2月4日号　立春篇

立春が過ぎて安堵の朝寝かな

お正月が終わったなとほっとしているとあっという間に節分、立春がやってくる。理の通り満月ですが、この月がまったく冷たそうには見えないから不思議なものです。

風は冷たいし、道路標示の温度計は1℃とか2℃という朝もある。先日など、夕刻の帰り道で0℃というのを見つけて、あら、今年初めての氷点だね、と車の中でつぶやいてしまいました。

春は名のみの/風の寒さや/谷の鶯/歌は思えど/時にあらずと/声も立てず　と歌う早春賦を思い浮かべる人も多いことでしょう。

日暮れの時刻が目に見えて遅くなっています。私の職場が閉館する時刻が17時30分ですが、まだそのころには明るいなと感じます。真冬ですと、四日市市のコンビナートから桑名市、遠くは名古屋市の明かりが揺れていたものですが、今は湾岸のラインがまだ夕焼けに染まっているのが見渡せます。

立春に母を訪ねておかき食う

今年の節分には豆を食わなかったなあ、と感じて、そういえばかき餅を近頃は食べないなー、と感じ、こんな句を作ってみた。

子どものころには、真剣に玄関から外に向かって豆を投げつけたものだ。豆まきは一年のうちでとても大事な行事だった。寒い冬は、こたつのそばに炭のおこった火鉢が置いてあることがあった。台所の釜や風呂の残り火で湯を沸かしていたのか、母が何かを煮焚きをしていたのだった。

炭火を見ると必ずといっていいほど、お餅やかき餅を焼いたり、あられを炒って食べたものだった。炭火は赤外線を放出するので顔が火照り、手をかざすと身体の芯まで温まる。煙たいのが難点だった。

スローという言葉が蘇えっている。人はどうしてスローな暮らしを棄ててしまったのだろうか。そんなことを、赤々と熱腺を放ち出す炭を見ながら思う。

効率とか合理性とか損益分岐などという言葉を聞くたびに、地球はすべてを知っていて、温暖化現象は地球の生命の存続過程の上にあって、ひとつの筋書きなのかもしれないと思うことがある。きっと正しい。共に罰を食らうときにわかるだろう。科学と哲学の戦いだ。

2004年2月 4日（水曜日）【裏窓から】

春という季節　4月4日号　清明篇

麦がぐいぐいと大きくなって緑を逞しく成長させている。

この姿を見ると春が近いのだなぁ、待ち遠しいなぁと感じ、自然の息吹に感動するのである。

都会でも麦畑を見ることができるのだろうか。

風はまだまだ冷たい。

しかし、バイクに乗って郊外に飛び出したい、そう思っている人も多いだろう。
思い切って出かけるのもいいでしょう。

梅の便りが真っ盛りです。
あのほろ苦い香りが、地味でありながら愛しい。

春という季節は、混沌とした部分もありながら、閉ざされて枯れていた自分自身が、これから夏という季節を迎える準備をするのだという、わくわくドキドキするひとときでもある。

ぼたん雪がはっさくの木に積もって、花火が開いたように成っていた黄色い実が雪をおぶって重たそうにしていた1月、2月。しばらくしたら、南風が吹き荒れて、その後北風が再び吹いて、黄色い実は落ちてしまった。

真っ黒い土の上に転がった実を集めに畑にゆくと、ふきのとうが芽吹いている姿を見つけ、目の前に広がる麦畑に足を踏み入れてみたくなってきた。

土が温かくなってきている。

2004年4月 4日（日曜日）【裏窓から】

4月20日号　穀雨篇

夕暮れの時刻が真冬よりも遥かに遅くなってゆくのを実感しながら、鈴鹿の峯峰が赤く染まっているのを、信号待ちの合間にぼんやり眺めていたりする。ほっとひと息をつける瞬間です。

ふと気が付き嬉しくなったことがひとつあります。数日前に四日市市と津市を結ぶ国道沿いの水田にも水が張られ始めまたのです。この道路脇の水田が、滅びてゆく1日の光を受けて銀色に光ります。信州・姨捨山で眺めた「田毎の月」の風景を思い出しました。小さな棚田が1枚1枚、淡い光を受けて光る姿は万葉の一刻からの普遍の姿で、現代人もまた、時間を越えたひとときにそれぞれの思いを馳せながら山を見下ろします。

夕焼けが綺麗に一面の空を覆っていたかと思えば、今、この原稿を書いているときは渋々と雨が降っています。「春に三日の晴れなし」と言うらしい。農家生まれの私としてはそんなことは常識なんですけどね。

雪が解けると何になる？　水になる…。(それも正しい。)

いえいえ、雪が解けると春になって、緑が芽吹き、花が咲き、生物が冬眠から目覚め、嵐のような雨が降り、花は散りゆき小川を流れ、その水が緩やかな斜面の棚田にも流れてくる。ただそれだけのことだが、それが自然の営みなのですね。

さて、そろそろ「光化学監視強化体制」をとる季節がやってきました。その合間を上手に使って、時々、「監視室の裏窓」と題する、何の役にも立たないお話を綴ってゆこうかと思っています。試行時期のものも含めてアップしました。これからも、どうぞよろしく。

2004年4月20日（火曜日）【裏窓から】

5月5日号　立夏篇

カエルがけたたましく啼く。4月早々に水田に水が張られたころから当然のことのように啼いてはいるが、5月になるまではさほど気にならかった。それには理由がある。GW晴れていた日などは気温が25度を超え、宵になっても寒くない、というより、少しひんやりとした外気が欲しく窓を開けることがある。今、これの原稿は、夕食を終えて自室に来て書いているが、昼間の余韻のようなものが部屋に残っていて、空気を入れ替えるために窓を開けている。机に向かって落ち着くと、ちょうどそこにカエルの声が届いてくる。早くも夏の雰囲気もある。

これが木村さん〔環境学習推進員〕のように生物学を専攻していた人ですと、私のように風流を感じるだけで満足してウイスキーを飲んでいる程度ではなく、もっと生態学などの知識や観察経験などが複合的に頭の中を駆け巡っているのかもしれない〔と勝手に想像してごめんなさい〕。例えば私ならばアマガエルの姿を思い出しながらカエル全体を構想して、心地良い風が田んぼの上を渡ってゆくのを描いているのだが、木村さんならかれこれ10種類ほどカエルの顔が思い浮かび、泣き声や棲み分けの生態などごとに、様々なことを思い浮かべるのかもしれない。ああ難しい･･･と思う一方で、なんて楽しい学問なのだろうと、その分野の方々の苦労も知らずに、カエルの声を肴にしている。

さて、立夏です。立夏のあくる日、つまり5月6日から9月17日まで、今年の光化学スモッグ緊急監視体制に入ります。去年は、それほど気温が上がらなかったので、緊迫した状況にはなりませんでしたが、今年は少し心配です。光化学スモッグという言葉は、昔ほど怖そうに思わなくなってきていますが、地球の自然という観点からみる大気の状況は相当に好ましくない方向に進んでいるといえます。何が一番に心配かというと、一人一人が他人事だと思っていることではないでしょうか。

2004年5月 5日（水曜日）【裏窓から】

5 月21 日号　小満篇

あじさいが花を咲かせるために花弁の準備をしている。その緑の葉っぱの上で青蛙が精一杯大きな声で啼いているの見つけた。

黄金週間が過ぎて光化学緊急時監視体制となったと思えば、とたんに涼しい日やジメジメした日が続いて、オマケに小満を迎えようとする夜には台風2号が太平洋岸を通過してゆくなど、梅雨を思わせるような空模様が続いている。水不足に悩むことが多い地域の農家では、豪雨にならずに雨が降り続いてくれると、それは恵みの雨となる。溜め池が満水になってホッとする安堵感は、その人たちにだけしか分からない気持ちだろう。

小満とは、陽気が良くなって万物が成長し始める節季をいうらしい。緑が芽吹き、お茶の摘み取りも盛んになってきた。私の子どものころは養蚕が盛んだったので、桑の葉を摘んで小屋の中の棚の蚕に与えているを、友達の家などでよく見かけたものだ。授産場の中は、嫌な匂いではないが独特の臭みがあって生温かい空気に包まれている。蚕がサクサクと桑の葉を食べている音がした。

すっかり野山の姿も30年ほどの間に姿を変えてしまった。水田は、台風を避けて早期に収穫するために早植えになって、れんげ畑が姿を消し、麦畑と隣り合わせで並んでいたりする。トマトやきゅうり、かぼちゃ、ジャガイモなど夏が旬の野菜畑も減った。たまに畑作業をしている人の姿を見かけると随分なお爺さんや婆さんであったりする。

私たちの環境を守るためには、理屈抜きで、人は土に還るのが一番の近道だと思うのだが…

ふるさとの沼のにほいや蛇苺　　はてさて誰の句だったか…思い出せない。

2004年5月21日（金曜日）【裏窓から】

6月5日号　芒種篇

勢和村のあじさいの道を訪ねた。というか、偶然に傍を通り素敵な散歩道が目に留まったので足を踏み入れたのです。

立梅用水という歴史のある水路沿いにあじさいの花が植え込まれていて,散歩道の脇の樹木には名称の札が掛けてある。手間の掛かる作業だっただろうが、通りゆく人はこのご苦労のお蔭で自然に親しみを持ち、やがてそれが自然の姿になってゆくのであれば, 甲斐もあろう。

子どものころに親しんだ生き物がごく普通にいるだけのように私には見えるのだが、ここに絶滅の危機に瀕するメダカなどもいる。資本と言う文明が切り棄てた自然という貴重品は、大きくかけ離れてしまった時空のうえで動いているのではないかと思う。つまり、大局的に幸福を見極めることの出来なかった人々が、ある日突然、都合よくも格好をつけて自然保護の運動などをしても、報われるのだろうか。

この自然保護はホンモノだと思うものの、まだまだ環境に目を向けようとする人口が少ないことや人々を惹き付けられない無力を思うとじれったい。

そんなことを考えながら歩いていると、足元に蜥蜴が飛び出して私を驚かせて茂みに消えた。ハッとした拍子に大きく息を呑んだ。深呼吸をしたら草の匂いがした。子どものころの、あの匂いだった。

2004年6月 5日（土曜日）【裏窓から】

6月21日号　夏至篇

ツバメが監視室のある3Fの窓の外にたくさん来る。テラスの手すりに止まってしばらくすると急降下してどこかに消えては、また別のヤツが飛んでくる。まだ、柄も小さく、きっと雛だろうと思う。飛び方を覚えたばかりのようすで、危なっかしい。嵐の風に煽られるように急降下してゆく。

そんなツバメの姿を見ていたあくる日、6月16日には今年最初の光化学注意報となった。「ええ？光化学スモッグって今でもあるんですか！」って驚かれたばかりだったのに。

今週は、台風6号が近づいてきた。6月の台風は珍しい。2,3日前に沖縄諸島付近にいた。今の季節だから九州の西側を通って朝鮮半島に抜けてゆくのかと思っていたが、予想に反して近畿地方にやってきた。金曜日や土曜日は確かに嵐の前の静けさで、風はややあったものの雨など降らず、日差しはきつく真夏のようだった。しかし夏のように湿気がないので意外とカラリとしていた。

ツバメの奴、やがて嵐が来ることを知っているのだろうか。横殴りの雨が必ずやってくる。でもどうにかなるだろう。6月の台風なんて聞いたことないよ。そう思っていたら、夏至の今日、台風6号は四国東部から紀伊半島を襲った。

風のおかげで光化学の恐れはないので、明日は台風一過で空気も綺麗となって、ホッとひと息できる1日になりそうだ。

今年はこの先の梅雨開け後が怖い・・・

2004年6月21日（月曜日）【裏窓から】

7 月7 日号　小暑篇

セミが鳴いているのをセンターの構内を散歩して見つけたのが、つい先日の日曜日のことです。そしたら立て続けにあちらこちらでクマゼミが鳴き始めたり、所によってはヒグラシも鳴いているという便りが届いてきます。

日本列島の本州部分には4つの季節の他に梅雨という季節があります。これは夏を迎えるための通過儀礼のようなもので、近頃は雨がたくさんふるわけではなく、その形も集中豪雨的へと変化しているのではないかという声も(学説？)聞かれます。ほんの1週間ほど前にも局所的に雨が降って災害が発生している地域が報じられました。私たちの手で何をどのように変えて行けるのかは疑問ですが、自然の営みには敏感でいたいものです。

きょうはたなばた様です。5節句のひとつですね。季節の変わり目に感謝をし、今の季節を精一杯に受け入れて喜ぶ。四季の変化に感謝をしたいものです。

夏は暑いので嫌いな人もあるだろうし、逆に好きな人もありましょう。私は？実の成るモノが畑に行くとたくさんあるという点では大好きです。とうもろこし、すいか、瓜、なす、ピーマン、きゅうり、トマト、もも。挙げればキリがない。夏の朝は美味しい。

2004年7月 7日（水曜日）【裏窓から】

7月22 日号　大暑篇

仕事を終えて鈴鹿山麓リサーチパークの周回道路から国道306号線に向かって走ると、四日市市の高い煙突が街の明かりの向こうに見下ろせる。

人々の暮らしは、海から陸へ上がり丘に向かって広がってきて、鈴鹿山麓の大丘陵地帯の山里の森の中にたくさんの住宅地をつくって営まれてきた。大都会と比べるとささやかではあるものの、工業技術主体の経済社会の発展が生み出した小さな歴史とそのマップであるのだろうと思いながら丘陵地帯を走る。

高原の風を感じる。そんなデジャブのようなものを感じることがある。窓を開けて車を飛ばすと、森の木々が放つ香りが飛び込んでくる。松林と杉林では匂いが違う。雑木林にもまた違うモノがある。人々の暮らしをまるで色分けするように、工場地帯の煙突と住宅地帯の明かりが並んでいる世界へと、私は急降下をしてゆく。

高原の風は、やがて湿気を帯びて、排気ガスにまみれてくる。揺らめいていた明かりが間近に成ってくると、私は窓を閉めてエアコンのスイッチを入れる。このまま、高原の道を走り続けていたいものだと悔やむような気持ちがある。

バイクで旅をするときには、その悔やむ気持ちがいつまでもどこまでも不要のまま走り続けることができる。人は、現実があるから、デジャブという概念を持てたのだろうし、不幸せがあるから幸せを感じるのだが、幸せばかりの世の中ではそのダイナミックレンジをスキャンする能力に狂いが生じる。イニシャライズの手法は様々だが、世直しは必要なのかも知れない。

電気の明かりというモノがなかった時代、おそらく、ここで感じる高原の風と同じような風が、人々の暮らす街の中でも吹いていたに違いない。抵抗さも出来ない夏の暑さに立向かうために、理論という概念のないながらの科学的対処や非科学的戒めなどを信じていた。夏の暑さを思うとき、賢治が書いた「おろおろ歩き」を思い出し人の心の美しさとたくましさを想像してしまう。

2004年7月22日（木曜日）【裏窓から】

8 月7 日号　立秋篇

早いもので暦の上では今日から秋になります。

そう思うと庭先を吹く風もそよそよとしているように思う。いや、そう思いたいが、さっき洗濯を干しに庭に出たら汗が吹き出た。

この2週間で何が変わったかな。

待宵草が一斉に黄色い花を咲かせ始めたこと。稲穂が出て、ところにより少し黄色く色づいていること。イチジクが大きな実をつけているぞ。かぼちゃやスイカも大きくなってきた。

私は夏が嫌いだと言っているけど、うだる暑さに嫌気がさすだけで、果物は美味しくなってくるし、そうでもないのかな。

ヒグラシがカナカナカナと鳴いている。

まだまだ暑いけど日差しに突き刺さるような切れ味がなくなってきた。残暑御見舞い…と書きながら、少し心に余裕が見えている。あと半月の残暑を楽しもうじゃないか。

2004年8月 7日（土曜日）【裏窓から】

8 月23 日号　処暑篇

別に自然に敏感に生きていようと思ったわけではないが、鈴虫が鳴き稲刈りが始まれば秋を感じる。

汗が噴出すような日も減ったし、たとえ噴出したとしても許してあげることができるほどに余裕が出てきた。それほど暑さが和らいだと言うことでしょう。

その分、台風がやってくる機会が増えて、不安な日々を過ごすこともある。

秋が好きだ。夏の暑さから開放される秋のこの身軽になって行くような錯覚がたまらなく好きです。

私が秋生まれだからそのように思うのだ、とうちのんは言う。

光化学スモッグの予測を毎日の仕事にしている立場としては、風が吹いて雨が降ってくれると安堵の一日を送ることができる.。

本当は風のないカンカン照りの日も安心できるような大気が欲しい。

車が半分に減ったら間違いないのだが…。

2004年8月23日（月曜日）【裏窓から】

9 月7 日号　白露篇

この季節になると朝露が降りるのだろうか。早起きをして近所を散策するチャンスから少し遠ざかっていることに気付いた。

慌ててというわけではないが、「彼岸花は咲き始めた？」と職場で尋ねてみたら、「もう咲いてるよ」と教えてくださった。あの赤い花を見ると秋の気配を感じ始めます。

本当に秋が来るのだろうか、このまま灼熱の夏を引きずって9月になるのではないだろうか･･･と思う日々をおくりながらも、嵐のあくる日には綺麗な虹も見た。大気は少しずつ秋のものに変化しているのだ。

夏は終わった。そう言っても誤りではなくなった。闘いすんで日が暮れて。まさに言葉のとおりの静けさを感じる。秋深し隣は何をする人ぞ。月並みな言葉だが、その素朴さが心に響く。

2004年9月 7日（火曜日）【裏窓から】

9 月23 日号　秋分篇

月が満ち始めている。その月を見上げるために外に出ると夜風が涼しい。耳を済ませると虫の声が聞こえる。

日が暮れるのが早くなって、仕事を終えて車に乗る頃はやや暗みが増している。朝にヘッドライトをつけなくてはならないほどではないものの、冬に向かっていることは確かです。

やれやれこれで暑い夏も終わってくれたなあ、というのが私の実感です。寒い冬にはあれはあれなりの苦労があるのだが、目覚めの苦労が私にはないので、冬は過ごしやすい季節といえる。つまり寒くても起きるのが苦にならない私にしたら、暑くて寝苦しい夏よりも遥に快適なわけです。

光化学スモッグの監視体制が終わりました。今年は初めの段階で頻出傾向が出たので焦り、また心配もしましたが、夏が過ぎてゆくと台風が来て空は綺麗になりました。

2004年9月23日（木曜日）【裏窓から】

10 月8 日号　寒露篇

大根の湯気が恋しい寒露かな〔ねこ〕

おでんが喰いたいなと思う。夏のように明け方の空がどんよりとすることもなく、晴れの日は朝からスカッと空が青い。

空気が綺麗な証しだろう。職場のある四日市の丘陵地帯から見下ろす平野の様子もくっきりとし始めた。冬になって北風が吹くようになると、名古屋市の高層ビルや御嶽山までも見渡せるようになる。しかし、その時期は下界より一層寒い。

水沢のお茶畑で3番茶の刈り込みが始まったなと思っていたら、あっさりと終わってしまった。茶畑はこれから冬を迎える。

10月になって、また再び台風が紀伊半島に近づいている。前回の21号は多大な被害をもたらした。

地球温暖化が原因で異常気象が起こるのだと力説する人も多い。数十年後には平均気温が2度ほど上昇するともいう。私たちにとってはたったの2度であるが、台風にしたら凄く嬉しい2度なのだろう。これからも頻繁に台風は来ることになるだろう。

縄文時代の人々は北へ北へとのぼって、現代人からすれば幾分寒いかなと思われるような、例えば東北地域などに、多くが住んだ。疫病の発生から逃れて、保存可能な食物を求めての移動だったのだろう。自然に逆らわず生きるひとつの姿である。

私たちは、自然を捻じ曲げて且つ自然に逆らって生きようとしている。勝てるのだろうか‥‥。

2004年10月 8日（金曜日）【裏窓から】

10 月24日号　霜降篇

神島に行っている。三島由紀夫の潮騒の舞台になった島を歩きに行った。

穏やかそうに見えた海も、いざ定期船で伊勢湾に出てみると、なかなかの波であった。船は大きく揺れて公園のシーソーの真ん中に立っているように身体がふらつく。

船酔いで倒れるんじゃないかという不安もあるが、二十分ほどの揺れを我慢し島に着く。小さな島には、大きな感動がたくさんある。島を歩いて回って、あくる日(24日)の朝に船に乗って帰ってきた。

23日の夕日を貼っておきます。

監視室の裏窓は、ひとまず、中断。気が向いたらまた書き始めます。

2004.10.23　夕日

2004.10.24　島を離れる

2004年10月24日（日曜日）【裏窓から】

暑さ寒さも彼岸まで

一雨ごとに暖かさが感じられるようになり、暑さ寒さも彼岸まで、とは実に上手に言ったものです。

さて、お隣の愛知県では「愛・地球博」がいよいよ始まります。「環境」への取り組みとして様々なテーマを投げかけています。春休みなどを利用してお出かけになる皆さんも多いことでしょう。
家族やお友達同士で「環境」について話し合う絶好の機会かも知れませんね。

*

環境と考古学。このふたつの言葉を融合させた学問がちょっと注目されています。人々の生活や文明に環境がどのように影響していたのかということを遺跡などの出土品の中から探ってゆこうという学問です。

気候や地形、地理的条件の影響を受けて人類は暮らしてきました。つまり、古代人の生活や食事、暮らしを調べて、動物学や植物学、文献史学、生化学、昆虫学、寄生虫学などを集大成させて遺跡や遺物に取り組むのです。そして、環境が文明にどのように影響を与えていたのか、ということを考古学的な視点で考察してみようとしています。

「縄文時代に戦争はなかった」とおっしゃった佐原真先生に深く薫陶を受けたという松原先生の本が面白いです。どうぞご一読を。

◆参考：松井章著　環境考古学への招待―発掘からわかる食・トイレ・戦争（岩波新書）

2005年3月22日（火曜日）【裏窓から】

田一枚植て立去る柳かな

4月になりました。新しい組織、新しい学年での生活が始まっていることでしょう。毎年センターにやって来るツバメさん、今年は4月13日にやって来ました。

一方、咲き始めるのが遅くてヤキモキしたソメイヨシノですが、今では散りそめとなりました。花のあとから新芽が吹き出しています。

鈴鹿山麓にあります三重県環境学習情報センター周辺でも春が真っ盛りです。今日これを書いているのは16日ですが、今朝、国道沿いの水田で水を張った田んぼで田植えを始める姿を見かけました。

陽光うららかな日和に鈴鹿山麓にぜひお越しください。ニュース記事にも書きましたが、4月から「エコプリント」(プリクラ)が新機種になってます。トップページに投稿された三重の自然の写真から8種類を選んで背景にしました。「四日市スポーツランド」と「ふれあい牧場」を巡ってスタンプを押してセンターに来てスタンプを押せばOKです。

*

このメルマガの冒頭で田植えの風景を見かけたと書きましたが、「田一枚植て立去る柳かな」と芭蕉は詠んでいまして、ちょうどその句を思い浮かべました。「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。」で始まる「奥の細道」の旅へと、芭蕉が深川の住まいを出発したのは旧暦の3月末のことで、殺生石・遊行柳のあたりに辿り着くのがちょうど4月の20日ころでした。今ならば6月初旬になりましょうか。

田植えの風景を道路から眺めて佇む余裕はありませんので、車を走らせてセンターまでやってきましたが、芭蕉のようにゆっくりと立ち止まって眺めることもなければ、大勢の人々が総出で田を植える姿も現代では見かけることもありません。

人々の暮らしやそれを取り巻く環境は、極めてスローな足取りで変化をしてきました。私たちの自然に対する取り組みも、このスローな足取りを真似してじっくりとやってゆかねばならないのでしょうね。エコクラブ活動をしてくれる子どもたちをじっくりと育てて、私たちの未来の環境をみんなで考えてゆけるようになるといいですね。

2005年4月18日 (月曜日)【裏窓から】

風薫る五月

風薫る五月となりました。御在所岳でアカヤシオの花が咲いたという便りが届いて来ると堰を切ったように次々と花の便りが舞い込んできます。

自然とのふれあいをモチーフにした三重の環境・トップページの投稿写真にも次々とみなさんの力作が寄せられています。どうぞ、ご覧ください。
また、ライブカメラが設置されている「青山高原」の風景には、初夏の風を受けて力強く回る風力発電施設、そして五月下旬にはたくさんのツツジが咲き誇りる様子がカメラを通して少し伺えると思います。

種田山頭火が、「けふもいちにち風をあるいてきた」と詠んでいます。青田が日々色濃くなる季節に山頭火は行乞途上にありました。自然のなかを歩き続けている姿がこの句からうかがえます。句集ではこの作品のあとに、「ほうたるこいこいふるさとにきた」とも詠んでいます。

*

常一さんと聞けば誰を思い浮かべるでしょうか？　宮本常一さんと西岡常一さんの二人を思い浮かべる方々も多いと思います。今回は、西岡常一さんの語録をお借りします。

西岡さんは、法隆寺金堂の大修理、法輪寺三重塔、薬師寺金堂や西塔などの復元を果たした宮大工棟梁として有名です。

語録に
「わたしどもは木のクセのことを木の心やと言うとります。風をよけて、こっちへねじろうとしているのが、神経はないけど、心があるということですな。」
「木のクセを見抜いてうまく組まなくてはなりませんが、木のクセをうまく組むためには人の心を組まなあきません。」
「あなたが今造っているものが、五十年もたったらその町の文化になる。そういうものを造らなければいけない。」
「どの木にもそれぞれ癖があり、右や左にねじれようとする。右にねじれた木は、左にねじれたあの木とくみあわせたい。何百年後の木の性質と相談しながら、それぞれの癖を見抜いて使ってあげたい……。」
（堂塔を建てる際には）「木は山ごと買って、その山の南に生えていた木を南側に使い、北の木は北に使い、西の木は西に、東の木は東に使え」
などがあります。

環境活動を実践する我々にも共通するずっしりと重い言葉に揺るぎないものを感じます。

2005年5月16日（月曜日）【裏窓から】,【語録選】

アジサイの花

あっという間に6月のメルマガをお送りする季節になってしまいました。

梅雨入りしたものの、雨不足のお天気が続いています。アジサイの花には雨がよく似合いますね。

2005年6月20日（月曜日）【裏窓から】

蝉時雨

九州、四国地方から梅雨明けのニュースが届いてきます。このメルマガがみなさまのお手元に届くころには、わが地方も梅雨が明け、ギラギラと太陽が照りつく本格的な夏の日差しが戻っていることでしょう。

山一つ動かしそうな蝉時雨　（喜多嶋靜子・四日市市）

「俳句のくに・三重」でこんな入選句を見つけました。大きなスケールで自然を見つめているいい句ですね。

（ちなみに今年は「木の一句」を募集してます。）

*

オススメ本というか、面白そうな本があります。平田剛士著「そしてウンコは空のかなたへ」。愉快なタイトルですね。「買ってはいけない」でお馴染みの金曜日発行です。廃棄物が私たちの手を離れたあと、いったいどのように処理されてゆくのだろうか。そんなことを追いかけています。（詳しくは筆者もこれから読みます。）

熊谷達也著「邂逅の森」と「相剋の森」を読みました。

前者は、東北地方でマタギとして生きた青年の人生を描きます。自然と共に、熊と共に生きてゆくひとりの青年の物語です。直木賞。後者は、ツキノワグマの棲む森の自然と共に生きている人間たち、そして主人公の女性ライターが、自然とはいったい何なのか、保護をするとは、共生とは何かを考え続けます。ちょっとイデオロギーな話あり、ドラマありといった素晴らしい作品です。

「邂逅の森」は大正時代、「相剋の森」は現代を舞台に、環境問題や自然保護、狩猟という文化と対峙する様々な人々の視点を踏まえ、私たちが直面する環境保護という素材を取り上げた凄みのある小説です。どちらも小説ですが、自然と調和して生きるには大いなる畏敬がそこにあることを暗示している秀作です。（こちらの2冊は図書コーナーにはありません。）

ナツイチ。まだお決めでない方にオススメします。

2005年7月19日（火曜日）【裏窓から】

県内では稲刈りが始まりました

立秋を過ぎて少し暑さが和らいだように感じます。でも、まだまだ暑い日となることもあり、暑さ対策への油断は禁物です。夏休みも終盤にさしかかりますが、自然の中での遊びも十分に注意をして事故のないように心がけてくださいね。

夕立が洗つていつた茄子をもぐ　種田山頭火

お盆が明けて連日のように雷雨に見舞われました。そんな折、山頭火の自然を見つめた句にハッとさせられます。自然に逆らわないで自然と共に暮らす。インタープリター養成講座では、参加者のみなさんに一句ひねってもらうこともあります。ちょうど「木の一句」の募集も始まりました。

環境を考えながら一句、いかがでしょうか。

*

県内では稲刈りが始まりました。ふた昔ほど前ですともう少し刈り入れ時期が遅く、農作業の終わった田んぼにはたくさんの赤とんぼが飛んでいました。

「秋の田の刈穂の庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ」(百人一首)

と天智天皇が詠んだ時代は、夜露が付着するほど冷え込むことから、さらに晩秋だったということになります。

さて、先月の後記で少し触れました「そしてウンコは空のかなたへ」〔出版社：金曜日〕を読みました。タイトルの意味は、メルマガ読者のみなさんのご想像どおりのことと思います。

この本は全部で15章から成っています。産業廃棄物が実際に私たちの知らないところでどのように処理をされてゆくのかを追っています。狂牛病で有名になった肉骨粉、スーパーから出る食品廃棄物、ペットの死骸、献血された血液、携帯電話などなど、面白い話題が取り上げられています。

そして、第15章で日本一の糞尿生産地、東京都の下水処理事情をルポルタージュしています。ウンコが燃やされて「空のかなたへ」消えてゆく話で締めくくっています。

ちょっと結論としての押しがアマイようにも思えますが、リサイクルだけではなく、ゴミを出さない工夫を提言しようとしています。(…と思いたい。)

本書は、あの「買ってはいけない」(←私は著者のサインも貰いました)で有名になった「週刊・金曜日」に連載されたルポです。それだけにもう少し辛口でも良かったと感じるわけです。

2005年8月22日（月曜日）【裏窓から】

秋は、夕暮

朝夕にはすっかり秋の気配が漂い始めました。秋は、さまざまな形容が似合う季節です。中秋の名月(9月18日)もくっきり鮮やかにみえました。このメルマガがお手もとに届くころは、立待、居待、寝待と月は少しずつ小さくなり始めていましょう。ごゆるりと風流をお楽しみください。

さて、光化学スモッグ緊急時措置体制は、9月中旬をもって終了しました。たくさんのみなさまのご協力、どうもありがとうございました。

今年も例にもれず台風がたくさんやってきました。多かれ少なかれ爪痕を残してゆく自然の猛威ですが、台風が過ぎ去ったあとの青空や夕焼けは綺麗です。空気に汚れがないことで、波長の短い光線が透過し易くなるからなのでしょうか。紫色がとりわけ鮮やかです。

「秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の、寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。」

夕焼け空を写してホームページやブログに掲載している人をたくさん見受けます。

*

巻頭にも触れましたが、今の季節の夕焼けは七変化で、人々を感動させてくれます。

その昔(学生時代)、ある夕暮れのことです。西武鉄道沿線のある駅で電車を降りて連絡橋の階段を昇ろうとしました。ところが非常に混雑して昇れません。どうしたものかと少しイライラしながら人ごみをかき分けて行きますと、夕焼けの中にくっきり赤く映える富士山が見えたのです。帰宅を急ぐ人はその美しい景色に見とれて立ち止まっていたのが渋滞の原因だったわけです。そのとき、「へぇー東京からでも富士山が見えるんや」と気づいたのです。昔から武蔵野台地には夕焼けが綺麗に見えるところが無数にありまして、実は母校の屋上からも新宿の高層ビルの向こうに綺麗な富士山が見えることをあとで知りました。

私たちの身の回りには、まだまだ残してゆかねばならない自然が溢れています。台風が過ぎ去ったあとの大気環境データは、空気が非常に綺麗であることをその数値で示しています。空気は本来からこのように綺麗に澄んでいたのでしょうし、みんなで努力をすればきっと元に戻せるはずだと思います。

身近なところから、その一歩を始めたいものです。

2005年9月21日 (水曜日)【裏窓から】

天災は忘れたころにやってくる

昨年は、夏から秋にかけて、台風が何度も三重県にやってきまして、宮川村では大きな災害も発生しました。しかも、その後で、ちょうど10月の下旬に新潟では大きな地震がありました。まさに「天災は忘れたころにやってくる」〔寺田寅彦〕の言葉どおりでした。

今年は、「子ども環境会議2005」、「Mieちびっこエコ王国大会」と、夏にイベントが続きましたが、台風の影響を受けずに、お天気に恵まれて幸運でした。

*

愛・地球博も終わりました。

環境をテーマにした万国博覧会ということで注目されていたのですが、お越しになった皆さんの感想はいかがでしょうか。

入場者数だけに注目すると「世界の国からこんにちは」と歌われた大阪万国博覧会が6千421万8770人、今年の愛・地球博が2千204万9,544人となっています。連日、大混雑の報道でしたが、それでも大阪万国博覧会には及ばなかったのですね。これは意外でした。

国民のほとんどが注目した大阪万国博覧会では、動く歩道が注目を浴び、コードの無い電話機や電気自動車が夢の技術として展示されていました。

わずか35年の間に電気通信工学や情報工学は目覚しく発展をし、21世紀になって本格的なITの時代を迎えることになります。今や我々の身の回りでこれらの機器を使いこなさずに仕事をすることは考えられない状況となっています。

便利とか快適とか面白い、楽しいなどということに科学技術を注ぎ込むことで、このテクノロジーの進化が庶民に還元されて社会は潤うわけです。経済発展や社会革新の指標のひとつとして決して誤っているわけではないのですが、それらの技術が環境問題を解決するのにどうしてもっと役立たないのだろうか、というジレンマを感じることもあります。

「もったいない」という言葉が世界共通語になりつつあると聞きました。地球温暖化の危機も年々大きな声で叫ばれているのが伝わってきます。

無限点に向かって発展を続けるIT技術を、環境分野で上手に活用するような新技術の研究開発は、一体どのあたりまで進んでいるのでしょうか。それが見えて来ないなあ、というのがここ2,3年の科学技術の進化に対する感想です。

2005年10月17日（月曜日）【裏窓から】

切り通し多羅尾寒風押し通る　　山口誓子

　すっかり秋も深まりました。11月中旬にやってきた寒波のせいで、御在所岳にもうっすらと冠雪があったようです。山が綺麗に色づいているようすでしたので、そろそろ紅葉狩りでも行きたいなと考えていたのですが、あっという間に冬ですね。

| 切り通し多羅尾寒風押し通る　　山口誓子

| ふるさとのしぐれぐもゆく鬼の面　奥山甲子男

三重県という地域は温暖な気候ではあるものの、吹く風は冷たく、その寒さをうたったものも多いようです。（1首目は伊賀の御斉峠に句碑があります）

*

今月のメルマガでは、地球温暖化をテーマにした講座をご案内しました。身近な課題でありながら、なかなか身近に考えていないのが地球温暖化です。

秋の味覚であるサンマの体長が今世紀末には10センチも小さくなってしまうとの研究結果を、山中康裕・北海道大学大学院地球環境科学研究院助教授が発表されました。（10月初旬）

また、紅葉の長期変化傾向をしらべてみると、50年前に比べてカエデの紅葉が二週間ほど、イチョウの黄葉が10日ほど遅くなっていることが気象庁から発表されました。（11月初旬）

地球温暖化防止ということに特効薬や即効薬はなく、日常のゴミ削減や3Rの精神などの集大成が実を結ぶであろうということを考えると、ひとりひとりがしっかりと意識を持って行動したいものです。

2005年11月21日（月曜日）【裏窓から】

地球温暖化防止のための身近で取り組み

折りしもこのメルマガの編集に入った12月18日の早朝から日本列島を大寒波が襲っています。各地で積雪・低温による事故が相次いでいます。これも地球温暖化に起因しているのだという声も高いですね。巻頭にも書きましたが、ひとりひとりの心がけで必ず改善してゆける課題です。自信を持って自分で決めたアクションを実行してゆきたいものです。

そこでひとつ質問をしてみましょう。

◆　地球温暖化防止のために身近で取り組めること、10個挙げよ！

先日、ふと見たテレビのクイズ番組で、限られた時間に答えを10個出すようなゲームをしていました。数人のグループに分かれて競い合っているのを見ながら、「地球温暖化防止のために身近で取り組めること、10個挙げよ！」っていう問題も面白いじゃないか、と思った次第です。

俄かに繕って得た知識を競うクイズよりも、知恵を出しあいみんなで意識を向上するような発展的なクイズがあってもいいのではないか。はてまた、購買能力が高い二十歳代の視聴率を重視する今の時代、難しい注文なのでしょうか。

さて、このメルマガを読んで下さっている皆さんはスラスラと10個言えましたでしょうか？

2005年12月21日（水曜日）【裏窓から】

地球温暖化防止のために身近で取り組めること、10個挙げよ！

去年最後のメルマガで

◆　地球温暖化防止のために身近で取り組めること、10個挙げよ！

というクイズを出しましたが、お考えいただきましたでしょうか。

　答えはみなさんがそれぞれお考えになったものでよろしいかと思います。以下のようなものを考えてみました。

―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―

【まずは身近なところから】 5ポイント

・買い物袋は、エコバックなどを使ってレジ袋を削減する。
・冷房は28℃、暖房は19℃。断熱材を上手に使う(カーテン、雨戸の利用)。
・無駄なテレビや明かりは消す。テレビを時計代わりにするのはやめる。
・洗顔、歯磨き、洗髪のときのシャワーの水の出しっぱなしをやめる
・冷蔵庫の開け閉めを減らす。詰めすぎも減らす。

―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―・・―

【ちょっと努力を！】 5ポイント

・待機電力削減に努める(不要なコンセントは抜く)。エアコンとシャワートイレを見直す。
・暖房便座はけっこう電気を食います。便座カバーを使おう。暖房便座の蓋は必ず閉める。
・電気ポットや電子ジャーの利用は、必要最低限に。
・車のトランクなどに無駄な荷物を積んだままにしない。
・車の運転時は経済速度を守ろう。通勤時は努めて歩く。外出時は乗り合いに。

さて、どれだけ一致しましたでしょうか。

*

　10月号のメルマガの後記で「もったいない」という言葉について触れました。そのあと、ワンガリ・マータイ(著)「モッタイナイで地球は緑になる」も読んでみました。地道な活動が世界を地球温暖化から救えるのだという確信が伝わってきます。(この本はもうすぐセンターにも所蔵します。)

　巻頭でも書いた「地球温暖化防止のために身近で取り組めること、10個挙げよ！」の問題を、年末年始を利用して実際に自分の身の回りの人たちにも尋ねてみました。

　まず、質問のイメージが掴めない人がいました。しかし、誘い水として少し説明をすると、スラスラと幾つも挙げてくれる人が多かったのも驚きでした。

　ムダをなくして節約することは、もう少しで実践できるところまできているようです。ただ、「私ひとりくらいはいいでしょう」とか「そんな不便なことは嫌です」と、はっきり答える人もあります。

　「もったいない」という言葉を知っていますか？　福島県がこんなアンケート調査を小中高校生にしたそうです。そこでは98%「知っている」と答えています。

　アンケート結果を詳しく見てみますと…

「もったいない」という言葉を3割以上の子どもたちは父母から教わっています。次いで祖父母が多い。そして、半分以上の子が、(1)食べ物、飲み物を残して捨てること、(2)水道の水を出しっぱなしにすること、に「もったいない」ということを感じています。

　では、どうしたらいいでしょうかと問うと、(1)必要ない物は買わない、もらわない、と答える子が3割、(2)いらなくなった物を譲り合う、と答える子が2割でした。

先日、ミーティングの席で、環境保護の紙芝居を考えてみる話がちょこっと出まして、何か興味を引くストーリはないものかと考えていた最中だっただけに、大いに参考になりそうです。

2006年1月26日 (木曜日)【裏窓から】

いきいきと三月生る雲の奥　飯田龍太

いきいきと三月生る雲の奥　飯田龍太

　この便りを編集している18日はお彼岸の入りです。ひと雨ごとに暖かさが感じられるようになってゆくのがよくわかる季節です。

*

春に三日の晴れ間なし

雨の日は読書などいかがでしょうか。
以前、関野吉晴著「グレートジャーニー　― 地球を這う」という本を紹介したことがあります。

　約400～500万年前にアフリカのタンザニア・ラエトリに人類は誕生します。その人類が、百数十万年前にアフリカを飛び出し、ユーラシア大陸を横断しベーリング海峡を渡り極北の地を越え、北米を経て、ついには南米大陸最南端のパタゴニアへと到達する。

　東アフリカから南米大陸に至る5万キロに及ぶ大遠征の壮大でロマンに満ちた道のりを、関野吉晴さんは逆ルートで辿ります。まさに、グレートジャーニーと呼ぶに相応しい感動的な旅です。

　シベリアのコルフという町にやってきて、食料・雑貨店でインスタントラーメンやスナックを買って宿で食べたとき、
「みるみるうちにごみが出てくるので驚く。日本では当たり前のことなのだが、トナカイ遊牧民のキャンプから帰った直後だったために、強い印象を受けたのだ。」
「遊牧民のキャンプではほとんどごみが出ない。トナカイは余すところなく食べる。野菜などの生ごみはトナカイや犬が食べてしまう。基本的に一番無駄な『包装する』ということがない。缶詰はほとんど食べない。」･･･と書いています

また、魚やカニなどは各家庭や親戚で分配するが、大きな鯨が獲れたときに、
「分配という行動は、高等なサルのあいだでも見られない人間特有のものだ。」「ここシベリアでも、狩猟民の間では分配がごく普通に行われていた。」「この人間を人間たらしめている行動様式は、われわれの社会ではいつの間にか影を潜めた。いい車を持っている。立派な家に住んでいる。モノを独り占めする者が、社会的な地位を獲得するようになっているように思う」…とも書いています。

素朴でありながら、冷静な分析ですね。いかがでしょうか。

――
関野吉晴著　ちくま新書　；　グレートジャーニー 地球を這う
(1)南米～アラスカ篇　￥998（税込）　／　(2)ユーラシア～アフリカ篇 ￥998（税込）

2006年3月20日（月曜日）【裏窓から】

山笑う

「春山は笑っているよう、夏山は滴るよう、秋山は粧うよう、冬山は眠るようだ」と臥遊録の言葉にあると、授業の閑話で恩師が話してくれたのを三十余年が過ぎた今でも春になると思い出すことがあります。

早春の野山は、まさに「笑う」と例えるにふさわしいですね。水が温んでくると、眠っていた草花が咲き鳥が啼き生き物たちが騒ぎ始めます。

決して約束を交わしたわけでもないのに、ツバメがやって来て巣作りを始め、忙しそうに飛び回る姿を見ていると、私たちに突きつけられている環境を憂うことは、そのこと自体がナンセンスであって、解決の糸口はもっと他の所にあるのかもしれません。

*

日の沈む時刻がアッという間に遅くなったせいで、家路へと急ぎながら郊外を走ってゆくと、鈴鹿山脈や経ヶ峰が残照に赤く染まっているのに出会うことがあります。

ちょうど四月も中旬を迎える今は、あちらこちらの田んぼに水が張られ田植えが始まる季節です。その水田の一枚一枚に、ガラス細工を散りばめたように夕日が映り、赤く染まるのを眺めながら、三重の自然の奥深さを感じます。

春の海ひねもすのたりのたりかな 蕪村

冒頭にツバメのことを書きましたが、ツバメのように大空から見下ろすような大局観を持っていた蕪村ならば、この田ごとに映えた赤い夕日をみていったいどんな句を詠んでくれるんだろうか。ふと、そんなこと思ったのでした。

今月のメルマガの記事には自然系のものがたくさんあります。三重の環境と森林のトップページに掲載しています投稿写真も三重の自然をテーマにしています。

みなさんも薫風に吹かれながらカメラを手に「小さな旅」に出かけてみませんか？

2006年4月24日（月曜日）【裏窓から】

やっとセンターにもツバメが来ました

ツバメが来ました。隣の入口の巣には先日から忙しそうに飛び交うツバメの姿があったのですが、一番近い入口の巣には姿が見えなかったのです。でも、来ました、やっと。どこで迷子になっていたのやら。

さて、
光化学スモッグ緊急措置管理体制が始まりました。この体制は、24日(今日)から始まり9月下旬まで続きます。

毎朝、空を見上げ、四日市の工場群から立ち上る煙突の煙のたなびくのを眺める日々が始まります。

いやあ、
それにしても、春ですね。うららか、という言葉が何とも心地よい響きです。
(ちょこっと黄砂がたくさん飛んできているようですが・・・・)

春眠不覚暁
処処聞啼鳥
夜来風雨声
花落知多少

孟浩然は「春暁」で、実に美的に、このときをうたっています。

子供のころ、麦踏みの合間に、その麦畑に寝転がって青空を見上げたものです。ひばりが天高く啼いて、それを指差し「るりるりが啼いている」と、いつも母に言ったそうです。春になると、そのことを目を細めて母は口癖のように話してくれます。

麦踏み。そういうスローな暮らしがあったのだということも、思い出すだけでやけに懐かしい。

2006年4月24日 (月曜日)【裏窓から】

連休余話

お茶が新芽を吹き出して、擽るように緑が揺れる。今の季節は、郊外を走ると目に優しい風景が多く、茶畑もそのひとつで、機械的に整然と引かれた線ではなく、自然が織り成す直線と曲線がこれほどまでに見ている人の気持ちを和らげてくれるものなのかと、感心する。

社会の事象にしても同じことが言えて、理屈を通して理路整然としたものばかりが美しいのではなく、どちらでもない曖昧なものや優劣の論理などを抜きにして取り上げねばならないことというものがあるのだ。

自然体というものの奥深さとその大きさに改めて驚き、有り難味を感じながら、そよ風に吹かれていると、不自然の世界に戻るのが嫌になる。

5月には休日を連ねて旅に出ることが慣例だった昔は、この自然に自分を戻してやる作業が意外と大事だったのかもしれない。しかし、戻さねばならないほど病んでいることも望ましくないし、旅というものを癒しに利用しなくてはならない自分自身も情けなかった。

— — — — —

お茶の畑のほかに、麦畑、れんげ畑も広がる。この土地に生まれ住めることに喜びを感じる。
蓮華の花を枕に戯れた子どものころは、それが本当に子どもたちの遊びだったし、「麦ふみ」という農作業労働に汗を流すことが生活の一部でありながら楽しいひとときでもあった。

今や、れんげ畑の中で駆けずり回る子どもの姿はどれだけ探しても見当たらない。水を張った田んぼで屈んで作業をするのは年寄りばかりだ。「山村を走ってみても、こいのぼりが少なくなった…」と日記に書き続けて十年ほど過ぎる。

紀州道という自動車専用道路が開通して、山と山を繋ぐように大きな橋梁が架かっている。そのコンクリートの上に渋滞で動かなくなった自動車が点々と並ぶ。

人はどうして群がろうとするのだろう。排気ガスを出し、自然を踏みにじり、金をまき散らす。そういう社会現象は相乗的なもので、もはや止めようが無い。
人と同じ尺度で、同じステージに乗って、同じようにふるまうことを無意識に選択している。しかも、いつでも、急いでいる。

一体、何に怯えているのだろう。どこに向かって走ろうとしているのだろう。
見つめ直すことが必要なんだとわかっていながら、駆けている。それが、不思議だし、また歯痒い。
— 【5月初旬号】

2006年5月 4日 (木曜日)【裏窓から】

もうすぐ梅雨入り

大型連休(ゴールデンウィーク)は好天に恵まれましたが、そのあとが少しぐずつき気味ですね。

ニュースによると、5月7日から18日までの日照時間は平年を大幅に下回り、大阪で33時間、名古屋では19時間余だったそうです。このメルマガを書いている22日は晴れていますが、お届けするころは再び曇り空か雨模様かもしれません。

5月6日に立夏ということで、暦の上ではすでに夏です。しかしながら、まだまだ寒暖の差が激しい日々が続きますので、お身体には十分にお気をつけください。

例年、三重県地方の梅雨入りは6月の初旬です。次のメルマガ〔6月号〕が届くころにはすでに梅雨(つゆ)でしょう。今はまだ青い穂を天に突き出している麦も、そのころには黄金に色づき、早いところではもう収穫が終わっているかもしれませんね。

*

三重の環境と森林のホームページの投稿写真のコーナーが少し活気づいてきました。

春から夏へとたくさんの花が咲きますので、それを被写体に狙った作品が多いようです。

6月から7月にかけて、梅雨の風景や盛夏の風景なども募集しますので、さらなるご投稿をお待ちしております。

ちょっと写真に収めるのは難しいかもしれませんが、5月中旬から下旬にかけて、県内では蛍が飛び始めますね。

筆者の近所にも蛍を鑑賞できる水田がありました。ところが、今年になってその水田が埋め立てられ、宅地に変化していました。寂しい限りです。

ふるさとの沼のにほひや蛇苺　〔水原秋櫻子〕

この句は、私の大好きな作品のひとつです。身近な自然から大事にしたいものです。

蛇足ですが……蛍祭りなどのイベントもあり、6月10日には榊原温泉で地元FM放送の公開録音のコンサートがあります。実力・ビジュアルともに兼ね備えた若手箏奏者、「森川浩恵」の和のテイスト溢れるコンサートのほかに、地元のジャズバンド「ザ・ソルツ・アンド・シュガーズ」(筆者所属)の演奏もあります。

2006年5月23日 (火曜日) 【裏窓から】

【号外】 ほたる

卯の花の匂う垣根にほととぎす早やも来鳴きて忍び音もらす夏は来ぬ
と詠んだのは佐々木信綱ですね。いま、このうたを歌える子はどれほどいるのだろうかしらん。

はて、卯の花ってどんな花なんだろうか、と思ったかたも多いことでしょう。もしもお近くに植物図鑑があればご確認くださいませ。

私には頼もしい人【きむら】さんがいるので、ちょっと彼女のページを探って見つけました。
　センター周辺の自然>春へGO！>ウツギの花　　で行けます。

タイトルに蛍と書いて、卯の花にいきなり脱線してしまいました。
五月の連休が終わって六月の梅雨入りまでの間は、初夏から夏へ、新芽と花のラッシュですね。アレなんだろう…コレなんですか、の繰り返しです。

きのう、5月号のメルマガを発行しました。
メルマガの巻頭でも、卯の花のことも書きたいし、他にも、牡丹、ミカン、橘、薔薇、初ガツオ、ツバメ、ホトトギス…など、ちょこっといい話がたくさんあります。そういう点でも、いい季節ですなあ、今は。
(どちらかというと、私は夏が嫌いですし)

その中で、ちゃっかり、蛍祭りの話の一文を入れておいたのですが、お気づきでしたか。
(編集後記)

あいにく、私は当日出勤当番でして、本番ではキリギリか遅刻で滑り込むのもナンなのですが…コンサートだけは久々のナマ音なので行きたいです。(コラコラ)

○　FMみえ公開録音
○　日時　：　2006年6月10日(土)
　［ 開場 ］ 17時30分 ［ 開演 ］ 18時00分
○　場所　：　榊原温泉保養館「湯の瀬」多目的広場
FMみえのHPでは公開録音の概要を紹介してます。

2006年5月24日 (水曜日) 【裏窓から】

人恋しミカン畑の丘の道

朝夕に職場へとのぼってくる道路を走っていると、季節の移ろいを感じます。

大型連休のころから忙しそうにしていた一番茶の収穫がおおかた終わりました。麦の穂がいよいよ黄金色に変化してきましたし、ジャガイモの花が咲きました。ミカンの花も咲いている。ミカンの花は香りが素晴らしいですから、うっとりします。

つい先日、職場近辺へ来た人が事務所に声を掛けて、「キジのつがいがいますよ」と教えて下さいまして、カメラを持ってその場に駆けつけてもらったのですが、残念ながら写真に収められませんでした。

ホトトギスも鳴きます。「初鳴き」というのかどうかわかりませんが、去年は5月21日でした。(あら、今年はいつだったんだろうか・・・)
夕刻になると声が聞こえることがあります。梅雨前の乾いた空気のツッパリを解きほぐすように微かに響く。

ちょうど夏の暑さの前触れが来るため窓を開けていることもあって、建物周辺の音に敏感になっているからだろうとも思いますが、鳥たちは産卵で、植物は花粉を飛ばすのに忙しいのだから、野山がざわつくのも無理のないことか。

夏が近づいている気配をこういうところで感じ取ることができるのは幸せなことなんだろうなと思います。
「そうだ、桑の実を摘みに出かけなきゃ」と、初夏の台地を眺めながら思うのも、ちょうど今ごろです

人恋しミカン畑の丘の道　　ねこ作

去年の今ごろも、同じようなことを思っている自分。
進歩がないのだろうか。

――――
5月30日：光化学スモッグ予報(大安地域)・第1号
6月1日光化学スモッグ注意報(名張地域)・第1号

2006年6月 3日 (土曜日)【裏窓から】

キャンドル・ナイト

6月は環境月間です。

これにちなんで環境保全の重要性を認識し行動の契機とするためさまざまな行事が世界の各地で行われています。

「100万人のキャンドル・ナイト」もそのひとつです。
このメルマガが配信されるときにはすでに始まっていますが、この記事をご覧になったその日からご参加くださいね。。

みなさん、私たちの身の周りの環境について、いつもよりもっと真剣に考えてみませんか？
地球と、未来と、私たち自身のために‥‥。

*

筑紫哲也著、スローライフ―緩急自在のすすめ(岩波新書)という本が出ました(4月刊)ので読んでみました。

大小出版社の新書乱立ブームで、いささか、あらすじ本的なモノの増加傾向がなきにしもあらずなのですが、今、やはり筑紫哲也さんに語って戴くのはありがたい。私たちの環境を真剣にかつ肩に力を入れずに、お気軽に知っていただくのに最適の本ですね。グットタイミング過ぎて、ちょっと商業主義かもな、と思われても仕方がないくらいです。

レーガン大統領が当選したあの1980年の大統領選挙をルポした「アメリカンマラソン」のときからの筑紫哲也ファンとしては、いかにもジャーナリストっぽくまとめた本である、とまでしかお褒めできないですが、入門書としてもお気軽に読める本ではあります。

スローはダサい、そんな価値観など持ちたくない、というような方々に読んで欲しいです。

個人的にも、友人知人にオススメしてみたのですが、その反応が面白かった。私の話に耳を貸さないかも…心配していた若者たちは、真剣にこの本を読んで自分でできることを考えてくれた。逆に、真剣に考えてくれそうな熟年人にはそっぽを向かれてしまった。

筑紫さんも若きころは「スロー」なんて考えもしなかっただろうに、多くの知識人・著名人は、この時期(この年齢)を迎えると「スロー」に回帰するものなんでしょうか。

筑紫さん、キャンドルナイト、やってるかなー。

2006年6月19日（月曜日）【裏窓から】

暑い夏

このメルマガを書いている今日は7月16日で、京都では祇園祭の宵山を迎えています。

すかさず、川崎展宏さんの

「京都駅下車迷はずに鱧の皮」

の句を思い浮かべてしまう私ですが、京都の人に限らず、暑い夏を涼しく健康的に暮らしてゆけるように様々な工夫を凝らしてきたひとつとして、夏の食文化のようなものがあります。

祭りの人ごみをひと通り味わったら我が家の居間で鱧(ハモ)を食い、土用には鰻(ウナギ)を食う。
ただ、現代人の場合は、エアコンのよく効いた部屋でビールを片手に…という人が多いかもしれません。
各地で催されるお祭りは、昔から変わらぬ姿を受け継いでいるものの、真夏を過ごす生活からは団扇(うちわ)であるとか、浴衣、蚊帳、風鈴などの姿が消えつつあるのも事実です。ちょっと「ロハス」な暮らしも考えてゆきたいものですね。

*

もうまもなく梅雨明けですね。

連日、蒸し暑い夜に悩まされていますが、昼間の学校のプールなどからは歓声が届いてきます。

閑さや岩にしみ入蝉の声　芭蕉

みなさまの所ではもう蝉は鳴きましたか？

クマゼミとミンミンゼミについて環境学習情報センターの木村さんに尋ねたことがあります。

蝉は、種類によって棲息エリアが違い、ミンミンゼミは標高100m以上のところにいて、クマゼミは反対に100m以下のところに多いそうです。そして、最近の都会ではクマゼミが多くなって、ニイニイゼミが減っているそうです。

蝉にも初鳴きの時期というものがありまして、

・ニイニイゼミ…6月中旬頃から
・ヒグラシ…6月下旬頃から
・アブラゼミ、クマゼミ…7月中旬～下旬
・ツクツクボウシ、ミンミンゼミ…7月下旬頃から

ということだそうです。

みなさんのおうちの周辺では、どんな蝉が一番たくさん鳴いているのでしょうか。

2006年7月17日（月曜日）【裏窓から】

秋を感じる

　今年は、梅雨明けが遅かったので夏が幾分、短いのかな、と思ったりしていますが、立秋が過ぎても日差しの強さは一向に衰える気配がありません。しかし、伊勢平野の水田でたっぷりと実をつけて垂れている稲穂は少しずつ色づいてきたようです。このメルマガが配信されるころには稲刈りが始まる地域もありましょう。

内田百間をパラパラとめくっていたら
　欠伸して鳴る頬骨や秋の風
という句がありました。

読者のみなさんは、どんなところで秋を感じられるのでしょうか。

*

　暦の上では秋です。台風も近づいてきます。空を見上げるにはいい季節になってきましたね。

　去る13日に「空と雲を観察してみよう」という講座を環境学習情報センターで行いました。私が子どもたちに「将来、気象予報士になりたい人、いますか？」と問いかけたら幾人かが手を挙げてくれました。

　センターでの講座は、実際に実験をしたり工作をしたりするものがほとんどですから、話ばかりを聞かねばならない講座に来てくれた子どもたちはきっと退屈だったことだろうと思います。熱心に聞いてくれた人たちに感謝します。

　知らないことがひとつでもあればそれを探求しようとする心が大切です。講座をきっかけに、毎日空を見上げて不思議なことをひとつずつ解決したり、これまでは気にならなかった雲や空、お天気のことを気に掛けるようになって、資料で調べてみましたという子が一人でもいてくれるといいなあ、と思っています。

2006年8月15日（火曜日）【裏窓から】

秋の気配

すっかり秋の気配が漂っています。秋といえば、味覚、スポーツ、芸術、読書･･･などが思い浮かびますが、皆さんは何を最初に感じられるのでしょうか。

秋の味覚のビック3として、マツタケ・秋刀魚・栗を連想しますが、近頃では、これらが身近にあるとも限りません。秋刀魚についてはショッキングな学術発表もあります。

地球温暖化 → 海洋表層水が暖かくなる → プランクトンに異変が起こる → 三陸沖などの海域が影響を受ける → プランクトンが大増殖する時期が数週間早まる→ 小型魚種の成長影響が出る → 秋刀魚(30cm)が小型化し20cm程度になる････ということで、今世紀末に秋刀魚は20センチほどになっているかもしれません。

風が吹くと桶屋が儲かる…みたいな話ですが、秋刀魚だけで済むものとも思えませんから怖い話です。

*

先月号の巻頭で、読者のみなさんは、どんなところで秋を感じられるのでしょうか、とお尋ねしてみましたが、どんなことを思い浮かべられたでしょうか。

巻頭にも書きましたように、味覚・芸術。スポーツ・読書などが思い浮かびます。「秋の日の････」といえば、「秋の日のビヨロンのため息の身にしみてうらかなし」である人もあれば「秋の日の図書館のノートとインクの匂い」の人もありましょう。

あるいは、秋晴れの空の下を駆け回った運動会、クラスの仲間と一緒に熱くなった文化祭であるかもしれません。

さて、今年の光化学スモッグ監視体制の期間が9月15日に終わります。ご協力をいただきました皆様、どうもありがとうございました。

春から夏にかけて日々、空を見上げて過ごしてきたわけですが、毎年この季節に体制を終了しながら、すっかり空が秋の趣になっていることに気づかされています。

2006年9月14日（木曜日）【裏窓から】

灯を点す

先月の初めに中仙道を散策する機会がありました。

馬籠宿に立ち寄り石畳の坂道を何気なしに歩いてゆきますと、行き交う人の目に留まることさえほとんどなく、ひっそりと石の句碑がありました。

街道の坂に熟れ柿灯を点す　　山口誓子

その句碑は旧街道の佇まいの中にすっかり溶け込んでおりまして、遥かな昔の秋の夕暮れを想像させてくれました。

衣替えの時期を過ぎるとまたたく間に秋が身近にやってきます。嵐のような低気圧が去った晩には中秋の名月がくっきりと雲間に現れ、二十四節気の寒露の晩には立待ちの月(十七夜)を眺めることができました。

暦の上では寒露を過ぎて立冬までの間を「晩秋」と呼ぶのだそうですが、「秋山明淨而如粧」と臥遊録がうたうような「粧う秋」が伊勢平野まで訪れるのはもうしばらくあとのようです。

読書の秋ともいわれる季節ということもあり、大変過ごしやすくなりました。書に親しむ合間に、センターをはじめ各所で催される秋のイベントなどに参加して、心身ともにリフレッシュをしてみてはいかがでしょうか。

2006年10月16日（月曜日）【裏窓から】

木枯らしの吹く季節

11月12日の早朝は、鈴鹿山麓でも晴れ間と時雨が交互にやってくるような空模様でした。

時雨の合間にきれいな虹が出ていました。その虹をカメラに収めようとして外に出たら、冷たい風が小雨混じりに吹き付けてきます。
「早夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く」 そんな季節の到来です。

そのころ、御在所岳頂上の気温はマイナス1℃。夜明け前には初雪が舞っていました。例年より6日早い記録だそうです。(津地方気象台発表)

もう1ヶ月あまりで今年も終わりです。暮れる年の後片付けや新しい年の準備に忙しい季節となりました。何事にも気を引きしめていきたいものですね。

*

巻頭で初雪の話に触れましたが、いよいよ冷たい木枯らしの吹く季節となります。そのことに憂いを感じている方も多いのではないでしょうか。

三重県にもゆかりの深い俳人、山口誓子の句にも

・海に出て木枯帰るところなし
・切り通し多羅尾寒風押し通る
・雪嶺の大三角を鎌と呼ぶ

など、厳しい冬を詠んだものがあります。

そこで、ちょっと耳寄り情報をひとつ、お届けしましょう。

三重県環境総合監視システムでは、高層気象データを調べるために御在所岳の山上に気象観測局を設けています。そこではもちろん頂上の気温も計測して、ホームページ上で公開しています。

「ぶるっと寒く」感じた日にホームページを確認して、夕方から深夜の気温がマイナス8度よりも冷えてしまったら要注意です。あくる朝には、北勢地区で積雪…っていうことがあります。

的中率は(公式には未調査ですが)、筆者の感触では9割以上と思います。

2006年11月20日 (月曜日)【裏窓から】

ホンモノをにらむ視点

(12月中旬発行のメルマガで‥‥)
街はすっかり冬の景色へと変わってきました。県立博物館正面のイチョウ並木も1ヶ月の間に刻々と移ろい、瞬く間に冬枯れの木立ちと姿を変えつつあります。道行く人も学生さんもコートの襟を立て足早やに坂道を急いでいくように見えます。

街にはクリスマスソングが流れ、商店街も活気付いています。夜には鮮やかなライトアップのイベントが行われているところもあり、いよいよ師走の雰囲気が盛り上がってきました。

人類は縄文の昔から、暮らしの中に存在する明かりや音、匂いに対して敏感でありました。しかしながら、大らかでもありました。ですから、匂いは、悪臭にもなり芳香にもなりましたし、心地よい音が騒音や雑音にもなったわけです。

時代が過ぎて科学技術の進化により、そのような光や音、臭気を取り除き、逆に都合の良いことは強調して楽しめます。ムダを省いて効率を上げ快適さを獲得することができる反面、生活の中の雑音がデジタル音源のノイズを除去するように殺ぎ取られていくような気がします。

古池や蛙飛びこむ水の音　　松尾芭蕉
赤い椿白い椿と落ちにけり　　河東壁梧桐

二つの句の時代は大きく違うのですが、静寂のなかでじっと自然を観察している視点とその裏に隠された「音」の響きが、現代人が殺ぎ取って棄ててきたモノのなかにもあったのではないか、とふと思います。

年の瀬の雑踏ではクリスマス音楽があふれ、光が溢れています。これは現代社会の歓喜のパワーが漲るひとつの顔としてのパフォーマンスでもあるのですが、煌々たる光のイルミネーションに複雑な思いもあります‥‥。

と書きました。

あれから、さらに半月が過ぎて、すっかり待ちは冬枯れの景色に変わってしまいました。

師走のあわただしさが、テレビやラジオからも伝わってきます。

今年、1年、さまざまな方々にお世話になり、刺激を貰い、あるときは叱咤され、過ごしてきました。

暮れ行くときを人それぞれに振り返りながら、過去と未来を見据えて、みなさまの思いも十人十色なことでしょう。

仏教の教えのなかに除夜の鐘の告げる108の煩悩があります。
人間の六根(目、耳、鼻、舌、身、意)の苦、楽、不苦不楽における18通りが、富める人と富めない人で32通りとなり、あらゆる時空、つまり、過去、現在、未来にあてはめて、32通りを3倍して108通りとなるといいます。

これを仏教という観点ではなく、人の心の哲学として捉えるとすれば、揺るぎない普遍性がそこにあることを感じます。

人々は、ホンモノを見る視点をすっかり失い、経済優先社会の中で、「自由(主義)」というものをまったく勘違いしてしまっている。多くの弊害を生み、社会は荒れ果て、心はすさむ。本当の「ゆとり」というものも見失ったままだ。

果たして‥‥
私たちの心に宿る哲学の中に、揺ぎない普遍性の欠片を見るけることが、できるのだろうか。

2006年12月28日 (木曜日)【裏窓から】

ボッコちゃん

本年もよろしくお願い申し上げます。

年末にちょっと手にした本が、身近な話で、すごく懐かしかったので紹介します。

ちょうど10年前に他界したショートショート作家の星新一さんの「ボッコちゃん」という短編集の「おーいでてこーい」という一篇です。

崖崩れで壊れた小さな社の址(あと)に深い穴が残りました。
「おーい、出てこい！」と呼んで、石ころを投げ込んでみても誰も何も返事をしません。
穴は住民が不要になったモノや棄てたいモノを何でも引き受けてくれました。
そこで、都会で出るさまざまなゴミを棄てる人が現れます。
便利なことが判明し機密書類まで投げ込まれます。
さらに、原子炉のカスまで放り込むという事態になってゆき、そして、穴のおかげで人々の住む都会の空はきれいになってゆく。
しかし・・・・

という展開で物語が進みます。

35年以上前に発表された作品でありながら、時流をこれほどまでに読み切った作品は少ないかもしれません。
国語の教科書でも取り上げられた時期があり、一部の方々は記憶があることと思います。
興味のあるかたは、ぜひ一読を。

*

「ボッコちゃん」の続きです。
巻頭で取り上げました作品「おーいでてこーい」の結末は、非常にシニカルです。
簡単に結末を説明しますと・・・・。

あるとき、空から何やら石ころのようなものが落ちてくるのに気づき、そのあと、誰かが空のほうから「おーい、出てこい！」と呼んでいる声が聞こえてくるところでこの短編は終わりです。

ジャブ程度の皮肉で、自省を促されたという次第です。

さて、新年に出会った衝撃で、もうひとつ、ガツーンと来る映像がありました。

元旦の朝日新聞・社説は、「戦後ニッポンを侮るな　憲法60年の年明けに」という表題で

キリマンジャロのような高山から、しだいに雪が消えつつある。氷河はあちこちで「元氷河」になり、北極や南極の氷も崩れている。このまま進むと世界の陸地がどんどん海になり、陸上の水は減っていく。ニューオーリンズを襲った恐怖のハリケーンなど、最近の異常気象も、海水の温度上昇と無縁ではない。大気中に増える二酸化炭素(CO2)を何とか抑えなければ、地球の温暖化はやまず、やがて取り返しのつかないことになる。

と書き出し、米国の元副大統領アル・ゴア氏が伝道師のように世界を歩き、地球の危機に警鐘を鳴らしている記録映画「不都合な真実」に触れています。

折角ですから、お時間のある人はこのプロモーションVTRだけでもご覧になるとよろしいかと思います。
原因は「人間にあります」というテロップが印象的です。

2007年1月15日（月曜日）【裏窓から】

【ごみ】の話。ボツ原稿

はじめに

縄文や弥生時代の人のゴミは、食べカスや魚肉の骨のほかに、おしっこやウンコが主なものでした。骨は町はずれのゴミ捨て場(貝塚)に捨てて、排泄物はおおよそ肥料として再利用することができました。さらに、薪燃料の燃えカスの灰やお米のとぎ汁は田んぼや畑に戻していました。

太陽の光で光合成をしてできた樹木を燃料としたり住居として、大地の恵みで育まれた動物たちの恩恵を受けて人間は生きていました。それでもほんの少しはゴミが出ましたので、集落の外れなどに捨てていました。

縄文時代は、土地や権力の奪い合いなどの争いもない平和な時代で、タイやスズキという現代でも高級なお魚の骨が多く見つかっています。ほかにも、人や動物の遺体や遺物などを意図的に埋葬している様子がみられることから、この時代の人は、ゴミを単なる「捨てるもの」と考えたのではなく、再び蘇ってくる「生き物」と考えていたのかもしれません。

しかし、国家が形成され文明が進化し始めると、家を建てて家財道具が揃ってきますので、普段の生活のなかで壊れたりするようなものがゴミとなってきます。箪笥や食器(土器)のほかに箸が折れても捨てねばなりません。このようなもののほかに、天平時代(8世紀)に建てられた西大寺食堂院の井戸跡 (10世紀後半になって埋め立てられています)からは、瓜や桃、栗、胡桃の食べカスや種が見つかっています。

戦国時代や江戸時代になってくると、このようなゴミをお城のお堀に棄てる人があったことを書いた面白い資料もありますが、まだまだ社会の中にゴミをゴミと思わずに「もったいない」ので再利用したいという発想があり、ゴミは生活を脅かすほどたくさんは出ませんでした。

ごみというものを見つめる目が非常に環境に優しいものだったことが伺えますし、こういった視点がもっとも大事なことで、現代人には欠けていることです。新しい時代へと変化するにつれて社会の規模が大きくなり人間はどんどん賢くなってきます。

そして様々な便利品を発明するようになり、暮らしのなかで活用することで社会全体が快適に暮らせるように変化し始めます。人々は便利な場所に集まって生活をし、町を作り、各地域には少しずつゴミが増え始めます。それでも、人々がスローな生活をしていた時代には、予想以上にゴミを再利用する「循環型」の社会が残っていました。

では、どうしてその「循環型社会」が今の時代になって崩れて来ているのでしょうか。

科学(サイエンス)と技術(テクノロジー)という分野が急速に進化して、馬が自動車に、蒸気が電気に、そして原子力へと変化します。通信分野では、狼煙(のろし)が伝令に、そして飛脚の次代を経て郵便へと変わり、現代では電子メールとなりました。

「進化」が生活を便利しますが、そのために切り捨ててきたものが幾つもあります。それらは自然恵みに対する畏敬の気持ちであり、人の心の奥深くにあった思いやりであったわけです。そのことを、ごみの特集でみなさんにわかってほしいと思います。

————
次は
・ゴミには何があるか？
・どんな種類があるのか
・現代社会のごみの量

という話ができたらいいなあ。

2007年1月27日 (土曜日)【裏窓から】

「窓あけて窓いつぱいの春」　種田山頭火

「窓あけて窓いつぱいの春」　種田山頭火

こう山頭火も詠んだように、いよいよ春ですね。

少しひんやりとしているものの心地よい風が吹いています。でも、喜んでばかりもおれません。花粉症の方々は辛い季節でもあります。

今年は厳しく冷え込む日が少なく、野畑で作業をする人の話では、寒さで死んでしまうはずの虫たちが生きている、ということでした。そういえば熊が人里まで降りてきて退治されたというニュースもありました。これも暖冬のせいで熊さんが冬眠をできなかったことが理由らしいです。

暖かいのでヒトにとっては暮らしやすいのですが、やはり冬は寒いほうがよろしいようです。
花粉も、たくさん飛ばないようにお祈りしましょう･･･。

2007年2月19日（月曜日）【裏窓から】

春が来ました

冬が終わって春が来ました。今年は暖冬でした。

地球温暖化の影響とささやかれ、我々の直面している地球の危機を大勢の人々に知らせる意味では大いに役立ちましたが、3月下旬から桜が咲き始めるニュースに諸手を挙げては喜べませんね。

このメルマガを書き始めても、時々刻々と暖かさが増してきて、東京や名古屋の開花宣言のあとは県内での開花宣言と続きます。津市の偕楽公園にもお花見用の飾り付けが始まっていました。(メルマガ発行のころには咲いているかもしれません)

新しき菜籠が一つ春の土間　　津市・野田利勝
み吉野のどの山からも初音して　奈良市・田村英一

平成18年度の「山の一句」にこんな春の句がありました。
たくさんの人が待ち侘びた春だけに、一句一句に歓びが満ち溢れているのを感じます。

昔々、まだまだ木枯らしが時より吹く季節であったでしょうか、野山でふきのとうやウグイスを見つけると家まで跳んで帰って母に報告していたころがあります。

*

「初心忘るべからず」(初心不可忘)。

世阿弥が「花鏡」のなかに残したこの言葉を、編集作業をしながら思い出し、考え続けた。いつもこの季節になると必然ともいえるが、花が咲き花が散るのを眺めながら、世阿弥の書を読むというのも因果な話であるのかもしれません。

さて、ここで世阿弥が言う初心とは、新入のころの初々しさや緊張などを表すようなニュアンスではなく、「その時々の芸の未熟さ」を忘れるな、ということであったらしいです。

つまり、我々がこれまで蓄積してきた仕事の技を世阿弥のいう芸に当てはめるならば、その芸の道に終わりはないのだから今後も未熟者である心を忘れてはいけないのだ、ということになります。

実は筆者もメルマガを前任者から引き継いで2年がちょうど終わったところであり、この言葉は私自身を戒めるものでもありました。

皆様に配信を待たれるようなメルマガを作れるように工夫をしてゆきたいと心を新たにしています。

2007年4月16日 (月曜日)【裏窓から】

立夏も過ぎて

先日、電車で出勤をする機会がありました。最寄の駅で降りた後は車で数キロ先の鈴鹿山麓の環境学習情報センターまでくねくねの山道を上ってゆきます。その途中で蓮華畑を見つけました。蓮華畑が一面に広がるのを眺めていると、子どものころにふかふかの蓮華畑で転げまわったり駆け回ったりしたことを思い出しました。

伊勢平野の農地では、蓮華畑と水田が隣り合わせで、これに混じって麦畑が広がっているところがたくさんあります。まるで、子どもが描いたお絵かきの作品のようにのようにふぞろいのまだら模様を成しています。

緑の麦畑に近づいてみると穂が出ているのに気づきます。このメルマガがお手元に届くころには、立夏も過ぎていることでしょう。そして、あとひと月もすれば黄金色の穂が初夏の風に波打ち、緑が麦から稲へと入れ替わってしまいます。

時々刻々と季節が変わっていっても、風は緑のうえを静かに吹いていることでしょう。

*

大型連休もあっという間に過ぎてゆきます。このメルマガを書いているのはまさに連休の真っ最中です。センターへの道のりにある四日市・水沢地区のお茶畑では新芽が吹き出しています。芽吹くという表現の持つ逞しさが、陽光に生き生きと輝く緑にぴったしでした。

こいのぼりが風になびいています。

甍の波と雲の波
重なる波の中空を
橘薫る朝風に
高く泳ぐやこいのぼり

と歌われたように、鈴鹿山系をバックに気持ちよく泳いでいます。春の空は、秋に比べて幾分霞のかかったような趣があるものの、風に混じってどこからともなく届く花の香りもあいまって、うららかな陽気となりました。

憲法記念日に少し野山を散策してみました。山菜摘みに来ている人たちをたくさん見かけます。昔ある人に、タラの芽を採りに案内してもらったことがありました。「採りすぎたらアカンのや。食べるだけずつ採ったら十分なんや」と教えてくれました。

近頃は根こそぎ採って木を枯らしてしまうケースもあります。自然や山の恵みを戴くのですから、来年にやってくる人のために…ということで、ゆとりを持って散策したいものです。

2007年5月21日（月曜日）【裏窓から】

不如帰

県議会議事堂(津市)の植栽の緑がいよいよ夏の趣を呈して、博物館への坂道を辿ると街路の銀杏も夏に備えて着々と装いを新たにしています。日差しは既に夏のもので、時には木陰が恋しいとさえ思うこの頃です。

環境学習情報センターでは、夕刻になると不如帰(ホトトギス)の声が聞こえてきます。閉館のころ、裏山のほうから夕暮れのしじまを突き抜けるようにその声が届きます。

キョッキョッ　キョキョキョ。
キョッキョッ　キョキョキョ。

鈴鹿山麓の不如帰の初音は毎年、5月下旬です。山積の仕事にまみれているセンターの面々は、この風情に耳を傾けるゆとりなど無かったかもしれませんが…、今年も間違いなく5月20日ころから啼きはじめました。

不如帰。カナでホトトギスと書くことが多いですね。「泣いて血を吐く」といわれたり、「泣かぬなら殺」されてしまうような悲劇な鳥ですが、連日、きれいな声をビルの谷間に響かせてくれています。

こだまして山ほととぎすほしいまま　　杉田久女

自然観察に、環境講座に、社会見学に。
忙しい夏がそろそろ始まりますね。

*

卯の花の匂う垣根に
ホトトギス早も来鳴きて
忍び音もらす夏は来ぬ

巻頭でも触れましたが、いよいよ夏が来ますね。新しい講座も目白押しです。

今月号のメルマガでは、環境講座の話題を2点盛り込みました。
「子ども環境講座―水の調べ方講座―」と「プロジェクト・ラーニング・ツリー(PLT)」です。

水の調べ方の講座では、琵琶湖の湖水を学究の原点としてきた吉田(環境学習推進員)が水を調べるとどんなことがわかってくるのか、水にはどんな秘密が隠されているのかなどというような話をしてくれるかもしれませんね。夏休みの宿題に応用できるかも。

一方で、プロジェクト・ワイルドの講座でもお馴染みの木村(環境学習推進員)が、PLTというプログラムを紹介します。今、まさに「環境問題の解決に向けた決断を下すための情報を獲得する能力」を社会は求めています。もはや、一歩も引けないはずの環境問題ですから、大いなる志の方々に集っていただきたいです。

センターでは、出前講座を始め環境にかかわる数々の講座を開催しています。これらのスケジュールは、新聞や、ラジオ、テレビメディアでも積極的にお知らせしています。

「三重県からのお知らせ」が流れてきましたら、ちょっと耳を傾けてみてください。「ワクワク」「どきどき」してくださいね。

2007年6月18日（月曜日）【裏窓から】

夏も盛りを迎えようとしています

夏も盛りを迎えようとしています。旬の味がたくさん揃い始めました。

スイカ、トマト、メロン、ナス、かぼちゃ、どうもろこし、枝豆、カンパチ、鯵(アジ)、鰻(ウナギ)、鱧(ハモ)…。

旬を知り食することは環境問題を学ぶ第一歩であるものの、食卓を潤す食材に節度を奪われ、なりふり構わず食べ続けると、市井で話題のメタボちゃんになってしまいかねないのでご注意ください。

メルマガ本編のなかで「夏休み子ども環境講座」のご案内をしていますが、人気講座のひとつにエコ・クッキングがあります。

エコを実践しながらも食べ過ぎてしまえば、エコ・度合いは低下するだけでなく、肥満度合いが上昇してしまいますので、メタボちゃんが心配な方々はどうぞお気をつけください。

*

さよならと梅雨の車窓に指で書く　長谷川素逝

津市にゆかりのある長谷川素逝の作品にこのようなちょっと現代風なのがあります。映画みたいなシーンを想像しますね。ありふれた情景であるのですがこの作品の「梅雨」という言葉が、分かれてゆくセンチメンタルな人の想いと雨の日の持つ鬱陶しさとを上手に繋げてくれて、後味が爽やかになってゆくのがわかります。

今年の梅雨は少しジメジメするものの、水不足の解消にはそれほど役立たず、一部の地域には水害をもたらしています。昔から七夕豪雨ともいい、高校時代にも伊勢市の勢田川が氾濫して宇治山田駅まで水に浸かって立ち往生したことがありました。

たなばた様の夜は「うち曇る空のいづこに星の恋」(杉田久女)のうたのように曇り空でした。しかし、このメルマガがみなさまのお手元に届くころには、真夏の暑い日ざしが容赦なく照りつけていることかと察します。

いよいよ本格的な夏の到来。子どもたちにとっては楽しい夏休みの始まりです。

センターでは恒例の「夏休み子ども環境講座」が始まります。家族でご一緒に総合的な勉強に挑んでみる、また夏休みの宿題を補ってみるなど、どうぞ、奮ってご参加ください。

また、7月の最後の週の土日には「Mieこどもエコ王国大会」も実施されます。こちらでもみなさまの来場をお待ちしております。

2007年7月 9日 (月曜日)【裏窓から】

自然を考える

去る、7月29日(土)、30日(日)の2日間にわたり鈴鹿山麓リサーチパークで、Mieこどもエコ王国大会を開催しました。2日間で延べ2500名以上のみなさまにおこしいただき、どうもありがとうございました。

このイベントでは、近鉄四日市駅からジャスコ尾平店を経由して当センターまでの経路でシャトルバスを運行しました。利用者数が450名を大きく上回り、「パーク・アンド・バスライド」の定着が予想以上であることを実感できました。

まだまだ暑い夏が続きます。センターでは、「夏休み子ども環境講座」を開催しています。ほとんどの講座が予約で埋まっているものの、一部の講座では空席がありますので、夏休みを利用して環境を学んで、実際に体験してみようとお考えの方々はセンターまでお問い合わせください。

*

今月は、環境学習指導者養成講座から、「インタープリター養成講座」と「地球温暖化防止講座」をお知らせしました。

講座の詳細(プログラムや講座講師など)は、ホームページの中で説明していますので、「三重の環境と森林」からトピックスを辿っていただきご覧ください。 地球温暖化防止講座では、公開講座も用意しています。こちらは申し込みが不要ですので、みなさまのお越しをお待ちしております。

また、夏休み子ども環境講座「ジェンベをたたいて西アフリカの自然を知ろう」の募集案内も掲載しました。

センターでは、自然と親しみながら自然を考えることも、環境学習の一環として積極的に取り上げています。たくさんの方々の参加をお待ちしております。

2007年8月10日 (金曜日) 【裏窓から】

空を見上げる

夕焼て指切の指のみ残り　川崎展宏

空を見上げるのが楽しみな季節になってきました。以前、三重県環境学習情報センターで「空と雲」の講座を実施したときに「空を見上げるのが好きな人、居ますか？」と尋ねたら大勢の方が手を挙げてくれました。たくさんの人が空を見上げてそれぞれに様々なことを連想しているのだなと感じました。「夕焼て…」の句を詠んだ作者の脳裏には、きっと子供のころに見上げた鮮やかな夕焼けが蘇っているのでしょうね。

さて、8月末に伊勢平野で始まった稲刈りは、少しずつ山間部にまで広がっていきます。里山が少しずつ色づき始める9月末ころには、やまあいの集落でもおおよそ稲刈りが終了していることでしょう。実りを収穫したあとには感謝を込めた村祭りが行われ、やがて、農家は一年の後片付けを急がねばならない季節を迎えることになります。

自然と関わりながら四季折々の恵みを受ける人々は、自然に深く感謝をしてこの季節を迎えます。自然からの産物は食を満たし、静かな秋の夜は安らぎを与えてくれます。神秘的な淡い月の光は、長い歴史のうえにおいても大勢の人々の心を魅了し続けてきました。

このメルマガが配信されてしばらくすれば、月は少しずつ明るさを増し始めます。月見団子の美味も去ることながら、身体の中に潜んでいる音楽や芸術への思い、あるいは学を志す心を奮い立たせてくれるのも秋の特徴でしょうか。

*

今回のメルマガ記事のなかで紹介した「森の講座」の記事を読みながら、9月末に発行予定の「環境学習みえ・秋号」(三重県環境学習情報センター発行・年4回)の特集のことを考えていました。

今季の特集は「森」をテーマにしています。この企画は、秋にちなんで、こどもから大人まで、みんなを森に誘い出して、自然をもっと理解してもらおう、と考えられたものです。

「森の不思議」に出会えるかもしれません。

ーーー

ぼくらの町を流れる川を
ずーっと遡ってゆけば
きっと源流に辿り着ける

いくつもの森を通り抜け
いくつもの森のふしぎに
出会いながら
もっと奥へと　探検にゆく

森の奥には　お宝がザクザク
鳥が啼いて　風が吹いて
水が湧いて　花が咲いている

清水が　せせらぎに変わり
川になって滝になる

生命の始まりが　見つかるかもしれない

自然を知ろう　源流を見つけよう
ふしぎワクワク　自然ドキドキ

2007年9月13日（木曜日）【裏窓から】

芋峠から明日香村へ

カレンダーも残り3枚となって、嬉しいような哀しいような気分です。

10月。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺　正岡子規

深まる秋にこの句を思うと、人それぞれの秋が脳裏に浮かぶことでしょう。

子規は「法隆寺の茶店に憩ひて」と前書きしながらも、この句を東大寺で詠んだといいます。聖徳太子の勇壮な姿が斑鳩を駆けまわった飛鳥時代に思いを馳せていたのでしょうか。

そこで私も例に漏れず、あたかも子規の演出に釣られるよう風情を探しに、奈良盆地方面へと県境を越えたのでした。ひょいと明日香へ。

10月6日。

東吉野から明日香村へゆく峠を芋峠といいます。アスファルトの両脇が緑のコケで覆われている寂れた山道です。木でこしらえた手作りの道標のとおりに峠道を越えると明日香村に出ます。色づき始めた山あいの棚田で黄金色の稲穂が秋風に波打っている風景が広がります。所々で稲刈りが始まっていて、懐かしい稲架掛け(はさがけ)も見ることが出来ました。

脱穀の風景も変わりつつあります。刈り取った稲は生のままで脱穀して、石油などの燃料を使って乾燥してしまいます。したがって、刈り取ると同時に切り刻まれてしまう刈穂は、「すすきぼうし」になれぬまま、土に還っていってしまうのです。こんなところでも文明の合理性が採用され、その引き換えに小さなものを幾つか失ってきたわけです。

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我が衣手は露にぬれつつ　天智天皇

「あ」から始まるので覚えていました。明日香地方を散策しながらふっと思い浮かんできた歌ですが、この情景も失われつつあるモノのひとつのようです。

*

　巻頭で書きました「秋の田の」…の歌は、高校時代に徹夜で覚えた百人一首のひとつで、腕力で「あ」から覚え始めた成果もあって、30年以上の年月が過ぎても覚えていたのかなと思います。

明日香村稲渕地区で超のんびりしていました。このあたりは「かかしロード」と名づけて9月にはイベントも行われています。彼岸花が真っ赤な花を、黄色い棚田の間に点々と咲いています。

ハイキングやウォーキング、アマチュアカメラマンが溢れ返っていました。

細い道をゆっくりと抜けて石舞台古墳の前で少しまどろんでいました。久しぶりに来ましたが、人は多いものの、割と落ち着く公園です。

ちょうどお昼の時刻でしたので、笠そばに行こうと思い立ちました。長谷寺の山門前を抜けて山の奥へと入っていきます。二度目です。蕎麦の花は刈り取ってしまった後でしたが、大勢の人で賑わっていました。

奈良県の山中のB級・農道(村道)を堪能して帰ってきました。3連休の後ろの2日間は仕事でした。お疲れ様＞自分

2007年10月 9日 (火曜日)【裏窓から】

秋深き隣は何をする人ぞ

　秋深き隣は何をする人ぞ　　芭蕉

芭蕉は元禄7年ー奥の細道を旅をしたのが元禄2年で、それから5年後ーの9月28日この句を詠んだと記されています。旧暦の9月は、もはや、すっかり秋が深まっている時期で、ちょうど今ごろでした。　　（太陽暦で11月15日）

暮れ行く秋の静けさと寂しさを、移ろいゆく季節に感じながら、実は自らの体調に迫り来る異変にも気付いていたのでしょう。その10日余後の10月12日に突然ぽっくりと逝ってしまいます。50歳。

　此道や行人なしに秋の暮　　芭蕉(同年9月26日）

さて、今や「隣は何を…」ではなく、ご当地で鎮火の兆しのないおみやげ物の製造日などの不正騒ぎですが、その傍らで「もったいない」という声が上がり、情状に眼を向ける人も多かれ少なかれあるようです。

大勢を欺くという行為が如何なる理由であれ事実であるならば司法の判断を待たねばなりませんが、食べる側の人の中に「もったいない」という意識があったことに一縷の望みが残されているような気もします。

*

（後半部分は、チェックが入って、以下のように改訂しました。）

　さて、「秋の暮」というと「秋は夕暮れ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、…」を思い浮かべ「夕暮れ」をさすように思いますが、しかし、芭蕉のいう「秋の暮」は「夕暮れ」ではなく秋そのものが暮れてゆくという「晩秋」のことで、近づきつつある厳しい冬を思い浮かべながらの情景だったのでしょう。
　メルマガを書いている今日(11月12日)は、鈴鹿山麓に寒波が押し寄せ、外に出るとぶるっとする日になっています。

2007年11月 7日 (水曜日)【裏窓から】

師走雑感

巻頭言

　早いもので、あと数日で新年を迎えます。読者の皆様もそれぞれに1年間を回顧したり、来年の展望を抱いたりしておられることでしょう。

　この年を表す漢字が「偽」と報じられて、うなづいた人もあれば、嘆いた人もあることでしょう。また「××の品格」であるとか「××力」などという題名の本が話題になったりした年でもありました。

　今年の新年のメルマガ編集後記は、「米国の元副大統領アル・ゴア氏」の記録映画「不都合な真実」に触れましたが、ノーベル平和賞でも話題になりました。「地球温暖化」という言葉も、今まで以上に印象の強い年でした。

*

あとがき

　今月のメルマガは、月末ギリギリまで遅れてしまい、大変申し訳ありません。
遅れている間に師走がぐんぐんと押し詰まってしまいましたが、今回はまだ締め
切りに間に合う募集を何点か掲載しました。お正月にご家庭団欒の折にでも、ぜ
ひご検討ください。

　さて、平成19年の師走も、いよいよ残すところ僅かとなりました。今年も「三
重の環境と森林」メルマガをご愛読いただきましてどうもありがとうございまし
た。皆様、どうぞ良い新年をお迎えください。

この季節のこの時期を迎えると、毎年同じことを考え、頭の中を巡りゆく喜怒哀楽を思い起こし、自省をする。しかし、振り返ることが大切なのではない。次に何をするかを練ることが大事なのだ。

しかし、年末年始という時期が、昔のような緊張感を失っているため、師走といいながらも一年を納めるという重大感がないとも言える。

子どもの頃のように、親戚が遠方から帰省し家中に人が溢れ、賑やかにひとつのテレビに夢中になって時間を過ごすという風景は消えつつある。家族は、それぞれがテレビや冷暖房を備えた自分の部屋を持ち、一日の行動においても、マイカーで出かければ気ままな時刻に帰り着き勝手にご飯を食べるとスタイルを、悠々と送っている。

快適に暮らし、幸せであれば、それでいいのか。

*

日経エコノミーがサイトで有識者に次のような質問を投げかけている。

■　Q1）COP13の成果をどのように評価しますか?
5段階評価〔大変評価できる・ある程度評価できる・なんともいえない・あまり評価できない・全く評価できない〕でお答えください。
■　Q2）エコに気を使って冬を乗り切るアイデアは?

痛みを伴なう節約や省エネ、ライフスタイルの改革など、満足で快適な暮らしにメスを入れねば、いけない。そのことはこれまでにも再三、声を大にして言ってきたのだが。
社長、たのんますよ。

2007年12月29日（土曜日）【裏窓から】

冷たい朝

寒の入りを過ぎて朝の寒さが一層厳しくなってきました。伊勢平野には、鈴鹿おろし、布引おろしという厳しい北風が吹きますね。

　海に出て木枯帰るところなし　山口誓子

山口誓子が詠んだこの伊勢平野に湾の向こうから朝日が差し込み始めるころ、冬枯れの田畑を覆い尽くす一面の霜が銀色に輝きます。光を受けながら集団登校の小学生たちが銀色の畦道伝いに歩いてゆく姿はとても長閑で、子どもたちの吐息を太陽の光が照らすと、吐息はキラキラと鮮やかに揺らぎながら冷たい空気の中へと消えてゆきます。

こんな風景に出会って、子どものころの登校時間を思い出しました。田んぼの溝に張った氷を割ってみたり、道ばたに盛った土のなかに宝石のようにできた霜柱を手のひらに乗せて見せ合ったりして遊びながら学校へと向かったものです。

今の時代、道端に霜柱も水たまりも見かけなくなりました。田んぼの土手で道草を食う子もほとんどいません。だったら、この子たちが大人になったときに、今と同じ風景に出会ったとしたら、一体何を懐かしむのだろうか、ふとそんなことを思いました。

*

　締切りが迫った講座等のお知らせをお伝えするために、新年(1月)は臨時号からのスタートとなりましたが、遅ればせながら1月号をお届けすることになりました。

　まだまだ寒い日が続くにもかかわらず、スーパーなどの店先には節分グッズが並んでいるのを見かけます。やはり、暦の上では春がそこまで来ているようです。しかし、油断は禁物。インフルエンザは流行中です。どうぞ、ご注意を。

2008年1月14日（月曜日）【裏窓から】

今朝はうっすら。

きのう、発行したメルマガの「巻頭言」から。

先日、ほころび始めた梅でも観ようかと思い、京都の北野天満宮へ行ってみました。

その日は北風が冷たく、小雨が降ったりやんだりの生憎の天気でしたが、少しほころび始めた梅の蕾にカメラを向ける女性や受験生の親子などの、境内を散策する姿がちらほらありました。今月下旬の天神さんが一番見ごろでしょう。

あくる日の朝には洛中一面が雪景色になり、さながら枕草子の世界といった感じを味わえまして幸せな気分でした。

さて、あっという間に二月も中旬になってしまいました。暦の上では春ですが、如月(きさらぎ：衣更着)という名のとおり、まだまだ寒さの厳しい日が続きます。早く温かくなって欲しいものです。

*

　本文の記事に取り上げた「みんなでへらそうCO2」「おいしくのんでリサイクル」のダンスは、なかなか楽しくて面白いです。

　かつて一世を風靡した「ピンポンパン体操」のようなブームになるといいな、と密かに期待を抱いております。メルマガ読者の皆様も、どうぞ身近なところでPRをよろしくお願いします。きっと、先生も幼稚園児も楽しんでくれることと思います。

　まだまだ寒い日が続きますが、灯油の価格も高騰したままですね。おそらく、どちらの家庭も節約に様々な知恵を絞ってこられたと思います。厚着をして乗り切るという声もありますね。効果は出ましたでしょうか。

　このメルマガを書いている間に「雨水」が過ぎ、朝の冷え込みが心持ちゆるんだような気もします。どうぞ、暖房設定温度を1℃下げて、もうひと頑張りしましょうか。

ここで出会った雪は二月十二日の朝のことでした。あの日も寒かったです。

さて、春一番が関東地方に吹いたというのに、昨日の夕刻ころから鈴鹿山脈上空には雪雲がやってきてまして、峠の道路情報カメラにも雪がべっとりと付着しています。でも、期間は短いという予想だとか…。

今朝もうっすら。

少し朝寝をしたあとで部屋のカーテンをさーっと開けましたら、お向いさんの裏口や家の木蔭にうっすらと白いものが積もっています。

ゆうべ、峠のほうから吹けてきたのでしょう。朝日が当たるといっそう白さも増して、眩しいです。タンポポの綿毛のような雪片が風にゆられて舞っています。

この雪が今年最後の雪だといいのに…。

そろそろ、バイクを動かさねば、と考えています。さて、いつになるやら。

2008年2月24日（日曜日）【裏窓から】

春

すっかり春めいてきました。

朝夕が幾分温かくなって、起きるのもちょっと楽になってきました。

お天気のいい日には外へ出かけてリフレッシュしたいものです。

2008年3月20日（木曜日）【裏窓から】

風薫る

4月もあっという間に下旬になってしまいました。

平野の水田では田植えが終わっているところも多く見受けられます。小さな可愛い苗が春風にそよいでいました。その隣では、すくすくと育つ麦畑、れんげ畑が広がり、ヒバリが天高く囀っていました。

大型連休が始まりました。みなさんはどんな計画を立てられれているのでしょうか。

*

風薫るさわやかな季節になりました。三重県内には、野外を楽しめるところがたくさんあります。

今月号は、三重県県民の森(北勢)と上野森林公園(伊賀)の行事予定も載せてみました。

このメルマガでは、アウトドアへと出掛ける人たちのために役立つ情報等も、随時、掲載していきたいと思います。

どうぞ、お楽しみに。

2008年4月21日（月曜日）【裏窓から】

爽やかな風

風薫る5月。爽やかな風が野山を吹き渡り、自然の中に飛び出すには絶好の季節となりました。

大型連休のころ、伊勢平野に植えられたばかりの苗は、水かさが増えれば流されてしまわぬかと心配をするほど弱々しかったにもかかわらず、わずか半月余りのうちに逞しく青々と育ち始めました。この早苗に負けじと麦の穂も顔を出し、やがてこれらが色づき始めるころには夏の盛りがやってくるわけです。

夏が待ち遠しい方々。もうすぐですね。

*

実はメルマガ編集を3年前から担当してますが、3月まではこの拠点が鈴鹿山麓にありまして、豊かな自然に恵まれた環境のもとでPCに向かっておりました。

しかし、4月から県庁8階に異動してきまして、南の窓からは伊勢湾を遠望できるものの、ほんの2、3分歩けば雑木林の散歩道まで辿り着けて今の季節ならホトトギスの鳴き声に耳を澄ませるというようなこともなくなってしまいました。

そこで、何か身近なところでホッとするような記事でもないものかと新聞を開ければ、遠い国で嵐が吹き荒れたとか、地震が襲って街が壊滅的になっているとか、地元では雷雨の被害があって災害が発生しているというようなものが目に付きました。いずれも近年、注目されている気候変動に因るものかもしれないと思うと複雑な心境になります。

琵琶(ビワ)の花が咲いたとか、その花が咲いたと思っていたらいつの間にか実がなっていたとか、ハイキングの途中で鮮やかな山吹の花が咲いていたとか。できることなら、そんな便りや写真が数多く私たちのところに飛び込んでくると嬉しいな、と思います。

2008年5月19日（月曜日）【裏窓から】

梅雨の季節

鬱陶しい梅雨の季節を迎えました。今年の梅雨入りは去年よりも12日も早く、クールビズ初日と梅雨入り宣言が重なった形になりました。

その初めての朝、大粒の雨は夜半から降り続いたままで、列車の中は傘を持った人で混雑してずぶ濡れ、窓はすっかり曇ってしまっていました。そして、いつも座っている高田高校の女子生徒4人が曇った窓ガラスに落書きをしていました。

曇りガラスにハートを描いた子に隣の子が何か話し掛けたなと思ったら、その子はそそくさとその絵を消してしまいます。そのあとは訳の分からない絵をみんなで描き殴って、ガラスのキャンバスはぐちゃぐちゃになっていきました。

私はそんな様子を見ながら、

さよならと梅雨の車窓に指で書く　（長谷川素逝）

という句を思い浮かべて、いつの時代もあるささやかな情景にぼんやりと感動のようなものを覚えていました。

列車が阿漕駅に止まります。はからずも、この句を詠んだ長谷川素逝は、阿漕にゆかりのある人です。

普段から嫌なイメージばかりの梅雨ですが、こんな情景と出会うと少し見直してみようかなとも思えてきます。

*

先日、ふとしたことから30年ほど昔の下宿生活のことが夕食の話題になりました。

あのころは、そういえば「レジ袋」というものは流通し始めたばかりで、世の中には殆ど無く、スーパーで買ったものは四角い紙袋に詰めて持って帰ってきたものだった。だから、ゴミ出しの日にはその紙袋にゴミを入れたものだった。そんな話から始まりました。

それもそのはずよ、コンビニなんてものも、ポツリポツリとしか見かけなかったし、大体、夜中に町をふらふらと歩き回ったりもしなかったでしょう。明かりも今ほど夜中まで煌々と点けていなかったかも。

ゴミの量も少なかったような気がする。むやみやたらにプラスチックやアルミの容器なんて使われていませんでした。エアコンだって、大学生の下宿にはありませんでした。ビールだって瓶ビールが主流だったしね。

しみじみと話し始めれば次々と昔懐かしいものは出てきました。そんなものを掘り起こしながら、そのネタをツマミに缶ビールの栓を抜くのもいかがなものかと自省しながら、もう一杯だけいただきました。ビールのおいしい季節になりました。

2008年6月17日（火曜日）【裏窓から】

歴史に刻まれるもの

メルマガ今月号から。(まだ決裁下りてないけど)

□■　巻頭言

　通勤の途中で枯れ井戸を見つけました。手動ポンプが錆び錆びになって傾いて今にも崩れそうでした。でももしかしたら、朽ち果てた木の蓋を取って覗けば水がなみなみと湧いているのかも知れませんが。

　井戸というのは私たちの暮らしに非常に密接なところにあって、夏なら「朝顔につるべ取られてもらい水」(千代女)などという句にあるように生活が滲んでいまして、小さいころは、手でギーコギーコと水を汲み上げたものです。しかし、その姿も今や過去の風景で、水の恵みに感謝をする人の気持ちも希薄になりつつあります。

　ちょうど、先月号のあとがきで少し触れたレジ袋というモノが、その歴史は儚く短いものだと気付きまして、30年～40年前に登場しやがて消え行くという運命のものを身の周りから拾い出していたときにこの古井戸に出遭いました。

　井戸の水を汲み上げる手動ポンプもスーパーのレジ袋も長い歴史に刻まれるひとつの革新でありながら、人々の心に残る過程でそれぞれの色合いを放ち次の世代を担う子どもたちに受け継がれてゆくのだなあ、と思ったわけです。

　豊かさと満足度という庶民にとっての指標は、いつの時代でも変わりなく、レジ袋、コンビニ、深夜のテレビ放映…などもその例外ではありません。しかし地球温暖化のマイナス因子としてこれらひとつずつを取り上げて善し悪しを論じ合っても「木を見て森を見ず」のたとえになりかねず、本質はもっと源流にあり私たちの生活スタイル自体を見直すことなのだと、短い歴史を顧みながら感じたのでした。

□■　編集後記

　すっかり暑さが居座ってしまいました。夏本番といっても良さそうなほどの暑さです。あちらからこちらから、夏祭や踊りのニュースが届いてきます。このメルマガがお手元に届くころは、梅雨は明けているかもしれませんね。

　夏といえば…夏休み。子どたちは海へ山へと夏休みを満喫するべく大忙しになります。私が連想するものは、ウナギ、鱧(ハモ)、流しそうめん、スイカ、桃、ぶどう、梨、トマト、なすび、とうもろこし、かき氷…。おっと食べ物ばかり。

　ほかには、図書館、プール、麦藁帽子、夏祭、花火、海の家、苫屋、蚊帳、蛍、ラジオ体操、風鈴、蝉時雨、入道雲、宿題、撒き水など。

　ざっとこれらを思い浮かべてみるだけでも、人々の暮らしが短期間で簡単に姿を変えてしまっていることに驚きます。それはつまり、将来の環境は今の私たちがしっかり考えて行動すれば良くも悪くもなり得るということなのでしょう。

――

実は、
「豊かさと満足度という庶民にとっての指標は、いつの時代でも変わりなく、レジ袋、コンビニ、深夜のテレビ放映…など」のあとには、

これらが「狙い撃ち」されて、言論なども厳しく捲くし立てているようだが‥‥

という意味のことを書いたのですよ。
そしたら、チェックが入って「やんわりと」いきましょうと。

同じことを述べるのに、角を尖らせて、いかにも正論堂々風、辛口の厳しいものが格好良く受ける風潮はあるのですが、しかしながらここでは、優しくさり気なく、ファインプレーじゃなくても実はファインプレー的な書き方も格好いいのだという静かで重みのある指示でした。

2008年7月16日 (水曜日)【裏窓から】,【雷山無言】

暑さ。もう少し続きます。

立秋が過ぎてもなお、クマゼミは早朝から激しく鳴き立てています。休日の早朝にゆっくりとコーヒーでも味わいながら読書でも…と企てたのですが、ものの見事に愉しみは打ち崩され、じりじりと蒸し暑さを呼び込むセミの喧しさにちょっと閉口気味となってしまいました。(怒りと苛立ちかも)

閑さや岩にしみ入蝉の声。松尾芭蕉が立石寺の境内から下界を眺めて詠んだであろう一句を連想してみても、こんな暑さのなかでは、芭蕉さんのような悠長で広い心の持ち主には到底なれません。(「昔はこんなに暑くなかったのに…」とひとりごちておりました)

蝉採りや魚釣りをして過ごした子どものころ、お盆が近づいて夏休みの終わりがあと半月ほどに迫ってくると、子供心に切迫感や寂寥感を抱きながらお盆を迎えたものでした。

オリンピックのニュースを見ながら思っていたのですが(なかには東京五輪を回想された方もありましょう)、今の子どもたちの暮らしのなかには、生まれたときからテレビに色が着いており、個人で携帯する電話があり、いつも冷蔵庫には氷ができている。どの部屋にも冷房があり、食材はプラスティック製品で綺麗に包装されている。

「昔は…」と口癖のように形容する夏も、やがて歴史のひとつの事象になってゆくときが来る。ひとつの文化を持つ時代が過ぎ去って、新しい時代と入れ替わるときには、多かれ少なかれ歪や損失、衝突を伴いながら、古いものが消失してゆく。

そんな幾節にも連なる歴史を飛び越えて喧しく鳴き続けるセミの声は、300年前に芭蕉が唱えた「不易」を象徴するかのように、今でも同じ声で鳴き続けているのだと思うと、憎くらしさも半減といったところでしょうか。

暑さ。もう少し続きます。

*

長いメールマガジンになってしまいました。既に1万3千字を超えてしまいました。そこで、何かを誰かに簡単に説明するには果たして何文字くらいがいいのだろうかと考えると、たとえば新聞の投書欄のように500字から800字程度が適切でしょうか。無駄を省き、短い言葉で正確に伝え、読者を惹きつけるのは難しい。いつもながら、ここまで読んでくださっている読者の方には感謝します。

さて、最近ちょっと気になるモノがひとつあります。それは新聞の「折込チラシ」です。ものスゴイ量の広告が毎日我が家に持ち込まれ、資源ゴミの日に纏めて排出されてゆきます。

インターネットが普及して携帯電話などから手軽に消費者情報が得られる時代になりつつあり、根強く紙ベースで配布されてくるチラシも(もしかしたら新聞も)、やがて消えてしまう日が来るのでしょうか。

立秋が過ぎてまだまだ暑い…と巻頭で書いたものの、深夜や早朝にふっと涼風を感じることもあります。私事ですが…寝室のエアコンが壊れて扇風機で過ごしておりまして、正直言って早く夏が終わって欲しいです。

2008年8月18日 (月曜日) 【裏窓から】

泣くことを忘れて夜の長さかな（竹久夢二）

中秋の名月の夜は、部屋から空を眺めていた。

定例のメルマガの巻頭から。（URL：略）

--

　待てど暮らせど来ぬ人を／宵待草のやるせなさ／今宵は月も出ぬさうな

　竹久夢二がどんな想いでこれを綴ったのかは計り知れないのですが、
秋とはまことに不思議な季節で、人々は月を見て様々なことを想い、悩み、或いは願い続けてきたのでしょうね。

　今年の中秋の名月も例外なく、この巻頭を書くためにペンを持った夜半に、あくる日の雨を予言するかのように、うすぼんやりと絹雲に覆われた姿で南の空にありました。

　夏から秋へと季節が変わるのはページを1枚捲っただけのような感覚でもありますが、目に映る自然や人の装いまで秋色に変化していることに、ときどきハッと驚かされます。

　2、3日前には咲いていなかった彼岸花が気がつくと満開になっていたり、夕焼けがやけに赤くて思わず写真を撮ってみたり。少しウキウキの気分になれたりします。

--

こんな嘯いたことを書きながら、月を見ていた。

今の時期の月には迫ってくるものが無い。
ゆるゆるとしている蒟蒻のような奴が歩いている姿のようだ。
月は、寒さの中で凍えるように震えているのがいい。
泣いても泣いても果てることなく燃えるような情熱を持っているときが人は最も美しい。

　泣くことを忘れて夜の長さかな（竹久夢二）

*

あとがきから

　少し前に枝廣淳子さん(環境ジャーナリスト)のブログでマイ箸のことを読みました。そこで枝廣さんは

「何年か前に家族で旅行に行ったときのことです。お家で使っているそれぞれのお箸を、袋にまとめて入れて持っていきました。帰りに、富山県の魚津駅で、朝、どうしても時間がなくて駅そばを食べたんです。袋に箸をしまって帰ろうとすると、きっと奥からみていたんじゃないかな、お店の奥からおばさんが出てきて、『よこしな』と言って箸を全員分洗ってくれました。熱湯消毒したあとの箸のぬくもりが、嬉しかったのをおぼえています。」

と書いています。

　すべてのことに合理性を適用して、二者択一の飾いにかけて、アレは環境に良くないコチラは優しい、というように前進することもひとつの手段ですが、その背景には私たちが大昔から築き上げてきた生活文化への畏敬の気持ちがあってのうえでの選択かと思います。

　聖徳太子が初めて使ったいう1400年もの歴史を持った箸の文化、江戸時代にお蕎麦屋さんが考え出したという割り箸文化。奈良時代に登場したという風呂敷文化。買い物に使うような籠の文化は縄文時代まで遡るかもしれませんね。

人々の心の中を深く受け継がれてきた文化を見直してゆくことで、随分と環境に対しても優しくなれそうな気がします。

2008年9月22日（月曜日）【裏窓から】

欠け欠けて月もなくなる夜寒かな　蕪村

すっかり秋めいてきました。時に、夜道を歩けば冬を思わせるような寒さを感じることがあります。

十三夜のころ、食事に出たあとに、月明かりの下を少し歩きました。薄着で出掛けたのでブルッときました。

こういうのを夜寒というのかな、いや、夜寒とはもっと秋が深まったときのことをいうのかな、などと思案しながら家路を急いだのですが、辞書を調べると「10月から11月に使う」と書いてあったので、いまごろのことをいうのだなと安心しました。

辞書を開いたオマケで、

欠け欠けて月もなくなる夜寒かな　蕪村

という句が目に留まりました。

昔から、誰もが同じようなことを肌に感じながら秋の夜を送っているのですね。

*

三重の環境と森林のホームページのトップ画面左側に投稿写真のコーナーがあります。10月は「秋の風景」 11月は「秋から冬へ」というテーマで募集しています。

近頃は携帯電話にカメラが付いていますし、コンパクトなカメラもお手ごろになっていますので、身近なところで秋を発見したらすかさずにパチリと撮って送ってみませんか?

野山を歩いていて珍しいなと思うような動植物を発見したときなど、もしも名前が分からなくてもそのまま構わないので送ってみてください。環境森林部の誰かの目にとまれば、その名前は判明するでしょう。

いい写真、珍しい写真が撮れたら投稿してくださいね。今なら掲載されること間違いなしです。

実は私の場合…街角や雑誌で珍しい花や鳥などを見つけたら、即座にメールで環境学習情報センターの木村さんに「教えて、これなあに？」メールを出します。

子ども電話相談室の先生みたいに分かりやすい解説と正解が、確実に返ってきます。けっこう重宝しています。

2008年10月20日（月曜日）【裏窓から】

通学のカバンにきょうから赤い靴

寒くなりました。13日のメルマガの巻頭で

――
11月の声を聞いた途端加速するように寒さが増し、朝夕、暖房の入った電車に乗り込むと優しい温もりを感じる季節になってきました。

　冬と書く柊と書く火恋し（榎本享）

今年も残り2ヶ月を切ってしまいました。そうだ、火の一句の〆切も近いですね。
街はハロウィンが終わって次はクリスマスという勢いです。晩秋という言葉が醸し出す静かな秋ではなく、子どもたちのにぎやかな声の聞こえる秋といった感じです。
――

と書き始めましたが、ほんの1週間ほど前に思いついたことだったのにもかかわらず、二三日でいっそう冬らしくなってしまいました。

朝の駅、ホームで列車を待つときも息が白く濁ります。吐息が白くなり始める気温は5℃程度だから、もう冬のような朝といってもいいのかも知れない。コートを羽織っている人もいる。

線路脇に生えた雑草が朝露に光っている。落ち葉が風に吹かれてきて、道の隅っこに集まっている。
落ち葉と言えば･･･葉っぱが落下する速度は秒速0.5メートルから1.5メートル。背丈が2メートルの木から寿命を迎えた葉っぱが地面に落ちるのを見つけたら、その葉っぱは2秒ほどの時間で地面まで落ちる計算になります。

エレベータのドアが開いて人が下りた後、約2秒で「まもなくドアが閉まります」と声が流れ、1秒後にドアは閉まる。とても長く感じる人が大多数なのか、大抵の人は必ず「閉」ボタンを押す。

落ち葉がゆらゆら。
地面に落ちてゆく時間くらい、待てばいいのに…
といつも思う。

列車が近づいてくると、いつも乗ってる女子高生が向こうから駆けて来る。上品で可愛らしい子だ。

あら、この前までぶら下げていたマスコットと違って、今日から赤いサンタのミニミニブーツだ。
「きょうから赤いブーツね」
と思わず声を掛けてしまいそうになりました。

通学のカバンにきょうから赤い靴　ねこ

そういえば、子どもが小さかったころ、お菓子の詰まったブーツを買うのが楽しみでした。必ず子どもは足を入れて遊ぶのよ。

何歳までサンタさんを信じていたのかな。

*

あとがき　から

　先日亡くなった筑紫哲也さんの著作に「スローライフ―緩急自在のすすめ」(岩波新書)という本があります。

　記者としての一線を引退してからの作品だと思いますが、アメリカ特派員時代に(ちょうど私は学生でしたので記憶が鮮明なのですが)、記者としての激しい使命感でルポを送り続け、その後も注目を集めるジャーナリスト人生であっただけに、晩年に書いたこの作品は随分と穏やかだなと感じます。

目次を紹介します。

――

- それで人は幸せになるか
- スローフード、9・11、一神教
- ファストフードの時代
- 寿司と蕎麦、そして「地産地消」
- 「食」の荒涼たる光景
- 小さな旅、スローな旅
- 失われた「子どもの楽園」
- 急ぐことで失うもの
- 「学ぶ」ということ
- 「スローウエア」「ファストウエア」
- ロハスのすすめ、森林の危機
- 「木」を見直す
- 長寿と「人間の豊かさ」
- スローライフ、北で南で
- 真の「勝ち組」になるために

――

人は、全速力で突っ走った後には、スローに戻りたいのかもしれませんね。興味のある方は、ぜひどうぞ。

2008年11月14日（金曜日）【裏窓から】, 十七音　のおと

新年明けましておめでとうございます

新年明けましておめでとうございます。といっても、すでに成人式が終わって、お正月気分は完全に抜けていることと思いますが。

世界は大恐慌並みの不景気に危機感を募らせる一方、海の向こうのアメリカでは次期大統領就任で湧き上がっています。google の検索窓に「Barack OBAMA」と入れてクリックすると新大統領のスピーチが目に飛び込みます。熱気ある演説の中では「change」であるとか「environment」という言葉が盛んに登場します。化石燃料に代わる次のエネルギーに何か新しい変革を起こそうとしているのがわかります。

元旦の朝刊の広告に「百年後だって、人間はきっと変わらない」というのを見つけました。それは、ある出版社のものですからすっと通り過ぎてしまった人が多いかもしれませんが、ちょっとお洒落で、意味有り気なキャッチコピーです。私たちは百年も生きられませんから「百年後だって、人間はきっと変わらない」という願いにも似た気持ちを叫んでみても、しかしそれを確かめるのは私たちの次の世代です。「百年後」を見据えながら「変化すべきところ」と「守るべきもの」をしっかりと見極めていかねばなりません。

今、オバマ氏が叫ぶように、人類は「change」をしながら、さらに社会は進化と後退を繰り返しながら歴史を刻んでいくことを考えると、やはり、私たちもこのときを機会に新しいステージへと踏み出さねばならないのだ、と暗示をされているようにも受け取れます。

どうぞ、今年もよろしくお願い申し上げます。

*

成人式を祝う若者たちをニュースで見ながら、10年前に環境活動を学んだ子どもたちは、今や二十歳になっているのだなと思っていました。三重県環境学習情報センターが開館したのが平成11年のことで、小学校時代にここで環境に関ることを学んだ子どもたちも成人式に混じっていることになります。

巻頭でも少し触れましたが、今「変化」しようとしているものは数限りなくあり、私たちが携わっている「環境と森林」いう分野でもこれまでにないチャレンジがあると思います。これまでと同じことを繰り返しているだけでは、新しい環境活動は望めないと示唆されているようで身震いする思いです。

このメルマガを前任の人から引き継いだのが平成17年3月ですから、早いもので、やがて4年を迎えます。「まちかどエコ＠みえ」のコンテンツも始動しました。ホームページやメルマガを始めとして、活動の新しいステージを構築するべく、自分たちも change しなくてはならない日々が続きます。

2009年1月19日（月曜日）【裏窓から】

如月

◆◆　巻頭言

▽　2月になりました。

▽　寒さが募るために着物を更に重ねて着ることから、昔の人々はこの月を如月と呼んでいたそうで、覚悟を決めてこの季節を迎え身を引き締めていたことが伺えます。

▽　その一方で、泣いても笑ってもやってくる春は、もうまもなくということで、待ち侘びる気持ちから、気候が陽気になる時期を「気」が「更」に「来」ると当てて「気更来」とするという説もあるようです。

▽　春は名のみの風の寒さよ、と歌われるように立春を過ぎてもまだなお朝夕の寒さは厳しく、夜明けが幾分早くなったとはいえ、新聞配達のバイクが暗がりの住宅街を走ってゆく音には頭が下がります。

▽　特に今年は例年ほど氷や雪に悩まされることなく、伊勢平野は暖かかったように感じられありがたいのですが、その一方で大根のハサ掛けには寒風が良く似合うなとも思います。

▽　節分が過ぎて、立春も終わって、もう少し、名のみの春とお付き合いください。

　せんべいの紙たべてゐる子鹿かな　長谷川櫂

▽　この次にメルマガを書くときは、奈良・東大寺のお水取りも始まっていることでしょう。

◆◆　あとがき

▽　「氷が融けたら何になる？」と尋ねたら「水になる」答えた人に、「いいえ、春になります」と応じたなぞなぞ問答のような話がありましたが、霜柱を踏みながら道草を食ってい行く子どもたちの姿や池の水面を覆いつくすような氷に出会うことがめっきりと減ってしまい、今どきの子どもたちはこんな話をしないかもしれませんね。

▽　先日、「まちかどエコ」の取材で松阪市にあるベルファームを訪ねました。風が冷たい日でした。朝市を覗いてみましたら、真っ白に洗った嬉野大根がどっさりと積んでありました。土を落として出荷した農家の方々はさぞかし水が冷たかったことでしょう。この日は旬の食べ物をその時期に美味しくいただくということを見直す日になりました。

2009年2月 4日（水曜日）【裏窓から】

啓蟄や、モッコリか、むっくりかもな

【巻頭言】

あっという間に三月を迎えることになりました。日に日に夜明けが早くなって、寒さも緩んできました。

種田山頭火は、句集「草木塔」のなかでいくつも春の句を詠んでいます。

春が来た水音の行けるところまで
もう明けさうな窓あけて青葉
窓あけて窓いつぱいの春

などという句を見ると、締め切っていた窓を開けて、新芽の吹き出す野山へ出掛けよう！と誘われているような気になります。

その一方で、窓あけて…を読みながら、山頭火のころ(70年余り昔)にも花粉は浮遊していたのだろうか、と想像してしまいました。

今月号の記事には、自然と触れ合うものが多いようです。重いコートを脱いで出掛けませんか。

--

【あとがき】

70年前には…と巻頭で書きました。10年ほど前のことになりますが、母校の同窓会に出席しまして、当時60歳から70歳ほどの大先輩の方々が感慨深く学生時代を回想されていたときの言葉が深く記憶に残っています。

「あのころはなあ、特急蒸気(機関車)で、一晩掛かって東京まで出て来たなあ、九州の奴らは二晩掛かったんやで」というようなもので、何もかものスピードが現代よりも格段にスローだった時代です。

丹羽保次郎先生(10大発明家・松阪市名誉市民)のファックスの発明など、科学技術は指数関数的に進化し、60年70年昔には存在しなかったものが今の世に登場してきました。なかには昔ではまったく想像できなかったものもあり、様々な物質や構造物であったり仕組みやシステムであったりします。

大内山インターまで開通した自動車道路の巨大な橋脚を見ながら、もしも、百年後へタイムスリップができるとしたら…私たちはいったい何に驚くのだろうか、と思いました。その驚きの中に、環境の変化とか見たことの無いエネルギーというようなもの入っているのでしょうか…。

メルマガから

2009年3月 5日 (木曜日)【裏窓から】

5月初旬に考える ― エコ運転 ―

5月初旬に考える

・・・・・・・・

■□□
巻頭言

「知ってはる? だんぜんおトクなエコ運転」

これは、平成20年度に募集した「関西エコドライブ推進共通標語」の「最優秀賞」で、啓発ポスターにも使われています。リズミカルにエコドライブをアピールしています。でも、エコドライブっていったいどんなことするのかな？と疑問を抱いている方々もあろうかと思います。

身近なところでは、アイドリングストップもその1つです。実際に信号待ちでのアイドリングストップを小まめに実施すると満タンで100キロほど余分に走るようになったと、地球温暖化対策室の職員談も届いています。やればできそうな気がします。みなさんも挑戦してみてはいかがでしょうか。

交通渋滞が発生すると、いたる所で無駄なエネルギーが大気中に放出されてしまいます。貴重なエネルギーをみすみす棄てるのはモッタイナイですし効率も悪いので、ちっちゃなことも気にしながら、公共交通機関の利用推進、エコドライブの工夫をしていきたいものです。

・・・・・・・・
(没記事)

くしくも大型連休で大渋滞が各所で発生していたわけですが、そんなことがわかっていながら渋滞のなかにお出かけするのはおバカさんですね…みたいなことを書いたら、行政批判はちょっと…いうことでカットとなりました。

■□□□
編集後記

3月、4月、5月と瞬く間にときが過ぎてゆきます。花が咲いたと思っていたら、麦の緑色が鮮やかになり、大型連休のころには伊勢平野の所々で田植えが始まりました。

4月の中ごろのことでした。田んぼ道を散歩をしていると娘(大学4年生)が麦を見て「これ何？」と尋ねるので驚きました。「麦ふみクーツェ」(いしいしんじ)という小説もあるし、麦というものを知っていても、実物は知らない人が居るのだということでしょう。

毎日食べているパンや乾杯で飲むビールも、品種は様々だけれども、この麦の恵みなんだと気付いているのかな。ひょっとして蓮華も知らないか…と思いましたが、そのあたりには既に蓮華畑はなく、田んぼには水がはられ始めていました。

麦の穂のおもひでがないでもない　種田山頭火

壮年のみなさまには蓮華畑や麦畑には数々の思い出があることと思います。

日々のおぼえがきに、桜が咲いたとか麦が青みを増したとか田んぼに水がはられたなどと書き残しておくことがありますが、それもやがて気が付かずに夏を迎える時代が来るのでしょうか。

2009年5月 9日 (土曜日)【裏窓から】

6月のはじめに考える　ー　神去(かむさり)なあなあ日常

メルマガから

――

【巻頭言】

　夏も間近に迫ってきました。クールビズもすっかり定着して、朝夕の通勤列車の中にもノーネクタイの方々をたくさん見かけます。

　じめじめと五月雨が続いてみたり、真夏のように晴れ渡ったりしながら本格的な夏へとなってゆくのでしょう。3月、突然降った牡丹雪の合間から力強く緑の芽を突き出していた麦も、青々と育つ水田の脇で黄金色に実り、今や遅しと収穫の日を待っています。

　南天の花にとびこむ雨やどり　飴山實

　ふと、こんな句を思い出しました。ケータイ電話が一般的になってから、軒先で雨宿りをする人など居なくなってしまったかもな、と苦笑してしまいます。

　お天気を気にして空を眺める日がひと月ほど続きます。

　6月は環境月間です。

――

【編集後記】

　環境森林部職員が綴る「ちょこっと日記」というのがありますが、その中で森林・林業経営室の市川さんが、三浦しをん著「神去(かむさり)なあなあ日常」のことを書いてられます。

　この作品は、三浦ファンならずともちょっと注目していた本ですし、三重県や地元が協力をしたこともあって、新聞などの広告にも「三重県」という文字があったのでお気づきのかたもありましょう。

　早速、本好きの娘と夕食の話題となったのですが、やはり、人間というのはこの作品の舞台になるような鄙びた山村にある種の憧れに似た回帰本能のようなものを持っているのではないか、ということです。

　ごみやリサイクル、地球温暖化という言葉が新聞などで取り上げられ馴染みになるのは大変嬉しいことですが、そういうものを追いかけて、バイオディーゼル燃料やバイオマス、生物多様性のような課題を掘り下げてゆくと、上流には地上にある森林やそこで暮らす生き物、自然に辿り着きます。そこにヒトも住む(棲む)わけで、やはり、源流を見つめるということが大切なんだなと感じていたところで、この作品と出会うので衝撃もやや大きい。

　環境と向き合うということは、ヒントをもらって考えるということなんだなと、つくづく思います。

2009年6月 3日 (水曜日)【裏窓から】

伝承すること、モノ

【巻頭言】

私の生まれた地域では、七月を迎えて七夕様を過ぎたころに、祇園さんという祭があり「堤燈(ちょうちん)灯し」と呼ばれる行事がありました。日が暮れると近所のお寺に集まって、堤燈に火を灯しお参りをします。子どもたちは花火を上げて遊びました。今思うとあれは旧盆の行事のひとつだったわけで、現在でも続いているかどうかは不明ですが、蛍の飛び交う田んぼ道を、浴衣姿に着替え堤燈をぶら下げて出掛けたのを鮮明に思い出します。

先日、シナリオ作家だった向田邦子さんのエッセイを読んでいましたら、玄関や式台に置かれた足ふき雑巾の話、「よそいき」服という言葉、パジャマの上からした腹巻、お風呂のげす板、蚊帳など、昭和のころの懐かしい話が登場しました。

これを読んで懐かしくなり、ある人に話したところ、それって私たちが子どもの頃に親から授けてもらっておきながら次の世代へとは引き継げなかったものばかりですね、と言われました。

なるほどと思いながら、大切なことは、そのときの暮らしやそこにあった営みを守り伝えることではなく、みんなが毎日使っていたモノに対する畏敬や感謝の気持ちを持つことであって、合理性などを優先するあまりモノの大切さを伝承してゆけなかったことを、まさに後悔の念を持ちながら、何となくノスタルジックに捉えているのだと思います。

キャンドルナイトやスローライフ、自然体験など、夏は数多くのイベントがありますが、現代を「豊か」に暮らしている二十一世紀の人たちに、少し昔の歴史にも触れながら、モノの大切さのようなものを伝えられるといいのにな、と思いました。

【編集後記】

早いもので、このメルマガが今回で100号を迎えました。いつも読んでいただいて、ありがとうございます。第46号から担当してまいりましたが、月日の過ぎ行く速さを切々と感じます。

当初は、〇〇〇〇センターから発信をしていました。センターの周辺はご存知の方も多いと思いますが自然に恵まれた素晴らしい環境です。四日市市内の街並みからその向こうに続く伊勢湾、中部国際空港、知多半島、名古屋市方面、恵那山まで見渡せます。木々が茂り、花が咲き、鳥が啼く日常にごく普通に接して暮らすことのできるところです。

平成20年の4月から〇〇8階に異動してきました。自然のなかでのささやかな発見などに触れる機会が減ってしまい、寂しい思いもありますが、人の集まるところには情報があふれ、声が飛び交い、刺激に満ちています。それらひとつひとつを大切にし、時には1号のころの気持ちを振り返りながら、100号を過ぎていつまでも、みなさまの元へ新鮮で躍動的な情報を発信して行きたいと考えています。

どうぞ、今後とも引き続きご愛顧をよろしくお願い申し上げます。

7月号　7月7日発行

2009年7月 7日（火曜日）【裏窓から】

夏は夜、ですか。

【巻頭言】

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

誰もがご存知の川端康成「伊豆の踊子」の冒頭です。

夏は夕立ち。まだ陽のぎらぎらとする時刻に、真っ白い入道雲が湧き立って、ゴロゴロと腹に響くような音と共に稲光を伴いながら激しい夕立がやってくることがあります。

焦げ付くように暑い日の昼下がり、軒先に縁台でも出してスイカでも食べようかと算段をしていると、激しい雨が縁台を叩くような勢いで降り出し、あっという間に過ぎ去っていったというような夏休みの思い出もあります。

夕立が洗つていつた茄子をもぐ（種田山頭火）

濡れて雫立っているなかにも、ひとときの涼しさと落ち着きがあります。

夕立やら縁台のことを思い出しておりましたら急に懐かしくなりましたので、今年のお盆は庭に縁台でも出して、蚊取り線香を焚きながら、ビールでも飲もうかなと思っております。

みなさんはいかがな夏をお過ごしでしょうか。

――

【あとがき】

夏は夜、と清少納言は書きます。月の明かりしかない時代ですから、その明るさもありがたみも今の時代以上のものがあったことでしょう。

筆者も、夏の夜には数々の思い出があります。夏になると決まって1週間の旅に出たころがありました。それは、オートバイに野営道具を積んで放浪のような旅で、明かりの無い森の中や公園、野原で神々しい月を見上げたり、あるいは激しい雷雨に見舞われて自然の驚異に恐れをなしながら、夜を明かしたものです。

当時の日記には、自然と触れ合うことでその恵みに感謝をする箇所が幾節もあります。風景、食、風、水などは決して自分だけのものでもないし、自分たちが築き上げたものでもない。遠い昔から長い周期の営みを繰り返してここにあるのだということを肌で感じています。太陽や水、土、火、森などに神が宿ると昔の人が考えた所以も知りました。

今月の「まちかどエコ＠みえ」では、生物多様性という言葉が登場します。生き物のことや自然のことを学びながら、ふだんの暮らしを見つめなおしてみませんか。

2009年8月11日（火曜日）【裏窓から】

「生物多様性」というテーマに少しずつ迫ってみる

「生物多様性」というテーマに少しずつ迫ってみる
2009/08/26 09:47

8月中旬号では「生物多様性」という言葉を用いてみたが、どれだけの人が気づいてくれたのだろうか。

気づいたレベルが、環境意識の指標(の参考)にもなるかもしれない。

——
9月原案（変更する可能性大です）

【巻頭言】

「神去村」が静かな旋風をまきこしているようです。みなさんはご存知ですか。

三浦しをん著「神去なあなあ日常」に登場する神去村の舞台は、三重県の中勢区域を流れる雲出川を上流へと遡っていった旧美杉村です。

三浦さんのおじいさまが美杉村出身であるという繋がりで三浦さんは何度かこの山深い地にお越しになったことがあるようです。

「神去なあなあ日常」は、林業を営みながら、なあなあという言葉を大らかに話す村人たちと若者が巻き起こす日常を、コミカルなタッチで書き上げた青春小説で、三浦さんらしく軽快に仕上がっています。

林業って廃れていったイメージがありますが、そもそも産業に廃れるというような概念があるのだろうか。私たちは物質社会のなかで合理性を追い求めることに夢中になって、産業にも生物にも、もしかしたら人の心にも「多様性」というものがあることを忘れてしまっているのではないだろうか。

「なあなあ、そんな難しい話とちがうんや、林業は楽しいらしいよ」って語りかけられているような気になります。みなさんも、どうぞご一読ください。(ちなみに図書館は予約待ちが長いですぞ)

【あとがき】

神去村という名の付いた由縁はナニなんだろうと思い、少し前に美杉村へと小さな旅をしてみました。

まずは、伊勢奥津駅へ立ち寄りました。驚くなかれ！蒸気機関車の給水塔が残っているんです。全国で2箇所しかないという貴重な遺産を現在は市が管理をして残してもらっているようです。

初夏に訪れましたので、蔦が絡んでタンクは青々と包まれていました。冬に行けば、灰色のコンクリート柱にかかえられた錆茶色のタンクだけになります。

さて、神去村探検ですが……畑や山で作業をしている村人の方々に声を掛け、「ここは神去村という小説に出てくるそうですが、舞台は何処の在所でしょうか」と尋ねて回りました。

雑談をしながら神去の話をしようと考えて切り出すものの、なかなか本題に入れず、村の未来のことや動物による作物被害、病院のこと、村に残されたお年寄りの話などをみなさんは熱心に話してくれ、神去村のことが聞けません。それに夢中になっていると直ぐに1時間ほどが過ぎてしまいました。

スローな時間が過ぎてゆくひとときを愉しみながら、森林浴ができたのですが、主人公が残したかもしれない足跡は見つけるには至りませんでした。

1両だけのJRに揺られてゆき終着駅で降りて、伊勢本街道をてくてく歩けば、どこかで発生している高速道路の渋滞や家電や車の買い替え騒動をひとまず忘れられます。どんどんと頭の中が環境に優しくなります。保障します。

2009年8月28日（金曜日）【裏窓から】,【雷山無言】

スローに生きることを見つめなおす

「神去村」が静かな旋風をまきこしているようです。職員が綴る「ちょこっと日記」でも取り上げている人がありました。みなさんはご存知ですか。

三浦しをん著「神去なあなあ日常」に登場する神去村の舞台は、三重県の中勢区域を流れる雲出川を上流へと遡っていった旧美杉村にあり、三浦さんのおじいさまが美杉村出身であるという繋がりで三浦さんは山深い当県までお越しになったことがあるそうです。

この物語は、林業を営みながら「なあなあ」という言葉を大らかに話す村人たちと若者が巻き起こす日常をコミカルなタッチで書き上げた青春林業小説です。三浦さんらしく軽快に仕上がっています。

林業や漁業って面白くないし人気もなくて、仕事も厳しい…と思われる方々があるかも知れませんが、そんなことはまったくなく、林業技術は少しずつ進化を続け、昨今では若者が林業への還ってくる傾向もあり、ヒトが自然に回帰する息吹のようなものさえ感じさせてくれます。

私たちは物質社会のなかで合理性を追い求めることに夢中になって、産業にも生物にも、もしかしたら人の心にも「多様性」というものがあることを、改めて見つめなおさねばならないようです。

「なあなあ、そんな難しい話とちがうんや、林業は楽しいらしいよ」って語りかけられているような気になります。

あるインタビューでは「取材してみると尾鷲も松阪もいいところでした。住んでいる人もいい人なので、それも(住むのも)ありかなとちょっと思いました」とも仰ってますし、みなさんも、どうぞご一読ください。

*

神去村という名の付いた由縁はナニなんだろうと思い、少し前に美杉村へと小さな旅をしてみました。

まずは、伊勢奥津駅へ立ち寄りました。驚くなかれ！蒸気機関車の給水塔が残っているんです。全国で2箇所しかないという貴重な遺産を現在は市が管理をして残してもらっているようです。

初夏に訪れましたので、蔦が絡んでタンクは青々と包まれていました。冬に行けば、灰色のコンクリート柱にかかえられた錆茶色のタンクが姿を現すでしょう。

さて、神去村探検ですが……畑や山で作業をしている村人の方々に声を掛け、「ここは神去村という小説に出てくるそうですが、舞台はどこの在所でしょうか」と尋ねて回りました。

雑談を交えながら神去村の耳より情報を聞き出そうと考えて話を切り出すものの、なかなか本題に入れず、村の未来のことや動物による作物被害、病院のこと、村に残されたお年寄りのことなどをみなさんは熱心に話してくれ、小説に出てくる神去村の舞台のことに話題が移りません。村人さんの話に夢中に相槌を打っている間に1時間ほどが過ぎてしまいました。

まさに「なあなあ」でスローな時間が過ぎてゆくひとときを愉しみながら、森林浴ができたのですが、主人公が残したかもしれない足跡を聞き出せないままでした。(でも、満足でした)

1両だけのJRに揺られてゆき終着駅で降りて、伊勢本街道をてくてく歩けば、どこかで発生している高速道路の渋滞などの騒動をひとまず忘れられます。どんどんと頭の中が環境に優しくなります。保障します。

2009-09-16

2009年9月16日（水曜日）【裏窓から】

続　生物多様性 ― 3

生物多様性 ― 3

数字がやたらとたくさん登場するので、普段から関わりの少ない人たちは苦手意識が多いかもしれないが、数字に強くなると、身近なものが面白く見えてくるので、嫌がらずに読もうね。

さて。
果てしないお話。「生物多様性について」、その続き。

地球上にいる生きものは、3,000万種ともいわれています。それぞれが様々な環境に適応して進化しています。

たくさんの生きものが地球上に存在するそのありさまを、私たちは「生物多様性」と呼びます。それぞれが「個性」を持って、「つながって」います。

私たちはそんなことに気遣いもしないで、地球上に存在しますが、「ごみを出さないで」「リサイクルしよう」「地球温暖化を防がねばいけないよ」などと一生懸命に活動しているのは、生きものである私たちが生きものとして、住まわせてもらっている自然に感謝をするところに還ってくると思うのです。

10月のメールマガジンの巻頭で、先日のイベントのお礼を書きました。その巻頭言を切り取ってきます。

*

　10月3日土曜日、松阪市のウッドピア松阪(松阪市木の郷町)にて「三重の森林と木づかいフェア」が開催されました。ご来場いただきました皆様、どうもありがとうございました。

　森林は、おいしい水やきれいな空気を供給し、山崩れを防ぎ、あるいは私たちの心に安らぎを与える一方で、二酸化炭素を吸収し貯蔵し地球温暖化防止にも役だっています。

　このフェアを通して、大切な働きを持つ森林や木に触れて、自然という偉大な環境の中で暮らす私たちのスタイルを見直された方々も多かったのではないでしょうか。

　今回は、三重県の美杉村を舞台とした「神去なあなあ日常」の著者三浦しをんさんを会場へお招きして、1時間余りの森林トークがありました。

――― 山を手入れすることで下流の水がきれいになるなど、環境のためにも林業が果たしている役割が重要なんだということを、もっと知りたいし、自分も伝えたいと思う ―――

　三浦さんの言葉がひとりでも多くの人のもとに届き、みんなが自然と仲良く暮らしてゆけることが、私たちの環境を守る一番の近道なのだと感じます。

　フェアでは「マイ箸作り」講座もありました。みなさん、一生懸命にノミを使って自分の指で採寸した長さの箸を削り出していました。最後に名前をサインして出来上がり。

　もしも、日本中のみんながマイ箸を持つようになるまで自然や資源のことに気が使えるようになったならば、そのとき環境問題は「問題」ではなくなっているのかも……、と思いませんか?

*

一般に配布する記事に「生物多様性」という言葉をいきなり登場させると引かれてしまう恐れもあるので、かなり我慢をしてますが、今、次のステージは「ごみ」「リサイクル」「地球温暖化対策」から「自然」「森林」そして「生物多様性」へと変化してゆくのだろうな、と思っています。

しかし、やはり、言葉の意味が難しい。

*

　自然環境や森、木のことを書きながら西岡常一さんを思い出していました。西岡さんは、法隆寺金堂の大修理、薬師寺

金堂や西塔や法輪寺三重塔などの復元を果たした宮大工棟梁として有名な方で、NHKのプロジェクトXにも登場しました。

素晴らしい語録がいくつも残されています。

――あなたが今造っているものが、五十年もたったらその町の文化になる。そういうものを造らなければいけない

――どの木にもそれぞれクセがあり、右や左にねじれようとする。右にねじれた木は、左にねじれたあの木とくみあわせたい。何百年後の木の性質と相談しながら、それぞれの癖を見抜いて使ってあげたい……

――わたしどもは木のクセのことを木の心やと言うとります。風をよけて、こっちへねじろうとしているのが、神経はないけど心があるということですな

――木のクセを見抜いてうまく組まなくてはなりませんが、木のクセをうまく組むためには人の心を組まなあきません

――(堂塔を建てる際には) 木は山ごと買って、その山の南に生えていた木を南側に使い、北の木は北に使い、西の木は西に、東の木は東に使え

三浦しをんさんの作品に登場する大勢の人々も、実際に美杉村で出会ったみなさん(先月のこのメルマガ参照)も、自然のなかでほんとうに自然の恵みに感謝をして暮らしているのが伝わってきます。

文明は輝かしく進化を遂げるものの、長い歴史の間に受け継がれてきた文化の伝承が途絶えるようなことがあると、社会は少しずつ暗くなっていくような気がします。そのためにも、自然とともに暮らして森に種をまかねばならないのですね。

2009年10月17日 (土曜日) 【裏窓から】, 【語録選】, 【雷山無言】

ふるさとのしぐれぐもゆく鬼の面　奥山甲子男

　秋が深まるにつれて落ち葉は目の前をひらひらと舞い落ちるようになり、やがてコートが必要になり、時雨の季節がきます。通勤経路でも街路樹が少しずつ古くなった夏の葉を落としているのを見かけるようになりました。11月の半ばになりますと一夜のうちにイチョウの葉が落ちていて驚かされることもあります。

　奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき（小倉百人一首）

という歌も思い浮かべて、少し風流な気分に浸れそうです。

　奥山に‥‥の歌は、古文の授業で先生が奥山君という子に向かってニコニコしながら暗誦しておられたので、とても鮮烈に記憶に残っています。学生時代には深い意味など全然わからないまま百人一首を丸暗記した人も多いでしょう。

「あ」行あたりの歌がたくさん記憶に残っているのは、試験前の対策で前から順に片付けようとした賜物か、はたまた奥山君のおかげでしょうね。

　11月号のメルマガはヒヤヒヤします。何故ならば、書くうちにあっという間に季節が移ろい、ブルッと寒いしぐれの季節に変わってしまってはいまいか、と心配をするからです。幾分暖かめの日があれば、しぐれる日も来ます。そんな季節になってきました。

　ふるさとのしぐれぐもゆく鬼の面　奥山甲子男

　どうぞ、風邪やインフルエンザなどにお気をつけいただき、健康で快適な暮れ
をお迎えくださいませ。

*

　秋深き隣は何をする人ぞ　松尾芭蕉

　有名な句なので誰もがご存知でしょうが、これを＜秋深し隣は何をする人ぞ＞と覚えている人が多いと、長谷川櫂さんが著書「国民的俳句百選」のなかで触れています。ちくま新書の「奥の細道」をよむ、のなかでも「古池や‥‥」の「切れ」を解説してらっしゃいますが、この「秋深き」も「切れ」だそうで、さすがに奥が深いなあというのが理系出身の私の感想です。そんな「切れ」をこの一句から鑑賞したいものです。

　さて、今月号で紹介しました記事やイベントには秋の気配が漂っています。

　地球温暖化で色づく時期が幾分遅くなりつつあるという声も聞こえてくるものの、このメルマガを発行するころには、秋は少しずつ里山にも下りてきて、県境の山々は錦繍の粧いとなっていることでしょう。

　紅葉や庭園で有名な名所や史跡が県内に数多く残されていますので、自然のなかへとお出かけになるみなさまも多いと思います。その際には、県政だより11月号で紹介しています「エコドライブ」を思い出していただき、やさしい運転を心掛けたいものですね。（記事番外に「10のススメ」を「オマケ」で追記しておきました）

　私ごとですが、タイヤの空気圧をやや高め＋αにし、早めのアクセルオフ、ふんわりアクセルを心がけていますが、6万キロを越えているにもかかわらずタイヤ交換はまだ一度も行っていません。車検のときに新品みたいなタイヤですね、と驚かれました。みなさんも、ぜひ、チャレンジしてみてください。

2009年11月16日（月曜日）【裏窓から】

歌をうたう

アンデルセンの「マッチ売りの少女」は、木枯らしが雪を舞い散らせるまちかどの露地で厳しい寒さをしのぐためにマッチを擦りながら暖を取る悲しい物語です。私たちが子どものころにこの作品を読むのは、紛れもなく寒さがいっそう厳しい年の瀬で、メルマガを読んでいただいているみなさまのなかには、このマッチが貴重な物資であったという人もあるかもしれません。

先日、今年卒業する娘に「マッチを知っているか」と尋ねたら「知っているが怖くてよう擦らん」と言っていました。お墓参りのときでさえ、マッチを擦ることがなくなりつつあります。確かに便利な世の中ではありますが、不便を知らずして便利への感謝は生まれず、感謝の気持ちが生まれることなくモノを大事にする心は育まれないことを考えると、安易な買換えやエネルギーのムダ使いをわかってもらうためには、マッチを理解することから始めねばならないのかも…と思いました。

今年も暮れの街角には、鮮やかなライトアップや色とりどりのイルミネーションが溢れています。その傍らで、キャンドルナイトのささやかな運動も繰り広げられ、歓びと戸惑いが交錯しているなかでクリスマスソングが聞こえてくるのでしょう。

津駅前では、ときどき、路上ライブをやっている元気な若者たちを見かけます。筆者の学生時代も路上ライブっぽいものがありました。フォークゲリラと呼びまして、反戦歌でしたけど(苦笑)。

――

以上は、今月号のメルマガの巻頭に書いた一部を持ってきましたが、私も京都にいたころはコンボをやっていて年末になるとクリスマスソングを演奏したのを思い出します。

あわてんぼうのサンタクロース･･･とか、ママがサンタにキスをした…とか。

今は(12月中旬)はまだ暖かいのですけど、毎年決まって下旬になると寒波がやってきてクリスマスころには雪が積もったりします。

今日の青空を見ていると、想像できないんですけど。

木枯らしの一日吹いておりにけり　岩田涼菟

窓越しに背中ポカポカ猫気分

楽器出して、クリスマスソングでも吹いてみようかな。

*

先月号のメルマガの巻頭・欄外で、三重の自然を映し出す映像配信「宮川の自然」のライブカメラを紹介しました。すでに、多くの方にご覧いただき、その反響が届いてきています。宮川を泳いでゆく魚の群れがカメラに映っているのを発見すると、こんな綺麗な渓流に恵まれたこの地に生まれたことを誇りにしなくてはならない、と強く感じます。

二見の夫婦岩のカメラも年末から新年にかけて見逃せません。特に、満月のころはこの岩の向こうから月が昇るようすを見ることができます。夏に日の出を見られるのは有名ですが、夕焼けの光線が大気圏で反射を繰り返して東の空を赤く染める「反対夕焼け現象」に包まれてまん丸い月が昇るのを今の時期には眺めることができ、感動モノです。

　初富士の鳥居ともなる夫婦岩　山口誓子

海に浮かぶ富士。新年にも見えるといいですね。

次号の発行は新年になります。
少し早いですが、みなさま良いお年をお迎えくださいませ。今年もご購読、どうもありがとうございました。

2009年12月12日 (土曜日)【裏窓から】

星落ちて石となる夜の寒さ哉（正岡子規）

今年はと思ふことなきにしもあらず（正岡子規）

年末あたりから新聞やテレビで正岡子規の名を見かけることが増えたのは、ドラマ「坂の上の雲」の影響も大きいのでしょうか。原作小説では、前半部分で子規が亡くなってしまうので非常に残念です。しかし、この物語は原作者司馬遼太郎の作品群の中でも人気が高く、また歴史小説ジャンルの中でも人気上位を占めていると言われています。

昨年は政権交代がありましたものの、一方で寒風が吹きすさぶ社会情勢が依然として続いています。しかしながら、凛然たる意気が熱く燃えている物語を見ながら、道を拓いた人々は夢や希望を決して絶やしてはいないのだなと感じます。

星落ちて石となる夜の寒さ哉（正岡子規）

子規はこんな素晴らしい句も詠んでいます。しばらく寒さが続きますが、負けずに頑張りましょう。

*

年始の知事のお話のなかに、箱根駅伝の地元勢の活躍の話がありました。たくさんの学生さんが頑張ってくれたようで驚いています。

高校時代にはさほど頭角を現さなかった選手が大学になって今年のように大活躍をするのを応援しながら、県民性のことについて想いを馳せました。あまり人の前に出てゆくことのない作戦参謀的な人柄が目立ちます。南北に長い県ですから、幾分、気候的な影響や基盤産業の違いからくる社会との接し方にも違いがあると思います。地理的にも、都であるとか天下の台所から一歩退いた国柄でもありますし、しっかりした考えを持ち、じっくりと活躍するタイプが似合うのかもしれません。

とりわけスポーツに長けている人が育ちやすい土壌でもないのでしょうけれども、駅伝の選手たちが次々とゴールをするときに、倒れかかって動けなくなってしまう選手は無理ですが、その他の選手は自分が駆けて来た道に深々と礼をしている姿が美しかった。

伊勢や熊野という地を控え、人々は、信ずるものに礼をするという文化に支えられてきた県民性もあります。「美(うま)し国」とは、まことに素晴らしい言葉だなと感動しております。

2010年1月11日（月曜日）【裏窓から】

椿落ちてきのうふの雨をこぼしけり　蕪村

2月になると節分や立春など、春を想い起こすような行事が数多くありますが、(暦のうえのことであり実際には)、まだまだ寒い日が続きます。

どこかに春の話題でもないものかと思い、上野森林公園のホームページを覗くと、「カンツバキ」の話が紹介されていました。

椿(つばき)と山茶花(さざんか)は、住宅街や公園を散策するとお馴染みの花ですが、そこには面白い違いがあるようです。

| 椿と山茶花の見分け方のポイントは、花が平開せずポトリと落ちるのが椿、
| 花びらが1枚ずつ散るのが山茶花(さざんか)です
|「雄しべがくっついて筒状になっているのが椿、雄しべがまったくくっつか
| ず離れているのが山茶花という見分け方もあります
|　　(上野森林公園HP)

と書かれているのを読むと、庭に出て花を眺める楽しみがまたひとつ増えました。

椿落ちてきのうふの雨をこぼしけり　蕪村

*

暖冬でやれやれと思っていたところへ26年ぶりの大雪が日本列島を襲いました。2月6日、7日のことです。

学生時代の友人が雪国のある都市にいまして「国土交通」業務に就いているのですが、豪雪見舞いをメールしたところ、市内は大渋滞や麻痺状態になって徹夜をしたので頭がさえない、というような連絡をくれました。その便りの最後に、「しかしながら、先日から我が家に棲みついた野良猫たちもこの大雪のせいで家の中でおとなしくしております。ちょっと幸せです」と書き添えられていました。

北国からはそんなニュースの便りでしたが、一方では梅の開花の知らせも届きます。三重の環境と森林の投稿写真の新着投稿がちょっとお休み中のようなので、春の花の写真などを募ります。どうぞよろしくお願いします。

〔追伸〕かんきょう川柳を募集する記事を本文に書きましたが、メルマガ発行直前情報によりますと、県内の皆さんの投稿が伸び悩んでいるようです。三重県の皆さん、頑張って投稿してくださいね。

2010年2月15日 (月曜日)【裏窓から】

桜の開花

このメルマガがお手元に届くころには桜の開花だよりも届き始めていることでしょうか。

数年前に、三重の環境と森林のホームページ上で、津市偕楽公園の桜の開花状況を定点観測してお知らせしていたことがありました。

花が咲くときというのは、まことに胸がときめくものです。坂本竜馬が脱藩するために土佐の国境「韮が峠」を越えるとき、峠の桜は咲いていたと「竜馬がゆく」で司馬遼太郎は書いています。こんな場面設定もとても合います。

また、「臥遊録」では「春山澹冶而如笑」とうたい、「山笑う」は季語にもなっています。草木の新芽が吹き出す淡いながらも逞しさを秘めた雰囲気はこの季節だけの特有なものなのでしょう。

*

巻頭で桜の開花の話を書きましたが、それほど華やかではない花もあります。

菫程な小さき人に生まれたし

と詠んだのは漱石で、おそらく今頃の季節でしょう。庭には花が咲きそろい、桜のような華やかさではなく、石の隙間から花を咲かせるしたたかな姿にも眼をやっていたことが伺えます。ちょっと掴みどころのない難しい句だなというのが私の感想ですが、このあたりも漱石らしく奥が深いようです。

三重県環境学習情報センターで「ちょこっと川柳」の作品展示を行っています。四日市にありますセンターの周辺は、自然度満開で、春を愉しめる施設が点在しています。ご家族やお友だちを誘ってお出かけになってはいかがでしょうか。

2010年3月15日（月曜日）【裏窓から】

薫るがごとく ― 4月

今年の冬は積雪の影響で被害などの出た地方もありましたが、私たちの住む三重県ではそれほど悩まされたというできごともなく、どちらかといえば穏やかな冬であったように思います。

津市、偕楽公園の桜は、三月下旬から四月上旬にかけて咲きました。ちょうど入学式のころと相まって、またひとつ良き思い出を積み重ねられた皆さんも多いことかと思います。現在は桜の花も散ってツツジの花が満開になっています。

メルマガを発行する準備を進めるうちに咲き誇る花が次々と変化してゆきますが、それも途絶えることなく、満開は続くのでしょう。

あをによし奈良の都は咲く花の薫るがごとく今盛りなり

と百人一首にも歌われるように、万葉人のころから春という季節は人をウキウキさせてくれるものなのですね。「薫るがごとく」というところが味わい深い。

*

4月10日(土)に自転車に乗って近所へぶらりと散歩に出かけたときに、幾つかの新鮮な感動に出会えました。

ひとつは麦畑でした。車で走っていると目にとまらないのですが、意外とたくさんの麦畑が広がっていて、青麦はすくすくと育っています。いつの間にか麦踏みの季節も終わってしまっていたようです。

もうひとつは、田植えが始まっていることです。このあとがきの書き出しできちんと日付を書いたのは、農家でない私にとっては、田植えってこんなにも早い時期なのか…と驚きだったので、しっかりと記憶に残そうと思ったからです。子供のころの田植えといえば、5月か6月の鬱陶しい梅雨のころのイメージがありましたから。

青い麦が風になびくなか、その隣の田んぼには水が張られ始め田植えが始まっていました。雲雀が天高く姿も見せずにさえずる。この日の晩は今年初めて蛙が鳴く声を聞きました。すごく得した休日でした。

こんなことを振り返りながら、四月号のメルマガを書き終わりました。今年度もよろしくお願いします。

2010年4月12日（月曜日）【裏窓から】

「山笑う」から「山滴る」へ

新緑がにぎわう季節が瞬く間に過ぎて、風薫る五月となりました。

水田の若苗が青々と逞しく育ち、隣りあわせの畑には麦の穂が顔を出して夏はまだかと色を帯び始めています。

花水木や藤のかぐわしい匂いが風に乗って届いてきます。野山を歩けばミカンの花が甘い香りを放っていました。

まことに五月という季節は人々をうっとりと酔わせて自然へと惹きつけてしまうような魔力を持っていますね。

五月も二十日を過ぎれば、ホトトギスが啼き始めます。

　キョッキョッ　キョキョキョ

　こだまして山ほととぎすほしいまま　　杉田久女

こう詠んだ久女の人生は、ホトトギスの啼き声から連想するようなものでは決してなかったのかもしれないなあ…と思いながら、いつもこの季節には、この鳥の華麗に透き通るような声に聞き惚れてしまいます。

（おぼえがき・変更削除あり）

2010年5月12日（水曜日）【裏窓から】

雨水を使う

先日、朝の通勤列車の中で高校生のみなさんが英単語問題を出し合っているのが聞こえてきました。「environment…」「ナニソレ？」こういう1シーンに出会っても夏が来たのだと感じます。

夏といえば、夏至のころから始まっているキャンドルナイトやライトダウンキャンペーンがあります。また、まき水、打ち水運動も最近では盛んになってきました。身近なところで、ぜひ、みなさまもご参加ください。

一昨年に北星高校を訪ねて雨水利用状況とその装置を見学しました。建物に降り注ぐ雨水をタンクに取り込む機構にはひと工夫もふた工夫も必要ですが、この学校では上手に雨どいとの接続部を加工してました。

もしも、日曜大工が趣味ならば、この部分でちょっとアイデアを出して屋根の上に降り注ぐ雨水を利用されてはいかがでしょうか。雨の水は無料で供給され、何の遠慮も要らない水ですから。

ペットボトルに入った水をお店で買う人が増えていますが、その水と同品質の水を花にやったり地面に撒いたり、またそれで車を洗っているなんて、普通に考えてもモッタイナイと思いませんか。

（もしも雨水を使い始めたら絶対に元には戻れなくなると思います）

2010年7月 9日（金曜日）【裏窓から】

裏窓から。8月篇

【巻頭言】

梅雨明けのころからは、何も変わらない澄み切った青空が広がり、暑い日が続いて熱中症のニュースが届いてきますが、光化学オキシダントの発生量は8月になってから幾分少ない様子です。

あっという間にお盆が終わってしまいましたが、まだまだ、空を見上げる毎日が続きます。青い空と白い雲、今は夏休みも真っ盛りで、この夏空の下、元気に遊んでいる子供たちも多いことでしょう。光化学オキシダントという過去にはなかった物質が私たちの暮らしを脅かし始めて何十年も過ぎます。朝日を拝み、夕日を見送る。人間は天性として、空を見上げることが好きであったのではないかと思えてきます。

天に抜けるような快晴の空を見上げながら、今日の空は私たちにどんな現象をもたらすのだろうか、と毎日青い空を見上げます。いつものように、県警屋上のヘリポートがくっきり見えて、そこからぐるりと見渡せば伊勢湾が広がります。神島までくっきりと見える日も意外と多いです。こんなところからでも海は青く、小さな船もくっきり見えます。時にはキラキラと光って輝くこともあるのだと気づきます。秋が深まるころまで、空を見る毎日が続きます。

【あとがき】

これを書き始めた8月7日は立秋でした。まだまだ残暑が厳しいようですがみなさんのそばには秋の気配が漂い始めましたでしょうか。

　髪切ってバッグの中の缶ビール(八木早苗)

8月3日の「ねんてんの今日の一句」は清清しい一句でした。

学生さんは夏休みですね。長い夏休みになったら、みんな思い思いに実家に帰ってしまって、帰省する元気も金もない私はあまりの暑さに肩まであった長い髪をバサリと切ってしまった二十歳のころを思い出しました。

下宿にはシャワーもなければクーラーもない。扇風機が24時間回り続けるという四畳半でひたすら夕立を待ち続けた。補講で提出するレポートは一向に進まなかった日々でした。でもでも、刻々と時は過ぎお盆はやってきて、やがて秋の風が吹くようになります。

前に書きましたように、我が家は寝室でのエアコン使用を断念しましたので、連日暑い夜を送っています。それはあたかも70年代の東京都心の下宿にタイムスリップしたかのようで、二十歳のころを思い出しながら暑さを愉しんでいます。

そういえば、この暑い夏に、森先生も梅棹先生も、つかこうへい氏も逝ってしまったなあ。科学技術でも経済理論でもない何か新しいモノで世の中を変えなければ世の中はよくならないような気がする。

暑い夜にそんなことを考えていると、眠ってゆけます。もうひとがんばり、です
ね。

　すずむしの声のほうから風が来る（「風の一句」から、拙句）

2010年8月20日（金曜日）【裏窓から】

かんビールをポンとぬいて… ― 9月号

いよいよ秋らしくなりました。お月様も日に日に名月に近づきます。

今年の夏は記録的な暑さということもあり、ビールなどの「のどごし」を刺激する飲みものがたくさん売れたのではないでしょうか。

武田泰淳の奥さんの武田百合子著「富士日記」(中央公論新社)を読むと、泰淳はいつもビールを飲んでいます。

「かんビールをポンとぬいて…」と泰淳がねだる様子が昭和51年9月の日記にも書かれ、この月を最後に日記は終わり、泰淳は10月5日に胃がんと肝臓がんで逝ってしまいます。

富士日記には、家計簿的な日常も書かれていて、昭和39年ころから泰淳が亡くなる昭和51年までの様子や、そのころの人々の暮らしが随所に出てきます。

昭和39年のころは大卒初任給が2万円あまりの時代でした。武田泰淳ほどの人物でありながら、メザシであるとかもやしのあえ物などという非常に質素な暮らしをしていることも伺えます。

およそ10倍になった現代、豊かさとその満足度を環境的な視点で振り返るだけでも面白く読めます。

*

このメルマガを書き始めた初旬のころ、巻頭で「残暑お見舞い申し上げます」と書き出したのですが、一日一日と過ぎるうちにさすがに猛暑は衰え始め、ツクツクボウシも上手に啼くようになり、夜半には虫の声も聞こえてくるようになりました。

暑さ寒さも彼岸までといいますが、まさにその通りであることに驚きます。そして彼岸といえば彼岸花です。この花も毎年、この時期に間違いなく咲きます。自然の生き物は、不思議をたくさん含んでいて驚かされるばかりです。

　秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

暑かった夏を忘れて、しばらくの間、感性を刺激してくれる秋をお楽しみください。

2010年9月15日 (水曜日)【裏窓から】

胡麻の花

泣き虫のまた泣かされて胡麻の花
（高倉和子）

坪内稔典さんがご自身のHP、今日の一句(10月7日)で「悲しいにつけうれしいにつけすぐ泣く人が、またまた何かで泣いている。その近くで胡麻の花が揺れている。のどかな農村の立ち話を想像する場面だ。」と書いてます。

近ごろは農家の畑でもゴマの栽培を見かけることが少なくなりました。子どものころには秋の収穫が片付いたころに、いつも、小春日の縁側でゴマの鞘を木槌で叩いたのを覚えています。

旬のモノがお店から影を潜めていってもう幾年も過ぎるものの、今年もサンマが魚屋の店先に並ぶ季節になって、心が密かに喜んでいます。秋とはそういう季節だという方々も多かろうと思います。

*

春山淡冶にして笑うが如く、夏山蒼翠として滴たるが如し、秋山明浄にして粧うが如く、冬山惨淡として睡るが如し。

ついこの前に「山笑う」と書いたばかりなのに、もう「山粧う」季節になってしまいました。

秋は何をしても楽しいです。イベントも盛りだくさんですから、身体を動かしても、食べても、芸術に目を向けてもいいですね。

2010年10月 9日 (土曜日)【裏窓から】

十二月の巻頭言

【巻頭言】

　この季節になりますと、強く冷たい風に晒されて伊勢沢庵がはさ掛けされている景色を見かけることがあります。その姿は、凩に立ち向かうかのようで勇壮にさえ見えてきます。

　岩田涼菟の代表的な作品に

凩の一日吹いて居りにけり

という句があります。

　また、山口誓子も木枯らしを詠んだ句があり

海に出て木枯らし帰るところなし

が有名です。

　伊勢平野に暮らす人々であるからこそ、寒風の厳しさがよくわかるだろうと思います。

　師走を迎えましたが、本格的な冬はこれからです。環境のことも考えつつ、生活に工夫をして、冬を楽しく暖かくお過ごしください。

【あとがき】

CO2削減のために、暖房器具を上手に使って効率良く暖房しましょう、といろんなところで様々な工夫が紹介されています。皆さんは、どんなことを実践されているのでしょうか。

意外と見逃しがちなのは、暖房便座と温水シャワー、キッチンでは電気ポット。スイッチをオフすると途端に不便ですが、少し我慢が必要かもしれません。

効果を考えればこの程度の我慢を、1人がひとつくらいしなきゃいけないんじゃないか、って思うことがあります。ちょっと、豊かで便利な暮らしにどっぷり浸かり過ぎな気もするのです。

暉峻淑子著「豊かさとは何か」(岩波新書)を読み返してみてそう思います。

2010年12月10日（金曜日）【裏窓から】

遥かむかし ― 2月の初めに考える

（裏窓から）

■ 巻頭言

初冬に奈良の飛鳥地方を少し散策する機会がありました。思いつきの小さな旅でしたので、駅に降り立ってから案内板を頼りにバスに乗りました。有名な石舞台古墳に着いたころはお昼時で、ちょうど広場の前にあった「農場レストラン」で古代米のカレーを食べました。初めて食べる古代米の味は黒くて硬い(コワい)感触で、まるで玄米のようでした。古代人たちはこんな味を日常としていたのか、と思いながら食べて、そのあと高松塚古墳跡に向かいました。

永年京都に居た私には、飛鳥地方に来るとまた違った独特の時流を感じることがあります。橘寺と川原寺に挟まれた芝生広場に佇むと、聖徳太子の馬蹄の音が聞こえてくるようです。

はたと思考が止まります。この時代の人々には、地球とか環境、汚染という言葉が存在しなかったのではないか。もしかしたらゴミという言葉もなかったかもしれない…などと思いました。

折りしも年が明けてから、桜井市の纒向遺跡で大量の動植物の骨や種が出土しました。環境考古学の分野から見てもドキドキです。

出土品には、モモの種、猪や鹿、鴨、鯛や鯖、鯵などの骨があるといいます。上古の人々の祭祀や食事に思いを馳せ、現代人の幸せや豊かさを見直してみると、私たちが次の世紀へと伝え遺すべきものとは何か、を考える良い機会になります。

■ 後記

三重県環境学習情報センターが募集した「かんきょう川柳」の発表がもうすぐあると思います。川柳や俳句、短歌など、いろいろなところで募集がありますが、これらの入選を見ていつも驚かされるのは子どもたちの視線です。それは畏れ多くも大人への気づきの警鐘でもあるのかもしれません。第3回佛教大学小学生俳句大賞の高学年最優秀作品も素晴らしかったです。

家族の足安心してるほりごたつ　谷矢奈美(世羅町立せらにし小学校)

子どものころは、居間の真ん中に掘りごたつがありました。台所でおこした炭を堀こたつに運んで布団の中に入れます。この句を読んで、顔を突っ込むと煙たかった子どものころを思い出しました。

おそらく人類誕生の初期に火というものが発見され、ヒトは様々な形で暮らしの中に火を取り入れてきました。掘りごたつはいつの時代に人間の住居の中に作られたのか、門外漢の私にはまったく想像もつかないことで、火を使う「こたつ」というモノは、巻頭でも触れた上古以前の生活にはまだ登場していなかったかもしれません。

何れにしても、火は、どんな時代においても環境と融け合って様々な形となり温もりを与え続けてきました。

余談ですが、燃え続ける火を見ているのは大人になっても結構楽しいもので、知人が新築した家の居間には大きなマキの暖炉があります。一日中火を絶やさないのが上手に使いこなすコツのようで、大人でも簡単に持てないほどの大きな木の切株が庭にゴロゴロしています。

オール電化の時代になってゆけば、火はどうなるのでしょうか……。

2011年2月11日（金曜日）【裏窓から】

サクラサク。

サクラサク。

春の空をこんな電文が飛び交ったのは昔のことです。そんな時代があったことを知る人さえ今は息を潜めてしまいました。

しかし、情報通信技術が夜明けを迎えるのは、1830年代にイギリス人のミシェル・ファラデーが電磁誘導理論を考え出したころのことで、それ以前の通信はとても原始的でした。つまり、飛脚が街道を駆けたり、さらには狼煙をあげて情報を伝達したりしていました。

サクラサク、という言葉を聞いて、世間を騒がせたひとつのできごとの記事を見ながら、科学技術の賜物である携帯電話がもしもこの世になかったならば、不正を働いた子はサクラを咲かせようと頑張れたのかもしれない…と思ったのでした。

このメルマガがお手元に届くころには桜の開花だよりも届き始めるかもしれません。花が咲くのは嬉しいですが、開花時期が年々早くなるのを喜んでばかりもおれませんね。

2011年3月10日（木曜日）【裏窓から】

「畏敬」とは何か

アラスカに住み自然を見つめ続けた写真家の星野道夫の著作を読むと「自然に対する畏敬」という表現が数々登場します。そこで「畏敬」とは何だろうと考えてみます。

辞書を引けば答えは簡単ですが、彼の伝えたかったことや彼の感じていた畏敬がことごとくすべての人々に伝わったならば、私たちが目指している環境創造活動は違った形になっていたかもしれません。

天災か人災か。東日本を襲った大震災の余震は物理的にも精神的にも続いています。社会までもが揺れ続ける中で3月30日の天声人語(朝日新聞)は「地球や自然への畏敬が足りず」「天災が暴いた人災である」と書いています。

大きな問題を解決しても将来にあるべき私たちの姿が揺らいでいては再び社会は道に迷うことになります。コラムは「電力業界は論敵の視座から出直すしかない」と手厳く締めていますが、環境に携わる我々も、エネルギのことを見つめなおし「地球を見つめる視座」が必要なのでしょうね。

2011年3月30日 (水曜日) 【裏窓から】

四月の初めに考える

春を迎えました。花が咲き鳥が啼いて野山はいっそう元気になってきましたのが伺えます。通勤列車の沿線に広がる麦畑も日に日に青く大きくなり、県庁前の花時計も色鮮やかになってきました。このメルマガが配信されるころには偕楽公園の桜は散ってしまいツツジの出番になっているかもしれませんね。

自然の移ろいにうっとりとさせられながら、こうして春がやって来るという約束は百年も千年も昔からなされていたことであろうと思い、また一方で東日本に地震災害にもたらした地震も地球と人類が交わした約束であったのかもしれない……とも考えたりしていました。被害に遭われたみなさまをお見舞い申し上げますとともに、一日でも早い復興をお祈りします。

「天災は忘れたころにやってくる」という言葉を物理学者・寺田寅彦が残しています。私たちが暮らしている地球という惑星から見れば、その果てしない生命線上の捉えようのないほど小さな近年に私たち人類がいます。200万年以上昔に2本足で歩く人類が登場し、5千年前に文明が生まれ、科学技術に至っては18世紀ころから歴史が始まります。

これらの長大な歴史のなかで、人々の暮らしが幸せを夢見ながらも何者かを畏れ、知恵を絞り文化を築き上げてきたことを振り返ると、環境を守りながら自然とともに豊かな暮らしを実現してゆく過程で見直さねばならないものがいくつもあることに気づかされています。

そのようなことを感じながら四月の始まりを迎えました。

2011年4月 3日（日曜日）【裏窓から】

一次産業とはなんだったのか ― メルマガ「編集後記」から

▼大型連休が過ぎ去って俄かに陽射しが強くなったかなと感じたみなさんも多いのではないでしょうか。5月6日は立夏。暦の上では夏を迎えたことになります。

▼今の暦で4月末に江戸を旅立った松尾芭蕉は、ちょうど今ごろは日光街道を北へと向かいつつありまして、田一枚植て立去る柳かな、という句を遊行 柳の前で残したのが元禄2年(1689年)の4月20日(新暦6月7日)だったといいますから、このメルマガが配信される5月中旬ころには芭蕉の時代の「みちのく」ではまだ田植えが始まる数週間前だったのかもしれません。

▼レジャーランドで遊び、テレビやネットのメディアを愉しみ、音楽で癒され、物質・情報文化のなかに埋もれて暮らしながらも、地産池消な暮らしを 始めることで改めて気付いたことがひとつあります。それは、私たちは第一次産業抜きで暮らしてゆけないという当たり前のことでした。

▼「一次」という言葉は時系列的に古くなってゆくもののイメージがありますが、実はこれからの時代に必要不可欠で、これからの産業の中でとても重 要な文化なのではないかと感じます。もしも、大きな天災から復興するパワーが何処からか生まれてくるとするならば、それは自然と密接に関わっているモノが 芽生えさせるのだろう、というようなことを近ごろよく思います。

目には青葉山ほととぎす初鰹　山口素堂

▼旬を知り、旬を食べる。これも環境を見つめなおす立派な活動ですね。

2011年5月12日 (木曜日) 【裏窓から】

水無月に、質素で慎ましやかさを考える ― 六月編

■巻頭

つい先ごろ新年が明けたばかりと思っていたのですが、早いものであっという間に半年が終わりそうです。水無月の22日に夏至を迎えて、それからは本格的な夏になります。

今ごろの時期を水無月と呼ぶのは、降り続く雨のせいで天に水がなくなるからだという説がある一方で、旧暦の水無月は梅雨が明けて水不足の時期だったとする説もあるようです。何れの理由であっても、しとしとと降る雨が草木を濡らす6月にはよく似合う名前だと感じます。

京都では、6月下旬になると和菓子屋さんに水無月というお菓子が並びます。忙しい忙しいと言っている間に過ぎて行った半年間に積もった疲れをこのお菓子をいただいて癒しつつ、またこれから訪れる真夏の暑さにも負けずに健康でありたいという願いを込めるのだと京都の人は言います。暦月の名をあしらい、京都北山の氷室から切り出した氷をイメージさせた質素な和菓子が、京都の人であれば6月下旬に必ず食べる水無月という和菓子になっているというわけです。

中古の歴史に想いを巡らせば、雅やかにも思える宮廷の暮らしですが、実は非常に質素で慎ましやかなものであったのかもしれません。電力事情が危ぶまれるニュースが飛び交うなかで、ツル植物やスダレの売れ行きが好調という声も聞こえてきます。皆さまの間でも暑い夏を迎える準備は着々と進んでいるようです。

風鈴を復活させて、渦巻の蚊取り線香を買ってきて、縁台を出して薄縁(うすべり)を敷いて、夜空を見上げながら、ちょいと冷たいビールでも……といきたいところですが。おっと、ビールを冷やせる冷たい水の湧き出る井戸は、生まれ故郷の山の中あたりまで行かねば見当たらないかもしれませんね。

■あとがき

地産池消、旬産旬消を実践しようと心がけていると、自ずと旬とかかわりが深くなってきまして、俳句を読んだりするのもちょっとしたの愉しみになってきます。

お気に入りの１人に藪ノ内君代さんという人がいます。彼女の句集「風のなぎさ」のなかにとても素敵な句があり大好きなものをいくつかお借りします。

(藪ノ内さんの句から)

つれだって歩くのが好き柿の空
白菜がごろんと二つ考える

という句に触れ暮れゆく年を送り決意を新たに新年を迎え

春は名のみの鯛焼を頭から
たんぽぽの井戸端会議に参加する
花嫁をみんなでのぞく桜草
海苔巻きの端っこ好きで小春日で

という具合に春を迎え、

母さんが父さん叱る豆ごはん
わたしだらだらかたつむりぐずぐず

に出会って、細やかな共感を抱きながら夏を迎えようとしています。

夏になると、生き物の講座などに活気が出ます。
自然エネルギーや生物多様性のことをじっくりと考えてみようかな…と考えています。

2011年6月15日（水曜日）【裏窓から】

ふみづき ― 7月に考える

■巻頭言

学生時代に情報処理方式関連の講義でコンピューター言語の話になったときに脱線して先生が「辞書は読むものなんだよ。大言海という辞書があってこれは引くのではなく読むモノなんだ」と仰っいまして、そのときはチンプンカンプンでどのような点に深みがあるんかさえわからなかったのですが、このごろになってその重みらしきものを少し感じることができるようになりました。

先生のその言葉に出てくる「大言海」という辞書を編纂したのが大槻文彦博士で、とんでもない偉い先生だったのだと後で知り、若き時代の学への対峙の浅はかさを反省したのです。

七月が「ふみ月」と呼ばれる理由を、「稲穂がふくらむという意味の<穂ふむ月>が転じて<ふむつき>になりそれがのちに<ふみつき>になった」と、その大槻博士は書いてられます。

今年は梅雨の入りが1週間ほど早くて、その分七夕様のころには明けてしまいました。にもかかわらず七夕祭りの夜には例年に背くことなく雨模様で、たくさんのみなさんが短冊に捧げた願いも厚い雲の下での祈りとなったわけです。

しかしながら、梅雨が明けましたら瞬く間に暑さは本格的になり、稲穂ももうすぐ顔を出すのだろうと思います。ちょうどこのメルマガを書き始めた7月10日の朝、県庁のケヤキの脇の石段でセミの声を聞きました。時雨となって降るほどではなかったものの、このケヤキの木陰にセミ時雨の日々が来るのは間近だと感じます。

蛇足ですが、七月を英語では、July といいます。これはジュリアス・シーザーの誕生が7月で、その偉業をたたえたものだということを知りました。海外では人物にちなむ暦の名称も私たちの国では稲穂にまつわり、ここでも日本人の生活文化には大きく農作文化が関わっていることを知らされたのでした。

--

■後記

空調のない休日の職場でメルマガの編集をしながら、ふと暑さのことを振り返ってしまいました。

もう遥か三十年以上も昔に受験や卒業の勉強に明け暮れた時期がありました。それが幸か不幸か同級生よりもちょっとばかり長く続いてしまったせいで、暑い夏に泳ぎに行ったり山に出掛けたりするという青春の明るいページが友人たちよりも少ないのです。七月といえば夏休みの真っ最中で、分厚い教科書のことはすっかり忘れてぼんやりとできるまたとない貴重な季節なのでしょうが、冷房も無く風呂も無い下宿に篭っているか、大学の研究室の一角に簡易的に寝泊りしたりして、甚だ汚くみすぼらしい生活をしたことばかりを思い出してしまいました。

今年は節電の呼びかけが例年以上なので、冷房装置の電源を切って夜を過ごす人々が増えて、個人的には仲間ができて非常に喜んでいます。三十年前にはクーラーのある下宿などは間違いなく一軒も無かったので、どこもかしこも窓を開け放ち、隣部屋の女子大生さんでさえも、みなさんが夜どおし窓を開けっ放しで寝ていた時代でした。

各人が熱を放出しないため、外の空気は意外にも涼しかったようです。調べてみると電力消費量は(1970年代から)三十余年にウナギのぼりの傾向で、3倍ほどの電気を各家庭で使用するようになりました。 参考サイト

電力消費の数値は即ち発熱量と言い換えてもまんざら過言ではないので、もしも三十年のタイムスリップができてあのころの人々が現代に瞬間移動できたならば、私たちの暮らしに触れてみて、電熱器を抱いて暮らしているようなものだ、と感じるかもしれません。

豊かさに満足することはある種の麻薬のようなもので、しかも、ヒステリシスを伴うのでなかなか昔には戻せません。節電以外にも目を向けようという世の中の動きもあるのですから、生活スタイルを思い切って見直してみるのが一番でしょう。エアコンを停めれば大気は相乗的に涼しくなり、効果は大きいと睨んでいます。やってみませんか。

2011年7月11日 (月曜日)【裏窓から】

立秋を過ぎると瞬く間に秋が・・・・

住宅街を散歩しているとベランダに花を咲かせている朝顔やゴーヤの花を見かけます。今年は緑のカーテンに初チャレンジのご家庭も多いことだろうと思います。皆さん、効果はいかがでしょうか。

朝顔の花が咲きますと「朝顔につるべ取られてもらい水」(加賀千代女)の句を思い浮かべる方々も多いことでしょう。でも、「つるべ」を取られる風景など、井戸そのものが少なくなっている時代ですから見かけることはほとんどありません。時代劇などで時々出てきます。

江戸時代は、庶民が皆とてもエコな暮らしをしていたといわれます。つるべで水を汲み上げていたころは、水のありがたみを庶民はよく知っていたので、資源を大事に暮らしていたのではないかな、と想像したりしています。

涼を体験するということでは、打ち水運動なども活発なようです。しかし、これは飲用できるような上水をドバドバと地面に撒き散らしてはやはりもったいない。ぜひ、雨水などの再利用水をお薦めしたいです。

今、自然エネルギーがとても注目を浴びています。太陽光発電も話題になっていますが、風力発電にももっと眼を向けたいと思います。技術力という面では世界でも上位のものを持ちながら、発電量の方は少なく、世界に遅れを取っています。それだけになおさら風力発電の技術開発とその普及が見直されようとしています。洋上風力の潜在的エネルギーは、意外と知られていないようです。黒船以前の船は、風で世界を駆けました。海にはパワーが潜んでいると信じています。

■□□────────────────────────────

立秋を過ぎると瞬く間に秋がやってくるといいますが、夢と希望を打ち砕くように8月8日の最低気温は27℃、最高気温は33℃でした。7月末ころからいくらか涼しい夜を過ごせてホッとしていただけに、秋を告げる節気が熱帯夜となりカウンターパンチを食らった感じです。

この暑さに嫌気がさして(実はひっそり)秋が待ち遠しいのですが、夏の花は元気です。ゴーヤ、カボチャ、トマト、ヘチマ、キュウリ、カンナなどなど、黄色い花が目立つような気がするのは私だけでしょうか。

黄色い花、もうひとつありました。月見草(通称)の花も黄色です。本当の名前は大待宵草。この花が野山や田んぼのあぜ道に咲き誇るようになると、稲穂がいよいよ色づき始めます。お盆過ぎにはたわわに実り、伊勢平野で稲刈りが始まるのではないでしょうか。

投稿写真に、センターの木村さんからトンボの写真を2枚続けて送ってもらいました(1)(2)。夏休みの宿題のために昆虫採集に駆け回ったころを思い出す方々もあることでしょう。

法師ぜみ鳴く新学期始まれり　水原秋桜子

8月とはさまざまな哀愁が満ちた季節でもありました。そう考えると、8月8日はやはり立秋だったのです。9月になったら熊野市紀和町の千枚田の稲刈りの写真が届くといいな、と心待ちにしています。

2011年8月13日 (土曜日)【裏窓から】

森を考える　9月

巻頭言

台風12号の被害に遭われた皆さまに心からお見舞いを申し上げますと共に一刻も早い復旧をお祈りいたします。

9月になってちょうど台風12号が去ってゆく日曜日からこのメルマガを書き始めましたが、引っ切り無しに電話が鳴り、雨も降りやみませんでしたので、県内の様子がとても気になっていました。そのあと台風が遠ざかってから、各地の被害状況が時々刻々と報道され、惨事の大きさの実態が明らかになってきています。

災害に遭遇された方々の復旧具合が気がかりです。事態が一段落しても、生活が元に戻り気持ちが落ち着くまでには相当の時間を要するだろうと思います。そんななか、災害ボランティア支援で活動をしている皆さんのアクションの素早さには敬意を表します。

このようなことが起こるたびに人類は多くのことを反省し、ひとつひとつを見直し改め、新しい道を切り拓いてきました。もう二度と起こさないようにと努めてきました。文明の進化の歴史を辿っても、人間の知恵と欲望が縺れ合いながら輝かしい実績を残しています。これからもみんなで力を結集させて頑張っていきたいですね。

◆−−−−−−−−−−−−−−−−−−

あとがき

今月号も森林に関わる記事や情報をたくさん掲載しました。

森の話を書きだすと、星野道夫さんの「森へーたくさんのふしぎ傑作集ー」という本を思い出します。福音館書店から出版している本で星野道夫さんの文と写真で構成されています。(1365円)

この本をパラパラとめくると、たくさんの「ふしぎ」に出会えます。星野道夫の視線は、私たちを森へと、森の奥へと誘いこんでゆく。巨木の合間を縫って森の奥へと踏み込めば、想像もしていない景色が次々と飛び込んでくる。果てしない時間が過ぎた足跡を目前にして出会った不思議は、呼吸をしているような森の自然の姿であり、揺るぎない生命力だった。

初めて読んだときに私はこのような感想を書き残しました。何度読んでも、誰に読んでもらっても、いつもこんな風に森を感じていたいです。大きな自然災害の後ですから、山や森林のニュースが目を惹きます。私たちはもっと「ふしぎ」とトコトン付き合わねばならないのだ、と暗示を受けているのかもしれません。

2011年9月15日（木曜日）【裏窓から】

自然とともに、あゆむ

■ ― はじめに　　（改篇）

夏がトントン拍子に終わって、すっかり周囲は秋の気配となってまいりました。

でっかい青空に秋の雲が浮かび、優雅に流れていくのを見ていると、家の中に居るのがもったいなくなってしまい外出をしたくなりました。

そこで、少し遠出をしてオートバイで県境の道をトコトコと走ってゆきましたら、田舎の小さな小学校で町民運動会の歓声に出会いまして、ちょっと得したような気分になれました。

　街道の坂に熟れ柿灯を点す　山口誓子

ずいぶんと昔の旅の話になりますが、中山道を散策中に石畳の坂道のわきの句碑で見つけた一句です。

こんなふうに、秋の夕暮れを味わうのが愉しい季節になってきました。
やはり、秋の夕暮れは人の心を魔法にかけたように優しくしてくれるようです。

この季節、柿栽培が盛んな県南のほうでは、熟れた実をたわわにつけた柿畑を至るところでみかけます。ビタミンCがたくさん含まれその成分が癌を抑制するということで、柿の葉茶がちょっとしたブームになったことがありました。

緑茶、ドクダミ茶、柿の葉茶など身近なところにある自然のパワーが私たちの生命に大きな効能もたらすことがあります。
人間が科学の力で生み出した のではなく、自然の力とともに大切に育んできた点が重要なのだろうと思います。

そう、自然と共に歩むの。
もっともっとそのことに、感謝しなくてはなりませんね。
地震も大雨も包み込んでしまうように、大きく地球と向き合って歩むの。

■ ― 後記

　空をあゆむ朗朗と月ひとり　荻原井泉水

旧暦の8月15日に見上げた中秋の名月も素晴らしかったのですが、寒さも引き締まってきた深まる秋に眺める満月も好きです。

冬の月はさらに高度を 増して85度近くまで上がります。

夕焼けを眺めて一杯飲み、月を見上げてまた一杯のむ。

温かい飲み物や食べ物が恋しい季節です。
スポーツの秋、読書の秋、芸術の秋、食欲の秋。

みなさんはどんな秋を愉しまれるのでしょうか。

2011年10月 4日（火曜日）【裏窓から】

枯れ色にうつろう

■――　巻頭言

枯れ色の大豆畑を通勤列車の中からぼんやりと眺めつつ、いつの間にか終わってしまった夏や足早に過ぎ去った秋を振り返り、やがてくる時雨まじりの風が吹く冬のことを考えていました。駅前のショッピングセンターにはすでにクリスマスツリーが飾られ、冬を迎える準備は万端のようです。

コタツを出してこなくては、そろそろ寒いなと感じるようになりました。コタツでマフラーを編もうと思っている方も、ぼちぼちと気合を入れてスパートをかけて下さいね。

節電対策も頑張らねば…ということで、みなさまのご家庭でも省エネに力を注がれると思います。ちょっとした工夫をすれば、節約をしながら温かい冬を過ごせます。たとえば、断熱材を上手に使うと効果が出ます。ひとつだけ身近なものを紹介しますと、お風呂の湯舟に発泡スチロールのような板を浮かせるだけでお湯が冷めませんので、ぜひ、お試しください。

11月下旬を過ぎるとぐんぐんと寒くなってきます、どうぞ、十分な準備をして師走をお迎えくださいますように。

■――　あとがき

いよいよコタツの季節になりました。うたた寝をするのが大好きです。

そのコタツも子供のころは正真正銘の「やぐら炬燵」で、お風呂や竈で焚いた炭を「やぐら」の中に入れて使っていました。布団の中に潜り込むと煙たかったのを覚えています。

この頃、ファンヒーターに代わって赤外線反射式の石油ストーブがちょっと注目を浴びているようです。やかんを載せておけばお湯が沸きますので、部屋の湿気を保てます。さらに、沸かしたお湯でお茶も飲め、お湯が残れば湯たんぽに使えるからでしょうか。

おまけに焼き芋ができます。お芋を焼く温度は80度くらいが一番美味しく出来上がります。焼けてゆくときにできる旨み成分は、ちょうどこの温度条件でほどよく生成され、電子レンジですと高温(200度ほど)になってしまうため、お芋は柔らかくほぐれるだけで美味しさが引き出せないのだそうです。ストーブをこれから買おうというみなさんは参考になりますね。

2011年11月16日（水曜日）【裏窓から】

木枯らしのゆくところ

●●
●● 巻頭言
●●

去年の暮れのメルマガで反射式の赤外線ストーブのことを書きましたが、そんなに売れるものか半信半疑でした。ところが、年末に訪ねた家庭では、どこもこの赤外線式のストーブが赤々と燃えていて、焼き芋をしながらおせちの豆を煮込んでいました。

薪ストーブの話も書きました。友人宅の庭には木の切株がゴロゴロとしていて冬の間は暖炉の火が絶えないのだ、という話です。100万円近くするストーブでありながら予想以上のブームを巻き起こし、新聞やTVでも話題になるなんて、少し驚きです。

……ということは、自然エネルギーや電気自動車のブームもある日突然やってくるのでしょうか。

電気自動車(EV)のCMは、車のイメージから変わって、オシャレな日用品の感覚です。数年後には、ちょっとそのへんまで出かけるときは誰もが オシャレなEVで行く時代が来るのでしょう。家を新築するときは、EV用充電スタンドが標準装備になるのも近い未来です。

新年にこんな夢を考えるのはとても楽しいです。目標に向かってみんなが力を合わせて暮らしのスタイルを変えていけたらいいな、と思います。

●●
●● あとがき
●●

凧もあげないしコマもまわして遊ばないお正月が過ぎてしまって寒の入りとなりました。いよいよ本格的な冬の到来です。

お正月に少しサイズアップしたお腹の周りを気にしながら、魚の丸干しを食べていますと、伊勢平野や紀州の人たちが昔から愛してきた魚文化をしみ じみと感じることがあります。

木がらしや目刺にのこる海のいろ芥川龍之介

海に出て木枯帰るところなし山口誓子

芥川龍之介の俳句には幾つも木枯らしが出てきます。一気に吹き抜ける儚い風が彼は好きだったのでしょうか。

木枯らしで思い浮かぶもう一句は、三重県ゆかりの俳人・山口誓子が詠んだ木枯らしで、これは鈴鹿山脈から吹き降ろす強くて冷たい北風でした。三重県の人なら誰でも理解できる風は、海に出て伊勢湾を吹き抜けてゆきます。

巻頭でEVのことに触れましたが、これからの電気を作り出すために洋上風力発電が注目を浴びています。青山高原には40機を超える発電施設がありますが、その調子で海の上にも電気を起こす設備を作ってしまえば、当県は屈指の自然エネルギー活用王国になれますね。

伊勢湾へと吹いてゆく風にはものすごいパワーが隠れていて、これを海上へ捨ててしまうのはもったいないので、上手に利用すれば夢ではない？かも 知れません。

2012年1月16日（月曜日）【裏窓から】

春を待つ 2月号

●● 巻頭言

一雨ごとに春が近づいてくるのがわかります。冷たい雨の日もあれば柔らかい陽射しの日もあって、どこかで春が生まれている感触を味わう日々が過ぎます。

外にも出よ触るるばかりに春の月　中村汀女

夜は夜で、木星や火星が明るく輝いてくれて、空を見あげる人たちを釘付けにしてくれます。中村汀女が詠んだこの句は立春のころの丸い月を見あげてのことでしょうか。

春を待つ人がたくさんいます。受験、健康、家族などなど、みなさんはどのような春をお待ちでしょうか。

●● あとがき

電気自動車が面白い。電気供給スタンドがガソリンスタンドに代わってしまうまでにはかなりの時間がかかりましょうが、都会では月々3千円ほどの会員価格で充電し放題というところがあるそうです。

しばらくの間は、電気自動車はセカンドカーとなるかもしれません。しかし、ガソリンよりも電気の方が安いことが広く知れ渡るようになれば、郊外型のショッピングセンターで充電中にお買い物をしたり、家のガレージに車を入れて夜に充電、朝は満タンで出勤という日も近いと思います。

太陽電池や風力を利用した発電施設が増えてくれば、電気を起こす技術も一緒に進化することになります。自然エネルギーのコンパクトな発電施設がたくさんできれば、暮らしの中の自動車のステータスなどが大きく変化をし始めるのでしょう。

2012年2月18日（土曜日）【裏窓から】

花は桜の

●●

あたたかくなったり、寒さが急に戻ってきたりして、まさに三寒四温の日々が続いています。まもなく土筆が芽を出すのでしょうが、まだもう少し寒い日が続きます。

今年は例年よりも気温の低い日が多かったような気もします。寒さが厳しかっただけにいっそう春が待ち遠しいです。

2月のある日、県立博物館の移動展示「くらしの道具いま・むかし」というのを見る機会がありました。そこには暮らしのなかで昔から私たちが受け継いできた文化が並んでいました。

木の枡や湯たんぽ、蕎麦や米を粉に引く石臼などが展示で、現代っ子たちは、きっとそれらの多くを知らないようなものばかり。

昨今、省エネ活動などの影響もあり湯たんぽが注目されたり、薪を焚きつける竈や暖炉が見直されています。

しかし本来、これらは私たちの先人たちが暮らしてゆくうえであみ出してきたわけであり、生かしてきた知恵であるわけです。

そのことを考えると、エネルギーを見つめ直すことは暮らしの文化を振り返ることでもあるのだ、と気づくことができます。

「文化力」という言葉が少し鳴りを潜めていますが、素晴らしい環境を持続することは、その土地で芽生えた文化と暮らしの知恵を受け継いで守ってゆくことでもあります。

そしてそこに存在する「豊かさと満足度」にも県民性があってもいいのだろうと感じます。

●●

春という季節には花がつき物です。

三国志では桃園で誓いを果たし、中古では梅の花に想いを起こしています。現代、別れや出会いの舞台を飾る花は桜です。しかしながら、「サクラサク」という伝統的にも素晴らしい電報も今や電子のモノとなってしまいました。

大河ドラマでは西行が登場し、歴史物語に花を添えているのですが、寒さのせいで桜の開花が遅れ気味と予報されているようです。

西行庵のある吉野山奥千本のあたりの花が満開を迎えるのは、年度が開けた4月上旬から中旬ころのことになります。

昔、桜吹雪の舞う奥千本を訪ねたことを思い出します。ひっそりとした気品のある谷でした。

お弁当を手に再び吉野を訪ねたい、という念願が叶うのはいつになるのでしょうか。

2012年3月14日（水曜日）【裏窓から】

便利の象徴として考案されたもの

ソメイヨシノが花びらを散らせているのを惜しむ間もなく緑の葉が顔を出し始めました。

青々とした麦畑が広がっているなかを整然と一列に並んで登校する小学生たち。その中に黄色い帽子の一年生が混じっているのを発見すると嬉しくなります。まさに新入生や新社会人といった雰囲気の若者たちが駅前を駆けてゆくのを見ても春をいぱい感じます。

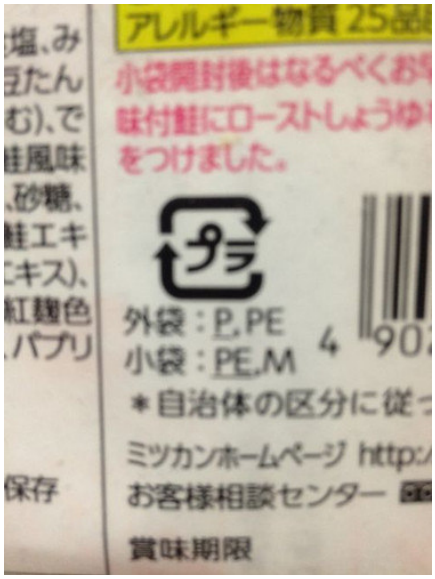
町外れなどにある野菜の直売所や無人販売所に竹の子やタラの芽が並ぶようになったのも近年のことのような気がします。それまでは近所のお爺さんが春の山で採ってきて世間話の傍らにおすそわけをしてくれたものでした。

人々は栄養価やアレルギー負荷を繊細に気遣う一方で、自然食や旬の食材にも関心を向けています。暮らしぶりは緩やかに変化しつつあり、豊かで快適さを求め続けます。

4月の初旬には、地域の資源ごみ回収の当番をする機会がありました。早朝に続々と持ち寄られるごみの山を見ながら、あらためて、便利さやデザインを優先した「プラ」マークの製品が多いことに気づかされました。

便利とはいったいなんだろう。豊かに暮らすということで私たちは、何を、どこまで犠牲にしていいものなのだろうか。

環境の負荷を小さくするために私たち一人ひとりはこうしたプラスチックのリサイクルにも気をつけている。それは大切であるのだが、さらに、豊かさと便利さについてももっと掘り下げて考えねばならないのではないか。



プラ

プラ資源についてもう少し書きます。

県外の友人となにげなくごみについて話をしているときに気づいたことがありました。それは、わが地方では常識化されているレジ袋の有料化やエコバックの普及のことです。

友人の地方では、レジでマイバックを出して「レジ袋を要らない」というとポイントがもらえると話していました。そのときは、なにげなしに聞き流してしまいましたが、ポイントがもらえるってどういう意味だろうと思い、話を戻してみてその発言の理由がわかりました。

つまり、レジ袋は何処の地方でも有料というわけではなく、地方によっては「もらわないようにしましょう」という呼びかけやポイント還元運動をしているだけで、レジ袋はあくまでも無料のところが多い、ということです。

今や、うちの県ででレジ袋を無料化にするということはできないと思いますし、人々はそれほど不便や苦労を押し付けられているわけでもないので、現状が常識として続くと考えられます。

レジ袋の有料化というのは、便利の象徴として考案されたものであるにもかかわらず、便利さを追求して進化していった社会システムを、ささやかながら昔に戻してみんなで考え直してみた実例といえます。

私たちの身の回りには、原点にかえってみることで生活スタイルをチェンジできるものが他にもあるのではないか、と思います。

2012年4月21日（土曜日）【裏窓から】

怖くないやさしいエネルギーに巡りあう

●

大型連休が終わるころ、遅れ気味であったサクラや梅前線も北海道に到達したようです。初夏を迎えて鮮やかな色や甘い香りを誇らしげに漂わすツツジや藤の花が盛りです。・・・・と書いている間もなく夏は、早足にやってくるのでしょう。あと1ヶ月もすれば、伊勢湾岸を南北に走る列車の車窓はこがね色の麦畑と青々と育つ稲田とのコラボレーションに変化してゆきます。

環境活動のイベント情報には、夏の講座が満載です。とりわけ、一番身近なところでは「金環日食」の話ではないでしょうか。「どうぞ、お見逃しなく」という案内が活気を帯びてきました。

ときは、5月21日。前回は沖縄などで1987年9月23日に観測したのが最後で、次の機会は、2030年6月1日に北海道まで行かねばなりません。18年先のことになります。さてさて、お天気はいかがなものか、と心配をしますが、こればかりはどうにもなりません。

これを機会に環境活動のイベントに眼を向けてみる。すると、ふだん知らないことの中に愉しいことがたくさんあることに気付く。そこでこれらの活動を通じて暮らしと自然とのつながりを再認識して、森や空や水に感謝をする気持ちが育ってゆけば、きっと、怖くないやさしいエネルギーに巡り会えることになるだろうし、暮らしにもゆとりが出てくると、そう願ってこの仕事を続けている。

●●

編集原稿は、発行の前月末ころにイベントなどの主催者のみなさんが届けてくれるのですが、編集に取りかかりますのは毎月10日を過ぎるころからになります。今回の記事の中に「樹木医の視点で木を観てみよう」(上野森林公園)というものがありましたが、〆切が5月中旬で、応募者が多数であったこともあり、このメルマガが発行される前に満員になっていたようです。

メルマガでは、県政だよりやホームページよりもいくらか柔軟に情報をお届けしたいと考えていますので、空席のようすなども掲載できたらいいなと思っています。読者のみなさんも気兼ねなくイベントの空席情報を電話やメールでお尋ねください。もしかしたら、最新情報にも書けないようなキャンセルなどがあるかもしれません。

2012年5月16日 (水曜日) 【裏窓から】

科学技術は誰のためにあるのか ― 6月中旬号

●●はじめに

今年は例年通りの時期に梅雨入りとなったようですね。

これからは、肌寒い日や蒸し暑い日が織り交ざりながらやってきて、やがて暑い夏になっていきます。

さて、今年の夏も節電が叫ばれています。みなさまの節電対策はいかがでしょうか。

先日、80歳を回ったお年寄りと電気がないと不便でしかたがないなあ……と話をしておりましたら、その人が子どものころの電気の話を聞かせてくれました。物を冷蔵して保管するのは夢であったころのことで、冷蔵庫などは何処にもなくテレビや洗濯機もまだまだ家庭に普及するずっと以前の話のことと思います。

電灯というものが珍しいころのことでしょうか、家の中なのか街灯のようなものなのかははっきりしませんが、そこには小さな電球があって昼間は消えているのだけれども、夕方になって暗くなるとポッと勝手に点いたものだ、と懐かしそうに話してくれました。明るいうちは田や畑、山へ仕事に出かけていて、暗くなって家に帰って一息つくころになると、昼間は電気などきていないのだが、夜になったら暗くなるので電灯が点いたのだ、というお話でした。

別にただそれだけで、細かいことを追求する必要もない話ですが、人々の暮らしが現代とはまったく違い、電気というものにそれほど依存していなかった時代があったということでしょう。明かりはロウソクか薪か月明かりくらいのもので、涼をとるのも暖をとるのも人が考え出した知恵や工夫だけであった時代です。

現代の私たちにとって電気を失うことは辛いことですが、視点を変えることで昔の人のように知恵を働かせ工夫ができれば、節電に貢献できるかもしれません。

当庁の玄関前のゴーヤも梅雨を迎えていっそう元気に伸び始めました。今年は去年以上に緑をアピールしているように見えます。知恵や工夫を掘り起こす着眼点から見直して、じっくりと考えてみたいと思っています。

●●あとがき

三重大学・環境・情報科学館で四日市公害訴訟の判決40年を記念した写真展が6月に入って始まりました。写真展は7月31日まで開催されています。四日市再生「公害市民塾」の沢井余志郎代表(83)が所有する50枚の写真などが展示されています。

1960年代から70年ころにかけて、四日市市にあるコンビナートは、真っ黒の煙を噴き上げ、空は現在のように青くはありませんでした。そのころの空気の匂いや住民が企業に抗議するようす、裁判のニュースなど、もはや、ほんの一握りの人だけしか知らない時代になっています。

この展示のほか、数々のサテライトでのイベント展示や環境学習センター(四日市市)での展示を見て痛切に感じたことは、これらの記録は、1つの歴史事件として捉えるだけではなく、科学技術史におけるこの出来事の必要性や必然性を考え、その半世紀の後に私たちの成し遂げた技術がもたらした豊かな社会とその副産物、さらには社会システムや環境学などあらゆる面から見つめ直し、統合的に考察することが必要なのだ、ということでした。

分業化や効率化でビジネス市場が巨大化し、経済がめまぐるしく発展を遂げる一方で、私たちの身近な物を生み出す農林漁業やお互いが助け合う社会が衰退し、物を粗末にしたり使い捨てる文化があたり前になり、そして「モッタイナイ」(MOTTAINAI)という言葉が世界の共通語になっていきます。

公害というものを産んだ歴史上の1つの発展期の記録を見るとともに、もう一度、さらに長い目で科学技術史を振り返って、本当に私たちの未来にかけての豊かさを実現してくれるものは何か、を考えてみることも必要ではないでしょうか。

展示は7月31日まで三重大学構内で一般公開されています。夏休み(夏季休暇)を利用してぜひ行ってみてください。

2012年6月18日 (月曜日)【裏窓から】

ひそかに待つ ― 小暑篇

節電をひそかに待っている蛍

七月の初旬に東海柳壇(朝日新聞)で見つけた句で、桑名の方の作品でした。

わが県では、事業所や市町等を中心に県民のみなさまに呼びかけて「ライトダウン運動」を行っています。七月に3回行い、1回目は七夕さまの夜です。(次は18日と25日です)

七夕の夜に明かりを消してエネルギーのことや暮らしのスタイルのことを見つめ直し、静かな夜を過ごしたご家族もあるかと思います。

時刻は8時から10時と短いのですが、テレビなどを楽しまれる方にとっては難しいですね。

真っ暗な夜を過ごす。ちかごろでは、野外活動で野営(キャンプ)をしても、至れり尽くせりの便利グッズがあり、困ることなどほとんどありません。

今ここで、こだわりやワガママを少し我慢して明かりを消すことで、電力不足で苦労している人や災害からまだなお立ち直れなくて苦心してる人が見えてきます。

私の子ども時代は蚊帳を吊って寝ましたので、縁側を開け放していると蚊帳のなかまでホタルが舞い込んで来ました。

そうだ、あのころは「節電」という言葉は世になかったかもしれない。今、ふとそう思い、蛍の気持ちにちょっと近づけました。

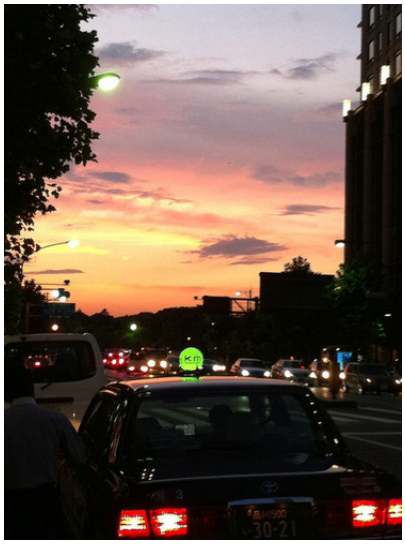
2012年7月 7日 (土曜日)【裏窓から】

日めくりをめくってそこに立秋―立秋篇

日めくりをめくってそこに立秋

▼8月7日を迎えた。昨日 Twitter で俳句つながりの@Chiko9781 さんが夕焼けの写真をのせていた。今年の夏に出会う会心の茜空だ、と感心をして、その赤色に見入っていた。そしてあくる日、きょうは立秋だ。暦を一枚めくったらそこには秋が待っていた。夏の最後に見た夕焼けをありがとう。

夕焼け（@Chiko9781 さん　2012.8.6）



8月6日、素敵な夕焼けの写真に出会った

▼朝、新聞をひらく。今はロンドン五輪の話題が満載だ。夏の高校野球も吹っ飛ばされてしまっている。去年やおととしより暑くないような気がするな、とこのごろの毎朝の涼しさを思いつつ、いい加減暑さにも人生にも愛想をつかしてきたのかもしれない、と苦笑してみる。鈍感なったのか涼しさに感動を覚えるようになったのか。

▼片隅の記事に訃報の欄がある。市内の人で見覚えのある苗字を見かけた。59歳。友だちにメールを入れてみたら「兄貴です」と短い返事が返ってきた。

▼盆棚のあかりをくぐり逢いにゆく

▼間もなくお盆を迎えようとしている。夏が嫌いだとわはままばかりを言っているひごろであるが、精霊様を迎える準備をするときにはやはりこの蒸し暑さがなくてはならないのだろうとも思う。中古の歴史時代、精霊棚には七夕のかんざしを飾って月光が届く軒先にまで出して、お盆にかえってくる霊を迎えたという。逢いに行きたい人がいる。その人だってきっと同じことを思ってくれているのだろう。

▼もぎたてのトマトを齧るとトマトの匂いがする。かつて、トマトは刺を持っていた。進化とともに刺をなくしてゆくのだが、その過程でトマトはトマトらしく匂いを放つようになったのだ。（真っ赤なウソ）

▼トマト食う真っ赤なウソを食い尽くす

2012年8月 7日（火曜日）【裏窓から】

夏の終わりの旅に出る前に・・・・処暑篇

原因は不明である。そう、21日から22日かけて私のおヘソの下10センチの箇所、直径5センチほどで、深さは数センチ程度の一帯に激しい痛みを感じた。

そもそも腹痛に見舞われることなど記憶にないほど、胃腸の機能はしっかりしており、1年以上過ぎた賞味期限のインスタント食品(明らかに腐敗したり細菌に犯されるものは除く)であるなら食べても平気という頑丈なお腹であるのだが。

原因は不明であると言いながらも、心当たりを探ってみる。
万願寺唐辛子を甘辛味で煮たものを、20日の夕ご飯のときにつまんだ。美味いと言ってパクパクと食べたことと偶然にもその2日前からウンコが滞っていたことが合致し腸が突然ペースを乱したのではないか、と後日になって分析している。

主治医の浜田先生は診察時に、ふつうならば下痢になるところですが……とおっしゃる。

万願寺唐辛子

私には、23日から25日まで喜多方にラーメンを食べに行くというテーマがある。やがて死んでしまうまでに完了させておかねばならない十大テーマをあげるならば必須で挙がるほどの一大事であるのだから、腹痛くらいで中止にしてしまうことなど許されない。
浜田先生に、重大な用事で3日間出掛けますので痛み止めの薬を出してください、とお願いした。先生は、では5日分出しておきましょう、と快く察してくださった。

周辺の方々からは胆石ではないかという心配が飛び交った。人は冷静な視点でモノを見つめることを失うと、自分の身体でありながら不安が募ってくる。痛み出した当初は、わが家系に胆石の者1人も無、食生活にもそのような傾向は無い、と便秘か腸炎かガスの仕業と考えていたのだが、傷みが激しく継続すると、揺らぐものだ。確かにあまり事例のないほどの痛みではあったのだが。

休暇計画は、22日から25日であったが、突発で21日に休んで、2日目(22日)に医者に行くほどの痛みになり職場には胆石かもと連絡を入れた。しかし、医者に行ったおかげで急激に痛みが引いて、職場に26日の出勤を危ぶまれるようなニュアンスの連絡をしたことなどすっかり忘れてしまいたことで、23日からはふだん通りに遊びに出かけていたのにも関わらず職場は大騒ぎになりかけていたのだった。

処暑であった23日の朝は爽やかな日の出を見て、6時直後に家を出た。初日に600キロ余りという久々の暴走ツーリングが始まった。

--

考えてみれば、夏休みがあったころは、8月の今ごろになると過ぎゆく夏を惜しんだものだった。勉強もしない、バイトもしないで、実家の4部屋続きの8畳をぱーっとあけっぱなしにして寝ころんで、それこそ100冊近い文庫本を積み上げて順番に読んでいく。夏の終わりは読書三昧の休みの終わりだったのだ。

夏の終わりに旅に出る。
そう書いてみて、不思議にもロマンが駆け寄ってくるような気がした。

2012年8月29日（水曜日）【裏窓から】

哀しいと悲しい　―　白露のころ

白露のころ。何がどうまとまったのか、ムスメの仕事の帰りを待って居酒屋に行く話になった。家からバスで二百円のところにある全国展開の居酒屋だった。

1986年にツマと二人乗りでツーリングに出かけたときに、旅の終盤となった苫小牧で、やっとのことで見つけたホテルの近くに夕飯のために飛び込んだのが、同じ名前の居酒屋だった。

ついこの間、あのときの日記をたまたま読み返す機会があり、今回偶然にもその店に行くことになると、これまた誰にも理解してもらえないような嬉しさのようなものがこみ上げてくる。

26年前である。ただそれだけなのだか、何か手がかりのようなものかあるとイイなと思ったりする。全国チェーンの居酒屋だから、手がかりなど何もないし、喜びなども何もないだろう。しかし、あの荒野のような寂しかった苫小牧で、お客さんなど来るのだろうかとも思わせるようなちっぽけな居酒屋の赤い暖簾の明りを思い出すと、あれは全く別の店であったのだが、一筋の何か繋がるような振動を感じる。

実際には、久しぶりに家族で入った居酒屋で、普段から家庭では面倒くさくて食べられないようなものを探りつつ、しゃべって飲むだけだ。

白露を過ぎていよいよ仲秋となってくる。秋はかなしいとツマがぽつんと言った。かなしいは、悲しいなのか哀しいのか、それは私にはわからないが、30年でそんなことを言ったりするのを1度も聞いたことがなかったと思う。

秋が好きな私と、秋が嫌いな人が、テーブルに向かい合ってお酒を飲んでいる。何も悲しくないのにと突っ張ってみる。

2012年9月12日（水曜日）【裏窓から】

冷たい雨　秋分篇

雨の秋分となった。23日ではなく22日が何年振りかということで、しゃべりたがりの知識人が騒いでいる。今年は秋が長い。

お墓参りをするので、車折に二人は出かけてしまったので、私は1人でお留守番をなっている。

昔のようにお店に行って買い出しをして、ふだんから食べられないような変わった肴を作ったりしなくなったので、今夜はお粥を炊いて梅干しを添えて食べている。この梅干は熊野の梅干でスーパーの陳列棚の中でも極上であったことは加筆しておこう。

健康的である。
お酒を飲まない夜を過ごしたのだ。

毎日が居酒屋のような我が家のゴールデンタイムは、テレビに夢中になろうとする二人と、テレビに背を向けてしゃべり続けようとする私との闘いである。
居酒屋メニューを出してくれる食卓に着き、勝手に聞こえてくるテレビの声に時々振り返りながら、(テレビを見る二人を邪魔しながら)何の役にも立たない話をし続けて夜が更ける。

秋分の夜は相手がいないので、、ゴールデンタイムに差し掛かるまでに寝床で横になって読書をしたり、ネットを見たりしながら過ごす。

金森敦子　関所抜け 江戸の女たちの冒険

まあ、よく眠れるもので、9時前には就寝していただろうか。
夜中に目が覚めて2，3時間ほど読書をしたり、iPhoneにメモを書いたりしてひとしきり過ごした後は冷たい雨音に守られながらふたたび眠った。

(23日)
朝は、ふたたびお粥。入院したときに看護婦さんが、お通じはいかがですか、と聞いてくれるのを思い出した。そんな風に聞いてほしいほど快適な朝です。

お酒を飲まなかったからか。違うと思うけど。
もしもひとりになったら、お酒もいらない暮らしになってしまうのかと不安がよぎる。

2012年9月23日（日曜日）【裏窓から】

新米や誕生祝う寒露かな ― 寒露篇

青いミカンが店先に並び始めてもちかごろは驚かなくなったとつくづく思う。ヒトははっと驚くことが大切なのだ。しかしながら、サンマが秋に出回っても、青いミカンをほくほくと食べられる夜長を迎える季節になっても、それがずっと前からの筋書き通りであったかのように過ごす。

と いいながらも、それが幸せなのだ。幸福というものはそういう当たり前のようなことを何の遮りもなく戴いて過ごせることをいうのだ。これは豊かさという概念でも同じだ。このことは、何度もこの「銀マド」で触れて、それを自分に差し向けて時には反省をし、さらには元気の源にしてきた。

さて、

新米や誕生祝う寒露かな

新米で誕生日を祝うなんていうことばの遊びすら何にも面白くない。新米など、今の時代に何が有難かろうか。コメなど収穫できて当たり前になったのだから。しかし、子どものころ……と書きながら早や50年も昔のことになるのかと思うと、その社会史を年表ではなく自分の目で見てきたことにもささやかな感動をおぼえるのだが、そのころの秋の運動会では両親がそろって見物に来て、地区ごとに区分して敷いてある藁の蓆の上で、子どもが駆けるのを応援したのだ。

青いミカンをその季節に初めて食べるのは、この運動会のお昼ご飯の時であった。あのときの大きな握り飯は新米だったのだろうか。母の握り飯は、きれいな三角で、この頃の人は三角に結ぶことむ下手糞になってしまったことを思うと、私たちは豊かさと引き換えにああそんなものまで失くしたかと、いささか寂しい思い である。

寒露。

小春日の陽射しをふんだんに受けながら縁側でゴマを叩いた子どものころを思い出す。静かな秋だった。

2012年10月 8日（月曜日）【裏窓から】

水冷えて古里の井戸思い出す （裏窓から）―霜降篇

カツオを食べた月曜の夜に天気が崩れて、早朝には雷を伴う土砂降りとなった。新聞を取りにゆくのに庭を二三歩跳んだだけで大粒の雨が頭に突き刺さるように降り注ぐ。

冷たい雨の降る朝だった。こんな雨の朝を迎えるのは、久しぶりのことで、やがて寒い冬がやってくるのだなと憂う気持ちが襲い掛かる。

傘をさして歩くのを嫌がっている自分の気持ちを押し切って、外に出ると雨が小降りになっている。もしやと期待をしたら願いが叶って、職場へのいつもの道は傘を差さずに歩いて行けた。

例年なら半袖のカッターシャツに薄い秋物の上着を着ていたのだろうが、その上着を箪笥のどこかに仕舞い込んでしまい、急激な気温の変化に追いついけず発見できないままなので、ここ数日は長袖のカッターシャツを着て上着なしの通勤スタイルで出かける。

霜降。

きょうの季語にそう書いてあって、吐息の白い11月下旬ころの田んぼ道を思い出す。

信州のほうからの便りでは、紅葉が1週間ほど遅れているという。

そんな話題が出ると決まって気候変動を指摘する声も上がってくるようになったのもこの10年ほどの間のことで、ますます社会の流れが大衆迎合型に変化してきて、その勢いで環境変化にも気づいてもらえるのはありがたいが、一向に暮らしの中に決定的な手段が定着しない。

ぶるっと震えた朝に怖気づいたのか、子どもがストーブを出さねばならないと言っていた。夏が過ぎて電力事情が少し安定しているものの、冬になると夏以上に電気の消費量が上がるだろう。

エネルギーを新しい発想で作り出し有効利用する取り組みは季節の移り変わりの数倍の遅さで進む。人の心は、メディアの強力な勢いのせいで、だんだん贅沢になり不満足を感じるレベルが高くなってくる。

これらのアンバランスな速度（の波長）が重なり合うねじれた位相の社会はいつまでも続くのだろう。この波動の上に、年齢とか健康などというパラメータが被さってきて、一段と社会の居心地感が複雑になる。

秋風に吹かれるススキのように風に揺られて、陽の光に輝いているのがいい。おいしい米粉で作った団子を食べたくなってくる。

霜降の朝には南勢方面で50ミリを超える雨を記録したのに、夕方にはその雨も上がって、あくる日は（今朝は）極上の朝日がわが部屋に差し込んできた。

▼古里はもう1，2度は寒かろうな　ねこ
と思いながら、真っ赤な朝日を愉しませてもらった。

2012年10月24日（水曜日）【裏窓から】

そんな季節を迎えようとしている　立冬篇

今月号では鳥羽市立菅島小学校エコ・ボランティアクラブを紹介した。書きながら、子どもたちの活動を思うと感動の波が押し寄せてきた。じっと熱くなるものがある。

*

あとがきから。

いよいよ秋たけなわです。京都・奈良の古刹からは紅葉のたよりが届いてきます。

　柿食へば鐘がなるなり法隆寺

古都を歩くのがいい季節になってきました。深まる秋を味わいながら小春日の里山を散策をしたいものです。子規の柿好きは有名で、柿を詠んだ句は いくつもあります。

　風呂敷をほどけば柿のころげゝり

伊勢地方は柿が特産ですので、美味しそうな柿が店先に並びます。子どものころから柿はどこの家の庭にも成っていて、よじ登ってもぎ取って食べると いうのが当たり前のスタイルでしたから、なかなか田舎育ちの者には買ってまで食べることがなく、今や高級な秋の味覚となりつつあります。

このような記事を書いている間に立冬が過ぎてしまいました。伊勢平野には「鈴鹿おろし」「布引おろし」という北風が吹きます。

　干柿の暖簾が黒く甘くなる　山口誓子

そんな季節を伊勢平野は迎えようとしています。

2012年11月 8日 (木曜日)【裏窓から】

月はなく星がひとつで朝明ける　小雪篇

月はなく星がひとつで朝明ける

そんなことばがふっと浮かんで、まだ明けきらぬ空をしばらく見上げていた。(20日)

鮮やかな朝焼けであるとかすがすがしい空気に感動する朝とは違って何も感動するわけでもないのだが、日々遅くなっゆく日の出時刻を戒めるように明るい星が南西の空にいた。たったひとつ残されていた。

何もない空をみながら新聞受けまで歩きガウンの襟を直しながらまた玄関まで小走りに駆ける。
部屋に戻って暦を繰って22日が小雪と確認すると、この日に京都に行く予定にしていることが、ちょっと嬉しくなる。京都と小雪に何の関連もないのだが、このごろはそれほど頻繁に帰らなくなったから単に久々なのでワクワクするのだろうか。

トロッコ列車が人を呼ぶようになり、年々、嵯峨の駅前も人がやってくるようになって、おまけに駅舎も名前も新しくなって、私たちが暮らした庶民の街並みは消えつつあるのが寂しい。ツマもそのことを口には出さぬが寂しく思っているようで、子どものころに通った嵐山小学校の前を通るたびに懐かしがるような歳になってしまった。

週末に向かってお天気が下り坂ということで、バックに折りたたみ傘を潜ませて、8時過ぎの京都行きに乗った。平日であるのに混雑しているもようで、3人がまとめて座れるシートがなく、テーブル席にグループ扱いで乗って行けることになった。6人ほど座れるので高級なラウンジに腰かけているような気分だ。窓から見える視線ラインがちょうどホームの高さということもあって、冬の装いのおしゃれな足元を眺めながら缶コーヒーを飲み新聞を広げる。

京都駅から嵯峨駅(現在は嵯峨嵐山駅)に行く各駅停車も11時ころだというのに通路にまで立つ人があふれている。隣国からの観光のグループが楽しそうに声高らかに話している。美人ぞろいなのでちらりちらりと振り向いてしまう。

嵐山から天竜寺を抜けて宝厳院の門前にある嵯峨野という湯豆腐屋さんにお昼を食べに行く。2, 3度来ているが、1時間以上の待ち時間だったので、正午になるまでに入れるように少し急いだ。

祇王寺のことは前の日記に書いたし、その中で昔の嵐電の写真にも跳べるようにしておいたのでので、詳しいことは省略する。

22日は小雪。薄日が差すと汗ばむほどにもなる日であったが、日が暮れるとさすがに京都らしくしっとりと冷え込んだ。

ムスメが生まれる予定もないころに、愉しみながら子どもの名前を幾つも考えていた日があって、その中に「小雪」という名前もあったことを毎年この日に思い出す。

嵯峨野　にて

2012年11月24日（土曜日）【裏窓から】

この日にコートを出しました ― 大雪篇

▼今年ももれなく大雪を迎える。この日から冬至までの間に冬の覚悟を決めて、そのあと正月を迎え冬を乗り切る勢いをつけて、一気に大寒を過ぎるまで全力で冬を走り抜けるのだ。まさに冬の寒さが身体の中まで染み込んでくるのはこれからだ。だから、身体中が凍てついてしまう前に春になってもらわねば、我慢の限界がきてヘタレてしまうような気持ちになる。

▼誰だって冬の寒さは苦手だろうと思う。朝、布団から飛び出すのが辛いし、服を着替えるのも寒くて億劫になる。えいやーと気合いと勢いでパジャマを脱ぎ、着替えてしまえば、そのあとはトントン拍子にお出かけの支度も進むことが多いのだが、みんなそこでもう少しだけこの温もりの中で微睡んでいたいと思い、誘惑から抜け出すのに苦労しているのだ。

▼12月になると寒さが一段と厳しくなり、朝、庭に出て植木の葉が霜で凍り付いているのを見ると、いよいよ本格的な冬を覚悟をせねばならないと思う。12月5日、歌舞伎役者で俳優の十八代目中村勘三郎さんが亡くなった。2歳しか違わない人であることにある種の無力と寂しさ、覚悟と使命のようなものを感じる。

▼大雪の朝、7日からコートを着用し始めた。特に辛抱をするつもりもないが、まだ冷たい風がシャツに吹き付けても痛々しい寒さを感じる訳でもなかったというのが延び延びになっていた理由で、二三日前から鞄を持つ手が悴むようになってきたことが切っ掛けだ。思うほどに吐息は白くないものの、寒さはぴりっと厳しい朝だった。一度着たら脱げないなと思い、これを脱ぐ春のことちょっとだけ想像してみる。

▼今年度の冬はどんなになるのだろうか。節電モードは去年よりも色褪せ華やかなイルミネーションも堂々と胸を張って輝いている。大雪の夜に東北地方・三陸沖で大きな地震があり、東日本は大きく揺れた。前の大地震から一年半余りが過ぎている。冷たい風の吹く冬に起こる地変は不安も大きくいっそう辛い。原発の被害を受けた地域や震源地に近い人たちが「原発がなければ放射線の被害はなかったし家族が離散したり古里を離れなくても良かったのに」とネットで呟くのを読むと、文明というものをもう一度最初から見つめ直し、社会を再構築しなければならないことを痛切に感じる。

▼一度手にしたものを手放すのは勇気のいることではあるけれども、科学技術の齎した幸福を振り返り、自分自身ばかりに向いている視野を周囲に転回しなければならない。高速道路の天井板の落下事故を見ても、人の奢りと横着が気にかかる。畏れる心が枯れてしまいつつあるのはやはり幸せボケと思わざるを得ない。イルミネーションを消すことがそれほど不安なのだろうか。

2012年12月 8日（土曜日）【裏窓から】

キミに会う朝焼け時刻に目が覚めて ― 冬至篇

21日。

T君から便りが届いたのが12月21日のことで、メリークリスマス、とだけ書いてある彼らしいメールだった。

もはや私たちに余分な言葉など不用だと考えていたのかどうか、それは全く不明だが、友だちの間にそれほど多くを語る言葉など今は必要としないのだということなのかもしれない。

何をして食っているのか考えるのは私のほうの都合であって、彼はたぶん人生に不満も持たず弱音も吐くことなく、逞しく生きているのだと信じて間違いはない。

土日は西戸崎教会の牧師をしています、と書いていたので、その場所を調べたら、思わぬと所だったことに妙に嬉しくなってきて、一方で、一瞬羨ましく思えて、また一瞬、これはやはり言葉の助けを借りて積もるは話もせねばならぬときが必要なのかもしれない、とも考えたのだが。

しかし。

会えば奴に私は諭されるだけだろう。ちょっと癪に障るような気もしないわけではないが、実に淡々と人物の本質を見ている奴だけに、失ってしまった感性をもう一度刺激してくれるかもしれない。

冬至の夜。

カボチャにも柚子にも縁もなく、淡々と日常の暮らしを継続している。アジのお刺身を食べたことをひそひそと歓んでいる。

■

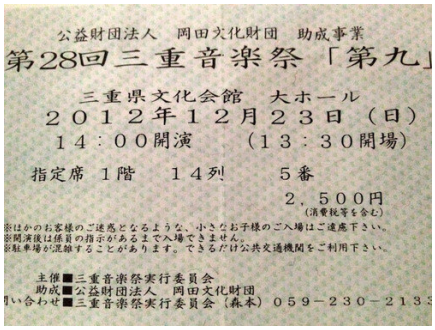
北国では雪が降り続いている。今年ももれなく寒い冬がクリスマスを目前に列島にやってきている。太陽は私たちの星から遠くに離れ、人類に物事を離れたところから眺めることの重要さを暗示しているのかもしれない。

年末には選挙があって、自民党の大多数の得票という結果になった。人々は今から次へと脱出して変化のなかを泳いでゆく決意をしている。原発には大勢が反対している気持ちを持ち続けているにもかかわらず、そうはさせまいと強い意志を抱く政治思想がしばらくこの国を引っ張ることになる。

論壇は、理性で政治を、と書く。
政治も、人生も、恋愛も。
みんな「あとの祭り」のことが多い。

23日にはベートーベンの第九を聴きに県文にいく。
Yさん（Y先生）のご招待券で。

図書館で、村上龍著「55歳からのハローライフ」を予約した。


公益財団法人　岡田文化財団　助成事業
第28回三重音楽祭「第九」
三重県文化会館　大ホール
２０１２年１２月２３日（日）
１４：００開演　（１３：３０開場）
指定席　１階　１４列　５番
２，５００円
（消費税等を含む）
※はかのお客様のご迷惑となるような、小さなお子様のご入場はご遠慮下さい。
※開演後は係員の指示があるまで入場できません。
※駐車場が混雑することがあります。できるだけ公共交通機関をご利用下さい。
主催■三重音楽祭実行委員会
助成■公益財団法人　岡田文化財団
問い合わせ■三重音楽祭実行委員会（森本）０５９－２３０－２１３

2012年12月23日（日曜日）【裏窓から】

うけつぐもの

■■　はじめに

新しい年が始まりました。
いかがなお正月をお過ごしになったでしょうか。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。

元旦の朝に若水を汲みに行く井戸やもち米を蒸す竈が残っているご家庭は、ほとんど姿を消してしまったのではないでしょうか。お正月が来るたびに、雑煮の餅が味気なくなっていくのを感じます。

子どものころはまんまるに丸めた手のひらサイズのお餅を具だくさんの味噌味で食べたものですが、杵や臼が家からなくなってしまったことで、つきたてのお餅を丸めることもなくなり、お雑煮用に丸いお餅を少し作るほかは、四角に切った餅のほうがポピュラーになってきました。

伊勢平野は、お米に恵まれたこともあって、かき餅やあられの文化が浸透していて、これを炭の火鉢で焼いてお茶漬けにして食べるという味わい方もあります。

直に火を使わず電気による暖房や煮炊きが当たり前になっていく時代へとゆっくり変化する環境ですが、忘れられていく味というものもあるのだな、と思いながらお正月のお餅を食べました。

今年は、我が家の定番・西京味噌(白味噌)のお雑煮のほかに、よその地方の真似をして吸い物ふうの汁に焼餅を入れて食べてみました。異郷へ旅をしている様な気分を少しだけ味わいました。

このメルマガがお手もとに届くころは、寒さもいよいよ厳しくなっていることでしょう。二十四節気の暦をもう二三枚めくれば季節が変わります。もうひと頑張りですね。

■■　あとがき

Facebook や Twitter の情報拡散機能を利用して、様々な行政部門からイベント情報や事業PR、活動報告などが発信されていく時代になってきました。メールマガジンはすっかり時代の置物のようになってしまいそうです。

それは、印刷された書籍や昔ながらの分厚い辞書が、電子ツールによって入れ替わってしまうのではないかと心配したときの不安にも似ています。

しかし、書籍は消えてしまう運命ではありませんでした。インクの匂いのする紙を一枚一枚捲って、活字を確かめることの喜びや味わいの深さを愉しむ人がいる限り、便利で合理的な電子の波にも待ったが掛かっているみたいです。

確かに、メールマガジンは素早い動きには追いついて行けません。これを書き始めてから配信をするまでに一週間以上を要してしまうこともありますから。

では、スローな時代に、スローな暮らしをしている人が読む「マガジン」とはどうあればいいのでしょうか。思索するときが増えつつあります。

読者のみなさまからもご意見やご提案をお待ちします。

2013年1月 2日 (水曜日)【裏窓から】

年の初めに考える ― 小寒篇

初霜に白きねぶかや薄化粧、と昔に書いたのを見て「初霜や白きねぶかの薄化粧」のほうがいいかもしれないと、今ふと思った。あれは小雪の朝のことだった。2年とひと月余り前の私が、たった十七音で綴られた言葉から、面白いように蘇ってくるのが分かる。

*
*

ニンゲンは言葉というものを話すことから、それを書きとどめておくという能力を身につけたことで、あらゆる情報を歴史に刻むことへの一歩を踏み出した。文字の発明。石器時代よりもさらに遡った時代のことだった。遥かなるご先祖様たちは、一年という周期で季節が巡り、太陽が私たちから一番遠ざかるときに冬という季節が訪れ、しかし必ずまた暖かい季節がくるということを、どのように捉えていたのだろうか。

言葉というものが文字よりも先行して存在したのだが、その言葉とは果たしてどの程度完成されたものだったのだろうか。季節という概念はどのような印象であったのか。痛い、こそばい、痒いという感覚はあったにしても、もしかして、嬉しいとか悲しいという感情はあったのだろうか、とさえ思うことがある。

言葉を書きとめておくのは、昔を蘇らせるためだけではない。現在進行形で次々と目の前で起こっていることに対する感情を捨て去らないためにも、残しておく手段のひとつとして、できる限り短く、そして激しく、美しい形で、脳裏に閃く情念を残そうと考えた表現、それが十七音である。

去年の暮れにふとしたことで「俳句って現在形なのだ」といった砂女さんの言葉に出会い、そが頭の片隅にある。生きていることや行動を起こすことの考察過程では、過去を疎かにせずじっくりと見つめることや未来を大きく描くことを大切にするのだが、行きつくところは現在だと常日頃から考えている。つまり、過去に栄光があったとしても、未来に夢を大きく描けたとしても、しっかりとステップを踏むときには今を見ている必要があるのではないかと考えているので、俳句が現在形であるという表現が妙に嬉しい。

*
*

最近は、お遊び十七音は低迷状態で、気に入った作品が続くときもあるが、叶わないときのほうが多い。善し悪しはさほど重視していないので、それなりの作品が続いたところで大きな落胆ではないものの、そんな作品しか残らない日常を送ることを旨とはしない自分がいるのも確かで、もっと現在形に元気を取り戻したい。

平成25年の元旦は快晴で、初日の出も拝める朝となった。寒さも例外なく厳しく、県境の山並みは薄化粧の山肌となったという。

寒の入りを迎えた5日には、初詣に出かけた。滝原宮の参道を歩く人影は疎らで、正月の賑わいと比べると夢の跡のようであったのだろう。神様をちょっと独占できたような気持ちになった。

今年は年賀に書き添えられた一筆に苦笑することが多く、、健康を労わるものや身体に傷みや軋みがあるのを嘆くような言葉が目立った。そういう歳になってきたことは紛れもない事実であるだけに、現在形を大事にしてアクションを起こしたい。

かみそのを足音ひとつ二つゆく

2013年1月 5日 (土曜日)【裏窓から】

冬は寒くなくてはならないのだった　大寒篇

まつすぐに十一月の始まれり　　鷹羽狩行

冬は寒く長く、確かに辛い季節ではあるが、11月にその覚悟を決めたからには、終わるまでやり通す意思も必要だ。寒いと言って投げていてもいられない。私のいつもの口癖で大好きな言葉で言えば「縄文時代から予測できた」ことに不平不満を言ってはいけないのだ。まっすぐに11月を始めるからには、強くて揺るぎない意思と決意と展望があったのだから。

私たちは怒りや不平を日常として生きている側面があって、それが励みになりプラスの思考ができて羽ばたけるのであろう。大寒を迎える1月20日は、連続的に寒がり屋さんを苦しめた寒さも少し揺るんでいた。今年は穏やかな朝だったと日記には書きとめている。

大寒を迎えることはそれは父の命日を控えてということであり、寒さの中で声も枯れて出なくなった1998年（平成10年）のあの葬儀のことを思い出す。なだらかで優しい山並みも大寒波の到来で白く雪化粧をしていた。嘗てこんな景色になった日があり、父が喜んでか珍しがってか、カメラを出してきて写真に撮っていたのを思い出す。それほどまでにこの山に雪が積もる景色は珍しかったのだが、父の葬儀の日は，峠を越えてくる人が難儀をするほどの雪となった。

21日が母の誕生日なので墓参りをかねて家を訪ねた。誕生日の贈り物などしないのだが、ドーナッツを三つほど買って帰って仏前に供えた。私たちが結婚をしてからの間に葬儀にたった（都合で参列できなかった人も含む）人のことを私が尋ねてクイズのように回想しながら並べ替えてみると、母は考え込むこともなくスラスラと答えて行く。私は1問も正解を出せなかったかも知れないのに、自分の答えが正解ですとばかりに教えてくれた。

房子さん、きしさん、逸夫さん、忠知さん、父、静代さん、さだえさん、としさん、幸一さん、常夫さん、三生さん。

もう結婚式に出席した数よりも多くなってしまった。このあとに連なるのは紛れもなく母の名前であり私の名前なのだ。そう考えると、こうして大寒を過ごすことの大事さが見えてきて、この寒さが不可欠であり、父を語り継ぐためには再び冬を迎えたら寒い冬でなくてはならないのだと思った。

2013年1月25日（金曜日）【裏窓から】

春まぢか付箋の色をかえてみる 立春篇

冬に積もった雪は、大きな山脈の森の深くまでしんしんと積もり、春から夏そして秋にかけて豊富で清らかな水を海へと注ぎ続けます。この水が生き物や植物の成長に恵みをもたらし、生態系と複雑にかかわり合いながら豊かな自然を作っています。

今年もまた厳しい冬を過ごしてきましたが、春一番という言葉が聞こえてくる時期になりました。雪が積もったのを珍しがって子どもたちと一緒に大喜びした冬ももう少しで、春はもうそこまで来ているようです。

雪は融けると何になるの？と問いかけて「春になる」と答えながら、多くの人たちは、春を待っているのだろうと思います。みなさん、春の準備は整いましたか？

寒い日や冷たい雨にときどき見舞われながらも、もうすぐ、ぼちぼちと咲き始めた花に心をときめかせる気候になっていきます。

◆

晩秋、11月のある日、
　まつすぐに十一月の始まれり　　鷹羽狩行
とこの句が詠むように、寒くて厳しい冬であっても何事にも挫けずに、逆に季節が移ろう中で迎える冬に感謝をして暮らそうと覚悟を決めてました。不必要な暖房を控え、お風呂を沸かしたときもテキパキと家族が続けて入って、日常の些細なことにも目を向けて省エネルギーを実践しようと決めました。もうひと頑張りです。

三寒四温といわれるように、2月には寒い日と暖かい日が交互にやってくるので、厳しさが少し和らぐ日になるとホッとします。地中にひそんでいる植物たちも暖かい日差しを受けて一気に顔を出しますから、人間のように喜怒哀楽の感情を持たない植物たちであっても、春を歓んでいるようすが新芽の形や色にも表れているような気がします。

みえ県民の森「森の日記」(ブログ)には、真っ白な足跡のない積雪の森の写真と新芽を食べにやってくる「ウソ」の写真が載っています。2月末ころから3月に花を咲かせる梅のところにも、この季節、メジロなどが美味しく甘い蕾をついばみにやってきます。

平成19年の2月に亡くなった飯田龍太の作品に春を詠んだものがあります。
　いきいきと三月生る雲の奥　飯田龍太
二月も中ごろを過ぎるといつも決まってこの句を思い浮かべます。

春はそこまで、いや、どこかで生まれていますね。

2013年2月 4日 (月曜日)【裏窓から】

待ち遠しいものいくつもありまして　雨水篇

18日、雨水の朝。

いつもの年よりも幾分寒い日が続くこの頃に、少し辛抱し兼ねている自分をみて、

▼卒業に苦心しつつ雨水の暦繰る

なんてことを書き残している。

卒業式が3月下旬であったのだから、いまころにはすでに卒業の確定は出ていただろうと思うが、人よりも長かった学生時代のことを思い出すと、晴れの日のことよりも雨の日のことのほうが思い出深い。

いわゆる出来のいい人たちは順風満帆に若きころを送り、およそ筋書きに書かれた通りの道を歩まれるのだろうが、私の場合はそう簡単には済まなかった。

怠け者であったこと、闘争心に欠けること、そして何よりも諦めるのが人一倍早いこと。

三十年以上も昔の記憶はもはやまったく正確ではないのだが、このごろは記憶なんてのはそんなふうに風化してしまっも構わないじゃないかと思うようになっている。

死んでしまったら影も形もなくなるし、そんな歴史を偲んだところで何が始まるわけでもない。そんなお荷物は、形のあるものも形のないものもすべて、持ってどこかの世界にゆけるものでもないと思っている。

だから、答案用紙に「就職が決まりましたので卒業させてください。試験問題の解答はわかりませんが、一生懸命に勉強したことを以下に書きます」というようなことを前書きして、別のことをA4の真っ白の解答用紙にびっしりと書いたことや、そういうおバカで実直な奴があの時代にはいたのだということ、そして、あのころの先生方は、卒業時に入学者同期が半数も残らないほど厳しく落第させた時代であったにもかかわらず、私のような答案を書く者を大目に見てくださった側面もあったことを、こうして語り遺しておけば私はそれでいいと思っている。

雨水のころ。冷たい雨に打たれながら大学にでかけていき、先生にお願いして回ったことも懐かしいが、あのころの雨は冷たいのであるけれども、手を凍えさせるほどにも非情ではなかった。

3月下旬の卒業式は晴れで、あくる日は土砂降りだった。気象台のデータを辿ると19日が降水なし、20日に雨が降っているから、ちょうどこの時だったのだろう。

19日の朝は、夜中に降った雨が朝方まで残り、傘をさして出かけた。
駅を降りると花びらが散るように雨つぶと雪の欠片が混じって降っていた。
高校生が傘をささずに自転車でかっ跳んで行ったくらいだから、それほどのものでもなかったということだろう。

実にめずらしく
雨に何か舞うものか混じり始めた。

三年生のいない列車
冷たい雨
隙間風

そんな朝であり、そんなメモが残っている。

▼待ち遠しいものいくつもありまして

そんなことを書いて

それは、
人であり
季節であり
変化であり

ひとしきり啼いて立ち去るホケキョかな ― 春分篇

3月20日(水)、春分。

朝から鶯がやかましい。

▼ひとしきり啼いて立ち去るホケキョかな

寝床で鶯を聞きながら、
朝寝をしてみる。

用もなく布団に入っているのは
ある意味で贅沢なのだが
時間を棄てているようで、
せっかちな者には些かイライラする。

もうすぐ、
父と一緒に暮らせた時間が、
逝ってしまってからの歳月に追い抜かれる。

▼彼岸なり。生きていれば誕生日
▼春分の庭の花だけ賑やかに

ほんとうは誕生日であった日に
墓参りに行きたいところだが
金曜日にすることにして
家族がそろった日なのでイオンに出かけた。

生きているときには
誕生日に祝いもしたこともなければ
おめでとうも言ったことがなかった。

おやじというのは寂しい立場なのだとつくづく思う。

**

夕方から土砂降りになる。
春の雨は濡らされても憎めない。

▼春暁の三行目をひた噛み締める

19日
1時間半ほどの自転車散歩をしてきた。
中部台公園のテニスコートの前の桜もほころび始めていた。

2013年3月21日（木曜日）【裏窓から】

人生は、sin、cos、tan。　清明篇

春には間違いなく桜が咲き、
そのころに嵐が吹いて花が散る。

別れを惜しむ人があれば、
出会いを歓ぶ人がある。

この時期は、羊羹を切った包丁の右と左のようなもの、
切り口のオモテとウラのようなものかもしれない。

sin、cos、tan。
サイン、コサイン、タンジェント。

人生は永遠の周期で、再帰的関数のふりをして
実は全てが新しい。

誰にも予測できないものであり
いとも簡単に方程式を解けるような錯覚もある。

指をスライサーで切りまして
血が止まらずに医者に行きました。

単に指を切っただけですが
この指の役割がよくわかった。

トラックパットの3本指操作に困るのはもとより、
両手を広げて、親指がお父さん指、人差し指がお母さん指……
と例えてうたを書いた人の素晴らしさにも感動する。

私の思いがちょっとした人にも伝わらなくて
地団駄を踏んだこともあったが
このごろは、再帰的関数の解のことを考えて
思い悩むことはやめにした。

▼地団駄を踏んで泣いたらひとしきり

2013年4月 5日（金曜日）【裏窓から】

おいしい季節　［裏窓から・号外］

ほんの一握りの人たちだけが知っていたことかもしれませんが、紀勢本線を1日1往復し「紀勢貨物」として多くファンを魅了していたディーゼル機関の貨物列車が3月末に廃止になりました。重たく長い貨物を引いて曲がりくねる鉄路を走り抜ける機関車の姿には哀愁を伴う感動がありました。（尾鷲市のHPにも「今週のスナップ」として掲載してます）

伊勢平野を通り抜ける時刻は早朝と黄昏時でした。時刻表に載っていないこの列車を通勤の行き帰りなどで見かけた人もあると思います。列車そのものが放つ鉄道の勇壮さだけでなく、長く連結されて黙々と旅する貨物の美しさに惹かれた人も多かったに違いありません。

鉄道輸送のひとつのステージに幕が下りたともいえましょうか。この1ヶ月ほどあとには、荷阪峠をトンネルで抜ける自動車道路が開通しています。

このごろはクリーンエネルギーコミューターとしての電気自動車が注目されたり、自転車をそのまま持ち込める電車が話題になっているのを見かけます。地域文化を紹介する記事もメディアで紹介され、昔ながらのスタイルを守りながら、ささやかにその土地で暮らしている人たちに触れることができます。

技術開発のニュースを見ると遅れてはなるまいと思うものの、それとは正反対に、ネット情報が伝えてくる近代から、一歩離れて暮らすのも粋なもんだと思うことも多くあります。急成長をしていた時代と違って、一息ついてスローに過ごす暮らしを見直そうしている人々がじりじりと増えていると分析する人もあります。私たちの地域にあう暮らしを大切にしたいと思います。これってきっと県民性ではないかと信じてます。

春になっておいしい県内産の魚がお店に並ぶようになってきました。列車沿線の田園風景が日々変化します。いつの季節にも感じてますが、うちの県ってほんとにイイですね。

2013年4月 6日 (土曜日)【裏窓から】

のんびり生きることを考える　［裏窓から・号外］

桜の花はどのあたりまで北上してしているのだろうか。

わたしたちの桜は春の嵐で既に散ってしまったけれども、今ごろは鶴ヶ城(米沢市)あたりまで届いるのだろうか。

川崎展宏さんの作品に素敵な一句があったのを見つけたので書き留めておく。

◆　オメデタウレイコヘサクラホクジヤウス　　川崎展宏

この作品は「葛の葉」(1973)に所収されており、前書きに「卒業生　札幌で挙式」と書いてあるそうだ。レイコさんは教え子なんだろう。

1973年といえば、山口百恵や桜田淳子がデビューの年で、電話料金も高額であったし、公衆電話(赤電話)さえ十分になかった。やはり、お祝いには手紙よりも電報を使った。大学の合格発表を「サクラサク」の電報で受け取ったという人も多いだろう。

*

1970年の1世帯あたりの1ヶ月の電力消費量が約120[kWh](キロワット・アワー)で、2000年ころには、およそ2.5倍の300[kWh]にまで増える。(電気事業連合会資料)

120kWh(1ヶ月)ということは30日で割ると1日4kWhという計算になるので、家庭のブレーカーは40A程度だろうから、4kWhの電力は、40Aのブレーカーが遮断されるギリギリで使えば、たった1時間で使い切ってしまう計算になる。1970年ころは、この電力量でほぼ1日を暮らせたことになる。

暮らしぶりの変化を振り返ると考えさえられるところも多い。

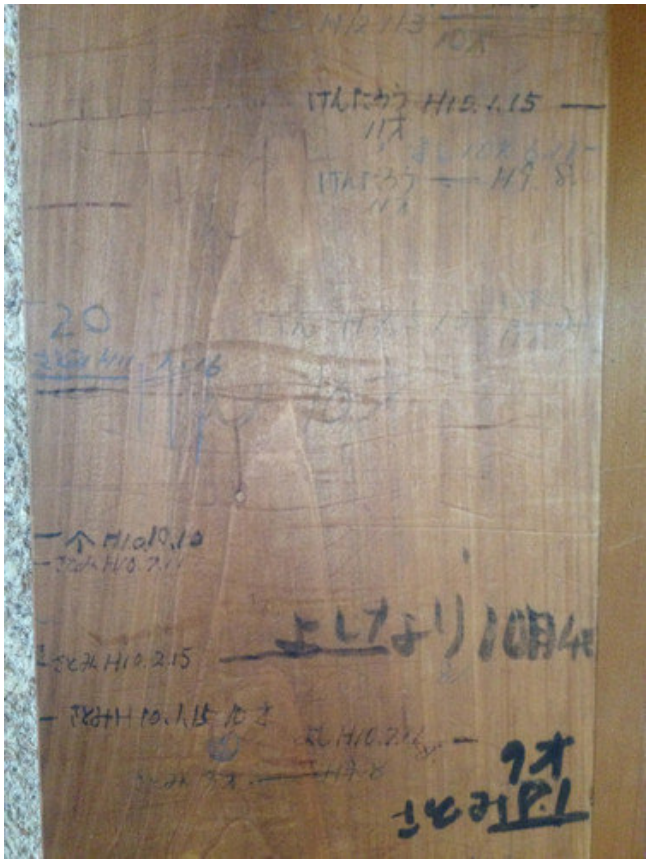
このごろ、秋田県の「のんびり」というホームページを見つけて愛読している。

「右肩上がりの経済成長というゴールなきゴールに向かい懸命に走ってきたニッポンにとってまるでビリを走るランナーのよう」であったのですが「相対的な価値にまどわされることなく自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う。そんなニッポンのあたらしい『ふつう』を秋田から提案」したいとホームページは言っている。

環境だけでなくあらゆる面で「秋田県」からあたらしい提案とPRをしている優れたページで、けっこう、ニッポンじゅうが参考にできるような内容だ。

2013年4月 9日 (火曜日)【裏窓から】

きかせてよ柱の傷の物語　穀雨篇



なかなか春の爽やかな風が吹かないこともあって春物のスーツと冬に履いていたズボンを混ぜこぜに着て何日かを過ごしている。

穀雨が過ぎてやっと本格的な雨が夜半から降り始めた。先日雑草を引き千切って庭を這いまわったが、土はカサカサに乾いていた。こんな年もあるだろう。田んぼにはきちんと例年通り水が張られ着々と田植えは進んでいる。

22日の夕方、列車を降りる直前に写真を写してみた。少し赤みがある。夕焼けが楽しみな季節は近いのだなと思いながら跨線橋を渡った。

近ごろは鯉のぼりを見かけることがないので、歌にもあるような「屋根より高いこいのぼり」の意味が子どもたちにはピンと来ないだろう。柱に傷をつけて子どもたちが大きくなったことを家族中で心から祝うこともない。

キズをつけられるような柱がないし、屋根の下に家族の面々が揃わない。

▼乾く筆、耳に染み入る雨の音

20日の夜には「花も嵐も」のなかで書き残そうと思っている温泉を思い出していた。数々の旅で訪れた全国の温泉の風景とその時に交わした会話や出来事を回想しながら、この形のない記憶もやがて消えていってしまう日が来るのだ、しかし、新しい時代には新しいドラマが始まればそれでいいのだと沁々と思った。

春の雨は少し肌寒い。それでいいのだ。

2013年4月24日（水曜日）【裏窓から】

きょうからは柱の傷を乗り越える ― 立夏篇

五月の風はひと月前の風ではなく
もう夏の風になっている。

- 五月晴れ母の背中の丸い影
- きょうからは柱の傷を乗り越える
- 背くらべいつか抜かれたこどもの日
- 枇杷の木がモゾモゾしとる立夏かな
- 道草を食ってツツジの蜜を吸う
- 初ガツオふるえる箸の辛子かな

どちらの農家も田植えが忙しいのだが、わたしは1町ほどの田んぼを弟に譲り、気楽な暮らしをさせてもらっているので、この季節は時間を贅沢に弄んでいます。

昔のように旅に出ることもなく、インドアな一日を過ごす。

田植えが終わるころは、ちょうどイバラの葉っぱを山に採りにいって（私の地方で言う）かしわ饅頭を母が作ってくれたものだ。父が逝って母も老いぼれてしまい、誰も山に行かなくなったから、そういう自然の恵みには縁遠くなってしまった。自分で山に入るワザを父に教えてもらわなかった私に与えられた罰だと思っている。

今、世の中はすべての人がそんな罰を受けているのだが、そんな意識は希薄だ。幸せだと思っている。

柱の傷を見て自分を省みることもなくなってしまった今
ツツジが花を咲かせて、私を誘惑することも
カツオが店に並んで、どうぞと微笑むのも

ある意味では幸せなのであろうけども、
ヒトはそこでとどまってしまっているように思う。

私の力で何かを……と息巻いたこともあったが、
このごろは、私の力などその程度で、そのへんの石ころの一つ一つに区別がつかないのと同じで、
まあそんなもんよ、と思うことが増えた。

きのう、ジョギングシューズを洗ったことや
トイレの水洗弁が錆び付いてきて流しっぱなしになってしまうことが多くなったのを見て、自分も錆びたなと思ったことや、
一昨日に肉を少し多めに食べたら夜にたくさん夢をみたことなど、

ホタルの予感 ― 小満篇

きのうは小満でした。立夏の次にやってきた節気で、その次が芒種で、そのあとに夏至になる。

この「裏窓から」を書き始めて随分と年月が過ぎ、何回かはメールマガジンの巻頭・あとがきにも流用してきた。

二十四節という数字を考えてみるとき、1年が12ヶ月でその半分を節として二十四節にしたと考えてもよいのだろうが、四季の1つの季節を3つに分けてそれをさらに半分に捉えたものとして眺めてもいいでしょう。

考えてみれば、365日の暦を28日や29日や30日や31日の月に分けることを不自然だとも思えて、古代エジプトのように30日の月を12回と残りを5日（時には6日）としたほうがスッキリする。

自然の中で私たちは暮らしている。少し人類が賢くなったからといって刃向かうことなどはできないし、知恵を使って冷房装置を発明したところで、地球温暖化というしっぺ返しを食らっている。ここで人類は賢いのか鈍感なのかわからない行動として、電気という歴史上で創造されたエネルギーにどうしても頼り続けるための施策を考え続ける。

その間にも自然の自然たるリズムは私たちの住む土地に手を加え続け、地震となりときには嵐となったりして、地球を改造しようとするのだが、それを人類は被害と呼ぶ。

自分たちで森に道を付けておきながら、雨で崩れたら雨を憎み、それでも崩れない道や宅地を作ろうとする。

どうして、広く大きな大地に住み、地震でも津波でも嵐でも揺るぎないようなところでどれだけ揺れてもガタガタしないシンプルで弱々しい「葦の家」のようなところに住もうと決心しないのか、不思議で仕方ないのだが、科学技術という麻薬のような知恵を絞って「開発」は続く。（便利で快適とは恐ろしい麻薬だ）

自然の力にやられたのだから、自然の持っているような周期でモノを考えていくことが大事だ。成金的に急に進化した科学技術と産業の発展を再び社会に蘇らせえようとするのではなく、100年前から構築した日本列島を今度は手順を変えて作りなおすチャンスであり、近代政治学や経済学の後押しで作り上げた虚構も見つめ直してみるのも大事だし絶好のチャンスではないのか。

物々交換社会や自給自足社会をもう一度と言っているのではないし、情報武装した社会や豊かさの上の幸せ感覚に麻痺した人々をイケナイといっているわけではない。

二十四節気の日にはいつだって、空気がきのうと違って思えるのは、ニンゲンらしい感覚を持っているからかなと自己満足しながら、晴れ予報なのにドンヨリとした朝の曇ったような空を見上げ、夏の空がやってきたと思ったのは私だけではなかろう。

ホタルが飛び始める予感がする。

2013年5月22日（水曜日）【裏窓から】

麦畑とドクダミの花　―　芒種篇

6月になった。

この麦畑の隣には青々とした稲がすくすくと育っている。

初夏の風がこのまだら模様の平野を海の方へと吹いてゆく。

定点観測のようにこの場所から車窓の風景を撮っているが、新学期になって高校生の顔ぶれが変わって、窓際の特等席がなかなか空かない。

（3日の朝、いつもの場所の車窓から）

雑草であるのかもしれないが、この4弁の花びらは愛嬌があって好きだ。

どくだみは薬草だ。イメージも苦みを発する。
しかし、一番お手軽なのは干して刻んでお茶にするのがいい。

群生しているこのどくだみ。

レジ袋を持って行って摘んで帰りたいと思いながら、通勤途上の線路道に群れているのを見ている。

色褪せる母ドクダミ茶作りをり

2013年6月 5日（水曜日）【裏窓から】

やっと正式に ― 夏至篇

「やっと正式に」、と砂女さんが書いていて、そのことに私は……
……
というところを何度も何度も読んでいる。正式と正式でないものが世の中にあるのだ。それは気持ちかもしれないし、時には法律に関わることかもしれない。

とコメントを書いた。そしてさらに、

私もあの時「正式に」悪さをしていたら、今頃は地獄のどん底だったのかもしれない。そんなことに思い当たる節があって、今の場合の正式を、苦いフリカケを掛けたようにして噛み締めている。さて、と私が心配してもしかたがないのだが、それ以上に「さて、」と何を新しく始めるのか、実は興味津々であるのです。

と付けたしたのだ。

■

「正式に」を使って作文をしなさいと言われたら「私は正式に彼女に結婚を申し込んだ」とか「正式に別れた」というように書くだろう。

「正式に」よその女の人に惚れたり、走ったり、逃げたりしたら、そこで私の歴史が途絶えてしまう。

歴史も途絶えず、ツマと仲良く今も暮らしているから、いわゆる上手に「水に流れて」再び晴れ間が戻ったのだ。危ない川は世の中の至る所にあり、大勢の人々がそこで足を掬われたり溺れたりする。

砂女さんの「正式に」という言葉をこんなにいい加減な人生話に捻ってしまってはいけない、のであるが、その言葉に戒めをいただきながら、長い人生で私も人並み以上に豊かで幸せな時間を過ごしてくることが出来たことに感謝している。

生きてきたことが、愉快であった。そして、熱くなれて、激しく踊れて、私なりに全力疾走出来た時期もあったのだから、56回めの夏至を迎えて、1番ファイティングだった時のように再び夏に暴れることができればいいなあと、少し欲を蘇らせている

2013年6月21日（金曜日）【裏窓から】

「闘う」ことを考え始める ― 小暑篇

「闘う」という言葉が目にとまって、そのあとに「ガンと闘う」と走り書きのメモを放置していた。かつてブログで「闘う」を取り上げて書いたことがあったのか、気にかかって調べてみたが、なるほどというものはヒットしなかった。意外なことに「闘う」ということについて余り触れてこなかったらしい。

これだけ膨大なブログを書きながら「闘う」ということを深く考えようとせず、考察にも踏み込まずここまできた。父は不治の病に立ち向かった人ではなかったし、母の大腸がんは加藤先生という素晴らしい医者の腕に依って魔術のように消えてしまった。確かに母はガンと戦ったし、父は高血圧症という魔者ののような血脈から受け継いだ病と闘ったのだが。

激しく闘う人がわたしの身近なところにたくさんいなかったことも理由なのかもしれない。私自身、競争をすることが嫌いで、勝ち負けの世界には足を踏み込まない。

他にもいくつか理由がありそうだ。テーマが大きすぎ、さらに重すぎて、いとも簡単にスラスラと書き過ぎて、焦点をぼかしてしまってはいけない、と考えていたのかもしれない。しばらく考えさせてほしいと思い続けているような状態で置いたままにしている。

7月6日、ツマとムスメが買い物に行くというので、金魚の糞のように付いて行くことになった。魂胆はお昼を一緒に食べたかっただけである。

バイクを降りてから家族と出かける時間を大事にするようにしている。何を今更とおっしゃる方々も多いだろうが、バイクに乗っているときは、3日間休みが続けば旅に出てしまっていた。ムスメがヨチヨチも歩かないころからずっとそうだったのだから、今からお嫁に行くまでの間くらいは家族と過ごしてもいいだろうと思う。

そしてその後は（お嫁に行ってくれたら）ツマと二人で旅をしたい。わたしの行ったところ、行っていないところを訪ねて歩きたい。

実は……

父から譲り受けた弱い弱い臓器たちの中で、更に腎臓がかなりヘタっていることが判明した。小学生の時に腎臓が悪くて100日ほど入院をしたし、その頃に父も同じように入院した時期があると聞いている。（腎臓だけでなく心臓も人よりはるかに弱い）

我が家は「短命の血統」である。今から10年間、祖父と父の享年である67歳をいかに越えるかがわたしのささやかな「闘い」かも知れない。

闘いについてしばらく連載として考察してみたいと思います。

2013年7月 8日 (月曜日)【裏窓から】

大暑の夜に考える・怒りのやり場　―大暑篇

▼目の前の幸せ
政治だけではなく、旧友たちとの付き合いにも不活性な面が噴き出している。月並みな言い方だが、他人などかまってられないのだ。目の前の幸せを逃さないために生きてゆくのが精一杯なのだろう。
永年の友人たちとも季節の挨拶ですら途絶えがちで、電子メールに返事はない。電子であるから乾いているのか、人と人との繋がりが乾きつつあるのか。

▼怒りのやり場
世の中が燻っているのは、TPPや原発や憲法改正に反対の気持ちを持ちながら賛成の党に何らかの形で協力した人への不信や不満や失望が、ドロドロとしているからだと思う。賛否善悪は別としてそういう意思表示が許せないのだと思う。

▼朝から高テンション
毎日、出かける支度をするときの家の中は戦争のようだと言った知人がいた。近ごろ、ムスメの出足が遅く、車を乗合いで駅まで行く私にしたら列車の時刻が気にかかる。朝に1分1秒でイライラするなら前夜に早く寝るなどの策を講じてほしいというのは私の希望であるが、その希望を言葉にすると朝からテンションの高い人だとナジラれる。

▼アクセス頻度、コメント頻度
フェイスブックなどのいいねやコメント頻度のことが話題になった。1時間に何度も確認する人もいれば1週間ほど放置の人もある。書かれている内容に無反応の人もあれば、助詞の間違いまで気に掛かってすぐ直そうとする人もある。「温度差」のところでも書いたが、人にはそれぞれの熱さがある。強要も出来ないし、同化も出来ない。波長が合わないからと言って切り捨てないものであるが、簡単に切り分けてしまう人もある。一種のデジタル化現象なのだろう。上手に付き合うのはなかなか難しい。

▼一周忌
ツマの友だちは、去年の3月に癌にかかり、ちょうどその年の夏亡くなった。結婚式のときに1度会ったきりの人だったが、ツマは仲のいい友だちだったので何度も京都で会ったり子どもの情報などを交わしたりしていた。大学時代のクラスメイトであるから55歳を直前にしてのまさかの突然死だった。何の準備も出来ずに、短い時間に残す人たちへの不安を思い、どうしようもないほどの後悔と無念に満ちた夏であっただろう。
奇しくも、人生でこの時期を迎えるとき、友人たちや家族、親戚や遠戚も含めると覚えきれないほどの人たちが世を去るのを送らねばならない。夏とは哀しい季節だ。

▼襲い掛かる反省
私には、私を偲んでくれるような実績もなければ魅力もない。亡くなったらそれで終りとなるのだろう。まあ、それでいいのだ。
亡くなった人をお盆に迎える人々の声に耳を傾けるとき、人は死んでしまってからもいつまでも大事にされるような人物であれることが最も喜ばしいことであると思う。

▼畏れ
真昼の照り返す暑さのあとの日暮れがもたらす一時の涼しい風に喜びを感じ、やがてそれが凪いで、仏壇に灯る明かりも仄かに揺れる時刻なる。昼中のざわめきも静まっている。
仏壇のある畳の間に無言で座ることも少なくなった。目に見えない神を畏れなくなっている国民像が、選挙のあとに浮き上がってくる。

▼永遠の0
7月7日七夕さまの日は、私の叔父がサイパン島で玉砕をした日だった。父が生きていたころから母は必ずその日にお墓にお参りをし、暑くて茹だるような夜にその時代を回想している。
永遠の0という本を読み始めたのは偶然で、映画化になるので注目なのだとムスメが教えてくれた。
私の叔父は、海軍の志願兵で出生して数ヶ月後にサイパンで散っている。「サイパン島で死亡」と書いてあるのが辛うじて

読み取れる古文書のように色が褪せた虫食いだらけでビリビリの1枚の紙切れだけが残っている。母はそれを大事に私も知らない場所にしまっている。

2013年7月24日（水曜日）【裏窓から】

風の涼しさ ― 立秋篇

┘ └
┘ ┘ はじめに

猛暑が続いていますが、風が吹けばまんざらでもないなと感じることがあります。

住宅密集地ではなかなかそうも行きませんが、今の季節、稲が穂を垂らす水田などがある集落などなら、風のおかげで真夏でも冷房のお世話にはならずに暮らしていけます。

　ふうりんにかぜがことばをおしえてる　　出口優樹・御薗村（当時）
これは「第9回・風の一句」の中学生の部・最優秀作品です。

風は、温度を下げて涼しくするだけでなく、そこで暮らす人たちに工夫をするヒントを与え、心にゆとりもくれました。このとき中学生だった子も今は 20代の半ばになっていましょう。この子が見た風鈴も今は実用的な緑のカーテンに変化しつつあるかもしれません。近年の猛暑にあって、音の風情を楽しむことは実用的ではないと考える人が増えたのでしょうか。

立秋も過ぎましたが、まだまだ暑い日がありましょう。そこは何とかひと工夫をして乗り切りたいものです。

┘ └
┘ ┘ あとがき

このメルマガがみなさまのお手元に届くのはお盆の頃かな、と思います。

　風の来て明日刈る稲のうねりかな　水野年子
これも風の一句からお借りしました。

お盆が来ると、夏の盛りが過ぎてゆくのだな、としみじみ感じます。

稲刈りが始まって、野焼きの煙が漂って、カナカナが鳴き出せば、夏休みがもうすぐ終わるのだなと思い、終わってしまう夏休みを悲しんだ昔の記憶が蘇ります。

でもその先には美味しい季節が待っています。旬のある暮らしに感謝したいです。

2013年8月 7日（水曜日）【裏窓から】

地震・雷・火事・オヤジ ― 処暑篇

▼脱線・閑話から
一言で表現すると、現代人はこのような災難や怒りのことを、小馬鹿にしたように振るまい、意識の面においても殆ど畏れを持たず、自分でどうにか出来るとか、理屈で何とか出来ると思っているように見える。もちろん、わたしもその一人であることが自分自身で歯痒くあり、愚かだと思えるものの、自分ができるできないはさておき、誰かが非難しなくては現状は打破できない。

▼神様がいて
世の中を好き勝手に暮らしていけば、いつかはやがて自分にその代償が回ってくると考えたのは、遠い遠い昔、原始の時代の人々であった。太陽の光を見て距離や角度を測り、建造物を正確に配置する設計や、暮らしの及ぼす暦をうるう秒まで計算していたわけであるが、それらと同時に神様というものを捉え信じて讃えて、なおかつ怖れ（畏れ）ていた。

▼救急車が交差点を横切ろうとするのにもかかわらず、横着にもそこをどこうともせずに救急車を邪魔する車を近ごろ度々どころではないほど見かける。故意であるかないかの問題ではなく、このような極悪非道な奴に対しては、必ず自分の身内が致死状態で救急車に乗っているときにその前で何者かによる神がかり的な戒めを受けるような世の摂理が施され、なおかつ死刑を進呈して悪人を戒めていただけるような神の業がなされることを願う。

▼神様とは、正義の味方であるだけでなく、悪者に対して怖くて厳しく冷たいモノであっても構わない、というか、神がそのように厳しすぎる神でなければ誰もここぞというときに縋ったりお願いにいけなくなる。世の中の悪事を神様が一手に引き受け裁くことでヒトの心は神を恐れ（畏れ）、非道を恥ずかしむようになるのではないか。見えざる神が消えかかっている社会が当たり前になりつつある。

▼これもすべて科学というものが災いだったというと飛躍し過ぎだとお叱りを受けるのだろうか。あらゆるものを科学が解明してゆきやがてそこに宿っていた神様がいなくなる。そんな時代はすでに来ているのだが、人があらゆることを神秘として捉える心は、五臓六腑が何モノか分かり始めている程度で留めておくべきであったし、情報通信は、狼煙に始まり伝令、手紙と進化していくけれども、電話程度で進化しないほうが良かったのではないか。

▼心に鬼を。むかし、そんなことを書いたが、鬼という架空で得体のしれない恐ろしい物を心に抱くことと、正義に対する後ろめたさは二つの揃ったヒトの自省作用であり現代はこれをなくしている。

▼理屈で考え進むことが出来るようになったせいで、何事も見えているような錯覚に陥る。（見えているのは事実かもしれないが、見ないことも大事だ）いわば、怖いものなしで暮らしているから、神様も怖くないし、地震や雷も怖くない。オヤジも地位を失っている。

▼罰（バチ）が当たるべき人に、罰（バチ）が当たらなくなってしまったら、そこには不平等感が残る。神に抱く畏敬の心をなくして、デジタル的に法律を解釈して世の中を構築してゆけば、オヤジの怖さが意味をなさなくなってくる。精神科学が抱かえる数々のオモロイ病気は、怖い神さまが苦言を呈さなくなったからではないかと思っている。

□■
■□

▼お金もないし地位も名誉もないのに年収の5倍も6倍もする家を買うようにというか、買うという行為が成立するのも現代経済理論の賜であろうけど、これはモノや心を白黒で切り分けてしまうことによって可能になってくる。りんごが好きでそれよりもいちごが好きでそれよりも桃が好きでそれよりもりんごが好きな人には想像も出来ないことを、社会システムの中に取り入れてきたのが21世紀なのだろう。

▼得体のしれない物がなくなっていくので、得体のしれないものを怖がる心がなくなる。雷雲が山峰付近で発生していて、ゴロゴロが地響きのように届いてきても、科学の力が自分たちにはあると思うからゆえ神様の怒りを畏れない。もしも、神様の怒りや祟を怖れていたならば、間違いなく都会は水浸しになっても怪我人や死人を出さないし、遠い山奥の大規模な地すべりでも最低限の被害に留められたかもしれない。長い科学の進化を思い切って2000年くらい昔でストップさせれば面白い。

▼利益というもの味覚というものなども全てがこのような数式の上で組み上げられてゆく。価値や味や心はすべてお金に

置き換えられる（またはそのことが可能な）世の中になっている。ここで、価値をお金に替えてしまわないことを提案しようものなら、変人奇人の時代遅れ人間扱いなのだろう。

▼しかし、処理できる数式があることで（それをいいことにそれを使って）何事にでもその中心に迫れるというのは、良い点もあるがマイナスも多く存在する。スポーツについても芸術についても文化にも言えるのではないか。詰まらなくなっていると思う人が後を絶たないのは、神（的なもの）を失くしたからだ。

▼その結果、「情熱が冷たくなっている」とわたしは思う。燃えたぎるものを感じなくなる人と、燃えているのを共有する人との隔たりが大きくなっている。身近にはプロ野球がそうであったし、次々とスターを生み続けたい様々な業界も、隔たりの向こうにいる無関心の（わたしのような）人にとれば、宇宙の外のような話になる。最近では、TV番組も映画もドラマもアイドルも、多くがそうなってきた。こういうことを多数決で乗り切ろうとするところが、またまた愚かだ。（フーリエ変換、しっかり勉強しなさいと言いたい。）

2013年8月23日（金曜日）【裏窓から】

ぶどう ― 白露篇

お盆が過ぎて稲刈りが真っ盛りのころに生家を訪ねた。母が近所のKさんにぶどうをたくさんもらったというので、おすそ分けでもらって帰った。

巨峰のような大きな粒だが，巨峰ではないらしい。みんなには名前のことなどどうでも良かったのだろう。普通のぶどうだと説明していた。種なしにする薬も使わず農薬もまかないぶどうだ。

種がある。
つぶも幾分不揃いだ。しかし、味は、おそらくこれまで買ったものも含めて未経験な旨さだったのではないだろうか。

不揃いのつぶの中には、旨くないものもある。全てが旨いと言うわけではない。

子供のころ、家の前の小屋に鶏をたくさん（100羽ほどいただろうか）飼っていた時期があって、そのころには小屋の前にはぶどうの木があった。

父が健康を崩してたために、農業に打ち込めないから鶏を飼ってみたりぶどうを作ってみたりしたと母はいう。

ぶどうが手間がかかることは作った人なら誰もが知っている。そのころは、袋掛けも新聞紙を工夫してしていたと思う。文明が技術を取り入れていない時代だ。つい先ごろのことだけど、実際、そんなにのんびりとしていた。

1年に1回だけ実をつけるものに父は一生懸命情熱を注いだ人だった。お米も野菜も。失敗したらまた来年だったのだ。

■□

あのころのぶどうも美味しかったのだろうなあ。踏み台で木に登ってもぎ取ってボリボリと食べたなあと思い出しながら、もらったぶどうを食べた。

ぶどうでも他の野菜でもそうだが、自分（家庭）で食べるだけの木を栽培すれば虫がつきにくいという。つまり、農薬も要らないので、品質も良くなるし育てるのが楽だ。

キウイもたくさん採れたころがあった。買い物カゴに5つにも6つにもなってしまって、ジャムだとか酒にするような洒落たことを母はしようとしないから、棄ててしまうのだが、わたしも2,3個もらって帰っただけでその後は任せておいた。

ぶどうは、美味しかったので、またKさんくれないかなあ。

うちの庭でも作ろうか。毎度のようにそういう話が出る。

しかし、メロンを作ろうとしたけど、始まりから面倒でほったらかしになっているくらいだから、ぶどうだって無理だろう。

ぶどう、みかん、すいか、もも、かき、など、我が家でできる野菜や果物はどれをとっても美味しいものが出来る。美味しくなる条件は、美味しい地下水と適している土が必要で、これはお米を食べても歴然としているのでマル。やはり、作物と向い合う生活を取り戻すことが大事な条件になる。

農家の長男だったのは18歳までということに（恥ずかしかったので）していたが、定年後は家に帰って400坪の一角に家を立てて、300坪ほどの畑で野菜を作って遊んでいますってのもいいなあ。

猫も飼いたい。

「白露」と検索マドに入れたらいくつか出てきたので、メモとして貼っておきます。（自分のため）

2004年（平成16年）9月7日号　白露篇

2005年（平成17年）あらし去り白露がきゅんとすまし顔

2010年（平成22年）白露も過ぎて

2012年（平成24年）白露のころ

2013年9月 7日 (土曜日)【裏窓から】

恋しい赤　―　秋分篇

赤いバンダナを鶴さんがわたしにくれたことで、
バイクで旅をするときには、
いつも赤いバンダナをわたしは首に巻いていた。

トレードマークという言葉を昔は使ったが、
それにふさわしい赤であった。

鶴さんから悲しい便りがあったあとか、
まあそんな似たようなときに、
泣けるのを我慢してバイクをぶっ飛ばしてしまったことがあって、
奇しくも鶴さんがくれたバンダナは、
知らない間にほどけて何処かに飛んでしまったのだった。

そんな悲しい物語。
そこで終わりにしたくないので、
新しいバンダナをツマにせがんで買ってもらって、
ずーっと旅には使い続けてきた。

今は旅をしなくなったので、
家のどこかの衣類整理したボックスで眠っているのだろうと思う。

それでいいのだ。

真っ赤に燃える太陽…とか
赤く激しく燃える私の心が…とか
弾ける真っ赤な血潮を…とか
真っ赤に流れる僕の血潮…とか

わたしたちは情熱的で激しく、
ときには過激とも言えるかもしれない昂ぶりを、
赤色で表現しようとしてきた。

ところが、ほんとうは、
その時イメージしているものや眼の前にあるものは、
赤色ばかりではなかった。

ドス黒く暗い赤色かもしれないし、
もっと弾けるような紫色かもしれない。
生臭い血痕そのものだったかもしれない。

または、情熱を弾き飛ばすならば少し橙色がかっているかもしれない。

しかし、それを「赤」と呼んだり歌ったりしなければならなかったのだ。

頭のなかには、世の中に存在しないかもしれない純粋な赤が焼き付いている。
それは、赤色の絵の具でさえも描き出せない赤であった。

−− −−

▼夕立の傘のスケッチ傘だけ赤い

鶴さんと鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮で撮った写真は赤い雨傘が写っている。
そのイメージだけで、傘を17音に綴るとそうなった。

バンダナを巻いて旅に出なくなったわたしは、
どこか、落ち着ける場所を探しているように
ふらふらと歴史街道を歩いていたりする。
ひとりで歩いている。

▼コスモスに尋ねて迷う古道かな

秋分って、
こんなに赤が恋しい季節だったのだろうか。

2013年9月23日（月曜日）【裏窓から】

菜箸や煙を纏う秋刀魚なり　寒露篇

8日は寒露であった。

窓を開けて眠ると夜風が冷たい。風呂あがりに軽く浴びている夜風は心地よいが、寝入ってしまうと大変なことになる。

　咳ひとつ赤子のしたる夜寒かな　　芥川龍之介

ツマは、寒がりである。私よりも少し厚めの布団をかぶっている。それでも、今朝、のどが痛いわ、と言っていた。

確かに風が冷たいが、薄手の布団を肩までかぶって窓の隙間から吹き込む朝の乾いた風邪を吸いながらウトウトしているのは気持ちがよい。

▼菜箸や煙を纏う秋刀魚なり

昔のように薪を焚いて風呂を沸かすわけでもない。薪ならば、焚きつければ火が起こるのでそれを七輪に入れて魚を焼けばよい。

夕方におもてに出て夕空に明るく輝く白い大きな星（金星）をみながら、カラスなどが鳴いて帰るのを見上げて夕飯を待っていると、母が、風呂を焚いてくれとか、ついでに秋刀魚を食べるから焼いてくれとか、呼びつけられる。

秋の夕暮の家の裏口（勝手口の外）は忙しかったことを思い出す。

子どものころは、秋刀魚などという魚は高級だったのだろう。本当に旬の時にしか食べさせてもらえなかった。ふだんは、鯵の干物か、今ごろの季節ならカマスの開きか。

刺し身でサンマを食べるのも大人になってからのことだ。

薪で焚いた風呂は、釜が保熱をするので、湯は冷めにくかった。今の季節は真冬のように寒くないので、早い時間に湯に浸かったものだが、昼間の明るさが窓に残っている時刻であったりすると、少し開けて外の空気を吸ってみる。風呂の周りに充満している煙が隙間から入り込むと、どこぞの温泉よりも風情があったのではないだろうか。

むかしは、10月10日ころに町の運動会や学校の秋の運動会があった。米の収穫も今ごろだったのだが、麦を作るのをやめてコシヒカリのような品種改良された作柄の米が普及してからは、台風が来る前に米の収穫は終わってしまう時代になった。

そんな昔を語れる人が少なくなった。秋の夜は、おいしいコメからとれた旨い酒を飲みつつ、夜風に吹かれていたい。

お酒は、燗でも冷やでもなく、棚で眠っている温度がいい。

満月まであと10日ほどか。

2013年10月 9日 (水曜日)【裏窓から】

冬のルージュ　― 霜降篇

嵐が立て続けに来ている。小雨の降る日が続く。(22日)

静かに冬を過ごしたいと思い、そっと冬を迎えるための仕度に忙しい日々を過ごしている人も多かろう。装いはまだ秋でありながらも、街には冬を待つ人がいる。

+　+

▼朝寒や挨拶かわす新聞屋

吐息は白く濁りはしない。しかし、あの1年前の寒さが蘇るような冷たさが瞬時に襲いかかる朝もある。

▼通勤の列車でパクリとメロンパン

寒いからという理由で布団から出られない。
時間が迫る。
駅までの車の中ではお化粧したり、パンを食べたり。

無人駅で通勤客を次々と拾うローカル列車の中は綺麗な娘さんたちがちらほら。

◎

▼忙しいを最後にメール途絶えたり

▼朝寒の垣根が焚き火を待っている

落ち葉がちらほら。

イチョウの落葉はまだだけど、雨に濡れて道路の隅っこに追いやられているのはサクラの葉っぱだろうか。

毎朝、のぼる坂道の上で待っているケヤキの葉も、しばらくしたら石段を埋め尽くすのだ。

◎

▼ショーウィンドウ貴方をさらう冬やがて

▼ときめいて君のルージュが冬を待つ

こんな日は風など吹かないで、静かにわたしを駅まで行かせて欲しい。

遮断機があがって、ちょっと遠回りをしてみたい駅の向こうのアーケード。

夢に描いたのは、貴方と私の架空の物語に出てくる遠い街の繁華街だったかもしれない。

2013年10月23日 (水曜日)【裏窓から】

冬布団ぬくぬく　―　立冬篇

7日は立冬でした。何の変哲もない1日と思ったら、夕方家に帰るつく直前で時雨に降られた。そんな季節になりました。

▼冬布団みな一斉にベランダへ

（6日）朝は暖かい日差しがさしていたので、どちらの家もベランダの手摺に布団が並んだ。

▼木枯らしや木戸をバタンと閉めにけり

4日には近畿地方に木枯らし1号が吹いた。それほど寒いと思わなかったのは、窓のこちら側から景色を眺めていたからだろう。

▼南天の赤だけ脳に焼き付いて

隣の庭に赤い実をつけている南天。ピラカンサには刺があるということを教わったあとで南天を見るとやさしそうな実に思える。私のドラマでは少し刺がある方がいいのかもしれない。

▼冬の鍋死んだオヤジの箸の癖

▼冬支度あなたの味を思い出す

大波小波を伴いながら潮が満ちてくるように、寒さがじわり・ザザザと押し寄せる。その度に、今夜はお鍋にしようといってコンロの鍋をつついている。

父と母と弟と、鍋をつついて夜を過ごした日々は、もう40年も昔のことになる。貧しい家であったので、鶏の肉をざっくり土鍋に入れて、畑でとれた野菜を放り込んであっただけの鍋だった。今のように洒落た味付けなどなかった。ポン酢の酸っぱかったのだけが鮮烈に記憶にある。

▼ねぶか持ち蕪村のごとく夜寒かな

月のはじめに母を訪ねたら、畑に出ていたのでそこまで行って、白菜がほしい、と願いでたら、まだ時期が早いわ、と言う。玉葱の植え付けで忙しいので、余りゆっくりと話をできなかったが、手伝わずに帰ってきたことを後悔している。もちろん、今までに一度も手伝ったことはないのだが、一度は手伝わねばとこのごろになって思う。手伝わんでくれ、手伝われたら明日逝ってしまうかもしれんわ、と叱られそうな気もしている。

柚子もたわわに成っている。母は柚子風呂にゆっくりと浸かるような性格でもないし、あの柚子はどうなるのだろう。ドロ土だらけの大根と竹籠（しんぐり）に一杯あった柿をもらって帰ってきた。

▼昼過ぎに畑で掘った大根をおろす

▼老夫婦小さい鍋でおでんなり

もらってきた大根をおでんにして食べた。

ムスメは用事ができて帰りが遅くなるという。

そういうことを、ほのかに喜んでみたり、未来を想像して、色々と思ってみたり……の毎日が過ぎてゆく。

2013年11月 8日（金曜日）【裏窓から】

30年という言葉で探ってみる ― 小雪篇

もう、小雪をむかえるのかと驚く反面、年の瀬が少し待ち遠しかったりもする。

▼小雪や風邪そこそこに靴磨く

様々な難題や岐路に立たされたり、あるいはゆとりが出来て人生を振り返るようなことがあるときに、私は幸せであったのだろうかと何度も繰り返し考えた。

そして、貧しかったことが即ち不幸となったわけではなかったというような朧気な解決でひとまず落ち着く。

身の回りには、資産家を受け継ぐ人もいれば、安定した事業を譲り受ける人もいて、或る時それを羨みの気持ちで見たことも何度かある。

しかし、無から有を生むためには私が舵を切らねば歴史は変わらないのだから、と思い、何も残せないけれども子どもには知の資産を残そうと漠然と考えた。知と仁があれば自分で歩めると信じたからだ。

6年制の私立中学に在学しているときに企業をやめたので、それから大学を卒業するまでの間に日本育英会の奨学金を400万円あまりを借金した。その負債は子どもに今も負わせている。

私の子育てに間違いはなかったと今でも信じているが、1円も肩代わりをして返済をしてやれないのは辛い。

■■

そんな苦渋の時代に、豊かさについて考えている。

豊かさと満足度
2008年（平成20年）6月12日（木）

続・豊かさと満足度
2010年（平成22年）5月15日（土）

何故こんなものを今ごろ見つけたのかというと、先日（前の日記）に読んだ宮本輝の小説の中に「30年」という節を見つめて未来へと生きてゆかねばならないということが書いてあった。

そこでちょうど、私もこの「30年」という数字で人生を振り返ったことがあったと思い起こし検索をしてみることにし、ブログの中にある検索窓へ「30年」と打ち込むと87件のヒットがあった。

社会批判や怨み、妬み、愚痴、不平、など、言い出せばキリがない。

宮本輝の小説「三十光年の星たち」のあとがきのなかで、非常にスカッとするほどに纏められた宮本輝の言葉がある。なかなか、言えないのではないか。

2013年11月22日（金曜日）【裏窓から】

大雪や日めくり薄し指を折り　― 大雪篇

二十四節気「大雪」も足早にすぎて、いよいよ暮れも本番となってまいりました。年始に置いた日めくりが、十二月になって薄っぺらになってくるのを見ているとやはり気持ちの何処かに焦るものを抱いてしまう今日このごろです。

今年の冬は寒いという長期予報でしたので、燃料代や電気代のことを気にしつつ、じわりじわりと押し寄せる寒さに少しジタバタしながら身を引き締めています。

　下駄買うて箪笥の上や年の暮　　永井荷風

荷風が詠んだような光景は、もはやどこの家にも残っていないと思います。かつては、暮を迎えるにあたってどこの家も大忙しでした。小春日和の一日には箪笥を庭に出し、畳をあげて、布団をはたき、天井のすす払いをしました。そして障子を張りかえ、しめ縄を綯う。暮れが迫ってきたら餅をつく。

今ではこれらを済ませてから新年を迎えるという家庭は減りました。このようにひとつの儀式でけじめを付け節目で身を引き締めるという文化は、私たちが昔から受け継いできたかけがえのないものでした。合理性、経済性という視点で切り捨ててしまっては残念なことになります。

技術は弛まなく進化を続けても、私たちはもっと鈍感な部分があってもいいような気がします。荷風の句には、襟を正して純心さに胸弾ませている正月の姿が見えています。

年末年始、みなさまお忙しいことと思いますが、充実したときをお過ごしください。

2013年12月 8日（日曜日）【裏窓から】

流行りの言葉 ― 大雪篇（あとがき）

平成25年の流行語が今月初旬に話題になっていました。年の瀬のお祭り騒ぎだという人や無縁な言葉が多く流行語というには疑問があると一蹴する声もあるようですが、その大賞候補の中に「PM2.5」という我々にも身近な用語がありました。みなさんは、熱い思いでこの言葉に注目していたのではないでしょうか。

四日市市には1960年代に多くの住民を苦しめた四日市公害という歴史があります。あの時代に発生した大気汚染物質に因る健康被害は、現代からみて想像以上のものです。二酸化いおう濃度は、1961年（昭和36年）には1ppm（1時間値）を超える値を記録しています。先月の平均値が、0.002ppm以下ですから、どれほど空

気が汚染されていたのかを想像することも困難なほどの隔たりです。

PM2.5も窒素酸化物、硫黄酸化物、揮発性有機化合物等と同様の大気汚染物資で、環境基準は「1年平均値が15μg/m3以下であり、かつ、1日平均値が35μg/m3以下であること」とされています。しかし、隣接する国では1日平均値が日本の環境基準の10倍に達しているところがあると報じられ、霞のかかったようなスモッグの空模様がニュースの映像で流れています。

四日市公害の歴史は、ご存知のとおり1970年代に10年以上の歳月を要し結審します。PM2.5もそういう意味では決して流行モノではなく、これから10年を過ぎても付き合っていかねばならない言葉であるともいえましょう。そして、10年後に大陸で計測される数値は現在の10分の1になっていなければなりません。

そのことにチャレンジするのは「今でしょ！」なのですね。

2013年12月16日（月曜日）【裏窓から】

島倉千代子さんのこと ―冬至篇

平成25年が更けゆく折の冬至を迎え、心のどっかに寂しさのようなものがひっそりとあるような気がしてならなかった。どうしてもその正体がつかめなかったのだが、どうやら島倉さんへの想いを何らかのカタチにしておきたいのかもしれないと気付き始めた。

11月8日逝去。そのあと、多くの新聞は彼女をコラムに取り上げた。

天声人語は、「いつまでも小料理屋の気さくな女将（おかみ）さんのような風情の人だった。」と結びの部分に綴っている。

「ものに憑かれたような迫力があった。戦争の悲惨。戦後の痛苦。昭和の日本人の情念を託せる歌い手が去った。―日本経済新聞、春秋」

「今、演歌歌手の王道を見事に渡り終え、終生「お姉さん」と仰いだ美空ひばりさんの待つ天国へ旅立った。―毎日新聞、余禄」

あの震えるような歌声が今でも脳裏に蘇る。美空ひばりが唄う歌と違い、心の情念に染みわたるようなかすれた声がいつまでもいくつになっても若々しく可愛らしい人であった。

人生いろいろ。まさに、彼女が歌うことで、感涙を堪えることのできない方々も多いのではなかろうか。

いったい、どれだけの人がこの色々な人生や、または、人生という得体のしれないものを理解して生きているのだろうかと考えさせられることが多い年齢になってきた。

今年はどんな重大ニュースがあったのだろうかと振り返りながら私にはこの島倉千代子さんの逝去が心にズキンと来てポッカリと穴を開けたままになっているのだ。

母よりも7歳若い。7年前の母を思い浮かべると、75歳のころはずいぶん若く元気でテキパキ・溌剌としていたと思う。それだけに余計に悔しく思うのだろうか。

島倉さんの歌を聞いて大きくなった世代は、私より年上の人たちばかりだったのであろうか、私がこれだけ言葉にならないモノを感じているのだから、大勢の人がズキンとやられているに違いない。各新聞社一斉に取り上げたのだから、執筆者のみなさんの年齢も見えてくる。

しまった・しまった・島倉千代子

年の瀬に今年に逝ってしまった人を見て大きな節目を感じる。一昨年よりも去年のほうが節がしっかりしていたように思え、さらに今年はずっしりとした節を迎えているように思う。何年後かは予測がつかないが、私の節が近づいているのだなと思う。

2013年12月28日（土曜日）【裏窓から】

力うどん ― 小寒篇

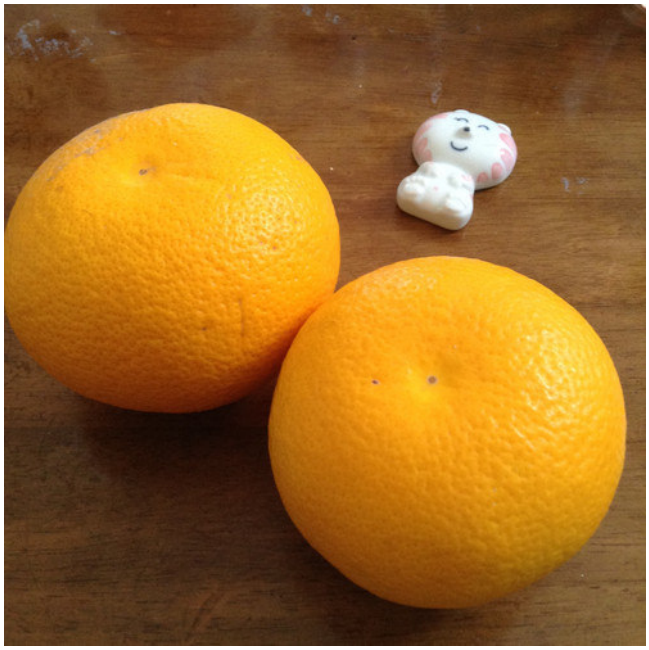
◎ とんがって生きて丸餅焼いている（長谷川博）
ねんてんさんが紹介してくれる句は、もしかしたら、天声人語よりも刺激的かもしれない。そんなことをいつも感じながら、素直になったり捻くれてみたりして毎日を暮らしている。

今年は、お正月休みを最も長く取得できる周期で曜日が巡ってきたので、どちら様もゆっくりとお過ごしに成っていることと思います。その分、ブタになってしまっている方も多かろうと想像します。

おせちは大晦日に大方を食べ尽くしてしまうので、お正月が明けるころにはうどんであるとかお好み焼きであるとかを食べて、出っ張ったおなかをさすっている。

寒波襲来とニュースが伝えるけど、朝起きてもそれほど寒くもなく、昼間は明るくて暖かい日差しが部屋に差し込むので気持ち良い。パソコンの前に腰掛けて、ぐうたらな時間を過ごしている。

こんなときには、満足のいく作品など期待できない。もっと追い込まれているとか、不平があるとか、夢が叶わないとか、切ないとか、そういう出口に向かって一途に必死な状況のときに名作品が生まれてくる。



去年に続き今年も八朔は豊作で、軽トラの荷台に積み込めば溢れるほど成っているので、家に帰ったときに五六個持ち帰ってきた。

ミカンを食べ始めるとかっぱえびせんのように止まらなくなって何個も食べてしまうのだが、八朔は1個食べれば割と満足してしまう。食べるのに手間と時間がかかることもあるのだろうか。

年末年始最後の日のお昼には、お餅を焼いて力うどんにして食べた。同期会のビンゴで最後の最後まで当たらなかった。どうしてこんなに隙を突いた番号ばかりが開くのだろうかと嘆く私に隣席の子が「そこまで行ったら相当運がええ」と言ってくれた。

力うどんにすこし願いを賭けてみるか。当たらないものと当たるものを上手に選り分けて進みたい。

▼寒気団命日近しと告げに来る

そんな句をつぶやいたら、3年前の冬が蘇った。

１８日十七回忌をするという。ときのたつのははやい。

2014年1月 5日（日曜日）【裏窓から】

雪しぐれ ― 大寒篇

19日のつぶやきに次のように書いた。走り書きであるがそのまま写します。

冷たい風が吹く一日となりました。朝、目覚めてすぐに幕の間から外を見たら雪はなくホッとしましたが、ネットで近隣を見回してみるとすぐ隣の町からは積雪映像が発信されています。慌てて鈴鹿峠などを調べると、真っ白の道路を車が走っている様子が写っていましたので、来たのだな思い、心を落ち着けたのでした。寒い夜に十七回忌を済ませて酔いしれて帰った夕べですが、知らぬ間にいつもの酒より多めに飲んだらしく、日本酒の糖分のようなものが身体の隅々の隙間にとごっているような感触。やはり、お酒はもう一杯呑みたいのを辛抱するくらいが一番旨いと思います。旨い酒を楽しみたい。

わたしにとって大寒という日は、ひとつの節目ですけれども、ことしは17回忌をするということで、いつもの年とは違い迫ってくるものを感じていました。

未年の母は83歳になりますし、まさに21日は誕生日ですから、83回めのこの冬を迎えているこの季節に、頭のなかに真っ先に浮かぶことは、来年の冬をこうして迎えられるという望みは非常に少なく、期待もできないのだということです。長生きを叶えられなくても失望もしない覚悟はしているつもりですが、もちろん、覚悟というものほど当てにならないものはありませんでして、そのときはそのときのパニックが襲い掛かるのでしょう。

おとう（父）の葬儀の日に冷たい風が吹き荒れ、峠の山々は真っ白になりました。大人でさえ山に雪が積もれば珍しがって感嘆の声とともに眺め入ってしまうのですから、あの日の雪は突発的で、私たちの記憶の大きな目印を付けてくれたのでした。

いまでも、あの日の寒さと、焚き火の暖かさと煙たさと、あのあと1週間以上も咳以外の声も出ないし風邪を引いてしまったことを大勢の人が思い出します。あれから風邪を引かなくなってしまったという伝説まで出来上がってしまいました。

むすめは、イチゴ狩りに出かける算段を立てていたのですが、峠の向こうは想像以上の積雪であったらしく早々に変更して、近所で済ませました。ツマと私が買い物に出掛けた時にひっそりと家に帰り冷蔵庫にパックをひとつ放り込んで、いそいそと映画などに再出発していっ たのでした。（あとで尋ねて知りました）

こうして、17回忌のころに迎えた大寒は過ぎていきます。

17回忌の晩（18日）のこと。

お酒を少し多めに飲んだので、体調を崩しそうになったのですが、調子そのものは崩さなかったのですが、腰痛が現れまして。原因はどこか別のところにあったのかもしれませんものの、すぐに胃腸が愚図るのは昔にはなかったことです。

こんなことでも、おとうのことを思い出しています。おとうは、腰の調子が悪ければ仕事にならなかったのですが、割と腰痛で家で臥していたのを思い出します。身体が丈夫でなかったという話になると決まって、母は「おとやんはカラダがひとよりもずっと弱かったなあ、それで、あれこれと工夫をして、身の回りのことを楽にしようと考えて、道具を上手に使うたりしてやったんやろうなあ」と話し始める。

寒さが沁みてくる季節になると、おとうの背中を思い出す日が多くなります。

2014年1月20日（月曜日）【裏窓から】

明日から良い子になるわと嘘をつく ― 立春篇

いつも悪い子である。演技をしてきたわけではないが、悪い子のレッテルをもらって五十年以上を生きてきた。

叱られて、棒でシバかれて、足首が腫れ上がり黒沁みができても、二三日すればもとの黙阿弥で腕白坊主の悪たれな倅であった。

悪たれと悪い子は、ここでは少し違っている。

親に反発し、社会に盾突き、流れに逆らって、生きてきた人生も、もはやここまでと観念しかなり柔軟になって反省をする昨今だ。

◎

節分に追い出された鬼は、何処に逃げてゆくのだろうか。追い出された鬼たちが集まって反省会をする場所が必要ではないか。

世の中には悪が満ちている。質が悪いのは、「自分のことを正義だと思っている悪」であろうが、論座が逆さまになれば話も変わる。

いかにも正しい情報が、堂々と飛び交い、いつの間にか正当になっていることが多い現代の情報合戦社会で、惑わされずに生き抜ける人は少ないだろう。

しっかりと掴んだ幸せと豊かさ気分を手放すのが怖いのだろうと思う。原発云々のことだって、それよりも切り離して、新しいエネルギーに目を向けている世界各国の取り組みを知ろうともせずに、ハナから無理だとか夢物語だと言っている人を見ると（その愚かさ加減に）、ニンゲンは今の自分を守り通す本能を持っているのだろうと切実に感じる。

◎

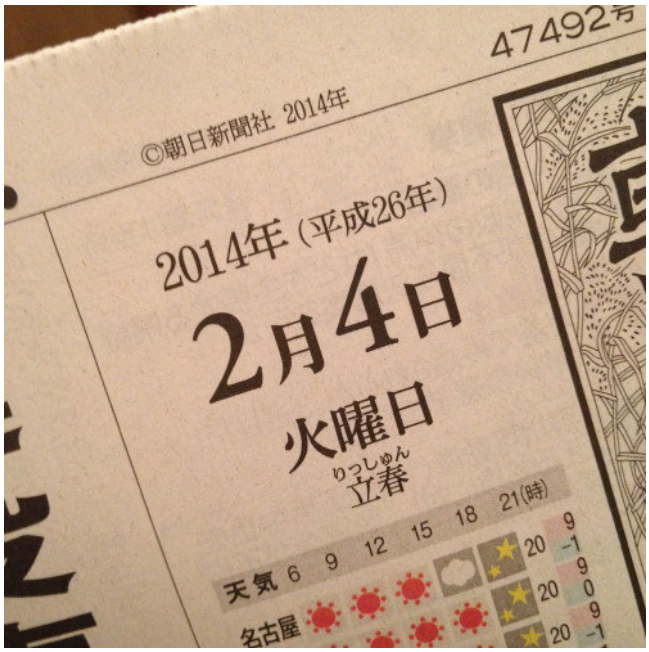
ヒトの心とは無関係に、自然は自己変動を繰り返す。異常気象、地殻変動など、それらは大きな災害をもたらすけれども、いいことだって少しはくれる。

たった一日二日ほど日が短いだけで……という日記を二月の初めに書いたのだが、ヒトの感覚とはそのように当てにならないけど逞しく生き抜くパワーをも備えている。

30日の月があれば31日の月もある。28日もあり29日のときもある。一律30日にした古代エジプト人の着想は素晴らしいけど、凸凹なカレンダーにした現代人もおもしろい。

人生は凸凹で、友情も凸凹だ。

ボクが気にかけているときはアイツは知らんふり。それでいいよ。



2014年2月 4日（火曜日）【裏窓から】

春近し麦の芽見つけて ― 雨水篇

少し前から毎朝乗る列車が変わりつつあって、今までと違い快速列車に乗っている。

これまでは、快速よりも一足早く最寄りの駅を出発し3箇所の駅に順番に止まってゆく鈍行列車だった。だが、これまでと違って一気にそこを飛び越して行くので、8分後に出発するのに数分お先に到着する。列車に乗っている時間も半分ほどだろう。

鈍行列車は、快速に追い越されながらのんびりと、途中駅でたくさんの高校生を乗せて行く。そんなノロイ列車に何故に乗っていたのか、には訳が無いわけでもないが、周りから見たら必然的に、快速の乗るようになったのには訳があった。

ムスメさんと乗り合いで最寄り駅まで車で出て来るのだが、早い話が冬が到来してムスメさんのお布団から出る時刻がジリジリと遅くなっていっただけある。

各駅停車に乗らなかくなったので寂しい思いも多かれ少なかれある。途中で乗ってくる中高生の途轍もないお馬鹿な対話や勉強話を（勝手に耳に入ってくるのだが）聞けなくなった。

そしてもう1つ、大事なことがある。車窓の景色をゆっくりと楽しめなくなったのだった。

鈍行ってのは最高速度が遅い。春から夏には水田、そのあとは大豆畑、冬は枯田、春から初夏にかけては麦畑と変化する田園風景を楽しめなくなったし、定点で写真を撮るチャンスが殆どなくなってしまった。

二月になって日に日に夕刻の日暮れ時刻が遅くなってきて、帰りに乗る快速の車窓が真っ暗闇ではなくなり、真っ赤な夕焼けに変化してきたなと喜んでいた。数日前、ウキウキ気分で夕焼けを見ながら田んぼに眼を落とすと、真っ黒の土のなかに青い芽がポツポツと出始めている。中学生の髭のように頼りないのだが、もうすぐこの田園地帯を青々と麦が覆い尽くす季節が来るのだ。

◎

▼あの人を憎んで雨水凍りなさい　　ねこ

▼一輪ざし白き吐息の恨み活け　　ねこ

花を愛した人々のことを次々と思い出す。

春が近いと切ない。

2014年2月19日（水曜日）【裏窓から】

一生懸命、生きなくては ― 啓蟄篇

しばしば、静かに物を考える機会があると、どうして私は今のような仕事をしているだろうと思うことがある。多くの昔の知人たちも、折り在って再会すれば、私がイメージと異色な仕事をしていると思うらしい。

先代は、村長、村会議員、町役場職員だった。そんな衰退の系譜を正直に受け継げばよかったものを、どこか私の捻くれ根性が反発したのだろう。クラスのK君が「オトコは数学」と叫んだこともあってか、どん尻の成績だった数学を使う分野に進学をした。

いい加減なところで見切りをつければいいのに、執念深い気性と、とんでもないときに根性を発揮してしまう質から、工学部を諦めなかったのが人生を決定づけてしまったようだ。

紆余曲折の歴史はあるものの、情報科学と数理科学の谷間を往来しつつ電気のことも知ってるふりをして、アホみたいに大きい「パーな」総合電機メーカーに席を置くことを選んだ。正しい選択をして早々に山の中の農村に帰れば、明るい人生だったのだろうか。しかし、想像は次々と浮かぶものの、どれも情けない姿ばかりだ。

◎

時間というものはパラパラ漫画のように捲れてしまったら戻せないし戻さない。戻そうとも考えない。

そういう掟を破って、もしもあのときにあのような道を選択していたらどうなっていたのだろうかと、深々と考えて、静かに沈み込んで夢を見る。しかし、どこまで考えてもそれは夢であるだけだ。

◎

例外もなく、啓蟄のころになると、また、夜中に魘されたそうで、卒業できなくて必死になっている私が、試験を控えて友人たちに情報を集めて回ったりしている夢を見たところを見つかったらしい。

親はそんなアホな息子とは知らず仕送りを続けてくれたのだから、夢の中でも夢から醒めても、泣ききれない。

絶対に取得できるわけのないほどの科目数が卒業直前の試験でも残っていた。あとから考えても、本当に卒業できたのか不安になって、卒業証明書を取り寄せたこともあるほど、ドタバタであったあのとき。人生で一度だけ死に物狂いになったのかもしれない。

真っ白なA4サイズの答案用紙に、答えが書けない。解けない。そこで、苦肉の策で私は次のように答案用紙に書いたのだった。（そんな科目が幾つもあった）

先生、私は一生懸命勉強したのですが解けません。勉強したことを代わりに書きます。就職も決まりました。卒業させてください。

こうして考えてみると、今も昔も進歩がないことに気がついた。遅すぎるか。あと十年でおとうの死んだ年令になるというのに。

2014年3月 6日（木曜日）【裏窓から】

あしたを生みだす ― 裏窓・号外

■■ 巻頭言

春の足音が聞こえ始めるとあっという間に野山が華やかになり街行く人の装いも少しずつ変化してきます。オフィス街に溢れる人たちも颯爽としていて春らしさを感じる毎日です。少しばかりの寒の戻りがあっても、新学期には花が満開になるように植物たちは準備を着々と進めていますし、新学期や新年度をこの時期に決めた昔の人はエライなあと思えてきます。

そんなふうに花の咲く来月、いよいよ三重県総合博物館（MieMu：みえむ）が開館します。首を長くしてお待ちの方々もさぞかし多いことと思います。津駅から偕楽公園に寄り道をしてツツジを楽しんだ後、美術館を経て博物館までとゆっくり歩いてみるのもいいかもしれません。いつかこの道が、四季の花に埋もれるフラワープロムナードのようになってくれるといいなあと夢見ています。

博物学という分野は、子どものころから意外と身近にあったのではないでしょうか。家の本棚にずらりと並んだ百科事典などに植物や動物の図鑑があって、子どものころは絵本代わりにこの図鑑を眺めたりして過ごしました。大人になったら昆虫学者になるんだと夢を持つ友だちがいて、夏休みには一緒に昆虫採集や近所の河原へ化石や鏃（やじり）を採りに出かけたりした思い出などありませんか。

そういう思い出を結集させてくれたのが博物館なのだろうと私はイメージしています。高校の教科書で今西錦司先生の大興安嶺探検という著書を知り、探検家になりたいと夢に見たこともありました。

博物館といえば、京都大学総合博物館（京都市）や国立民族学博物館（吹田市）がまっさきに浮かびます。MieMuもこれらに負けない魅力的な博物館になって欲しいです。そのためには、利用する人たちも本当の博物学の面白さを、知識だけでなく体感して熟成させていかなくてはならないと感じます。

興味深い企画があがっているようです。MieMuに見学にお越しになるみなさんと私たち環境生活部のスタッフが一体となって、あっと驚くイベントや展示を見たり体感できると、三重県がもっとおもしろくなってくると思います。

■■ あとがき

明日を生み出す力。子どものころの生き生きした自分に戻ることからスタートしたいと私は考えています。

博物館のことを書くことで、博物学とは何だろうということを考える機会ができました。それを探っていくと、子どものころには何にでも「わくわく・ドキドキ」な気持ちで踏み込んでいって、知らないことがあっても「知ること」へ変えてゆく原動力としていたことを思い出します。

このごろは、どこかに出かけて何かをするにも、あらゆる面で準備万端になっています。やはり、好奇心を刺激してものごとを探求するには、少し未完成である方がいいでしょう。未熟で未完成なものを散りばめることで、多くの人々を惹きつけて欲しいです。

私たちがふだんから接している環境学だって博物学と仲間の体系で、たぶん同じステージで未来を見つめているのでしょう。だったら、環境創造活動をするたくさんの人たちもMieMuに集い、もっと手を取り合って一丸となって進んでいけるといいですね。

そうすると、MieMuの「明日を生み出す力」が築き上げる未来は、きっと楽しくておもしろいものになって行くのだろうな、と思います。

2014年3月18日（火曜日）【裏窓から】

わたしの新しいドラマを始めよう ― 春分篇

（17音のつぶやきを拾い集めるやよい三月彼岸まで）

――

▼けんけんぱあの人に追いつけないまま

わたしの三月朔日はこんなふうに始まったのでした。いつものようにあの人ってのは架空の人でありながらわたしは誰かを見つめている。

――

▼雪あかり夢から醒めて火をおこす
▼雪しぐれあなたの髪を眠らせぬ
▼郵便屋さん私の手紙は来てません？
▼凍りつくよな貴方の指と切る
▼雨音がピチピチ春が近づいてくる

三月になっても一向に暖かくなって来ず。お水取りのころに春のジャケットとズボンで出掛けた覚えもあって、あのひんやりと沁み入る寒さが快感だったのだが、今年はしばらくお預けになっている。

▼土砂降りの予感がしたの逢う前に
▼泣き顔がステキ土砂降りハネたボブ

容赦なく夜どおし降り続く雨の音を聞きながらわたしは何をぼんやりとしていたのか。いつもならば32年前に東京で聞いた雨音を思い出すのだろう。今年はそんなにも沁みったれていなかったようだ。ちょうど夢中になっていた本でもあったのかもしれない。

――

▼蕾待つ誰とは言わぬ露の朝
▼花が咲くまでもう少しだけ頑張る

どうやらひたすら何かを待っているような気配がある。またどこかの街角で素敵な人でもみつけたのだろうと想像しておいていただくことにしよう。

――

▼よもぎ摘み1両の汽車飄々と
▼下駄の音春はまだかと坂をゆく
▼あの人を憎んで雨水凍りなさい
▼恋空を寒風吹いて片思い

春の足音という表現がある。それが好きで、春が好きであるよりもその言葉の響きが好きなために春を待ち遠しくしているのではと自分で思うことがある。足音が近づいてきたり坂道をのぼっていくドラマの場面には明るい未来へと向かう変化が隠れている。見えないものを待っているのが好きなのだろう。何年か前の今頃の季節にも夜空を見上げては切ない思いをしていたことがあった。そんな時間ばかりであれば死んでしまいそうになるが、片思いであっても終わってくれるからこうして生きているのかもしれない。

――

▼うしろ向き泣いた笑顔の黒い髪
▼お月様もう貴方なんぞ追いかけない
▼春一番あの子が欲しい花いちもんめ
▼ウグイスや囀りだけが花なりて

▼鴨の池そろそろざわめき始めたる

▼あの人がお伽噺話をしてくれてひとつの恋が終わるのを知る

ちょっとした決心のようなものが見えていると思いませんか。恋が終われば、また新しい恋の予感を感じ始めるというお得な気質なようです。

――

▼卒業の朝霧雨滲む水銀燈
▼待ち合わせ疏水のほとり柳の芽
▼あの人の言伝てを胸に春に立つ

3月下旬にはおとうの誕生日があります。もう16年も過ぎてしまって、その誕生日を祝うこともないのですが、生きている時にも一度もお祝いをしたことなどなく、言葉に出来ないほど後悔をしています。

ヒトはひとりで生きていることには変わりないのですが、知らない所でものすごい大きな心配や願いが飛び交っていて、そのおかげで自分が成長できていくのだということにあるとき突然気づくわけです。

これは他人に教えられて知ったら無意味なことであり、教えて差し上げてもそれは禁断なことだとつくづく思います。たいていはおとうが死んでしまってからのことが多いと思いますし、死んでしまってからのほうが宝としての価値があるのだとも思う。宝とはそういうものだとも言い換えられるかな。

――

▼土筆摘み架空の会話を籠に盛り
▼サクラソウお稲荷三つくださいな

春休みに落第が決まった頃だったのか、それとも特別研究テーマが決まった頃だったのか、それははっきりと記録にないのですけど、いつも通りに商店街に出かけた帰りにいつも通りの小さなお店でお稲荷さんを買うのが愉しみでした。可愛らしい頭巾のバイトの女の子で、きっと近所の大学生だろうと思うけど、ショーウインドーの上の小さな寄せ植えの花の名前を尋ねたことがありました。知らなかったようで小さな声で「サクラソウ……」と教えてくれました。あのころの恋はいつもたいていがそんな感じでした。

写真：浜松城公園のしだれ桜。

— Hitomi (@taps_miller) 2014.3.21のツイートから

2014年3月21日 (金曜日)【裏窓から】

桜咲く、桜散る。あっという間に　　―　清明篇

▼大人になる春の嵐を乗り越えて

桜の花は、例外もなく春の嵐に晒されて散り散りに吹かれていった。その様子を見上げながら、三百数十日のうちのたった数日だけ胸を張って咲き誇った花に感謝しその儚さを嘆き悲しんだのであった。しかしながら、これも宿命とあきらめ、そしてまた決まってあくる年にも再会できるという約束を交わして花びらの流れ行くところを見ている。

▼花筏見送る人も無言なり

これは2年前の4月にこの日記に書き残したもので、この年も例外なく悲しい別れがどこかで果たされたあとだったのだ。花びらの流れゆく先は誰もしらないのだろうが、あの夜に月もない宵の中にやがて散りゆく花びらを咲き誇らせた時間があった。

◎

酒を飲んでお祭りのように歓喜を祝えるならばそれが一番だろう。大いに狂うように祝い一陣の風に吹かれて潔く忘れられてゆく。散ればまた咲けばいい。ただそれだけだ。

◎

清明。
4月5日のこの日に車折を訪ね、小倉山から天竜寺あたりをすこし歩いてきた。百人一首の句碑がその数だけ建てられているのを巡るわけでもなく、それは余りにも熱く悲しすぎるからだと言い訳をしながら、街なかでは散りそめているソメイヨシノがここで満開となっているのを見上げてくつろいでくる。少し肌寒い昼間であったが、小倉山の石畳をそろそろと歩けば少し汗ばんだのでした。

11時すぎに四人で廣川に並んで1時に食事が終わって嵐山の人混みへと再び吐き出されて、そのあと中の島の桜を見てからさくら餅を買って嵐電で車折まで帰った。

2014年4月 9日（水曜日）【裏窓から】

「愛してる」を考えてみる ― 穀雨篇

「愛してる」を考えてみる。

永年思い続けている事実がひとつある。それは、人が人を「愛している」とき、必ずそこに温度差がある、ということだ。

動詞は、「愛している」だけではなく、ほとんどが当てはまる。

愛している、憎んでいる、疑っている、信頼している、求めている、嫌っている、など。

私はある人を愛していた。
しかし、その人は、私と同じ温度で私を愛したわけではなかった。

好きだった。
でも、その人は、私のことを好きではなかった。

私が好きではなかった人もあったが、私以上にその人は私のことが好きだった。

憎んだ人もあった。殺してしまってもいいとさえ思った人もあった。
しかし、相手は私を憎んだわけでもなければ、殺そうとも思わなかった。

友情だって同じだ。
温度差があるのだ。

そんなもんだ、で済ませればいいのだろうが、割り切れないものもある。

人生の終焉が見えて始めてからこの温度差のことが非常に気に掛かるようになってきた。

許せない人がある。
でも、その人は私を許している。
当然、その逆の人もいる。

物理学で仕事をしてきた人生だった。
⊿T を追求してきた。

dT／dt という変化率。
私のエネルギーなのだと思うことにして、しばらく生きながら考えたい。

（写真は、全く関係なし。伊勢うどん）

2014年4月20日（日曜日）【裏窓から】

神去村（旧美杉村）のこと ― 春土用篇

∞∞∞∞

三浦しをんさんの「神去なあなあ日常」という旧美杉村が舞台の小説が映画化され、５月１０日から公開される予定で、ちょっとした話題になっています。

話の筋はシンプルですが感動的です。

大学受験に失敗し彼女にもフラれどうしようもないままで高校を卒業した勇気といういい加減な男子が、美人のパンフを見て林業の研修を決意し山深い田舎にやってきます。その村が神去村（旧美杉村）で、携帯電話も通じない駅に降り立ち大きなショックを受けるところからお話は始まります。出会ったことのないような生き物に驚き、人生を急展開させるような人間関係に揉まれながら、厳しい林業体験を経て、大きく成長していく物語です。

ヒトは、大きな自然の中でまっすぐに生きていくことが本来の姿で、それを夢見て生きている。生物や植物のように命あるものを生み出し、それを育てながら、将来はその恵みに自らも育ててもらう。そして、自然に、あるいは文明が開けていない時代の人々たちは、地球上に数々の神を棲まわせながら、それらに畏敬を感じ恩返しをしながら生きてきた。文明がどれほど進んでもヒトはいつかそのことに気付いて来たわけだし、地球というものは永遠の恵みを与え続けてきたわけだ。

そのことは教科書に載っている話ではないが、全く大仰しくもなく、宗教じることもなく受け継がれてきた。

ドラマは、そんな大層なことをテーマにしているわけではないけれども、ちょっと形のないものに心を奪われ過ぎではありませんかという緩やかな提案のようにも思えてくる。

◎

合理性を追求し机上で（利益を生み出しさえすればいいというように）発展していく暮らしの経済とは別次元のところにある百年二百年のサイクルで恵みを与えるものを（それは林業や漁業だけではないものも含めて）疎かにしてはいけないと「神様」が暗示しているようだ。だからタイトルにも神が存在するのではないか、と妙に納得させてもらえる。

作者である三浦しをんさんのお祖父さんは美杉村の出身だという。三浦さんは当然都会っ子だからこの作品を書くために美杉村を訪ねた時はさぞやびっくりなさったことだろう。環境と森林の行政部門と一緒になってPRもしてもらい、（私も来庁のときに偶然に文庫を持っていて名刺を見せて私の名前宛にサインまでもらえて）、全国のみなさんに村を広く知ってもらえれば嬉しい。

映画作品はコミカルでありながらも地味でそんなに大仰しいものではなく、年齢層のターゲットも広いように感じる。映画のPRは壮大にやっていますが、もっと娯楽的に捉えて、自然というキーワードでしばらくモノを見つめてみる機会とすればいいのではないでしょうか。

∞∞∞∞

旧美杉村の話を書きながら長閑な山村を思い浮かべ気持ちもリラックスしました。豊かな水量を誇り緑を流す雲出川、そしてそこ右岸左岸にはおいしいお米が収穫できる小さな平野があり、そのなかを真っ直ぐに東西に延びるローカル鉄道の名松線が走っています。のんびりと走り行くディーゼルカーと沿線の自然を背景に休日にはデジカメを持って走り回る鉄道ファン・写真ファンが増えつつあります。

林業のお話も面白くて魅力的ですが、この超ローカル線も、映画のロードショーをきっかけに注目してもらえるといいなあと思います。乗っているだけでも楽しい列車なのですが、沿線には自然と触れあえるところがたくさんあります。何よりもこれらはポテンシャルが高いにもかかわらず、今はそれほど有名ではないので、東北のリアス式海岸を走る列車や四国山脈に点在するド田舎を貫くローカル線などがTVや雑誌に登場するたびに、名松線も是非！有名にさせたいと思ってしまいます。

神宮がある伊勢市と京都を結ぶ歴史街道がいくつも残り、太平洋・熊野灘という大自然の海に守られたところに当県は位置します。世界遺産の熊野古道などもあり、大きく胸を張ってアピールしてもいいと思います。しかし、自分たちの環境の素晴らしさに地元民が意外と気付いていないのです。こういう環境に暮らせることは幸福なのだと知り、恩返しのために

も未来に受け継がねばならないのです。

（写真は、名松線を元気にする会FACEBOOKから）

2014年4月23日（水曜日）【裏窓から】

切り捨てるもの ― 一子相伝　立夏篇

夏も近づく八十八夜。子どものころに母と幾度も「せっせっせーのよいよいよい」をして遊んだことを思い出す。科学的・文明的おもちゃもなく、母と二人で遊ぶか縁側で裁縫をしている脇で話を聞くなどをして過ごしたのだろう。

今の時節ならば、もうすでに麦は大きく育って穂を出しているし、当時は現代のように田植えを5月初旬にはせず、1ヶ月先の6月初旬頃にした。。麦を刈り取ってから田植えを始めるので、5月は苗床を作るのも忙しかったに違いない。

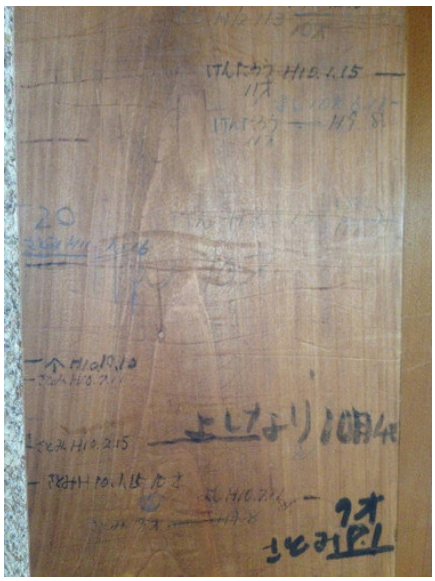
もちろん、茶摘みの歌のようにお茶の収穫も農家にとっては大事な仕事だ。また、桑が大きく育ち始めるので、養蚕の方も忙しい。

◎

83歳を超えてしまった母の昔ばなしを聞くのが、近ごろ楽しい。中身は決して楽しい話ではないのだが、苦しかったり辛かったことを、すべて過去のことにしてしまって話す母の姿を見るのが楽しいのだ。

二十歳の頃に嫁いできて、舅・姑、大姑がいて、夫には姉と妹、二人の弟がいた。そんな家族がどのように暮らしていたのかを話してくれる。詳細は書かないでおく。母や私が順次死んでいくときに消えていってしまうような記憶とすればいい、そんな理不尽で不条理な話しであった。

母は当時の人やその人の為したことやしきたりを私たちが想像できるレベルを超えて憎んだに違いない。今さらそのレベルを定量化してみたところで時代は変わらないし巻き戻せるわけでもない。怨みを果たせるものでもなかろう。その時代は既に過去なのだと切り捨ててしまえるような人の方が幸せなのかもしれない。



パソコンのなかの記録写真に柱のキズを写したものがあった。

▼背くらべそれも無縁なひとりっ子

その写真を見ながら、もはや、ここに名前の書かれている子どもたちはこの写真なぞ必要とはしていないのだと感じた。

ひとつずつ明日へのステップを踏み続けるために、もはや、このようなモノが必要な時代ではないのだ。私はもっと冷めてこなければイケナイと示唆されているのではないか。

母が切り捨てた過去は、確かに歴史的には尊いものであり人間の心が未来へと進化し成熟する時代のある種の証であるのかもしれないが、私たちにも（否、私にも）このような「切り」の決断が必要だと迫られたのだ。

父は生前に日記をつけていた。かなり若いころから1年に1冊という立派な日誌をつけていて、私の最古の記憶のころにすでに日記が枕元に置いてある様子がはっきりと残る。しかし、この日記は、晩年には1冊も残っていなかったのだから、どういう事件か事故か判断かで処分をされたのだと思う。

先日、母が更に古い記録を出してきて見せてくれた。それは昭和初期の我が家の家計簿に相当する記録だった。筆で和紙に綴っている。時代劇や平安絵巻の古文書みたいに流れるような墨字で書かれている。祖父が残していたものだと母は説明をしてくれた。

消えてゆくモノと残されるモノ、そして、切り捨てられるモノ。様々な記録や記憶があり、その時代が望んでいる方法でおそらく始末されてゆく。しかし、何等かの形で伝承していけたとしてもやがては消えてしまう。

父は何のために日記をつけて、のちになって、どのような判断で抹消(始末)したのだろか。それは何故だろうか・・・・と大きな疑問が残ったままである。

父からは何ひとつ形見として受け継いだものはなかったが、この心を推測するための目に見えない秘伝書のようなものを、伝心で受け継いだのだなと、このごろ何となく感づき始めている。

一子相伝という言葉が浮かぶ。

2014年5月 5日 (月曜日)【裏窓から】

霧雨ふる ― 小満篇

ツバメの写真。
ムスメが熊野へ帰るのを見送りに出かけて
多気駅で撮ったのではないかと記憶する。
平成22年の7月初旬のことだ。

メールボックスに保管していたのを見つけてきょうここに保存しておいた。
平成26年5月21日、きょうは小満。

昨夜から雨が激しく降って
夜明けのころから霧雨にかわった。

日めくりを見て小満だと気づく。

おとといあたりから青空文庫で三国志を読んでいる。「桃園の誓い」の巻は感動の連続で、初めて読んだ時にもこんなくだりがあったことをすっかり忘れており、とても新鮮な歓びである。

最後まで読み切る自信は、はっきり言ってない。登場人物が多いし漢字難しい。目も見えなくなってきたので長時間読書は辛い。何よりも、どれだけ面白くても緊張を持続する根性のようなものがすっかり萎えてしまっている。ウソを書いたところでしかたがないので、そう記録しておこう。

■

先日から断片的でかつ曖昧に書き残してきた雑感のひとつに、旧友・知人との意識の温度差のことがある。つまり、その人たちは学生時代などに熱く語り合うような時間を共有したり、多かれ少なかれ、あるいは善意と悪意の混在するなかで友人として一時期を送った人たちのことで、60歳を間近に控えてこれまでと全く違った感覚でその友人たちを見つめ直しているという日常である。

時には競争をし刺激を受け突き飛ばし合い励まし合うという人生の教科書に載っているような人間関係が、結婚をしたり遠方に住むことで疎遠になったりったり、永年の年月を経たりする間に忘れられていき、そして冷めてきた。自分の家庭や趣味が優先されるので当然の成り行きだ。

頭のなかで「友は大切な宝だ」と考えて若き頃から今までやってきたが、そんなことは切り捨てて、ひとりで（または家族などの限られた人間関係のなかで）人生を終わっていけばいいではないか、と考えを修正したかのような時期もあった。つまり、会いもしない友人たちとは、もう縁がなくても仕方がないとまで考えていた。

しかし、更に最近になって、これらの人々は何の根拠もなく人間的付き合いを開始した人々であったことを再認識して、言ってみれば価値観も政治観も趣味も暮らしも性格も全く違う人たちであることが多く、作為的に不安定で纏まりのない集団であったからこそ、新しい何か価値あるものを増殖していたとも考えることがあった。だから、（人生の見直しのようなものをして）きっぱりと切り捨てるのではなく、損得抜きでけっこう心から友として触れ合えるのではないか、むしろ、今の殺伐とした時代にはその友人のほうが掛け替えのない存在ではないかと考えるようになった。

私たち夫婦が100の項目で何1つ一致しないにも関わらず夫婦として非常に完成されたバランスを保っているのに似て、そういう友人たちがたとえどんなに異質で異次元で暮らしている人になってしまっていようが、もう一度わたしの死に際に刺激をもらって再燃するのにふさわしい人ではないのかと考えたのだ。

だが、それもそこで終わりかも、と思う。

温度差という言葉で曖昧なようにして書いてきたが、しかしながら、やはり、折り合わないものなのだなと感じざるをえないことも多く、波長のようなものはそんな美的な幸福物語では巡ってこないのだ。昔なんかにかまってられるか、というのが本音の人も多かろう。

些か消沈気味になったものの、早い話が、そういうむかしの仲間たちは、もう過去の人であるのだ。それでいいのだ。

◎

そこで、先ほど。

棄てられずに放置していたメールや文書を先ほど処分をした。
私が突然いなくなったとして、即座に価値が失くなるものたくさんある。
今のうちに棄てよう、と考えたのだ。

■

4年前のツバメの写真。

あのとき、ムスメは新任か2年目のころであった。ツマは、寮へと帰るムスメの姿を淋しそうに見送っていた。その姿が印象に残る。

今は本部に帰ってきたから家にいるが、更に4年後にはここにいないだろう。

私は未来をどの程度まで読みきっているのだろうか。その程度が優秀であっても見誤っていても、どっちだって構わないのだが、答はひとつだろう。

4年後、面白くなってくるぞ、と楽しみにしている。

2014年5月21日（水曜日）【裏窓から】

梅雨めく ― 芒種篇

天気予報の降水確率は50%を超えていないのに、早々に予想を外れて小雨が降りだした朝であったが、午前中の健康診断のときは一時的にあがってくれた。

今月になってから5日余り食事を心得てお酒も控えてみた。この結果がなにか数値に出るならばおもしろいと思い我慢をした。

我慢をするというということは、とても大変なことで苦難を伴うことが多いが、日常の暮らしでチャレンジする程度に苦難なものはさほど無い。1年も2年もかけて受験勉強をするとか修行を積むということには無縁の年齢になってきて、ビールやウイスキーを控えることなどに努力も何もない。

昨日飲まなかったら今日も飲まない。この繰り返しであった5日間であるが、5日のツマの誕生日にお茶を飲んで過ごすのは少し寂しかった。

健康診断の血液検査の結果次第では、控える歓びも出て来ることが想像できる。お酒を控えてお茶をゴクゴクと飲みながら、日常に旨いと言って飲んでいるウイスキーの味やその必要性を省みることもできた。酒や食事は旨いものを旨いまま爽快な気持ちでいただくという基本を忘れないようにするためにも数日間控えたことは有意義であった。

健康診断が終わった6日。この日の夕方、おいしいケーキとかワインとかを買ったのかとツマにメールをしたら何も買っていないというので、帰宅してからワインだけでもと店に出かけるように背中を押した。

いつものお魚屋さんのお寿司で、いつもよりも少し高めのにぎりを買ってきたようで、私の誕生日やし少し高めのんにしたわ、ええやろ、と言いながらつまんでいる。私に買ってくれたちらし寿司に中トロが載っていたので自分のマグロと入れ替えて食べている。それに、ワインを、というようなへんてこりんでささやかな誕生祝いであった。

マイマイガを発見（拡大写真）

夕方、雨があがって蒸し暑くなっているので、汗にまみれて帰り着いた。そのときにはまったく気づかなかったのだが、ツマが買い物に出かける直前、門塀に大きな毛虫がへばり付いているのを見つけた。思わず写真に撮り名前を調べたら「マイマイガ」というポピュラーな毛虫であるとわかった。刺したりするような害も及ぼさないと書いてありホッとする。

よく見ると綺麗である。羽化すると蛾になるのだが、蝶よりも我のほうが美しいのだと昆虫に詳しい人が話してくれたことを思い出し、こうして毛虫を見ていると、幼虫の美しさにも見とれる。

荒れ放題にしている庭の片隅であじさいがひっそりと咲いている。

▼ 紫に庭もつゆめく雨あがり

▼ ものぐさな庭も梅雨めくにぎやかさ

そんなことをぼんやりと考えていた。

---

bike-tourist.air-nifty.com > Apple 散歩(写真日記)

2014年6月 6日 (金曜日)【裏窓から】

ニホンウナギとトキソウ　―　番外

6月11日は暦の上での入梅、暑さもこれからいよいよ本番という時に、土用の丑を来月下旬に控えて「ニホンウナギ 絶滅危惧種に指定」のニュースが全国を駆け巡りました。

「世界の野生生物の専門家などで作るIUCN＝国際自然保護連合は12日、ニホンウナギについて、近い将来、絶滅する危険性が高いとして絶滅危惧種に指定し、レッドリストに掲載」（NHK）

いよいよ、ニホンウナギは私たちの食卓からさらに遠のく模様です。マツタケが身近でなくなって四半世紀がたち、ウナギも後を追うのでしょう。

現代では、マツタケをおいしいと思わない子どもたちが増えているそうです。いつか、ウナギの味も消えてしまい、ファーストフード店のハンバーガーが最高の美食である時代がやって来るのでしょう。

次から次へとグルメなものが生み出され続ける食の世界には夢がありますが、一方で、私たちがテーマとしている次世代のエネルギーはまだまだ保障できるものがありません。

小さな町工場や休耕田が、ある日突然、太陽光発電設備へと姿を変えているのに出会うと、これも1つのステップなのだろうなと思ってみたりしています。

ニホンウナギのことを巻頭で取り上げたあとで、環境省によりレッドリストの準絶滅危惧の指定を受けている「トキソウ」の話題を上野森林公園のホームページ　で発見しました。

「今年はもうトキソウが咲いています。しかもいろんなトンボが観察出来る池の縁に。間近で楽しめます。ハッチョウトンボもどんどん羽化しています。お天気続きで季節は夏の様」

トキソウは、漢字で朱鷺草と書き、ラン科トキソウ属の多年草です。佐渡にいる朱鷺を連想すれば、この花の淡い紅紫色を連想してもらえると思います。湿地の花のイメージがあり、なだらかな山歩きを愛する人たちのとっておきの花なのかもしれません。

ウナギのようにニュースにもなりませんので、静かにひっそりと咲く花を今度の休日にでもお楽しみください。

写真参照:三重県上野森林公園 トキソウ@魅せられて大和路

2014年6月13日 (金曜日)【裏窓から】

夏を待つ ― 夏至篇

6月21日は夏至で、少し夏らしい空模様になってきたかな、と感じさせてくれる。

梅雨は開けていないので、いったん雨が降り始めるとしっとりと静かに降り続くのものの、降り始めなどは真夏の夕立を連想させるような勢いになることもあり、夏が来るのが嬉しいようで忌々しいような複雑な気分である。

夏がそれほど好きではないわたしは、バイク旅をしていたころは、夏といえばただひたすら走り回るだけで、嫌いだとあからさまに気持に出さないことが多かったかもしれない。

確かに暑いけれど、雨が降るのか降らないのかはハッキリしていたし、明日の天気も1週間後の天気もそれほど予想からハズレなかったから、計画的に楽しい旅をすることができたと思う。滝のように汗をかきながら、走り回ったころが懐かしくもある。

夏至は、そんな夏への入り口で、さあ、はじけるぞ、と意気込む節目にちょうどよい。このごろは低空飛行の暮らしをしているので、日常が不活性であることもあって夏になる歓びはまった無い。将来、平成26年の夏には何をしていたのだろうと振り返るときのトリガーのために何かをやっているような毎日である。

夏至篇で何を書こうかなーと思い浮かべながら、22日の三重フィルハーモニーのコンサートのことを考えたりしている。雨が降れば仕事の休日体制が解散になるのでコンサートに行けるわけで、世の中の大勢の人が晴れることを望んでいるなか、わたしは晴れないで欲しいと願っていたのだった。

（22日当日）
仕事は午前中で完了し、午後は休暇取得とした。コンサートでは、久しぶりにYさんにも会えたし、音楽もいい演奏が聴けたし、申し分のない日曜日であったといえようか。

ついでなので、最近の体調のことについて触れておこう。

季節が移るに連れて少しずつ増え続ける体重であるが、過去のマックスレベルくらいまで達しており、おなかの周囲も過去最大の計測値にあと1センチほどいうところに迫っている。これは、運動量の低下と身体活動の不活性化が原因であろうことはわかっている。

今月のはじめのころ、数日間の断酒を試みてから、ときどき、お酒を控える日を設けてみている。これがなかなかよい。体調は快適で動きも快適で、よく眠れるし、胃腸のほうもスッキリして健康になったような気がする。

ビールは、随分と前から飲まなくても済んでいる。そこで、ウイスキーを控えて烏龍茶に変えてみてはどうだろうかと思い、ペットボトルでお茶を買って冷蔵庫に冷やしている。

朝から晩までパイプの煙が燻っていたころ、突然、タバコはやめようと思いたち、本当は煙は嫌いだったのではないかと思うほどに煙から急激に離れていったのだが、果たしてお酒からも離れて暮らすことがあるのだろうか。

もちろん、離れて暮らそうなんてことをの前でいるわけではない。欲しくならないときは飲まないようにしようとは考えている。

ただ、ささやかな楽しみが1つずつ消えていくようで寂しい。

2014年6月24日（火曜日）【裏窓から】

願いごとないと言ったら嘘になる ― 小暑篇

凸凹の少ない日常を送っている。そんな筈ではなかったと気がついたときは遅かった。

体力がないだけではなく、新しいものに反応したり食らいついてゆくスタミナもなくしつつあるのだった。

七夕の夜は、沖縄の南にいる台風8号の影響もあって曇り気味で、星空などは見えない。見えなかったと書いておかねば忘れてしまうような不安が襲う日々を過ごす。

豪雨災害のニュースが続いてパタリと梅雨が開けて夏になるのが七夕のころの特徴なのだと思っているのに、思い切り地面を叩く雨を今年は見かけないままだ。そんな夏があってもいいのだろうけど、筋書きが外れるとその後が少し怖い。

◎◎
◎◎
◎◎

友だちに葉書を書いた。

自分がいちばんボケにくいと自信を持っていても、多かれ少なかれ心配なり対策なりをしなくてはならない年齢が近づいてきました。健康には気をつけましょう。それが一番大事ですね。うちはまだ娘がお嫁にいきません。なかなか決心がつかないのも世相なのかもしれません。

そんなようなことを書いた意味のない手紙になったけど、わたしたちの人生はそんな意味のないことを交わすステップが日常に求められている。それは、何も恥ずかしいことではなく、むかしからそうだったのではないか。

◎◎
◎◎
◎◎

七夕には

▼雨だとか晴れだとかよりプロポーズ
▼星のない夜よ貴方を独り占め
▼七夕は雨がよろしい蛇の目傘
▼笹の葉に飾りきれない願いごと

とつぶやき、あくる日には

▼初蝉や鳴いて哀しい学期末
▼初蝉を追うてさまよう森の中
▼キミのいた石段坂も夏休み
▼ぴょんぴょんと水たまり飛び越して夏になる

とつぶやいて、そのあとに

きのうは、小暑でたなばたさま。夏もいよいよ本格化します。仕事帰りに駅前で、カレー屋から出てきた高校生に試験は終わったかと聞いてみた。

休み明けにあります。
今日はクラブが休みで、息抜きで飯食いに来ました。
野球部です。
暑っついです。

と話してくれた。

と書き足している。

◎◎
◎◎
◎◎

二十数年前のそんな暑い夏にムスメが生まれた。わたしがぼんやり屋なのか、記憶とはそんなものなのか、1987年の7月9日の朝は晴れていて、まさに暑い夏の始まりであったということくらいしか記憶にない。今の時代なら想像もつかないのだろうが、わたしは仕事に出かけて、お昼すぎに職場に電話連絡をもらって五条にある市民病院へと駆けつけたのを覚えている。

アパートにはエアコンがついていて、それはムスメが生まれるからといって夏を迎える前に買ったエアコンで、その後も何度かの引っ越しに持ち歩いてゆくことになるものだ。実は今の家の寝室に最後に移設したのだが、四五年前から冷えなくなったので放置したままになっている。（我が家はエアコンなしの生活を送っているのです）

こうして思い出してみると、古文書が蝕んでボロボロになってしまっているように、頭のなかのあのころのページが断片化されている。消えてしまったものもあるのかもしれないし、わたしが無理やり思い出そうとしないから欠落したままになっているのかもしれない。

◎◎
◎◎
◎◎

むかし、小学生だったころに、七夕飾りの短冊にわたしは何て書いたのだろうか。卒業の文集には「アナウンサーになりたい」とはっきり書いているのだが、それは一時的なものではなかろうか。もっと子どものころには船乗りになりたかったのだ。この夢はわりとわたしの中で筋を通し続けて、事あるごとに蘇ってきており、今でも大きな港町で海上保安庁の巡視艇を見たりすると、奮えるものがあるある。

現実路線を選んだのか、自分にはチカラがないと悟ったのか、それとも、長考の末に候補にしていた次の一手を打つ瞬間に、全く思いつきの（横から割り込まれたような）一手を打ってしまったときのように今の世界に飛び込んだのだろうか。神様もわたしもわからない。あのとき、あの人に出会わなければ‥‥みたいな回想は幾つもある。

◎◎
◎◎
◎◎

もうすぐ一学期が終わる。むかしと違って今の暦での七夕は、雨に降られることが多い。そのことを悔しく思ったり残念がったりしたこともなく、今も昔も

▼星のない夜よ貴方を独り占め
▼七夕は雨がよろしい蛇の目傘

のように感じでいる。

悩みごとはないけれど、出っぱってきたおなかがいろんなところでつっかえることが多くなってきた。

かと言ってそれほどにも困らない。

2014年7月 9日（水曜日）【裏窓から】

利休氷 ― 大暑篇

「高円寺」といえば、中学時代に夢中になった吉田拓郎の歌が

君を好きだなんて言ったりすると
笑われそうな気がして
とても口に出すのがこわかったけれど
気がついてみたら君の方が
僕を好きになっていて
それで口に出さないでもよくなったんだよ

君は何処に住んでいたのですか
高円寺じゃないよね
だって毎日電車に乗っても 違う女の子に
目移りばかり それで電車に乗るたびに
いつも色んな女の子にふられていたんだものね

と歌っていて。

そんな音楽を頭に焼き付けて高校時代を送ってわたしが上京して住んだのが東村山で、あのころ売れ始めたばかりの志村ケンと久米川から高田馬場まで向かい合わせで行ったことも思い出す。

そして、そのあと住んだ西武池袋線の江古田は高円寺とは華やかさが違っていた。

ちょっと負けてるなあ・・・なんて思い出しながら悔しがっている。

あのころの若者はそんな変なところに見栄っ張りがあって、そのくせ汚い長髪に下駄履きで街を歩いた。

そう、あのころは歳上のおねえさんが大好きで、北海道の帰りに青森から上野まで夜行急行の同じボックス席で帰ってきたかわいいOLのおねえさん（樽角さんっていう珍しかった名前まで覚えている人）にせっせと手紙を書いてみたりもしていた。

とおとさんと砂女さんの神田「竹むら」のお話はおろか、二人の俳句人が御茶ノ水から神田界隈を大人の雰囲気で語り合うところには、なかなか踏み込めない。

さながら、素敵な女がとまり木の向こう側で粋にやっているところに貧乏学生の成り上がりが声をかけるようなものだ。野暮はやめておこう。（実は、ふたりの大ファンなんですが）

だが、こういう二人の話に耳をか傾けていると、早々に都会を諦めて京都へと引っ込んでしまった自分を些か後悔することもあり、その一方であのまま東京で暮らしたらきっと夢を見すぎて死んじまったかもしれないなあ、と想像してみたりしている。

■
□■

一節ごとに自分を見つめ直そうとし、社会も眺め、ちょっとだけ皮肉も書いて、反省もするようなモノを書いて、せっかくだから少しは味わいのあるものでありたいと、当初から欲張って書き始めた「裏窓から」シリーズだが、このごろは少しネタが尽きてきてしまった感がある。

7月23日は大暑。

伊勢市三大かき氷のひとつ、利休饅頭さんとこの利休氷をツマと食べに行き、ささやかな夏休みを過ごした。

2014年7月24日（木曜日）【裏窓から】

台風11号　―　立秋篇

（8月7日立秋）

この日は台風がのちの報道になるほどにも大雨を齎すなどとは考えてもおらず

- 立秋のブルーブラックは特別色
- 秋立つと物音がするわけでなし終わりが近い夏休みの予感
- わが父は夏好きやったやろか冬に逝く

などと書きなぐって遊んでいた。

10日には今年最大の満月（スーパームーン）の夜を迎える。
比較的暑くない日が続くので有難い。このまま秋風が吹いてくれればと願っていたのでした。

▼立秋と書く噛みしめて秋味わう

秋になるということがこっそりながらとても嬉しくて仕方がなかった。そのことを誰に話してもわたしの気持ちなどわかってくれるわけもない。ひとりで立秋のことを考え「裏窓から」には何を書こうか考えていたら、時は容赦なくトントンと過ぎていった。

トントン

しかし、台風はトントンとはやって来なかった。7日の金曜日はまだ遥か九州の南方洋上と思っていたものの、8日の土曜日になると四国上陸の予想がほぼ確実になり、10日の午前中に当県も暴風雨圏に巻き込むと報じられる。

立秋をのほほんと味わって風流等と言っておれない状況である。8日には朝から実家の母を訪ね安否を気遣い、お米となすび（レジ袋満杯）とスイカを1個もらって来ている。ちょうどクルマを走らせているころに1時間雨量45.5ミリを記録している。（昔の水害を思い出す）

この日記を書く暇もないほど（というかゆとりも無いほどに）雨が降り続き、大雨特別警報という耳慣れない予報が8日の夕方に出た。

このニュースは全国を駆け巡ったために安藤や中川さんからもメールが舞い込み、「よう降るなあ」と驚いているだけではなく身を引き締めねばならないのは自分ではないかと自らを省みるのであった。

1989年の新大阪駅ホームでの集合写真が出てきたので少し前にも載せたが、調べてみると8月8日から9日に掛けて秋田県の沖日本海から小樽の方面へと抜けている台風13号ということがわかる。そのせいで（自分が悪いのだが）めげてしまいモト・トレインに乗って新大阪までビューンと帰ってきてしまったのだった。

風が少しずつ強くなる夜半に、ツマと食卓に座りニュースを見る。

子どものころにきた伊勢湾台風、第2室戸台風、宮古島台風の記憶が蘇るので、そのことを話してしまうのだが、理解できないようだ。住んでいた地域も違えば歳も少しだけ違う。

■

9日は長崎原爆の日。

（台風の被害にしても戦争の傷跡にしても）

消えてゆく過去をとても悔しい思いで胸に抱いておられる人々も多かろう。

今の世の中の多くの人に、そういう出来事をどこまで理解できるのだろうか。

あらゆるものを、どこぞの学者さんの論文の資料みたいにコピーして貼り付ける作業の繰り返しのように捉えてしまえば、ほんとうの意味での価値やドロドロしたものは能書きとしてでしか残されない。

悔しさの潜在的な苛立ちはそこなのではないか。

写真は1989年8月9日函館駅（日付は推測）

2014年8月10日（日曜日）【裏窓から】

夏もそろそろ　―　お盆篇

8月7日が立秋。少しは秋めいてきたでしょうか、なんて考えておりましたら…

その数日後、10日に台風11号が四国に上陸し、三重県にも大雨特別警報が発令されました。みなさまの市町も騒然となったのではないでしょうか。

数十年に一度とされるこの大雨特別警報が全国ニュースで流れたために、あちらこちらの友人知人から電子メールが舞い込む夜となりました。

11日の早朝、丑三つ時のころには今年最大の満月（スーパームーン）が見られました。空を見上げるのに大忙しな日々を過ごしています。

そして、8月20日の「ライトダウン・みえ」では上弦の月が迎えてくれます。このごろは、夕涼みといって団扇片手に外で夜空を見上げたりすることも少なくなりました。

ちょうど今、お盆のころはなおさら、ちょうちんを片手に地元地区の盆踊りに出かけたりしたころが懐かしくなります。

算術の少年しのび泣けり夏　西東三鬼

お盆が過ぎると一気に秋めいてきます。夏休みも終わりに近づき、図画工作などを大慌てで仕上げた夏休みの思い出があります。

欠伸して鳴る頬骨や秋の風　内田百閒

ひぐらしや熊野へしづむ山幾重　　水原秋櫻子

そして夏休みが終われば、本格的な秋へと季節は移ってゆくのですね。

■

先月のメルマガで、8月20日の「ライトダウン・みえ2014」を紹介で「深夜になってから東の空に三日月がでます」と書きましたところ、読者のNさんから「三日月ではなく上弦の月ですね」とメールいただきました。

うっかりしておりました。ご指摘どうもありがとうございます。

というわけで、巻頭ではしっかりと「上弦の月」と書きましたが、秋はやはりお月見がいいですね。

月見にはお団子も大切です。我が家では、米粉で作る丸い団子を「おころ」と呼んでいます。この団子を供えて風流に月見をした覚えはほとんど無いのですが、とても大好きなおやつでした。

月がいつしかあかるくなればきりぎりす　　種田山頭火

来月お届けするメルマガは中秋の名月のころかなと思ったりしております。

――
（８月１７日発行のメルマガ）

2014年8月18日（月曜日）【裏窓から】

秋足早に ― 処暑篇

23日は処暑。

そしてあっという間に25日になって、今日は三重高校の試合でした。

三重、甲子園準V

大阪桐蔭に惜敗

伊勢新聞

号外

伊勢新聞購読
おかし込みは
本社販売局
☎
059(224)4400
フリーFAX
0120(26)3954

▽決勝
三重―大阪桐蔭（13時1分、47000人）

	1	2	2	0	2	1	1	0	2		
三重	0	2	0	0	1	0	0	0	0	3	
大阪桐蔭	0	1	1	0	0	0	2	0	X	4	

（大阪）1 2 1 0 0 1 2 1
（三）今井、森、鍵戸上―中林
（大）福島―横井

第96回全国高校野球選手権大会最終日は25日、甲子園球場で決勝が行われ、大阪桐蔭が三重に4―3で競り勝ち、春夏連覇した2011年以来、2年ぶり4度目の優勝を果たした。大阪勢の優勝は12度目。

大阪桐蔭は1点を追う七回2死満塁から、中村の中前適時打で2点を奪い逆転。エース福島が九回のピンチをしのいで完投した。

三重は二回に中林の左越え二塁打で2点を先取。追い付かれた後の五回には宇都宮の適時打で勝ち越したが、初優勝はならなかった。

決勝です。

残念ながら仕事がありますので観戦はできませんでしたが、何故か試合経過は時々刻々と届いてきます。職場の玄関ロビーに行けば大画面液晶テレビで放送してますが、ホイホイとは見に行けませんし……。

休日にはテレビ観戦をして応援をしてきました。高校野球は、プロ野球と違って未熟さを感じますものの、一生懸命に選手が動き回ります。三重高校は派手ではなかったのですが、手堅く地味な守備がすごく好きです。

投手や打撃人、ほかの選手たち、それぞれが注目されています。しかし、一人一人がきちんと当たり前のボールを普段通りの練習のときと変わりなく処理をする姿に感動します。

何度も何度もノックを受けて絶対失敗しないように鍛えられるし、連携プレーも練習する。送球だっていつも真正面にと徹底して教えられも、本番でミスすることって必ずあると思う。そんな中での失策の少なさは誇れます。

選球眼の良さも目立ちました。こういうことは、地道な努力で完成するもので、一旦身につけたら崩れることが稀です。しかし、ひとつの実力としては非常に頼れるポテンシャルとなります。そういう基本的なものを普段から育てるという構想も素晴らしいです。

そういった積み重ねの力を発揮し、手堅く卒なく守備をこなしている姿。それが地味で真面目で素敵でした。

■

熱くなれた夏でした。とても思い出深い夏になりました。

今年は、雷雨や豪雨にやられましたが、それほど猛暑に悩まされることもなく、過去のような大きな災害もありませんでした。そろりそろりと秋になっていこうとしています。

時々刻々と季節がかわる。私もウカウカとしておれないことが身の回りで起こり始めています。

（追記）

このごろは、ワクワクドキドキをするようなチャンスが少なく、スポーツもゆっくりと観戦することが少なくなりました。でも、今年の夏の甲子園は久しぶりに熱心に見ました。

ムスメの母校ということもあるのですが、近所でもあります。毎日、日が暮れてもカキーンという音が聞こえてきます。

結構、マンモス高校で、1学年1000人以上いるのではないかな。

市長もこの高校の出身ですし、西野カナさんも新聞にコメントを寄せていました。

そばで見ていて、いかにも高校生らしい子どもっぽさもあり、ぼーっとした子もいますし、駅のベンチでしゃきっと勉強している子もいます。学校帰りの駅までの道のりでは青春を感じる光景もありますしね。

そんな思いで高校生を応援しました。

2014年8月25日（月曜日）【裏窓から】

仕舞い支度ひとつ重ねて白露かな ― 白露篇

（8日）

中秋の名月と白露が同じ日になったようで秋の風情をゆっくり楽しむ人にとっては味わい深い一日になった。

九月上旬にやってくる中秋の名月というのは意外と珍しいらしく多くの場合は九月下旬あたりに来るらしい。彼岸花が咲くのが不思議にもちょうど20日ころのことでこれは多少の気候変動感じてもズレること無く間違いなしにこの日ごろに咲き始める。中秋の名月はその時期に見上げることが多いらしい。

秋の七草に歌われるススキにおいてもまだわたしの居る人里ではそれほど風情を出し始めているわけではないので実際にはもう少し秋が深まった方が秋らしくしんみりとしてくるようだ。

味覚モノも同じで栗であるとかキノコなど九月の今ごろではまだ少し早い気がする。

九月になれば一気に涼しくなるのでかき氷を食べたいとか水遊びがしたいという欲求はいつの間にか消え去っている。

そして、スーパーの商品棚にはお鍋の具材が並び始めて、初物のサンマなどが登場する。そうするとさすがに、味覚を先取りしたくなってくるのだ。

▼秋の月かじってみれば失恋味

農業も実家の弟に任せたままだ。相続も済ませた。

全然手伝いに行かない悪い長男坊主だが弟が快く田んぼを継いでくれることになりわたしに残してくれたのは100坪ほどの畑でそこには柿の木と栗の木がいっぱい植わっている。実はそれもほったらかしで実家の母がせっせと草取りなどをしてくれている。

白露などという洒落た時節を味わうような暮らしをしていないくせに白露篇を書いている。

三十数年前の大学生活を送っていた頃であれば、試験の季節を終えて文化祭でざわめき始めるのがこのころで、父から

送られてくる秋の荷物には、鉛筆書きの手紙と両手で持てないほどの栗と新米が詰まっていた。

来春にはムスメが嫁ぐので今年は最後の夏であり秋である。父もアツイ人であっただけに今のわたしと同じような節目を超えるときに私と同じような気持ちを抱いたのだろう。

過去は消失してゆく。それでいいのだ。

2014年9月10日（水曜日）【裏窓から】

墓参り ― 秋分篇

bike-tourist.air-nifty.com > Apple 散歩（写真日記）

（23日）

SAPPORO CLASSIC ― 寒露篇

きのう（８日）は、二十四節気の寒露にあたる。朝から少しひんやりとして、机に向かいながらも一枚長袖を羽織ったほどだった。

この日記ブログのなかでも、これまでの季節の変わり目では自分を振り返り多くの人たちに感謝をし、これからの決意を新たに固めた日々が何度もあった。

寒露という季節は、晩秋に向かってゆく少し寂しい感じのする節目であり、もう一つ、自分の誕生日を数日後に控える貴重な戒めのときでもあるのだった。

■

サッポロクラシックというビールを、珍しくスーパーの棚で見つけたので嬉しくなって買っきて、ツマと飲んだ。コップに一杯ずつついでムスメに誘いをかけてみると、珍しく飲んでみるという。少しだけ口をつけて味わって一丁前なことを言っていた。

味がわかるのだろうか。「旨い」と言うので、この子もビールの苦味がわかるようになったのか、と思うと些か嬉しくなってくる。

■

実をいうと味については、それほど期待をしていたわけではなかったのだが、いさ飲んでみると懐かしい泡の味がするので、少し見直した。世間で馬鹿騒ぎをして買い求めている人々のブログ記事などをみて、ブームや広告が主流の今の世にどこまで味がわかっているのだろうかと猜疑心を抱いていただけに、まんざらでもない人がいるのだと思ったのだった。

■

というか。

このビール、50年ほど昔に父が、ポンと栓を抜いて、どくどくどくとコップに注ぎ、唇に泡を残して飲んでいたあの時のサッポロ（★マーク）の味なのだ。コップの上に吹けば飛ぶように柔らかく載っていた泡をぺろりと舐めて「わー苦いっ、まずい、大人の飲み物って苦くてまずい」と強烈に思ったあの味だった。（それでも何度も舐めてみたのだったが）

■

ビールの何が好きだったのだろうか。

麦茶を高いところからコップに注ぎビールのように泡立てて飲んで「ぷふぁ～」と大人の真似事をしていた時代があった。あのときテーブルにあったビールの苦味なのだろうか。

高校を卒業して上京して一人暮らしをするうちに憶えたビールの味は、子どものころの味とは変わっていた。それでも、一丁前に大人ぶってビール党を気取っていたりした。

■

ビールを愛してきた自分にも密かながら歴史があるのだなと染み染みと泡の香りを楽しみ苦味を飲み込んだ。

昔と変わったことといえば、この一杯をじっくり飲んでそれでオシマイにしてしまうことだろう。旨いものを旨いときに適切なだけいただく。

ゴクリと飲みながら、本当にムスメさん、味がわかったのだろうか？
そうだとすると、もはや追い越されているのかもしれない。

2014年10月 9日 (木曜日)【裏窓から】

小松菜とおあげ　―　霜降篇

（23日・霜降）

小松菜という野菜を
子どものころにはあまり食べていないように
記憶する。

それは、ひとえに、
母がその菜を好まなかったのか
はたまた、
わからないように姿を変えた料理にしていたのか

もうひとつ考えられるのは、
あまりのも当たり前の料理として食べて
名も知らぬまま口にしていたかもしれない。

ツマは、京都の人なので、
こういうものを作るときの味にはやかましい。

しかし、中学の卒業式の前日に
突如母を失ったこともあって
可哀想なことに母の味を完璧には受け継げなかった。

味とは受け継ぐことも大事だが
新しい我が家の味文化として拓くことも必要だろう。

そこには、気質（かたぎ）のようなものが脈々とあるのがよい。

ムスメはやがて出てゆく。

受け継ぐということの深い意義と美しさに気づくのかどうか
気づいたとしても
それはわたしが八十歳くらいになるころのことだろう。

bike-tourist.air-nifty.com > Apple 散歩(写真日記)

2014年10月23日 (木曜日)【裏窓から】

夫婦岩の月・秋の月　― 立冬篇

11月7日・立冬

立冬の朝はそれほどに厳しい寒さを感じることなく、家族もふるえることなく朝の挨拶を交わしながら、仕事に出かける支度をして、それこそ、いつもより30分ほども早い列車に乗れるほどのゆとりで家を出た。

外はやや冷え込んでいたけど、立冬だということはすっかり忘れていた。

それよりも朝の5時過ぎに月が西の山に沈むときの激しい輝きように驚いたので、そのあともドキドキが続いているような感じだった。

堀坂山の頂上付近に雲がかかり、月がその雲のなかに沈んでゆくのだ。

太陽のように赤く燃えないのは誰もが知っているし、真っ白に透き通るような満月の天空の姿も知っているのだが、その月が地平に消えるときの激しさというのは、天頂にいるときの物静けさとは全く違っていた。

もちろん物音は立てないのだが、月は、 山に激しく激突して怒りに燃えて山や雲を粉々に叩き割っているようにも見えたのだった。

あっという間に太陽が昇り、月は沈んで、空は朝を迎えた。

この今朝の風景には実は前触れがあって、きのうの夕刻に東の空に昇った真っ白の満月が神秘的で綺麗で、帰りの列車の中から洋上に浮かぶ真白の真っ白の月を見て、今までに見てきた晩秋の満月とはまた違っているなと思っていたばかりだったのだ。

やはり、11月の満月は、美しい。

▼水平線のまんまるの月見ながら汽車に揺られていた
▼十五夜は迷い道への誘いかな

ゆうべはこんなふうにつぶやきを残している。

❑

やや冷え込んでいるものの、まだ手袋やコートが欲しいわけではない。

コートを着るのはいつごろだったかな、12月のなかごろであったかななどと考えていると、マフラーを巻いている高校生などがスタスタと駅に向かって歩いていった。（太もも寒そうだった）

高校時代に母が編んでくれたマフラが長くて（もちろんそう要望したのだ）、ぐるぐる巻きにして駅までバイクを飛ばしたのを思い出した。

この写真は平成21年12月2日のものです。

2014年11月 8日（土曜日）【裏窓から】

コートと手袋 ―― 小雪篇

❏ 小雪

年が暮れてゆく。身の回りの整理もしなくてはならない一方で携帯端末のメモ帳にもたくさんの断章が散らかっている。

整理をせねばならない。面倒くさいという気持ちがあるけど、実はその陰にそのまま書きっぱなしで放置して、余りじっくり考えないままの宝にしておこうというような気持ちが潜んでいる。

▼冬来る父の命日近づきて

わたしにとって冬は凩容赦なく吹き付ける厳しい季節だ。12月13日にこんなことを呟いている。父が逝った1月22日という日は大寒の直後で県境の山脈からは北風が吹き下ろし、峠を越えて通夜に来てくれる人は毎年ごとにもこない寒波に言葉も凍らせていた。

愚かにもわたしは父がたった3週間ほど後に逝ってしまう運命であったことをこれっぽっちも予測できずに正月を送り日記には何も触れていない。

得てしてそれが平和というものだろう。呑気とも言えようか。
わたしもそういう平和のなかで許されるのならば死んでいきたい。

平成26年の小雪はそれほどの冷え込みでもないように感じる。しかしこれは朝寝をして布団のなかからの感想である。新聞受けまで小走りにトントンと駆けたときに見た庭の車の窓ガラスは一面が露で濡れていた。

きのうの朝、通勤列車のなかから窓の外を眺めていると線路沿いの田んぼがほんの薄っすらと霜のようなもので覆われていた。地面は冷え込んだのだろう。初霜なのかもしれない。

❏

コートと手袋はまだ出していない。

▼おはようと言い出せなくて金曜日

2014年11月22日（土曜日）【裏窓から】

いろはにほへと ―― 大雪篇

12月7日
暦の上で大雪で、冬至を間近に寒さ愈々。

時節のとおり全国の至る所を大雪が襲った。
伊勢平野では雪は降らなかったもの、真冬並みの凩が吹き荒れた。

▼凩 が吹けば楽器がモゾモゾと

1時間ほどだったが楽しく吹いてみた。久々。

▼友だちの半分くらいが雪に埋もれてる

コレを書いてその後に新潟のF君にメールしたら30センチほど積もってそのあとはやんでいるとあくる日に返事が来た。

▼人生は寄り道ばかり曲がり角

午後になって家族で買い物に出かけて
クルマをムスメに明け渡し
津新町から電車に乗って帰ってくることになり
いろはにほへと での道草コースとなった。

（バス帰り）

▼見つめ合って飲み干した時がラーメン時

2014年12月 7日（日曜日）【裏窓から】

何事もふだんどおりの冬至なり　―― 冬至篇

（12月22日・冬至の晩）

▼ いつの日か父と湯に入る冬至かな
12:38:17

▼ 小雪舞う追い焚き口まで柚子香る
12:56:42

▼ ゆず風呂に入っている夢のうたた寝
23:46:29

わはくま ― @wahaku

仕事を終えてエレベータに乗るときに一緒になった早苗さんが柚子風呂に入る話をしてくれた。むかしからの伝統的な習慣は守るような暮らしを心がけているという。

いつもどおりに快速列車に乗って帰ってくる。その話を思い出しつつ明るく華やかに瞬く無数のイルミネーションが車窓の向こうをながれてゆくのを見ている。

頭のなかでは、数日前からピックアップ課題にしているわたしの今年の重大ニュースと漢字１字が、答に近づかないままぼんやりしている。

もうそんなことはどうだっていいのだと思う心がある一方で、何かをある意思で変えようなどとしてももはや変える力などないのだとわかっていても、きちんとその時間を精一杯に生きることが大切なのだと自分に言い聞かせている。決して投げているわけではないのだ、と言い訳を心のなかで呟いているが。

柚子のお風呂に入るつぶやきが飛び交っている。父はこのような習慣やお祭り、習わしには非常に素直な人であった。柚子を手に入れてきて風呂に入れ、極楽気分を何度も味わっただろう。

子どもの頃に患ったせいで耳が遠かったから、風呂につかっていても物音らしいのが耳に届くと湯舟の中から「ええかげんやあ～」と頓珍漢な返事をしていた。「焚こかぁ？」（追い焚きをしよか～？）と誰かが声を掛けてくれたのだと察していたのだ。父は静かな柚子風呂にゆっくりとつかれたのだろうか。

薪の風呂は、理屈は分からないが、とても暖かい。非常に身体が温もるのだ。分からない理屈を色々と考えるに、薪を燃やす釜のなかに炭火が残るので、風呂釜全体がいつまでも保温されているからだろと推測する。

つぶやき句に書いたように柚子の香りを湯舟で感じたことは（架空の話で）実際には無いのだが、追い焚きをしてもらうと煙が窓から忍びこんできて蒸気と混じると子どものくせになんとも温泉気分に浸れたのを思い出す。

追い焚きをする釜の口は小雪が舞い込むような外ではなく風呂場の建物の中だったものの、寒かったことには違いない。薪の燃え具合を確かめるために釜を覗き込む顔がホカホカと温かかった。

2014年12月23日（火曜日）【裏窓から】

三十年という周期 ― 小寒篇

元日に襲来した寒波が一日二日息を潜めたと思ったが、再び勢いを増す気配だ。愈々寒の入りである。暑さより寒さのほうが我慢が可能でマシだとする気持ちがあるものの、低温というのは身体に大きな負担を掛けることは間違いなく、新聞の片隅に掲載する訃報欄にも御高齢の名前が目立つ気がする。

■

先日引用した「宮本常一が父から旅立ちの日に授かった旅の十ヶ条」のなかで

7番目にあげている
◎ ただし病気になったり、自分で解決のつかないようなことがあったら、郷里へ戻ってこい、親はいつでも待っている

8番目にあげた
◎ これからさきは子が親に孝行する時代ではない。親が子に孝行する時代だ。そうしないと世の中はよくならぬ。

そして、9番目の
◎ 自分でよいと思ったことはやってみよ、それで失敗したからといって、親は責めはしない。

さらに最後、10番目の
◎ 人の見のこしたものを見るようにせよ。その中にいつも大事なものがあるはずだ。あせることはない。自分のえらんだ道をしっかり歩いていくことだ。

言葉というのは安易に表出させてしまってはならないと思う。ここでみる文字が意味するものよりも遥かに大きく深く厚くて熱いものが隠れている。補足は不要だろう。

■

小寒が来れば寒の入り。ちかごろでは、七草粥やどんど焼きでもちを焼いて食べる習慣が消つつある。失くしてはならないと考えている人がたくさんいながらも消えてゆく。

子どものころに母が火鉢の前で編み物や手仕事をしながら「せりなずなごぎょうはこべらほとけのざすずなすずしろこれぞななくさ」と謡のように教えてくれたことが懐かしい。炭を放り込んで布団で覆う炬燵は昭和三十年代に姿を消したし、火鉢も時代を追って使わなくなった。（写真は一部ネットから）

進化の度合いが人の命の周期よりも遅いのであれば、平安時代、江戸時代の暮らしというように語り継がれるのだろう。しかし、高度経済成長の時代を二十世紀で終了させた現代では、いわゆる周波数（1／周期）が速くなっているのだから、そしておまけに寿命がドンドンと伸びているのだから、人々の心は追いついていけないし、社会も迷い道に入り込む。

■

去年は「結」（結ぶ）という字を当てはめておこうかと考えたりして迷っている間に年が暮れた。今年は、はて、どんな字を目標にするか。これまた迷っていると娘の結婚式まであと1ヶ月となりカウントダウンが始まった。

昔に書いたものに―2013年10月16日（水）

父の日記
■子どもというものは父や母の日記や行動や考えにはあまり感心を持たないことが多い例をこれまでにもいくつか見てき

た。

というのがある。子どもは親のことなど気にかけていないのだという静観的な所感だ。

ツマがムスメと離れるのでメソメソと淋しがっている。そのメソメソを見て、はたと気がついたことは、30年前に、またはその10年ほど前に、わたしたちの親がツマやわたしを自分の手元から手放したときの心情を思ったのであった。

父はわたしが18歳になるときにわたしを東京に送り出してくれた。ツマの父はわたしたちが結婚するときにムスメをわたしに託してくれたのだ。

あれから父は何通にも及ぶ手紙をわたしに送り続けている。ほんの一部しか現存しないのが残念だが、それはそれでいいのだとも思う。

三十年という周期は神秘的であり童話的でもある。長い長い物語がムスメにも始まるのだ。

2015年1月 6日（火曜日）【裏窓から】

ひの菜 ― 大寒篇

平成27年写真日記から

▼歳を食うきのうは大寒ひの菜食う

ひの菜は旨い。

毎年のことだが、この寒い季節には父の葬式に容赦なく吹きつけた凩への憎しみを思い出す。

もちろん、憎しみと言っても激しい憎悪の念ではない。葬式を行う最中もしぐれ雪が舞い冷たい風が山から吹きつけた。消えることなく燃え続ける焚き火を囲んでわたしは次から次へと事の次第を済ませてゆかねばならないで、忙しいも憎いも、それこそ哀しいも辛いも、何もなかったわけである。

何も憎むものなどなかったことにしてもあの冷たい風だけには参った。結局のところ風邪をこじらせて1週間寝込む結果になった。

まさか、逝ってしまうのが突然やってくるとは想像もしていなかっただけに、哀しみは随分とあとからやってきた。出来のよい息子ならオヤジの逝くときくらい察しがついて仕事のことなど放り投げて来るところなのだろう。わたしはアホな息子であった。おとうも察しがついていたことだろう。

■

わたしの場合は真面目といえば真面目であるが、あとから考えて馬鹿がつくような真面目さだったなと大きな後悔をした。詰まるところ、会社という実態のない亡霊のようなモノに見事に魔術をかけられ、飼い犬のように使われ都合のいいように行動や思考を抑制されていたのだと、冷静になって考えれば気づく。

仕事をいい加減にしろというわけではない。家族の一大事に何を根拠に仕事などに誠意のようなものを見せていたのか。自分に腹が立って仕方がなかった。会社という巨像はのちに美しい理由を大義名分に掲げて10万人の社員のうちの3万人近くを人員整理をするのだ。パーな会社であったのだが、その喘ぎに今なら笑い飛ばしてやるだけだが、あのときはそれさえもできずにいた自分も悔しい。

パーな奴らの話をすれば紙面が腐る。やめよう。

■

父は死んでしまう数年前にハッサクと夏みかんを畑に隣どおしに並べて植えた。その木が屋根を越すほどに大きくなって、実がなると軽トラックで貰いに来てくれる人があるほどまでになった。

今年のハッサクは旨い。食ってみてすぐに分かる。旨いと嬉しい。

ハハがひの菜を漬けて「持っていくか」というので何の遠慮もなくもらう。もう今年にもらうひの菜が最後かもしれないと思いながらもらってくる。

いなり寿司、味ご飯、味噌汁、お雑煮、ひの菜、その他にも漬け物の数々。それらの味を受け継げなかったものが多すぎる。

2015年1月21日（水曜日）【裏窓から】

温い日寒い日　―　雨水篇

新・写真日記（27）

これから書きます。雨水はきのうなのに（毎度のことか）

この【裏窓から】を書くのが結構楽しみであったりします。半月に1回という時間に静かに物事を考えるのが心地良いのです。

図書館に予約を入れておいた本が届きました。金子兜太さんの「他界」です。少し前に金子兜太さんの語る 兜太 ― わが俳句人生 金子兜太を読んで以来、カリスマ的に手が伸びていってしまう。

二月になって節分・立春とトントン拍子に時間が過ぎ、ムスメの結婚式をするころから随分と春めいてきた。バレンタインの朝は北勢地区でも薄っすらと雪が積もったものの、暖かくなりつつ在るのを感じる。

きのうの通勤列車で前の部長と隣り合わせになり、月なみに温かいですねと声を掛け合う。言いながら風は冷たいからちょっと軽はずみな挨拶であったかと反省したが、部長はすかさず「日差しが暖かいなあ春めいてきたわ」と相槌を打ってくださる。

なるほど、上手に言うもんだなと感心して、じわっとその意味も実感として迫ってくる。日の出は早くなったし、日暮れも緩やかに遅くなってゆく。手袋をしないで歩いている人も結構見かけるようになってきているし、春は一気に加速するのだろう。

金子さんの本を雨水の日から読み始めたことが、別に取り立てて珍しい訳でもないしニュースになるものでもないのだが、そのことを書き留めておこうと思うのだ。本の中身にワクワクしているからかもしれない。春とはこんなものなのだろうな。

〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

登るたび軋む階段冬終る　砂女
（砂女さんブログ1275から）

――

忘れていたものを思い出すかのようにときどき脳裏にリフレインされて来る言葉のひとつに「全力」というのがありまして。

その全力を出し切ってどこかを走り抜けたあとなどにくる満足感のようなものをこのごろは感じることがなくなったなと自分を見つめて思うことがあります。

実はムスメを嫁入りさせて再び家族は二人になってしまったのですが、その旦那さんが桐生で4年間も学生をしていたという話を聞いて、なんの意味もないのですけど、このブログを思い出すのですよ。ささやかなるご縁とでも言うのかね。

登るたび軋む階段冬終る。これを拝読しながら、先日ふとしたことで図書館で借りた八田木枯という津市出身のかたの句を連想的に思い浮かべたのでした。

近頃は、全力でがむしゃらに生きようとしなくなったわたしでしょうけど、軋むものを上手に受け入れて、終わると見せかけて新しく始まるモノを楽しみにして生きていくコツのようなものが身につきつつ在るのかなとか。

日差し長く雨水がすぎて二三日 【裏窓から・号外】

2月のなかごろに送ったメールマガジンに八田木枯の句を幾つか載せた。俳句のことをどこまでわかっているのか怪しいわたしがそんな大それたことをというような気持ちもあるが、読んでいる人の心をわたしからのパワー以上に揺さぶれるならそれでいいとも思っている。

○○○○○○○○○

この巻頭を書いているのは1月の暮れのことで、しとしとと降る雨がいつ雪に変わってもおかしくないようなお天気が続いています。

季節を先取る友人がロウバイの鮮やかな黄色い写真を送ってくれたり蕗のとうを見つけたと便りをくれて、まことに如月という時期は、ひたすら春を待つ人々のワクワクする息づかいを肌身に感じながら、季節が目まぐるしく変化する一瞬でもあります。

このメールマガジンは1シーズンに3回発行します。目をこらして自然をみつめて、ある一瞬だけの素敵な話題をみなさまに届けたいとも思いますが、やはり、それが花が咲くとか実が成るというような話題となれば、あっという間にチャンスは過ぎ去っていますので、素早い変化を捉えるのは難しいです。

やはり、メールマガジンには俊敏性よりも、しっかりした情報をじっくりと届ける役目も担って、おしゃれなファッションを毎週末に手頃な価格で販売するショップの広告のように、生活の一部としてメルマガを待っていただけるようになればいいな、と思ったりしています。

そういえばメルマガの巻頭で取り上げる一句を待っていてくださる方に声をかけられたことがありました。今月は八田木枯の句をお届けします。

落つばき眞新しきを踏みにけり　　八田木枯

❑

とんとんとやって来る春を歓ぶ一方で、冬をじっと受け止めている一句がありました。

いつ来ても枯野にのこる汽笛の尾　　八田木枯

津市出身の俳人・八田木枯（はった こがらし）の句です。作者は昭和初期に津市に生まれ平成24年まで活躍した人で、この句は昭和63年ころの作品です。

汽笛は紛れもなく汽車のもので、枯野は鈴鹿の山々を突き抜けてきた凩が吹きすさぶ伊勢平野のどこかでしょう。昭和から平成に変わりゆくころにはすでに蒸気機関車（汽車）は走っておらず、瞼に浮かべているのは昭和初期に枯野を走りゆく列車の姿であったのではないでしょか。

粉雪を運んでくる冷たい凩も、やがて緑の麦畑の上を吹く優しい風となり、春には花を咲かせてくれます。

八田木枯が、この短い句のなかで「いつ来ても」という言葉が持つ長い時間をさりげなく使っています。短い言葉であっても、この平野の凩の冷たさを感じながら暮らす人々の心が今の私たちにも伝わってきて共感を呼びます。

もうすぐ春ですね。

春を待つこころに鳥がゐてうごく　　八田木枯

○○○○○○○○○

わたしたちは、春を待っている。

▼日差し長く雨水がすぎて二三日

午後のひとときに物干しに差し込む日差しが白く明るく輝いているのをつけて、そのときの時刻を確かめながら春を感じた。

バルセロナから 2015年2月10日（火)にLINEで届いた写真を見ながら、まだ寒い冬ではあるが、この時期に旅をしているのもひとつの幸運なのだと思う。

この先の未来、どのように社会が変化し技術が進歩を遂げるかは全く想像域を超えている。30年前に私たち夫婦が二人で旅をしたパリもすでに歴史の中だ。あのころよりも格段に向上したジェット機で地球を横切れば半分くらいの時間で日本から現地まで一気に飛べる。それが当たり前で大昔からだったようなくらい常識化されている。

9日から19日まで（日本時間）の旅を終えて新しい生活が始まっている。幾つかのハプニングがあった話も断片的に聞いた。お話を面白おかしく聞けるレベルでよかったよかった。

三月は異動。四月は選挙で大忙し。春がざわめくのがこんなに嬉しいのは久しぶりのことだ。

2015年2月21日（土曜日）【裏窓から】

いつもと同じ春、いつもと違う春　―　啓蟄篇

新・写真日記（27）

６日は啓蟄

むかしむかし―それは結婚したばかりか、子どもがよちよちだったころとか―そんなころを回想しておりますと、あれこれれと涌き出てくるものがあります。

啓蟄という言葉をラジオの歳時記のような番組で紹介しており、アナウンサーがその意味をわかりやすく解説していました。つまりは、春になって虫たちが蟄居から這い出してくるというような話だったわけです。何を感じたのか、その自然の生業に目を向ける質素な暮らし目線での日常がとても新鮮に感じられ、それ以来季節の移ろいが気になるようになったのです。

自分の力でグイグイと人生を突っ走っているかのように思っていた時期がありました。勉強をして試験を突破し知識を得て自分の筋書きのように仕事を進め余暇に至っても自由に我が身の好きなように勝手気ままをしていたひとつの時代です。みなさまのさんざんお世話になって助けてもらってきた。そのおかげで今があるのだと気付くのは随分と後になってからです

子どもは私よりも三十年後ろの時間軸を歩んでいきます。私は父より二十数年後ろの時間軸を歩んでいる。あのころはそんなことなどこれっぽちも考えなかったし、気付くゆとりもなかった。当然、子どもに対してもそんなふうに考えて明確に未来を構築する手立てを打っているわけではなかった。

正しい方法や選択手段が他にあったかもしれないと反省をする一方で、そういう日常が間違っていたとまでも言わなくてもいいようにも思います。一生懸命にそれこそ全力で子育てをしてツマと二人三脚で三歩進んで二歩下がるような暮らしをしていました。

贅沢と言われるようなこともしていました。不義理なこともしていても気付かずに横着な生活をしていたのでしょうが、それを何ひとつ必要以上には叱ることもなく大きく見守っていた父は二十数年先を歩んでいる自分の道から遙か後方のさらに三十年先にいる孫の世代までお見通しであったのだろうと思うと、正直、親子でありながらこんな恥ずかしい思いはありません。

これから死ぬまでの間、大勢の方々や社会に恩返しをしなくてはならないステージなんだと考えています。

今年は未年ですから父が生きていれば八十四回目の春を三月二十日に迎えたことになります。六十六回目の春を迎える直前で逝ってしまったので、還暦が近づいてやっとのことで父に追いついて手が届く付近まで来ることができ、そんな今に思うと、さぞや心残りであったことだろう、ということがわかってくる。

ツマの母も四十年前の三月十四日に無くなっています。中学の卒業式を翌日に控えた日であったとツマは話します。

逝く人があれば生まれる人、新しく一歩を踏み出す人もいます。ウチの娘さんもその仲間のひとりです。生活道具が全く揃わない一部屋のアパートに移り住んで十日ほどですが、「まずまず」の暮らしが動き出しているようです。

金子兜太さんは「他界」のなかで、逝ってしまう人はもう一つの世界に移ってゆくだけで魂までもが消滅するわけではないのだとおっしゃる。新しい他界で人生を始めるのだから、つまりはこの世には終わりという概念はなく始まりばかりだといえましょう。

そういえば、春は卒業の季節。思い起こすとお別れは確かに淋しかったけど新しい天地で次の出会いやチャレンジが待っ

ていると思うと泣いてなんかいないで、はしゃぎ回って飛び跳ねていたような記憶もあります。

五十年を回ったころから人生を見つめる目に変化が出てきたように思います。それは良いことばかりともいえませんけど、私は喜んでいます。ツマは私のそういうモノの見方に、考え方の後退だとか怠け者になっしまう、生活水準の低空飛行に理屈をつけているだけだなど手厳しく申します。ご隠居するには早すぎましょうが、子どものころなら五十五歳の定年は当たり前で六十過ぎて没してしまうなんてのはざらだったのですから、何もそんなに欲深く生きて行かなくてもいいように思います。

庭の片隅にロウバイを植えました。花が咲くのは来年か再来年の春でしょう。むかしはそのようなゆっくりに進む時間を受け入れるような心のゆとりがなかった。

ほんの五十年ほど昔には、母の背中に袢纏でぐるぐる巻きにされおんぶされて、麦踏みの田んぼでヒバリの声を聞いていた時代があった。

母は私がヒバリをさして「るりるりが鳴いとる」と言ったものだと回想します。「るりるり」は私と母だけの共通の言葉なんです。誰にも受け継げない言葉です。

2015年3月 7日 (土曜日)【裏窓から】

おひっこし ― 春分篇

新・写真日記（27）

◎〇◎◎◎

水ぬるむ春分に―塵埃秘帖春分篇 の随想を書いてから丸々6年の歳月がすぎる。

その年ごとに思うこと感じることやそのアツさ加減も違ってくる。いつもどんなときも全力で生きていることに間違いはないものの、あとになって思えば力の入れ具合が下手であったりもう一つ敷居の隣にあった考えでも良かったかもということもある。

失敗はつきものだ。

❑

（追記分）

作成中としておいてムスメの引っ越しに出かけた。この子が生まれる前に建ったというアパートだそうで、相当に古いモノが各所に伺える。なんぼかの住宅手当のような補助が出て、家賃の何割かに当てるという暮らしがこれから続く。

新婚のおりに二人で住んだアパートを思い出しながらツマとあの頃の暮らしを振り返ってみる機会がこの引越に行ったことで生まれた。お風呂は種火点火をする方式で、追い焚きもできるというのは画期的で新しいお風呂給湯システムだった。台所にもお風呂の給湯器からお湯を送れた。種火の扱いには注意が必要で、長時間つけっ放しには特に気を使うことなどを教わった。次に引っ越しをしたアパートはもう少し進化した給湯システムで種火方式に変わりはなかったが、点火も楽になり使いやすくなっていたが、台所にはお湯は出なかった。

人は不便を直接体験してより暮らしやすいデザインや技術を開発してゆく。今の子どもたちの頭のなかに描いていたお風呂の給湯システムのデザインや技術が30年以上も巻き戻ったことになることを、気の毒だと思いながらも、非常に価値のある体験であるかもしれないと思うような者はわたしくらいかもしれないが、決して間違っていないと確信している。

2015年3月22日（日曜日）【裏窓から】

照れる膝小僧 ― 清明篇

今日こそは履くぞと決めたスカートを鏡に映し照れる膝小僧

❑

たびたび、それもおおかた忘れかけたころにふらりと出かけて何もしないできょろきょろと眺めてしっかりと作品も読まずに足あとも残さずに帰ってくるのだけれどそこに在る言葉のひとつひとつがとても心にひっそりと残るブログがある。

もともとはイラストが目に入ってその（失礼だが）素人っぽいタッチが若さとか大人びたとかそういう一線上にない輝きを持っていて立ち寄ったのだった。

❑

ブログは
　それはそれは　短歌と、日々と、普通のごはん。
という。作品は「照れる膝小僧」という記事からお借りした。

❑

わたしはこの照れる膝小僧というモノをぼんやりと思い浮かべた。何事においてもそうであるのだが、照れるという瞬間は美であると思う。その美のなかに隠された強い信念や意志であるとか、突き進んでいこうとするパワーの源があるのではないか。堂々として自信に満ち照れないのも大いに結構であるものの、照れたりはにかんだりする姿勢というのは狡そうだと悪くいう人もあろうけど可愛さがあってどうしても好きなのだ。

その膝小僧である。理屈の話はするつもりもないしそもそもできないから、感覚でモノを言うと、短歌というのは俳句と比べて14文字も長いゆえに、はっきりしていてそれぞれの質が印象を大きく変えてしまう。俳句ならば、

今日こそはと決めたスカート照れる膝小僧 （それでも長く、これは俳句ではなく）

この歌からどうしても消したくない言葉を拾い出して並べただけである。しかしながら、17音しか無いのだからコレをどうにか弄り回すしかないだろう。そのうちに段々と物語の情景が薄れていってしまって17音が完成するころには人それぞれが勝手気ままな想像をしているかもしれない。でも、この想像が好きでわたしは31文字の世界には行けないでいるのだが。

❑

けさ、つぶやきブログに
　花筏あんたのことが好きかもしれへん
と書いてみてこのあとに

　あなたもわたしを好きになってよ
とか
　恋しい二人はここでお別れ
とか
まあ好きな様に物語を作ってぼんやりと戻ってこない昔を思い出していたのだ。

思い出していると憎しみと愛しさが半分ずつくらいだったひとりのオンナを思い出した。あのオンナとは琵琶湖疏水のほとりのしだれ柳のそばで出会ったのだった。

きっと歌人という皆さまはわたし以上に辛い恋をしてきているのだろう。辛ければ辛いほど、ひとときに照れて美しくなれるのだ。そこには哀しいと言ってはならぬ歴史がある。

2015年4月 5日（日曜日）【裏窓から】

バッタリ ― 穀雨篇

▼日曜日の夜に眠りにつきながらツマとひとことふたこと言葉を交わす。
・明日は月曜日仕事に行くの嫌やなあ…
・むかし会社にいた頃はそう思う日が何度もあったなあ…

▼あのころは仕事が嫌というのではなかったものの激しい圧迫感の中で生きている表現のしがたい緊張に纏われて日々を辛いと思い生きていた。

▼もちろんそこを生き通したおかげで今があるのだ。もしもあのときに挫折していたら自殺するか家族を棄ててどこか遠くへ逃避してたのだろう。

▼逃げるとはそいう道しかなかった。そこで、もしも一人で生きている身だったならば「人生などどうなっても良い」と思ったに違いない。

▼だが、現実はそのようには展開しなかった。要約して結論づければ、ツマとムスメと親がいたから粘れたのだと考えて良い。

▼ここで、三つ目にあげた親というのが重大な要素だ。親というのは、現代のように入学式や卒業式さらには入社式にまで参上するような親をいうのではない。親という物理的な実体ではなく、一種のカリスマ性を持った鬼のようなものだった。

▼鬼といっても棍棒を持って目を光らせるものではない。孔子のようであり親鸞や日蓮のようであり小学1年生のときの担任の先生のようでもある。そしてそれは心の中で鬼として存在したのだった。

◎◎

▼今は仕事に辛さを感じることもなければ逃げ出したいと思うこともない。理由は簡単である。いつでも逃げられるし嫌ならやめればいい。

▼そう言ってみるものの生きてゆくために選択手段を天秤にかけることはあってそれはそれでストレスである。死というはっきりした到達点が見えて幸せとは何かというものが昔よりもはっきりと実像化してきたこと。さらにそれほど強欲に生きても無意味であることに気づいてきたことなどが肩から荷を降ろさせてくれた理由だ。

▼若いときはそうもいかない。植物だって成長する真っ盛りが在るのだからニンゲンだって同様に無茶をしてでも大きく成長する必要がある。温室で育つか荒野で育つか。十分な雨水に恵まれて大きくなるか。自然の寒暖差の刺激も受けるか。

◎◎

▼ストレスが著しく減少して爺（ジジイ）として厚かましくなってきた。高価なものが欲しい便利なものがほしいなどという欲目もなくなってきた。ビンボーで好きな様に生きている。遺書はないが言いたいことはおおよそ書いた。いつ死んでもいい準備ができた。怖いものはない。

▼否。1つだけ怖いものが在る。地獄のような苦しみで生き続けることだ。逝くなら即座に逝きたい。

◎◎

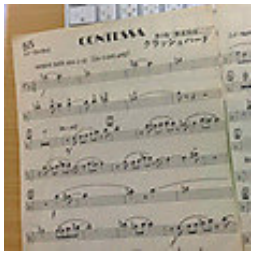
▼三十代のころに仕事に燃えて国産初、超一流の声に讃えられて数々の発明に関わっていたころ、今考えれば相当に大きなプレッシャーを背負っていたのだなと思う。今だからなおさら冷静にその姿が見えてくる。

▼ではあのときのわたしは可哀想だったかというと（結果論であるが・生き抜いたから）あれはあれで必要だったのだと思う。大事なことは生き抜くこととひとときたりとも夢を棄てないこと、そしてその夢にむかって進もうと努力することだ。

▼人は前進するために様々な力を必要とし知恵も出さねばならない。夢に到達するまでの企画力であるとか日々の実行力や行動力も不可欠だ。そのように目標を達成するためにあらゆる人がその手段を分析し明確化し手順化してきている。実践的な手法があれば精神論もあるし催眠的なものも在る。心身ともに鍛えるわけだがそこになかなか完璧には出会えない。パラドックス的に言えば完璧であればこそ未完成なのだし。

○

新・写真日記（27）



▼4月20日は穀雨。雨降りの月曜日となった。確か先週の13日14日（月曜と火曜）も傘のいる天気で、2週連続で週のはじめの2日間に傘をさした。

▼雨を憎んでも仕方がないが、中旬の雨のあとには水田に水が張られ休日には一斉に田植えが始まったので何となく気分がウキウキ。3月末に挿し木をした雪柳がまだ枯れずにいる（これは挿し木の技術も知識もないのでさほど期待していない）雨を喜ぶ人だってあるわけでぼやいてばかりもいられない。

▼そうだ。雨降りでしょぼんだったけれども、帰りの駅でいつも会う名も知らないのに通勤時に決まっていっぱいお話をする友だちになっちゃったおねえさんに、久しぶりにバッタリ会ったのだ。
「忙しそうですね、もう会えないかと思っていましたよ、こんなことなら連絡先を聞いておけばよかった思っていたのです……」
「残業で忙しかったのですけど、大丈夫、またこれからこの列車に何とか乗れるから」
そういってかわされてしまったのだった。

▼ちょっとしたストレスかも知れない。

2015年4月22日（水曜日）【裏窓から】

旅をしたカンナ街道を色褪せて ― 立夏篇

新・写真日記（27） から 2015年5月 7日 (木)

5月6日は立夏。

逃れることのできない夏が到来する。逃れられぬといえども必ず秋が来るし冬に成ることがわかっているからこれまでの長い歴史の間でも夏を許してきたし辛抱してきている。

ツーリング全盛期は夏を嫌いだと思ったことなどなかった。80年代から90年前半のころだ。

もちろん今でも夏は嫌いではない。だが、おデブになったしバイクに乗って旅をすることもなくなったので夏を歓迎することはない。

そもそも、人間は生理的に少し寒いめの暮らしが健康的ではないか。食欲も出るし心地よく快適に眠れる、魚や野菜などの食い物も旨いものが多い。

◎◎
○◎

さて

大型連休（GW）には京都・別邸に出かけていました。別日記のとおりです。

嵐山を散歩し「嵐山 よしむら」で蕎麦を食べて、帰りには伊勢丹の地下（デパ地下）で弁当を買って電車に乗った。

クルマで出かけることが減りました。かと言って電車に乗れば必ずビールということもない。ぼんやりと車窓を見ている。音楽も聴かないしスマホで暇つぶしも殆しない。

自分の体内時計が20年前、さらに40年前と比べると、まったく違う周期で動いてゆくのを感じる。

実は、二人で嵐山に散歩に行く前に嵯峨野六反田あたりに行ってみようという案があった。何もない場所で懐かしいだけなら「まあまた今度でもええわ いつでも行けるし」となって、日射しが暑かったこともあって、あっさり見送り。

京都を離れたのは90年のことであるから25年を迎えることに成る。82年と90年に屋上から撮影した写真が残っているはず。探しば見ればとても懐かしい。

しかし、技術は今もめまぐるしく進化し続けていく分、情報の貴重さは軽くなってゆくのを感じる。

子どもたちは自分の映った動画にもあまり興味を示さないし、子どものころの記録にも当たり前すぎて感動が薄いみたい。わたしがそう思うだけだろうか。

社会や暮らしや技術など、あらゆるものの変化を微分/積分して捉えることが、今の時代だからこそ大事なんだと思うのだが。

◎

しかしながらここで、そんな話をいくら熱弁したとて、理解してくれる人もなければ、その気になって聞く人も居ない。(そんなもんなのだろう……)

この疎外感のような余韻が、かつて日本が激しく進化した時代をモーレツに生きぬいてきた人々にとっては、とても歯がゆいことなのだ。淀んだような「幸せと豊かさ」から抜け出て羽ばたこうとしない今の若者がとても「トロ臭く」見えてくる。

それは同様に政治にもいえる。政治家に昔の真面目さや真摯さはない。とくに最も先頭を行く人の考え方や実行手段に貧しさを感じる。魅力に欠ける。

◎◎
◯◎

蕎麦どころ「嵐山 よしむら」での待ち時間は1時間半ほどだった。そこでムスメさん夫婦は大堰川でボートに乗ることにしたので、わたしらは、西高瀬川・取水口の前にある木陰で時間を潰すことにした。

ボート遊びを遠くに見ながら、旅人だった時代を思い出す。堰で遊ぶボートを木陰からぼんやりと眺めながらあのころを思い出すのだ。

夏が始まると旅心が抑えきれなかった。ストレスの発散だったかどうかは不明だが、休みには無鉄砲に家を飛び出し、あっという間にGWの10日間を走りきった。カンナが咲いていた国道や山藤の香る街道の峠は、今はどんなふうに変わってしまったかなあ。

そんなむかしを思い出しながら川の畔に居たのだった。(6日)

堰の向こうの山伝いの道を見ながら、下駄の鼻緒が切れた話をツマが突然(思い出して)し始めたりする。

あのときに買い替えた下駄はいつの日にか半分に割れてしまうドジをして棄ててしまった。その残念さまでもがリアルに蘇ってきた。

2015年5月 9日 (土曜日)【裏窓から】

車谷長吉 追悼　再読 ― 小満篇

　闇に光る小刀の迫力車谷長吉さんを悼む
と題して万城目さんが追悼を書いている。

❏

（記事から引用）
二十のころ、私はだいたい気分が暗かった。将来、何をしたらよいのかさっぱりわからず、だいたいぽかんとしていた。そんなとき、車谷さんの小説が身に沁みた。

言葉のとおり、ページに印字された文章が目から溶けて、血液へと流れこむのだ。その成分はおもに毒だった。毒が血肉に心地よく沁みこむ。本を読んで、そんな奇妙な生理的感覚に陥ったのは、あとにも先にも車谷さんの文章だけだ。

小説のなかで、どうしようもない人生を送る車谷さんが描く主人公に、私は憧れた。お前のしょうもない悩みなんぞ、ゴミのようなものだと思い知らせてくれる、暗闇に光る小刀の迫力がそこにあった。

（大幅に省略）

❏

わたしも感想を書いたときに

この作品が私を捉えて放さなかった理由は、この小説の根底を流れている生き様と、そんな寂れた人生がもたらす偏屈な眼差しと、日々の出来事に触発されて狂うようにいきり立つ感情の根源のようなものが、あまりにも私の人生と重なり合ったからだろう。この作者は、私のひとつ前のステージを走っているもうひとりの私ではないのか、とさえ思えてきた。（感想文）

というようなことを書いたが、車谷さんの作品には、心のなかまで震わせてくれるような波長があったのだと思う。

現在、またまた文庫を読んでいる。付箋を新しく用意して読んでいる。
結末を思い浮かべるともうその時点で泣けて来るから困る。

❏

69歳だったそうです。19日の日記には、

車谷長吉さん、食べものを喉につまらせて。
なんとも、最後まであなたらしい。
寡作でしたが、素晴らしい作品、ありがとう。

と書きましたが、

人生ってこんなもんなんやな
これでいいのだ

とささやくことが増えています。

物理学で定義するような時間軸の上で、他人があれこれ言うような周期に合わせた生き方を避けて、自分を見つめて生きてゆく。難しいのはわかっているけど、やってみなくてはならないでしょ。

天声人語（5月20日）

修行僧のような風情と言われることもあるが、失礼ながら筆者は任侠（にんきょう）の世界に属する人の匂いを感じてしまった。作家の車谷長吉（くるまたにちょうきつ）さんが文壇に登場した時に受けた印象である。ごく短い髪、鋭い目、こけた頬に、どこか捨て身な気配が漂っていた▼30代の大半、関西を転々として過ごした。料理場の下働きなどをしたが、極貧だった。「泥の粥（かゆ）」をすすって生きるような「世捨て」の時代だ。この経験がなければ「物書きという無能（ならず）者」にはなっていなかったと振り返っている▼金貸し一族の物語「鹽壺（しおつぼ）の匙（さじ）」を表題作とする作品集で三島由紀夫賞を受けた。時に47歳。自分自身の骨身に染みたことを、骨身に染みた言葉だけで書く。反時代的と言われようが、私（わたくし）小説でおのれの存在の根源を問い、代表作の『赤目四十八瀧（あかめしじゅうやたき）心中未遂』に結実させた▼変人といっていいのだろう。「私は原則としてズボンの前を閉めない」と書いている。原則、の2文字がなんともおかしい。48歳の時に結婚した詩人の高橋順子さんから「卦（け）ッ体（たい）な人」と呼ばれたのも無理もない▼本紙「悩みのるつぼ」の回答者としても異彩を放った。小説を書きたいという相談に、善人には書けないと答えた。作家は、人に備わる「偽、悪、醜」を考えなければいけないのだから、と。それは車谷さんの自負だったろう▼5年ほど前に書いたエッセーに「あと数年で死のときが来るので、その日が待ち遠しい」とある。予感があったのだろうか。69歳での旅立ちだった。

2015年5月21日（木曜日）【裏窓から】

傷跡 ― 芒種篇

平成27年写真日記

6月 6日（土）

これから書きます、がはは。

きのうは、これを見るために博物館に行ってきました。

詳しくはあとで。2015年6月6日

2015年6月 7日（日曜日）【裏窓から】

戦争のキズあと

6月6日

三重県総合博物館で
「みんなの近くにも戦争のキズあとがある」
という展示（入場料無料）を6月6日から6月２８日まで開催している。

これを見に行きましてん。

感想は後ほど書きますが。

共有:

ペンを置いたまま ― 夏至篇

写真日記（平成27年版）

夏至の日にペンを置いたままである。

土曜日（20日）と野菜がとれたので取りにおいでと電話があって運が悪いことに家に着いてからかけてくるからなんと気の利かない母だと思ってみるものの今に始まった事ではないしふだんからそんな細かいことに気を使って生きていない証拠でもあるのだろうと意味付けて考えてみると腹が立つこともない。

しかし、せめて帰り間際までに連絡が届けば仕事の帰りに寄ってくることができるのだがそんな私の都合のことは一度か二度か何度もか聞いて知っていてもナスビがいっぱい採れたのが夕方だったのかもしれないしインゲンだってそうかもしれないのでやはり人生というのはそういうもんだろうと思うことにする。

父が逝った時と同じように亡くなりましたの電話一本が後から届いて私はあたかも覚悟して準備ができていたような顔をして出かけることになろうと思うとおかしくなってくるのだ。

待っているわけでもないしそんなものを待っている人がこの世にいるとも思えないのだがそんな連絡がいつ届いても不思議ではないのだから夏至になって夏になる準備を着々とするだけである。

あくる日の日曜日に母を訪ねて博物館に連れて行ったりクチナシを挿し木にしておいて欲しいと頼んでその後にナスビとインゲン豆とピーマンと玉ねぎをトランクいっぱいになるほど積み込んで家に帰ってきた。

ピーマンを調理するともう何年も昔から消え去ってしまった本物のピーマンの味がしたのでふだん食べているスーパーの（大量生産の）野菜は偽物のくせに本物の顔をした野菜なんだとつくづく思い昔の味を懐かしみながら食べた。

もちろんナスビもインゲンも夏の味であるからやっぱし夏至が来ているのだ。

▼夏至すぎて二三日目に初なすび

こんなのを書いたのは24日になってからだった。

2015年6月25日（木曜日）【裏窓から】

七夕や星なき夜やカレーなり ― 小暑篇

きのうの話（６日朝）

駅で毎朝会う女子高校生に「試験終わった？」って尋ねたら「ハイ」って言ってた。
「夏休み 楽しみやな」って言うたら「うん」って。
この子は中学の時から駅で顔を合わす子。中学の入学の時にお母さんに連れられて、成長期だからダブダブの制服着せてもらってピカピカの鞄を持って不安そうな顔で汽車に乗っていた。
あれから5、6年か、そのころから知っているけど名前も知らん子です。
大きなったな、と思います。
それだけですけど。

駅に乗り降りするのは数人だし、ぴったしの時刻の列車は１本しかないから、特に理由がない限りは大体いつもの人たちは顔を合わせます。行きが３両、帰りは１両で出口は1つ。

テストが終わって夏休みになるので嬉しそうな笑顔だった。けど、受験勉強もしなアカンから忙しいのだろうな。

今のところ冷夏なので少し助かっているかも。

▼　七夕や星なき夜やカレーなり

またまた雨降りの七夕さんでした。
受験生のころって夜空がとてつもなく神秘的だった。

▼　月見草人里はなれて君を待つ

小さな花を道ばたで見つけた。
夏は黄色い花がよく似合う。

写真日記（平成27年版）

2015年7月 7日（火曜日）【裏窓から】

ソーダ水　― 裏窓・番外

私は冷たい麺類が大好きで、夏になっても美味しく食べ続けますので、夏バテという言葉は全く無縁です。好き嫌いも全くありませんので、四季折々の味覚を美味しくいただいて、モリモリと成長しております。

もうすぐやって来る土用の丑の日には鰻も食べます。県内ではなかなか手に入りませんが、鱧も好きで遠くまで買いに出かけたりします。

夏をそれなりに楽しみながら感じることは、楽しもうと思えば思うほどに子どものころに食べた美味しかった食べ物やお菓子に戻って行ってしまう、ということでした。スイカ、かき氷、冷や麦・冷そうめん、ソーダ水…。

文明が進化しても涼しさを呼ぶ夏の味はそれほど変化しないのかもしれません。

一生の楽しきころのソーダ水　　富安風生

7月号のメールマガジンのあとがきにはそんなことを書きながら、何十年もの変遷がもたらす味覚の変化や食べ物に対する執着心そして満足心のようなものも、ずいぶんと姿を変えてきてしまったと振り返る。

成長してゆく真っ直中で自分の身体の中に染み込ませていった味とか習慣というものは、容易く変更してしまうことなどできず、好き嫌い旨い不味いなどの感覚に基づくものは他人の忠告や刺激でさえ役に立たないほど頑固であることが多い。

それでいいのだと思う。

政治の方も揺れている。今決めたことは20年30年後になって不安から現実課題へとかわり問題となって人々を困らせたり悩ませることになるだろう。

新しく選挙権を得て勇んで投票をした人々は人生の半分以上を終えたころにあの時の人たちが叫んでいた声の本当の意味を知る。

歴史はそういう長いうねりで躍動している。

「一生の楽しきころ」はたった一回しかないのかもしれないが、間違いなく次の世代に伝わっている。少しずつ姿を変えて伝わってゆくのは仕方がないことだし、何が善くて何が悪いのかは、更にその後の歴史が吟味することになろう。

このうねりを楽しみながら人生の最終コーナーを心地よく走り終えたい。

2015年7月15日（水曜日）【裏窓から】

エアコンを取り替えました ― 大暑篇

7月23日は二十四節気の大暑にあたり、いよいよ夏もこれからで覚悟をせねばならない時期です。

この日は朝から空模様が不安定でしたので、雨の合間にすいっと駅まで行ってしまおうと考えましたのに、途中で霧雨に降られて折りたたみ傘をカバンから取り出しました。

空気は じめっとしていましたが、かんかん照りよりは暑くはないので、朝のうちは少し助かったのかもしれません。

その雨も朝のうちにあがって、夕方に家に帰るころに晴れ間が出ていました。暑さは少しずつ襲ってきそうな気配で、天気予報も晴れマークばかり。

夜半になるとじりじりと蒸し暑くなっていきました。台風12号が近畿地方には来ませんでした。

朝のうちの天気予報を見ると雨の確率がやや高めだったこともあり、ツマは前倒しで買い物に出かけてしまったようです。簡単な買い物で済ませてしまいたいと話していたとおり、おゆうはんは冷蔵庫の在庫野菜で作るカレーでした。

大暑ということで「裏窓から」を書こうと思っていました。何かをするときも何処かを歩き回っているときも何の話を書こうかを考え続けているので、きのうきょうあたりはぼんやり顔であったかもしれない。

様々な思いが湧き出てきては消えていきました。でも、ことさらこのごろは平和な日々で、ムスメのつわりがひどいという話だけが気の毒で心配です。

❏

24日は今夏1回目の土用の丑の日です。

夕方のウォーキングから帰るときに通る鰻屋あたりでは、ガードマンが駐車場整理に当たっていて前の道路の車もやや渋滞気味でした。でも、我が家では残念ながら鰻を食べることもなく、慎ましやかに普段通りのおゆうはんでした。

❏

25日は仕事です。

身近な地域の夏祭りや花火大会のニュースが次々と流れて賑やかです。

「裏窓から」のネタはいっこうに浮かばず、書き倦ねている間に土用の丑も終わってしまいました。

大暑が終わって丑の日が過ぎたころから気温がグイグイと上昇し始めまして、連日の猛暑日となっています。

❏

26日にはツマ待望のエアコンが二階の居間（寝室）に設置されました。日曜日でしたので午前中に庭の草引きとか町内会の出合いの掃除を済ませて、お昼はざる蕎麦を食べました。

現在部屋にあったエアコンは動かずに数年放置していたもので、ムスメが生まれる直前に買ったものです。

大塚先輩が東芝ということで、お薦めもあって冷蔵庫とエアコンを東芝製にしました。このエアコンを我が家が使い続けている間に大塚先輩は取締役になっていかれました。

私のムスメも結婚して来年には母になります。月日の過ぎるのは早いなあと一風変わった感慨にふけりながら新しいエアコンを眺めていました。

❏

26日の夜、偶然にテレビをつけると日曜美術館をやっていました。

普段テレビを見ないのですが、たまたまスイッチを操作したらNHKでした。

番組を見て父のことを思い出しました。

父もテレビをほとんど見ない人でしたが、ときどきテレビの前にいることがあって、それがこの日曜美術館でした。

この日の番組は、蕪村の一句をお題にして出演者それぞれが自由に解釈しながら絶妙にマッチする西洋美術の名品を選び披露する、というものでした。

涼しさや鐘をはなるるかねの声　与謝蕪村

絵と俳句が画面に映し出されているのをしみじみと眺めながら、もしも子どものころに絵の手ほどきをきちんと習っていたらわたしも今ごろは父のような作品を幾つも残せたのだろうと思います。

ヒトは深くて味わいのある人生を送りその姿で終わっていけるのが理想だなと思うことが多くなりました。

若いときには上昇気流に乗って舞い上がってゆくことを夢に描きますが、大空を飛びながらも自分の姿勢や地面にいたときの思いを揺るぎなく振り返り続けることが大切なのだと思います。

写真日記（平成27年版）

2015年7月28日（火曜日）【裏窓から】

立秋と書き出す手紙蔓の花 ― 立秋篇

立秋（8日）の前日夕方の散歩でツクツクボウシ、その明くる日の散歩でカナカナの鳴き声を聞いた。蜩（ひぐらし）はカナカナと鳴くのでそう呼ぶようにしている。

カナカナは6月の末ころから鳴き出す夏のセミらしいが、秋になると目立って気にかかるようになる。その鳴き声を今の時期に聞くと季節感を感じてしまうのは、寂しそうな響きによるものだろう。

ギラギラと真夏の日差しが照りつけてクマゼミがとても喧しく圧倒しているときにはどこかでカナカナが鳴いていても気付かなかないのだろう。住宅街の雑木ではクマゼミの声であったのが、高校の山ランコースの方まで登ってくるとアブラゼミに代わる。立秋からはカナカナとなった。

山ランコースからは遠くの海岸や造船所、海の向こうに火力発電所らしきものまで見える。野球部も近くで練習をしているから呼び声やボールを打つカキーンという音も聞こえる。セントレアから飛び立つジェット機の音が聞こえてくれば、上空に残る太陽光線で真っ赤になって去り行く翼を見上げ、遠くへ旅立つ人がここにもいるのだな、といつも思うのだ。世の中にはさまざまな人がいてそれぞれの暮らしがある。ここはその一コマなのだ。

立秋と聞くだけで季節が移り変わってゆく風情を感じる。夏休みの空っぽの校舎も秋を待っているだ。

――

かなかなやまっしろおばけの宿題帳　　岡田葉子

「増殖する俳句歳時記」の清水哲男は、「決して上手な句とは思わないけれど、読者に素朴に過去をふりかえらせてしまう力はある」と書いている。

そういえば、お盆を過ぎたころから夏休みが忙しくなってきて、手を付けずにほったらかしにした宿題も気になってきたな。

夏の思い出にもまた格別な味わいが残っている。

▼ 立秋と書き出す手紙蔓の花

暑中見舞いも書かずにいてこのままだと手紙は出さぬまま夏を終えるかもしれない。

毎年そんなことを思いながら秋めいて来る風にウキウキしている。

写真日記（平成27年版）

2015年8月11日（火曜日）【裏窓から】

稲刈り ― 処暑篇

▼ 秋立てば長い日記が書きとうて

と今朝からつぶやけば、昨日は

▼ 朝の田を稲刈り機がのそりのそり
▼ おつかれさん日暮れのホームは秋の風
▼ 回れ右すれば一面が秋の田
▼ 日暮れの田んぼには秋風が吹く

とつぶやいたのだった。

「出穂して四十日」という言葉がある
まさにその通りであった。

秋の風が坂道を吹き降りてゆく
ホームを吹き抜けてゆく
田園の道でわたしを追い抜いてゆく。

水のかたち（宮本輝）を
シバタさんに LINE でオススメしたりしながら
心に残った言葉を拾い出しては
ぱらぱらと斜め読みをして
本をめくってゆく。

> 負けるな、負けるな、あきらめるな。
> 心は巧みなる画師の如し、だ

この一節を感想で引いている人があった。
だが、どのあたりに書いてあるのかを思い出せなくて焦っていた。
ぱらぱらと見る程度ではヒットしなかった。

探し出すまでに結構な時間を費やす。
サラサラとめくって行くだけでは何度繰り返しても見つからない。
歯の奥に何かがはさかったようで気にかかって仕方がない。

よし、こうなったらもう一回全部読むか
と決めて再び読み始めた。

ありました。
いろんなところで尋ねてみたけど無反応だったし
教えてあげない

写真日記（平成27年版）

2015年8月23日（日曜日）【裏窓から】

稲刈り ― 処暑篇

▼ 秋立てば長い日記が書きとうて

と今朝からつぶやけば、昨日は

▼ 朝の田を稲刈り機がのそりのそり
▼ おつかれさん日暮れのホームは秋の風
▼ 回れ右すれば一面が秋の田
▼ 日暮れの田んぼには秋風が吹く

とつぶやいたのだった。

「出穂して四十日」という言葉がある
まさにその通りであった。

秋の風が坂道を吹き降りてゆく
ホームを吹き抜けてゆく
田園の道でわたしを追い抜いてゆく。

水のかたち（宮本輝）を
シバタさんに LINE でオススメしたりしながら
心に残った言葉を拾い出しては
ぱらぱらと斜め読みをして
本をめくってゆく。

> 負けるな、負けるな、あきらめるな。
> 心は巧みなる画師の如し、だ

この一節を感想で引いている人があった。
だが、どのあたりに書いてあるのかを思い出せなくて焦っていた。
ぱらぱらと見る程度ではヒットしなかった。

探し出すまでに結構な時間を費やす。
サラサラとめくって行くだけでは何度繰り返しても見つからない。
歯の奥に何かがはさかったようで気にかかって仕方がない。

よし、こうなったらもう一回全部読むか
と決めて再び読み始めた。

ありました。
いろんなところで尋ねてみたけど無反応だったし
教えてあげない

写真日記（平成27年版）

2015年8月23日（日曜日）【裏窓から】

秋風に吹かれて鉄棒にぶら下がる ― 白露篇

九月になって瞬く間に秋めいたような気がする。雨が二三日続いてバスに乗った日もあったものの8日に台風18号が伊勢湾の上を通過してからというもの風がすっかり秋風になった。

白露は9月8日で台風の来る前日の事だった。毎朝に駅まで歩く間に汗をかいてしまうので困っていたが、この頃から少しマシになった。ゆっくりと休憩をしながら行けばびっしょりにならずとも済む。

休日ごとに近所を5キロあまり歩いている。コレもあれこれ夏の終わりから続いているのだが、始めたころにはTシャツから汗が滴り落ちたころもあったのだ。今は行程の後半になるころにすっぽりとシャツが汗で浸っているくらいだ。

いつまで歩けるか自信がない。しかし、健康のことを考えるとやめるのが怖くなってきた。心配が実感として湧いてくるようになると食事においても食べ過ぎに気をつけるようになる。体重計には毎日乗る。それほど変化はないが、もうひと頑張りは続くと思う。

この行程の途上に高等学校のグラウンドがある。背中を伸ばそうと思ってたまたまぶら下がってみたらめちゃめちゃ驚いたことがあった。小声でしか言えないが、懸垂ができなくなっているのだ。体重が20キロほど重くなったのが原因だろうが、100回くらいは学生時代にやっていたことを思い出すとちょっとショックです。たぶん、逆上がりもできないのかもしれない。

鉄棒は子どものころから好きだった。父が庭に作ってくれたがきっかけで大体の事はできた。わたしの数少ない得意なことだった。お陰で上半身の体格はしっかりしていて、共同浴場でレスリング部ですかなんて声を掛けられたのは懐かしい思い出だ。

そんなことを思い出すと、もう一度できるようになるために、ココに来て時々ぶら下がって、這い上がれるようになりたい。

写真日記（平成27年版）
青森産にんにく入りスパ ― 11日（金）
シャケとホタテのスパに青森産のにんにくを入れてキャベツ、しめじも合わせて炒めたら、グッドになりました。キャベツとしめじは冷蔵庫の残りものでした

2015年9月12日（土曜日）【裏窓から】

木曽旅情庵 その2 ― 寒露のころに考える【寒露篇】

写真日記（10月8日）

寒露
　焼き魚寒露の宵を悠々と
　10匹め寒露の宵を記念して

▸ 木曽旅情庵ユース（YH） ― 十月初めに考える

考えてみれば
失うことの連続であり
人生の第4コーナともなれば
新しいことなど
もうこれ以上に起こらない

旅情庵という宿へは
もう行くことはなかっただろうが
営業をやめてしまったことは
わたしの旅のひとつのカテゴリーに
ピリオドを打った

❏

旅情庵に何度も泊まりに行き
信州の山々の雄大な風景や
目がさめるような秋の紅葉を目の当たりにし
大きく息をを吸って
元気な自分を取り戻そうとしていたのだろう

ちょうど十月の今ごろ
地図も持たずに
新品のオートバイで
乗鞍高原へと
鉄砲玉のように
走っていったのは
1982年10月の連休でことだった

三連休の一日目に仕事が入って
不平不満の気持ちで仕事に行ったときの気持ちの
記憶だけが強烈に残っているものの
あくる日に高速に飛び乗って
何も調べもせずに
ただ信州の方をめざすという
爆発心のようなものだけで

でかけたのだ

だから地図もなければ
宿の手配もしていなかった

❏

あれから
信州の虜になり
木曽街道や中山道に夢中になり
秋の紅葉、初夏の新緑に
食べて走って湯につかって泊まって
という冒険のような旅をしてきた

旅情庵はそんな遊びのひとコマで出会った宿で
全国数々のユースを駆けまわったなかでも
飛び抜けて贔屓にする理由を
しっかりと持っていた宿だった

❏

風呂に入れば窓から御嶽山の峰々が見えたし
窓のすぐ下には鄙びた田舎の山畑の景色があった

宿の建物は古くて
歴史を肌で感じることのできる味わい深いもので
タイムマシンに乗って
半世紀を飛んできたような安らぎの空間だった

ねこが
どっしりと
ふつうに
静かにいて

❏

写真もスケッチも残していないので
わたしの記憶が老化とともに過去を捨て去る

それと一緒に消えていく記憶のひとつだ

それでいいのだ

▸ 木曽旅情庵 その2 ― 寒露のころに考える

2015年10月 8日 (木曜日)【裏窓から

木曽旅情庵 その2 ― 寒露のころに考える

考えてみれば
失うことの連続であり
人生の第4コーナともなれば
新しいことなど
もうこれ以上に起こらない

旅情庵という宿へは
もう行くことはなかっただろうが
営業をやめてしまったことは
わたしの旅のひとつのカテゴリーに
ピリオドを打った

❏

旅情庵に何度も泊まりに行き
信州の山々の雄大な風景や
目がさめるような秋の紅葉を目の当たりにし
大きく息をを吸って
元気な自分を取り戻そうとしていたのだろう

ちょうど十月の今ごろ
地図も持たずに
新品のオートバイで
乗鞍高原へと
鉄砲玉のように
走っていったのは
1982年10月の連休でことだった

三連休の一日目に仕事が入って
不平不満の気持ちで仕事に行ったときの気持ちの
記憶だけが強烈に残っているものの
あくる日に高速に飛び乗って

何も調べもせずに
ただ信州の方をめざすという
爆発心のようなものだけで
でかけたのだ

だから地図もなければ
宿の手配もしていなかった

❏

あれから
信州の虜になり
木曽街道や中山道に夢中になり
秋の紅葉、初夏の新緑に
食べて走って湯につかって泊まって
という冒険のような旅をしてきた

旅情庵はそんな遊びのひとコマで出会った宿で
全国数々のユースを駆けまわったなかでも
飛び抜けて贔屓にする理由を
しっかりと持っていた宿だった

❏

風呂に入れば窓から御嶽山の峰々が見えたし
窓のすぐ下には鄙びた田舎の山畑の景色があった

宿の建物は古くて
歴史を肌で感じることのできる味わい深いもので
タイムマシンに乗って
半世紀を飛んできたような安らぎの空間だった

ねこが
どっしりと
ふつうに

静かにいて

❏

写真もスケッチも残していないので
わたしの記憶が老化とともに過去を捨て去る

それと一緒に消えていく記憶のひとつだ

それでいいのだ

等伯と永徳 ― 霜降篇

10月24日が二十四節気の霜降なのにとりわけ寒くはない朝を迎えたのだが、あくる日の朝には冷たい風が吹いた。
その日（25日）は日曜日で、午前中に地区の掃除があったので団地内の街路の掃除や草取りなどをする。風が強く、道路に刈り散った草が強風で吹けてゆくほどだった。

この次の週からカッターシャツを長袖にしてジャケットを羽織って衣替えとした。
昼間でも窓を開けて風を呼びこめば半袖ではゾクッとする日がある。
ちゃんと秋になってきているのを身に沁みて感じる。

人の話では今年は秋が早いのだという。
京都の紅葉の見頃は勤労感謝の日のころだが、そのころに行けば紅葉（もみじ）は散りかけているのだろうか。

❏

長袖に衣替えしたのはほどよいタイミングだったものの、こたつを出しても布団を被せていない。早くしないと寒くなると焦って思いながら、先延ばしにしている。

本格的な寒さがやってくれば、こたつに潜り込んでうたた寝をする。
いまはまだそんな季節ではなく、食事が終わったらそそくさと風呂に入り、布団に潜りこんで本を読んでいると、そのまま眠ってしまう。

❏

長谷川等伯を書いた安部龍太郎の「等伯」を読み終えたあと、山本兼一が狩野永徳を書いた「花鳥の夢」を読んでいる。
トントンとは読み進まない。

2冊の本を逆順で読んだら違っていたかもしれない。

どちらが面白い本であるという話はできない。
人物においても優劣はなく、善も偽もない。

こういう本は、例えば三十歳くらいに読んだとしたらそれなりに消化ができただろう。
この年齢になって読んだら受けるものも多いが、もはや受けてもとどめることのできないものもある。

わたしの人生の見えないレールを構想するころに、数多くの人間の、その人間味に出会えていたら、わたしは違ったレールを敷いていたのだろうか。

もし、それが実現していても、正しかった言い切れるだろうか。
そんなことを考えながらゆっくりとゆっくりと二人のことを考えている。

2015年10月31日（土曜日）【裏窓から】

冬じたく ― 立冬篇

11月8日は立冬で暦のうえではこの日から冬となる。また寒い季節を迎える招待状が届いたようなものかもしれない。

それほど冷え込んでこないのは雨が近いからだろうと天気予報を見て、前日の土曜日にお出かけをした帰りにムスメと合流しておゆうはんを食べた。

鍋が食べたいというのでお手ごろな店に4人で入ったのだが、焼肉とお鍋とがセットになったコースを注文して、みんなで汗だくになって食べた。

食事が終わって店の外に出ると、傘なしでどこまでも歩くわけにもゆかないほどの雨が降りだしていた。天気予報は夜半を回ってからといっていたのが、少し外れたようだ。

今の季節などは、天気や気流、気温の予測をすることにおいて難儀な時期ではないと思えるのだが、珍しく外してしまったには訳があったことだろう。何事も安易に見えてそこには無数の奥があるのだ。

▼ 雨静かに降り出して今年の秋と別れる

家の前まで車で送ってもらって週末・土曜の夜が更けた。

❏

二三日前に「花鳥の夢」を最後の第九章を残すところまで読み終わっていた。感想は思いつくことをメモ書きするように書き溜めていたので、第九章を読み終えて読了とする。

山本兼一の作品は「利休にたずねよ」を読んだのみで二冊めであった。

小説として作品を見ると、文芸の域より大きく文学に傾きながら、文学に偏らずに芸術をしっかりと手のひらの上に置いて書いているのを感じる。

❏

利休の言葉がいい。第八章最後にある。

「性分でございますゆえ、お許し願いたいが、見せよう、見せよう、という気持ちの強い絵は、どうにも好みに合いませぬ。絵師がおのれの技倆を鼻にかけているようで、いかにも浅薄な絵に見えてしまいます」

そして、秀吉の言葉が更に素晴らしい。（第九章P485、486）

「そなた、悪相になったな」

秀吉の命を受け東福寺法堂天井画を描きはじめる直前の永徳は、自分と格闘をしている。悩み苦しみ命をも削っている（…ことに気づかない）

「なにごともな、すべてを一人で掴もうとすると、し損じる。わしの天下統一でも、すべての大名たちが従うわけではないぞ。従わぬ者を討伐しても、皆殺しにするわけにはいかぬ。生かして残してやらねば、連中は追い詰められて、死にもの狂いで歯向かってくるぞ」

・・・

「絵は、もっと楽しんでゆるやか描くがよい。長谷川の絵は、観ていて気持ちがゆるやかに楽しくなる。絵のなかに、観る

者の居場所がある」

言葉というのは、受け取る人の心の状態でいくらでも変化する。
気にもとめられないこともあれば、言った本人がまったく違ったことを考えていたりすることもある。

秀吉が狩野永徳にそのように言い放ったとき、利休はまだ秀吉から切腹を命じられていない。

秀吉からの厳しい言葉を浴びたあとにも永徳は描き続け、龍の瞳に丸い二つの目玉を入れて、鼻の線を引いたところで永徳の命は尽きる。

小説は永徳が死んでしまうのだとは明確に記述していない。まして、利休がこの半年後の春に切腹を命じられこともどこにも触れていない。

❏

ムスメさん夫婦は私たちを家の前まで送り届けたあと、簡単な買い物をするためにスーパーに寄り深夜に家に着いたらしい。

ツマが、あの子たち買い物してから帰ったんやって、と明くる朝に話してくれた。
そうか、と返事をするときにノドが痛いことに気づいて風邪のはじまりとなった。

ぬくい夜がおわって雨の立冬の朝を迎えた。その雨も夕方には小止みになったかのように見えたが、月曜日の昼過ぎまで降り続いた。

わたしの風邪は、雨がやんでも、知らぬ顔。ノドはまだ痛いが、明日は休めない。

2015年11月 9日 (月曜日)【裏窓から】

最後の言葉 ― 小雪篇

わはく(秘)伝 のブログにメモ書きを始めたら長くなってしまった。移動しながらコチラで書く

▸ あのひとの最後の言葉

▸「ひとの最後の言葉」(大岡信 ちくま文庫)をみて、大岡信さんが亡くなられたころに買ったことを思い出し、さらに、わたしの父はなにか言葉を遺したのかを回想していた。

▸わたしは何を残せるだろうか。
残せる業績などなかったと卑下しても構わないが人として何かを感じたはずでゴミでもであろうがそれを残したい。

▸年が暮れてくると1年を振り返ることが多くなるので些細な事でも気にかかることが次々と頭のなかを掠めて通る。それが身近な人々の最後の言葉であるとか口癖であったりする。その人を偲ぶたびに切なくなり自分の覚悟ができてくるのが分かる。

▸父はなにか言葉を遺したのか
そのことが真っ先に浮かんだ。答えな曖昧なままなのだ。あのときを看取ってくれた人に尋ねたわけではない。なぜこれまで尋ねなかったのか。死んでゆくときの様子を何度も聞かせてもらってはその場所にわたしがなぜ居なかったのかを悔やんできたのに。わたしは知ろうとしなかったのだった。

22日 (日) おゆうはんにひの菜があったのだ(嬉)

▸ひの菜で夕飯を食べながら
今夜はわが家の母の美味しいひの菜のことを考えていた。

▸母は80歳を過ぎてから
(細かいことを気にすれば)味付けの腕も変化したてきたものの、これを衰えというよりは進化のようにわたしは思う。

▸そもそも旨味というものがヒトの身勝手な趣向で線引きされたものであり、漬物の味が変わったり、煮物の味が濃くなったり薄くなったり、寿司の甘酢の味加減に変化があったり、日によって違ったり、味ごはんの醤油や甘さ加減が昔と変わったとしても、それは母のサジではないかと思う。

▸母のたくあん漬けはわたしだけが世界で一番おいしいと思う。だから、ひの菜も母のひの菜が一番旨い。写真は地場産の店で買ったもので今年は母の漬物をまだ食べていない。

▸そんなふうなことを考えながら他愛ないおしゃべりをしておゆうはんを食べてたのだが、ちょうどそのときに日曜美術館を放送していることを新聞TV欄で知った。わたしはNHKは見ないが父がいつも見ていたのを思い出してそんな日々もあったなあと染み染み漬物でごはんを食べた。

▸父という人はテレビを自分から進んでみることは全く無かったのだが、日曜美術館はいつも見ていた。あのころのわたしはあの人の気持ちをわかろうとしなかったのだな。もう少し近づける努力はできたのかもしれないのに、なぜ、一緒に見て

共感しようとしなかったのか。幸せだったというのが答えのひとつかもしれんと思っている。だからそれを知っていて父はわたしに見ろとも言わず、また、自分の絵も押し付けようともしなかった。

▸父は朝ドラも時々見てた。仕事に出かける前に家で見るか、ご飯を食べに昼休みに家に帰ってきてドラマを見てから仕事に戻っていきました。あの人が見たテレビは、おそらくその二つの番組だけだっただろうと思うと、またまた切なくなる。

▸そんなことを思い出しながら まだ、あの人のあの人らしい言葉がするりと思い出せません。

（次篇へとつづく）

2015年11月23日（月曜日）【裏窓から】

冬眠をする ― 大雪篇

7日は大雪

それほど寒くないなと思っていたのだが 大声で さむ～い と叫んでいる子がいたので 一生懸命に歩いたわたしだけが寒くなかったのか

廊下からデスクに入り込むときに天井の送風口から なま温かい風が顔をさするように吹きつけた

外は冷たい風が吹いている

❏

大雪の日 つぶやきを拾ってみる

夢のなか好きだと言って 逃げだすの
12-07 08:25

大雪や赤いセーター追いかけて
12-07 08:26

追いかけて遮断機くぐる月曜日
12-07 08:27

母は七十一年前のきょうの地震の日の思い出を話してくれたことがあります。終戦前のころの正月前で 麦踏みをしていたと言っていたかな。今度もう一回訊いてみよう
12-07 23:27

母が話してくれたむかしのことを単に物語や出来事として聞くだけではもったいないと歳を食うに従い切々と思う。平成10年に逝ってしまった父の話もわたしに話してくれたときの年齢を越えるころになって初めて心に響いて届く。

母は正月があけたら八十五歳になる。わたしはこの歳まで生きていないだろう。祖父も父も短命で六十五歳、六十六歳で逝っている。生まれながらにして内臓が丈夫ではないのだから、よく頑張ってもそのころまでか。あと、7、8年ほどの勘定になる。

❏

冬眠なんて そんな甘っちょろいこと言っていたら時間がもったいない。

7日は月曜日で大雪。それほど寒く感じなかったのだがあくる日の8日の朝は少しピリリと寒かった。

太陽はは地平線の下にあって東の空が赤くなり始めたころに霜が降りた真っ白の田んぼの横をコツコツと歩いて駅まで出かける。いつの間にか吐息が白くなるまでに寒くなていた。

ダウンジャケットは羽織ってみたが手袋が見当たらずカバンは幼稚園掛けをして手はポケットに入れて歩いてゆく。

夜明け前 初霜ひかりごけのよう
12-08 07:02

そんなふうに書いている。本当に初霜だったのかどうかはわからない。ただ、日の出は着実に遅くなっている。

つづきはあとで

2015年12月 8日 (火曜日)【裏窓から】

年の瀬に母を訪ねて考える ― 冬至篇

冬至のあくる日に母を訪ねた。(23日 天皇誕生日)

ムスメもあと二ヶ月に迫ったこともあるので呼んでやり大きなおなかを母に見せながら正月のことなどあれこれと話をする。

母を訪ねれば昔の話をするのはどこのウチでも例外ではないだろう。近ごろはたとえ同じような話であったとしてもそんな話を聞かせてもらうのがわたしはとても嬉しい。

85歳になろうとするのに話す内容は正確で、細かい点まで記憶していることに驚く。年寄りとはそんなものだでは済ませることのできないレベルである。

例えば、親戚の人の逝去年表、家系図に登場する隅々の人までの名前、生い立ち、数々のエピーソード、それらの出来事に伴う年月日、付随する数字などなど。

真似をするとか、習うとか、はたまた、こうなりたくて自分も鍛えようとか、そう考えてできるものではない。脳みそと心の構造の問題だ。記憶しておくことや分類して整理をしておくことのメカニズムの凄さに感心する。

❏

自叙自伝的な話も多くなった。歳をとることで昔には話さなかったことでも捨てるように吐き出せるんかもしれない。年齢と気持ちがもたらす堰のよなものが外れるイメージで話してしまうのだろうか。

今までは堪えていたのか、話すチャンスがなかったのか、それともわたしが(娘でなく)息子だったからか、孫がこうして大きなお腹をしているからか。理由までは訊ねたりしないけれど、話す内容はしっかりと聞いておかねばならないことの連続だ。

冬至のあくる日に尋ねたのは、正月の餅つきのことを訊いておきたかったからだ。
だが、いつものようにストーブの前で話し始めた母は、自分が赤ん坊を生む頃の話をし始めた。
わたしには弟があるが、死なかしてしまった子が三人あったのだという話である。

大きなお腹のウチのムスメが安心するようにと思ってか、おばあちゃんの経験的な昔話なのか、これから子どもを生む子を心理的に安心させるためなのか、それほど深くを考えてのことでもなく、むかしを単に回想しての話であったのか。

死なかした三人の子について、どんな気持ちで思い返したのだろう。
大きなお腹を見ていると昔の記憶が蘇ってくるのだろうか。

一人は1年半ほどしか生きられなかった長女の話であった。貧しいのと農家が忙しいことで、ろくに医者にも連れて行けず死なかしたという。
あとの二人はわたしと(5つ離れている)弟の間にできた子で、八ヶ月と七ヶ月でそれぞれ流産した。
生まれてからもピクピクと動いていたというような少し怖くて残酷なことも平気で言う。わたしにはこれまで一度も聞かしてくれなかった話であった。

弟は7月10日に生まれるのだが、生まれる間際の6月25日にもまだ田植えをしに田んぼに出ていたという話も聞いた。

❏

今の子は大切にしてもらえて、更に医学も進化して安心して産めるから幸せである……というような単純な話では決してないのだ。

そこには60年の社会の進化と変化があり、人々のイデオロギーの遷り変りがある。暮らしのスタイルが姿を変え、身の回りにある物質が豊かになってきた。家族の体系が新しくなり、幸せ感にも大きな差異が出てきている。

母はそんなことを理屈でいう人ではないのだが、その糾える縄のように変遷する時代の襞のひとつひとつまでをしっかりと見つめ続け捉えている。そういう視線で語っていた。

話の深みを聞き逃すか、聞こうとしないか、聞いても理解できないのか、聞き取れないか。
貴重な話を生かすも殺すも、これからの人に任されている。

とうみ

2015年12月23日（水曜日）【裏窓から】

一子相伝 ― 元旦篇

ブログをだらだらと書いてきて2500篇ほども溜まってきたので整理をしたいと考え始めたのが年末のある日のことだった。

▸ 大きくて揺るぎない

でも触れたように何かを残したいとか伝えたいという気持ちが日増しに強まってくる。

一子相伝。
そう書いてみたが実体が見えてこない。

❑

写真日記（元旦）

（ムスメの角煮）

ムスメが角煮の写真を送ってくれた。私が自己流のレシピを送り届けたのを参考にして最初から最後まで自力で初挑戦したものだ。

1回前は私が作ってタッパーに入れて家に持って行った。それをお皿に移し替えて旦那さんにはどうぞと言って飯台に並べたと思う。結構好評だったようで、また食べたいとリクエストが出たらしく、愈々チャレンジをすることになった。

料理はどうやら好きらしい。家族を褒めても笑われるが、あれこれと工夫をして探求してみようというような気概があるみたいだ。旦那さんが喜んで食べてくれるという勢いも背中を押しているのかもしれない。

祖父、父、私とそういう精神が潜在的に流れていて人それぞれに表出する形は違うものの、底流を滾々と流れるものが息づいているのを感じる一瞬だ。

文学部だったのだがちょっと理系っぽくて、三代続いた理系色が僅かに残っているみたいで、嬉しいのである。

何事においてもそういう気持ちで取り組んでくれるといいのだがと思っている。

2016年1月 1日（金曜日）【裏窓から】

大きくて揺るぎない

考え続ける

大きくて揺るぎない
という日記を書き残している。
ブログだからいつの日にか消滅してしまうこともあるかもしれない。
それはわからない。

❏

昔ならば必死で残そうと思案したものだ。今は消えてしまってもそれはそれと思えるようになってきた。

2500篇書いてきた過去が自分の死とともに消えていいのか。
わたしはそう考えた。

大学時代の友人に残したい（伝えたい）気持ちをメールしたら返事が来て

> 来年で還暦の〇〇〇です。自費出版は数十万円かかりますが、結局、親戚や友人に配っておしまいの自己満足でしょうが、自分の死後も形に残ります。他人に読んで欲しければ、「小説家になろう」に投稿すれば、エッセイなどのジャンルもあるので、読んでもらえるようです。僕は、子孫がいない事が確定しているので、何かを遺す作業(写真の整理とか)は、止めました。同好の士がいれば、遺せるのでしょうが。

と書いている。

初行に書いた揺るぎないものについて纏め直して書き留めておく。

❏

ヒトは
どかんと動かないもんにあこがれる

また 不変な姿にも思いを馳せる

自分も大きくなりたいと思うし
揺るぎない人生を送りたいという意志を持って進もうとする

自然てのは
数々の苦難を経て
それらを犠牲にして（あらゆるものを）捨ててきたからこそ
あれほどまでに大きくなれたのだ
と思う

ヒトは
所詮 自然に
包まれているだけなんだ

ジリジリと伝わってくるものは
およそ 誰もが同じように感じているのだろうけど
取り込まれたあとは
みんなそれぞれに化学反応のように変化してゆくのだろう

揺るぎないものを核にして
感情の増殖は続くのだ

❏

死んだら終わり
苦し見ながら死にたくない

多くの人がそのように考えるのだろう

あるとき母が面白いことを言っていてポンと膝を打って頷いた。

> 死ぬときに痛いとか苦しいとかも嫌やけど
> バタッと死んでしまうのも嫌や